松山市文化財調査報告書 65

石井・浮穴の遺跡

浮穴小学校構内遺跡３次調査地
石井東小学校構内遺跡・越智遺跡
石井幼稚園遺跡２次調査地

1998

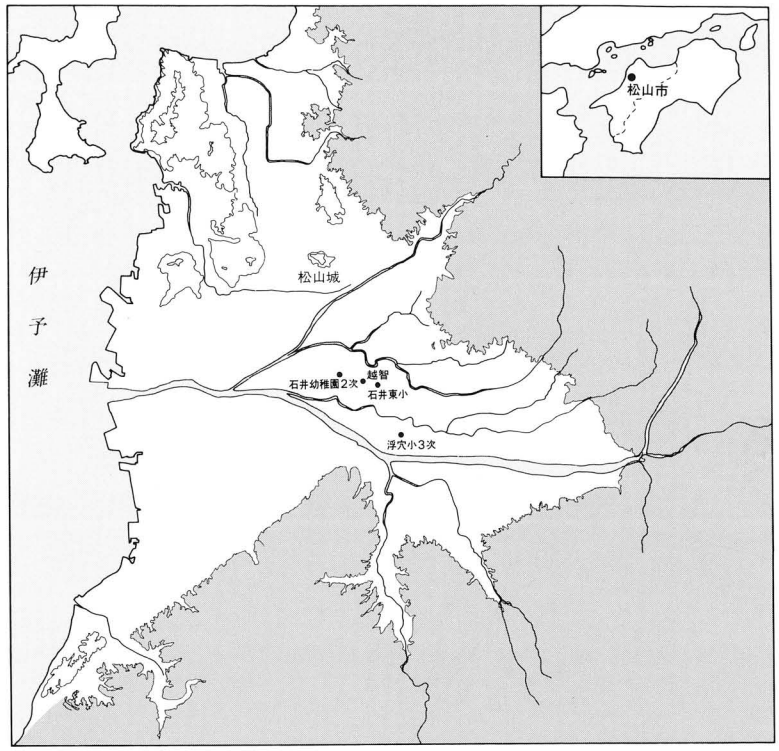
松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

石井・浮穴の遺跡

浮穴小学校構内遺跡３次調査地

石井東小学校構内遺跡・越智遺跡

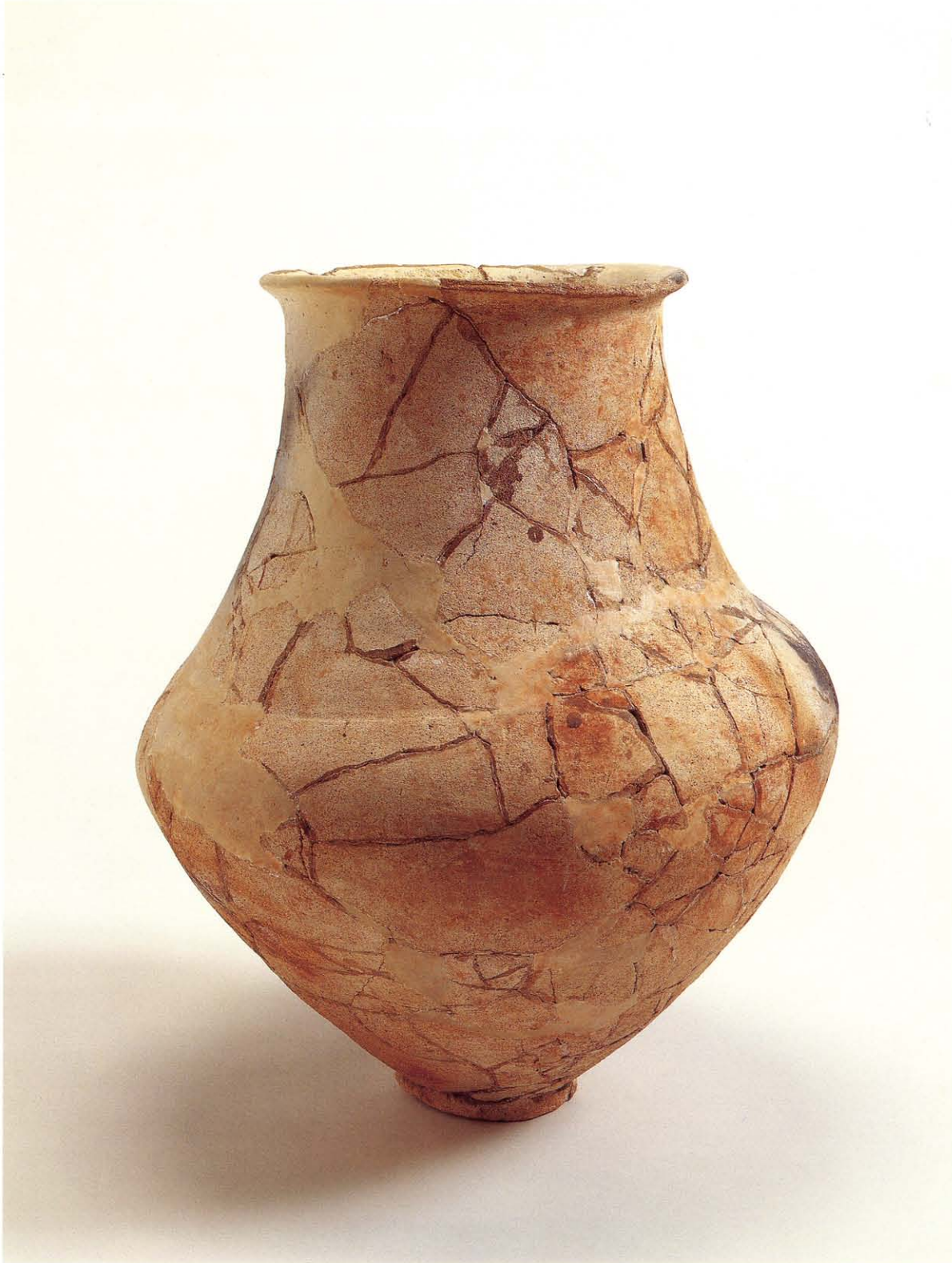
石井幼稚園遺跡２次調査地



1998

松山市教育委員会

㈶松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版　　石井東小学校構内遺跡出土の壺棺

序

本書は、松山市南部の石井・浮穴地区で実施した4遺跡についての発掘調査報告書です。

石井東小学校構内では、昭和53年に校舎建設に伴い調査を実施し、弥生時代から中世までの集落関連遺構を確認しています。このうち弥生時代前期前半の土器棺墓は、松山平野において検出例が少なく、弥生時代の墓制を解明する重要な資料のひとつになりました。

また、浮穴小学校構内では、昭和49年から平成元年までに4次の調査が実施され、弥生時代と古墳時代の集落跡を確認しています。弥生時代では後期の土器棺墓と溝、古墳時代では竪穴式住居址を検出し、同地域の集落構造とその変遷を明らかにする資料を得ました。

このほか越智町遺跡からは弥生時代終末期の土器が出土し、石井地区の集落が広範囲におよぶことを確認することができました。

これらの調査結果は、松山平野南部の弥生時代から古墳時代までの集落様相の一部を明らかにするとともに、弥生時代墓制を研究する上で、良好な資料になるものと思われます。

本書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を頂きました関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成10年3月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会と㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが昭和52年～平成７年の間に、松山市越智町・西石井町・森松町内で実施した４遺跡についての発掘調査報告書である。

2．遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、掘立柱建物：掘立、柱穴：ＳＰである。

3．遺物の実測・製図、遺構の作図・製図は、梅木謙一の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝、伊藤みわこ、長岡千尋、中平久美子、山下純代、渡辺いづみ、森田利恵、宮内真弓、古角優子ほかが行った。

4．写真図版は、梅木と大西朋子が協議し、作成は大西朋子が行った。

5．遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位はすべて磁北である。

7．本書にかかわる遺物や記録物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

8．報告書の作成に際しては、森　光晴氏に指導と助言を賜った。記して感謝申し上げます。

9．巻末（附章）には、石井・浮穴地区が立地する重信川流域の資料を取り上げ、調査・報告の充実につとめた。

10．本書の執筆は梅木謙一が主体となり、平岡直美が第３章２の須恵器を担当した。編集は梅木謙一が行い、水口あをいの協力を得た。浄書は、平岡直美が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　１．調査・報告の経緯　２．刊行組織　３．環境

第２章　浮穴小学校構内遺跡３次調査地 …… 7
　１．調査の経過　２．層位　３．遺構と遺物　４．小結

第３章 石井東小学校構内遺跡 ……35
　１．調査の経過　２．遺構と遺物　３．小結

第４章　越智遺跡…… 105
　１．調査の経過　２．遺構と遺物　３．小結

第５章　石井幼稚園遺跡２次調査地 …… 113
　１．調査の経過　２．層位　３．遺構と遺物　４．小結

第６章　調査の成果と課題 ……145

附章１．浮穴小学校構内遺跡出土資料 ……147
　１．はじめに　２．資料　３．小結

附章２．西石井荒神堂遺跡出土資料……159
　１．はじめに　２．資料　３．小結

附章３．古泉遺跡出土資料 ……185
　１．はじめに　２．遺跡の概要　３．資料　４．小結

写真図版 ……205

挿　図　目　次

第１章　はじめに
第 1 図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺１／200,000）……2
第 2 図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺１／25,000）……3
第２章　浮穴小学校構内遺跡３次調査地
第 3 図　調査地位置図（縮尺１／4,000）……7
第 4 図　調査地位置図（縮尺１／1,000）……8
第 5 図　東壁土層図（縮尺１／40）……10
第 6 図　遺構配置図（縮尺１／120）……11
第 7 図　ＳＤ２測量図（縮尺１／20・１／50）……13
第 8 図　ＳＤ２出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……14
第 9 図　ＳＤ２出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……15
第10図　ＳＤ２出土遺物実測図（３）（縮尺１／４）……16
第11図　ＳＤ２出土遺物実測図（４）（縮尺１／４）……17
第12図　ＳＤ２出土遺物実測図（５）（縮尺１／４）……18
第13図　ＳＤ２出土遺物実測図（６）（縮尺１／３）……19
第14図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／50・１／４）……20
第15図　ＳＢ１・ＳＢ１内カマド・Ｋ１測量図（縮尺１／50・１／30）……22
第16図　Ｋ２測量図・ＳＢ１・Ｋ２出土遺物実測図（縮尺１／30・１／４）……23
第17図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／30・１／３）……24
第18図　地点不明遺物実測図（縮尺１／４）……24
第３章　石井東小学校構内遺跡
第19図　調査地位置図（縮尺１／5,000）……35
第20図　調査区位置図（縮尺１／1,000）……36
第21図　遺構配置図（縮尺１／300）……37
第22図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）……40
第23図　ＳＢ２出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……42
第24図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……43
第25図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１／４）……44
第26図　ＳＢ４出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）……45
第27図　ＳＢ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……46
第28図　ＳＢ６出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……47
第29図　ＳＢ６出土遺物実測図（２）（縮尺１／４・１／３）……48
第30図　ＳＢ７出土遺物実測図（縮尺１／４）……50
第31図　ＳＢ８出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……51
第32図　ＳＢ８出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……52

第33図　ＳＢ８出土遺物実測図（３）（縮尺１／４）……53
第34図　ＳＢ11出土遺物実測図（縮尺１／４）……53
第35図　ＳＫ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……54
第36図　ＳＫ７出土遺物実測図（縮尺１／４）……56
第37図　ＳＫ10出土遺物実測図（縮尺１／４）……57
第38図　ＳＫ11出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……58
第39図　ＳＫ11出土遺物実測図（２）（縮尺１／４・１／３）……59
第40図　ＳＫ11出土遺物実測図（３）（縮尺１／４・１／３）……60
第41図　１号壺棺実測図（縮尺１／６）……61
第42図　２・３号壺棺実測図（縮尺１／６）……62
第43図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４・１／２）……63
第44図　ＳＤ２・３出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）……65
第45図　ＳＤ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……66
第46図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）……67
第47図　グリッド・地点不明遺物実測図（１）（縮尺１／４）……70
第48図　グリッド・地点不明遺物実測図（２）（縮尺１／４・１／２）……71
第49図　グリッド・地点不明遺物実測図（３）（縮尺１／４）……72
第50図　グリッド・地点不明遺物実測図（４）（縮尺１／３・１／４）……73
第51図　グリッド・地点不明遺物実測図（５）（縮尺１／３）……74
第52図　グリッド・地点不明遺物実測図（６）（縮尺１／３）……75
第４章　越智遺跡
第53図　調査地位置図（縮尺１／2,000）……105
第54図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１／４）……107
第55図　地点不明遺物実測図（縮尺１／４）……108
第５章　石井幼稚園遺跡２次調査地
第56図　調査地位置図（縮尺１／1,000）……113
第57図　調査地位置図（縮尺１／400）……114
第58図　東壁土層図（縮尺１／40）……116
第59図　南壁土層図（縮尺１／40）……117
第60図　遺構配置図（縮尺１／100）……119
第61図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１／20・１／４）……120
第62図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１／20・１／４）……121
第63図　ＳＸ１出土遺物実測図（１）（縮尺１／４）……122
第64図　ＳＸ１・２出土遺物実測図（２）（縮尺１／４）……123
第65図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺１／４）……125
第66図　ＳＢ１測量図（縮尺１／40）……127
第67図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）……128
第68図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／３・１／４）……129

第69図　掘立2測量図（縮尺1／80）……130
第70図　掘立3測量図（縮尺1／80）……130
第71図　埋土別柱穴配置図（縮尺1／100）……132
第72図　ＳＫ１・ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）……134
第73図　包含層出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）……135
第74図　地点不明遺物実測図（縮尺1／4・1／3）……136
附章1　浮穴小学校構内遺跡出土資料
第75図　1次出土遺物実測図（1）（縮尺1／4）……148
第76図　1次出土遺物実測図（2）（縮尺1／4）……149
第77図　1次出土遺物実測図（3）（縮尺1／4・1／3）……150
第78図　2次出土1号壺棺実測図（1）（縮尺1／6）……151
第79図　2次出土2・3号壺棺実測図（2）（縮尺1／6）……152
第80図　4次出土遺物実測図（縮尺1／4）……153
附章2　西石井荒神堂遺跡出土資料
第81図　ＰＤ１出土遺物実測図（縮尺1／4）……159
第82図　ＴＰ３出土遺物実測図（縮尺1／4・1／3）……161
第83図　ＴＰ２出土遺物実測図（縮尺1／6・1／4）……162
第84図　ＴＰ１出土遺物実測図（縮尺1／4）……163
第85図　ＤＫ１出土遺物実測図（1）（縮尺1／4）……165
第86図　ＤＫ１出土遺物実測図（2）（縮尺1／4）……166
第87図　ＤＫ１出土遺物実測図（3）（縮尺1／4）……167
第88図　ＤＫ１出土遺物実測図（4）（縮尺1／4）……169
第89図　ＤＫ１出土遺物実測図（5）（縮尺1／4）……170
第90図　ＤＫ１出土遺物実測図（6）（縮尺1／4・1／3）……171
第91図　土器集中地点出土遺物実測図（縮尺1／4・1／3）……172
第92図　その他の出土遺物実測図（縮尺1／4・1／3）……173
附章3　古泉遺跡出土資料
第93図　位置図（縮尺1／10,000）……185
第94図　出土遺物実測図（1）（縮尺1／4）……187
第95図　出土遺物実測図（2）（縮尺1／4）……188
第96図　出土遺物実測図（3）（縮尺1／4）……189
第97図　出土遺物実測図（4）（縮尺1／4）……190
第98図　出土遺物実測図（5）（縮尺1／4）……191
第99図　出土遺物実測図（6）（縮尺1／4）……193
第100図　出土遺物実測図（7）（縮尺1／4・1／2）……194
第101図　出土遺物実測図（8）（縮尺1／4）……195
第102図　出土遺物実測図（9）（縮尺1／2）……196
第103図　出土遺物実測図（10）（縮尺1／2）……197

表　目　次

第１章　はじめに
表１　調査地一覧 …… 1
第２章　浮穴小学校構内遺跡３次調査地
表２　竪穴式住居址一覧 …… 25
表３　溝一覧 …… 25
表４　土坑一覧 …… 25
表５　ＳＤ２出土遺物観察表（土製品・石製品） …… 26
表６　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品） …… 31
表７　ＳＢ１関連出土遺物観察表（土製品） …… 31
表８　ＳＫ１出土遺物観察表（石製品） …… 32
表９　地点不明遺物観察表（土製品） …… 32
第３章　石井東小学校構内遺跡
表10　竪穴式住居址一覧 …… 78
表11　掘立柱建物址一覧 …… 78
表12　溝一覧 …… 78
表13　土坑一覧 …… 78
表14　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品・石製品） …… 79
表15　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品） …… 80
表16　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品） …… 82
表17　ＳＢ４出土遺物観察表（土製品・石製品） …… 83
表18　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品） …… 83
表19　ＳＢ６出土遺物観察表（土製品・石製品） …… 84
表20　ＳＢ７出土遺物観察表（土製品） …… 86
表21　ＳＢ８出土遺物観察表（土製品） …… 87
表22　ＳＢ11出土遺物観察表（土製品） …… 90
表23　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品） …… 90
表24　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品） …… 91
表25　ＳＫ10出土遺物観察表（土製品） …… 92
表26　ＳＫ11出土遺物観察表（土製品・石製品） …… 93
表27　墓出土遺物観察表（土製品） …… 95
表28　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品・石製品・装身具） …… 95
表29　ＳＤ２関連出土遺物観察表（土製品） …… 96
表30　ＳＤ３出土遺物観察表（土製品） …… 96
表31　ＳＤ５出土遺物観察表（土製品） …… 97
表32　ＳＤ４出土遺物観察表（土製品） …… 97

表33　グリッド・地点不明遺物観察表（土製品・石製品）…… 98
第４章　越智遺跡
表34　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）…… 109
表35　地点不明遺物観察表（土製品）…… 110
第５章　石井幼稚園遺跡２次調査地
表36　竪穴式住居址一覧 …… 138
表37　掘立柱建物址一覧 …… 138
表38　土坑一覧 …… 138
表39　ＳＫ出土遺物観察表（土製品）…… 138
表40　ＳＸ出土遺物観察表（土製品）…… 139
表41　ＳＰ出土遺物観察表（土製品）…… 140
表42　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 141
表43　掘立１出土遺物観察表（土製品）…… 141
表44　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）…… 141
表45　ＳＰ出土遺物観察表（土製品）…… 142
表46　Ⅲ・Ⅲ-①層出土遺物観察表（土製品）…… 143
表47　その他の出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 144
附章１　浮穴小学校構内遺跡出土資料
表48　１次出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 155
表49　２次出土遺物観察表（土製品）…… 157
表50　４次出土遺物観察表（土製品）…… 157
附章２　西石井荒神堂遺跡出土資料
表51　ＰＤ１出土遺物観察表（土製品）…… 174
表52　ＴＰ３出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 175
表53　ＴＰ２出土遺物観察表（土製品）…… 175
表54　ＴＰ１出土遺物観察表（土製品）…… 176
表55　ＤＫ１出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 178
表56　土器集中地点出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 182
表57　その他の出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 184
附章３　古泉遺跡出土資料
表58　出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 198

写　真　図　版　目　次

巻頭図版.　石井東小学校構内遺跡出土の壺棺

第２章　浮穴小学校構内遺跡３次調査地

図版１．１　調査地全景（北より）
　　２　調査地南西隅（西より）
図版２．１　ＳＤ２遺物出土状況①（東より）
　　２　ＳＤ２遺物出土状況②（西より）
図版３．１　ＳＤ２遺物出土状況③（南東より）
　　２　ＳＤ２遺物出土状況④（北より）
図版４．１　ＳＤ２完掘状況①（東より）
　　２　ＳＤ２完掘状況②（東より）
図版５．１　ＳＢ１検出状況（南東より）
　　２　ＳＢ１内Ｋ１遺物出土状況①（東より）
図版６．１　ＳＢ１内Ｋ１遺物出土状況②（北より）
　　２　ＳＢ１内Ｋ２遺物出土状況（南より）
図版７．１　ＳＤ２出土遺物①
図版８．１　ＳＤ２出土遺物②
図版９．１　ＳＢ１・Ｋ２出土遺物
　　２　ＳＤ２出土遺物③・ＳＫ１出土遺物

第３章　石井東小学校構内遺跡

図版10．１　調査区東側（北より）
　　２　調査区全景①（北より）
　　３　調査区全景②（北より）
図版11．１　調査区西側（南より）
　　２　住居址完掘状況（西より）
図版12．１　ＳＢ１－１・２完掘状況（東より）
　　２　ＳＢ２完掘状況（東より）
　　３　ＳＢ３完掘状況（東より）
図版13．１　ＳＢ５完掘状況①（東より）
　　２　ＳＢ５完掘状況②（北より）
　　３　ＳＢ７完掘状況（北より）
図版14．１　ＳＢ４遺物出土状況（西より）
　　２　ＳＢ４完掘状況（東より）
　　３　ＳＢ９完掘状況（北東より）
図版15．１　ＳＢ７遺物出土状況（北より）
　　２　ＳＢ７完掘状況（東より）
　　３　ＳＢ11完掘状況（西より）
図版16．１　ＳＢ８遺物出土状況①（西より）
　　２　ＳＢ８遺物出土状況②（北西より）
　　３　ＳＢ８完掘状況（東より）
図版17．１　ＳＫ５遺物出土状況（東より）
　　２　ＳＫ６遺物出土状況（東より）
　　３　ＳＫ７遺物出土状況（北西より）
図版18．１　調査区南西側完掘状況（東より）
　　２　ＳＫ10完掘状況（北西より）
図版19．１　１・２号壺棺墓（東より）
　　２　１号壺棺出土状況（東より）
　　３　３号壺棺出土状況
図版20．１　ＳＤ１完掘状況（東より）
　　２　ＳＤ２完掘状況（北より）
図版21．１　ＳＤ５遺物出土状況（南より）
　　２　ＳＢ10完掘状況（北より）
図版22．１　ＳＢ１出土遺物・ＳＢ２出土遺物
図版23．１　ＳＢ４出土遺物・ＳＢ６出土遺物
図版24．１　ＳＫ10出土遺物・ＳＫ11出土遺物
図版25．１　１号壺棺・２号壺棺
図版26．１　３号壺棺・ＳＤ１出土遺物・ＳＤ２下部出土遺物
図版27．１　ＳＤ５出土遺物・ＳＤ４出土遺物・グリッド・地点不明遺物①
図版28．１　グリッド・地点不明遺物②
図版29．１　グリッド・地点不明遺物③

第４章　越智遺跡
図版30．１　調査区全景（北西より）
２　ＳＫ１完掘状況
３　遺物出土状況①
４　遺物出土状況②
５　ＳＫ１出土遺物・地点不明遺物
第５章　石井幼稚園遺跡２次調査地
図版31．１　調査区全景（北より）
２　南壁土層（北より）
図版32．１　ＳＫ１完掘状況（西より）
２　ＳＫ２遺物出土状況（南より）
３　ＳＫ２完掘状況（南より）
図版33．１　ＳＫ３遺物出土状況（西より）
２　ＳＫ４遺物出土状況（南より）
３　ＳＫ４完掘状況（南より）
図版34．１　ＳＸ１遺物出土状況（南西より）
２　ＳＰ115遺物出土状況（南より）
３　ＳＰ114遺物出土状況（南より）
図版35．１　ＳＫ２出土遺物・ＳＸ１出土遺物①
図版36．１　ＳＸ１出土遺物②・ＳＸ２出土遺物・ＳＰ113出土遺物
図版37．１　ＳＢ１出土遺物・ＳＫ１出土遺物・ＳＰ出土遺物・Ⅲ-①層出土遺物・地点不明遺物
附章１　浮穴小学校構内遺跡出土資料
図版38．１　遺物出土状況
２　調査風景（西より）
３　出土遺物
図版39．１　１・２・３号壺棺出土状況（南より）
２　１号壺棺出土状況（南より）
図版40．１　２号壺棺出土状況（北より）
２　３号壺棺出土状況（南より）
図版41．１　１号壺棺
図版42．１　３号壺棺
図版43．１　２号壺棺
図版44．１　Ｂトレンチ（西より）
２　Ａトレンチ（東より）
３　出土遺物
附章２　西石井荒神堂遺跡出土資料
図版45．１　ＰＤ１出土遺物・ＴＰ３出土遺物・ＴＰ２出土遺物
図版46．１　ＴＰ１出土遺物
図版47．１　ＤＫ１出土遺物①
図版48．１　ＤＫ１出土遺物②
図版49．１　ＤＫ１出土遺物③
図版50．１　土器集中地点出土遺物
２　その他の出土遺物
附章３　古泉遺跡出土資料
図版51．１　出土遺物①
図版52．１　出土遺物②
図版53．１　出土遺物③
図版54．１　出土遺物④
図版55．１　出土遺物⑤
図版56．１　出土遺物⑥

第1章　はじめに

1．調査・報告の経緯

昭和51年～平成７年の間に、小学校の校舎及び幼稚園の運動場建設に伴い、松山市越智町27－１、西石井町４－１、森松町832の３ヶ所において、事前の発掘調査を実施した。対象地は、周知の遺跡として知られ、かつ一部の対象地は大規模開発であるために、本格的な遺跡調査をすることになった。一方、越智町223－１は、店舗建設に伴う事前の発掘調査である。工事中に土器が出土し、工事関係者より届け出があり、調査を実施することになったものである。

発掘調査は、松山市教育委員会と㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者及び関係者の協力のもと、昭和51年・52年・59年・平成７年に実施した。遺跡名、所在地、調査期間は第１表にて記述する。

報告書の作成は、平成９年度に整理作業を行い、調査担当者及び関係者に協力いただき、執筆・編集をすすめた。

表１　調査地一覧

遺　跡　名	所在（松山市）	面積（m²）	調　査　期　間
浮穴小学校構内遺跡３次	森松町832	1,400	1984年５月１日～同年６月20日
石井東小学校構内遺跡	越智町27－１	3,600	1977年11月21日～1978年１月31日
石井幼稚園遺跡２次	西石井町４－１	884	1995年４月24日～同年８月31日
越　智　遺　跡	越智町223－１	100	1976年７月15日～同年７月30日

2．刊行組織（平成10年３月31日）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	三好俊彦
	次長	丹下正勝
文化教育課	課長	松平泰定
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	池田秀雄
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	担当	梅木謙一
		水本完児
		大西朋子

3．環　境（第1・2図）

松山平野は、瀬戸内海に大きくつきだした高縄半島の西のつけ根にある。平野の規模は、西部瀬戸内地方では最も広い面積をほこる。平野は、重信川や石手川をはじめとする大小河川の堆積作用によってできた扇状地と沖積地からなる。海岸線は15km、海岸から重信川扇央部までは21kmである。

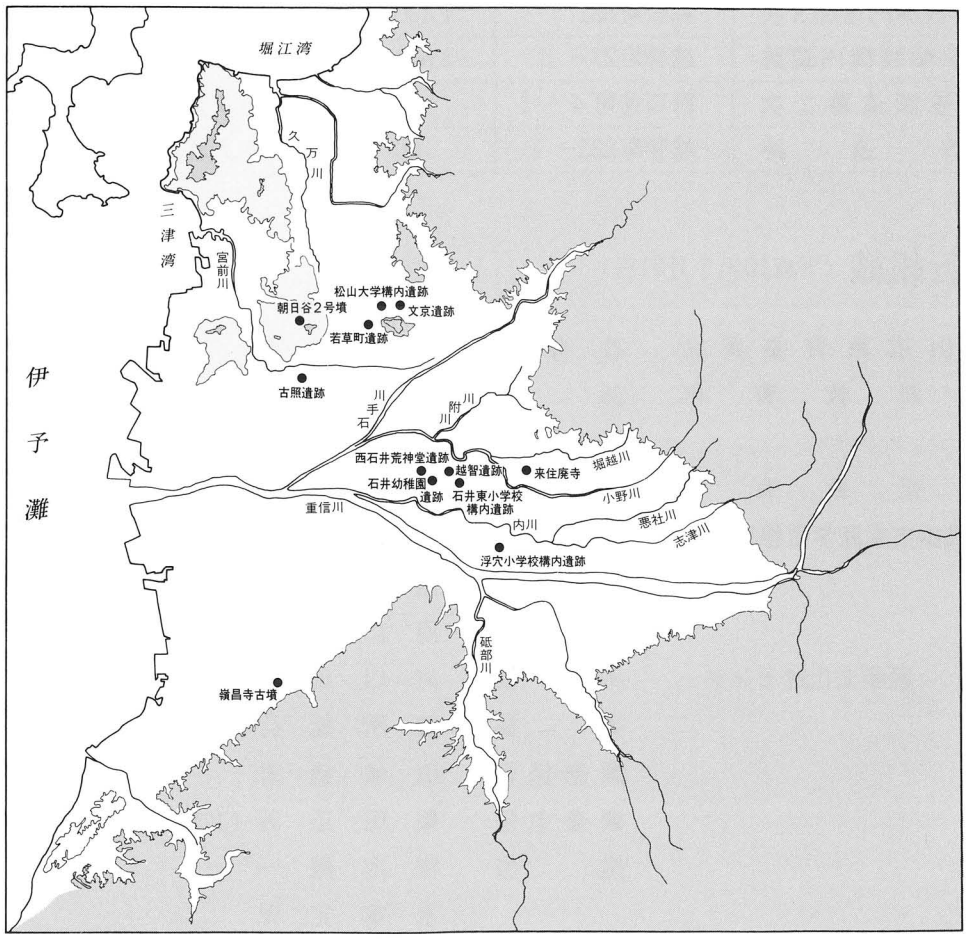
石井東小学校構内遺跡・越智遺跡・石井幼稚園遺跡は平野の中央部にあり、石手川支流の小野川と重信川支流の内川に挟まれた沖積低地に立地する。また、浮穴小学校構内遺跡は平野の南側にあり、重信川と内川に挟まれた沖積低地に立地している。よって、先の三遺跡と浮穴小学校構内遺跡は内川を挟んで、南北に対置する地理的関係にある。

先土器～縄文時代

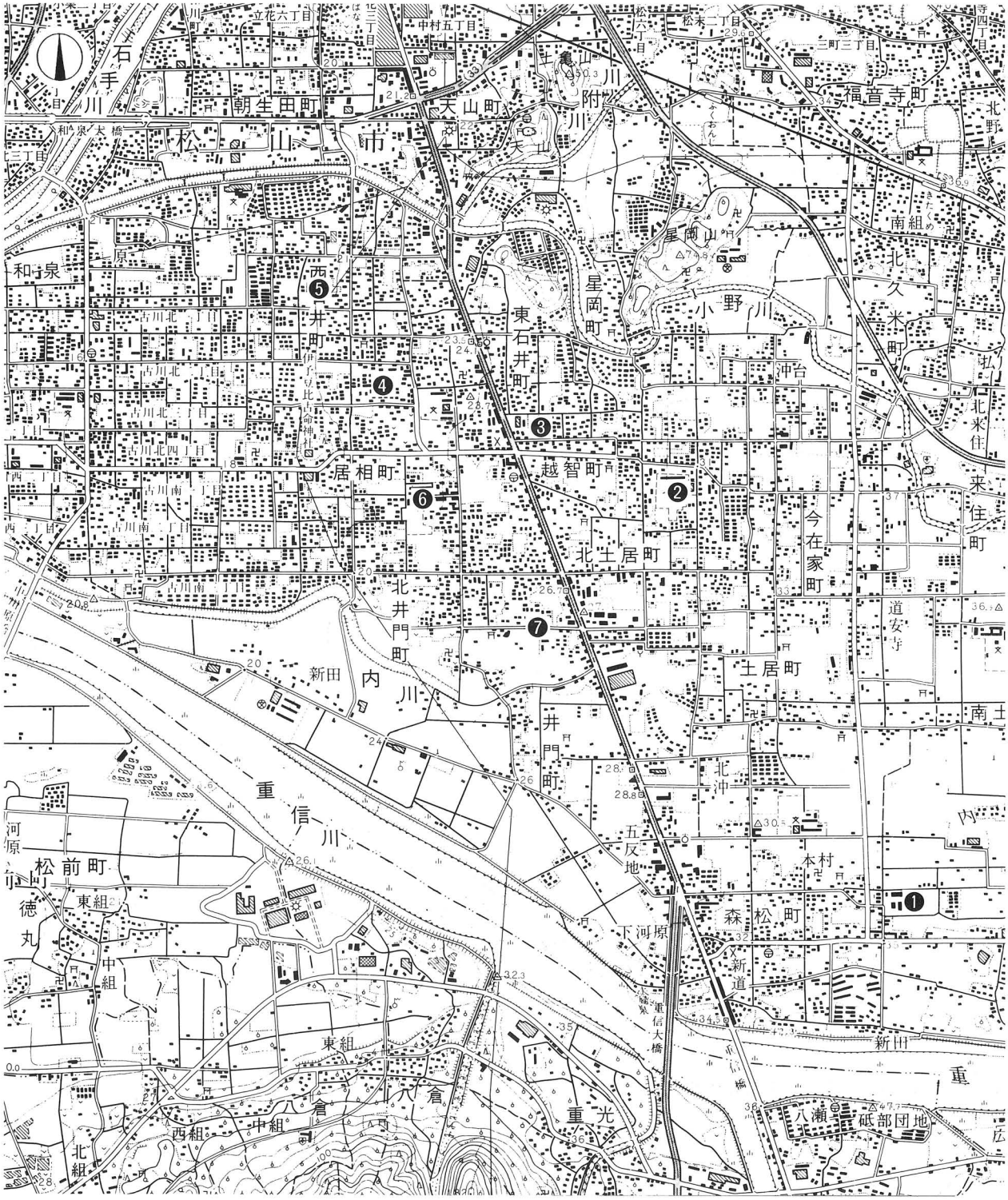
平野部では、先土器時代から縄文時代中期までの遺跡や遺物は稀薄である。石井地区の北には小野川を挟んで独立丘陵が存在し、この丘陵上に展開する東山鳶が森古墳群と天山天王ヶ森遺跡からはサヌカイト製のナイフ形石器が各1点採集され、平野での数少ない資料になっている（重松佳久 1992）。

弥生時代

石井地区のなかでは、前期の土器を伴う溝を検出した南中学校構内遺跡がある（栗田茂敏 1994）。



第1図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1／200,000）



❶ 浮穴小学校構内遺跡1～4次　❷ 石井東小学校構内遺跡　❸ 越智遺跡
❹ 石井幼稚園遺跡1・2次　❺ 西石井荒神堂遺跡　❻ 南中学校構内遺跡　❼ 北井門遺跡

第2図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺1／25,000）

出土土器は松山平野の前期後半の良好な資料である。中期の資料は少なく、後期後半以降に遺跡が急増する。西石井荒神堂遺跡は、後期後葉から終末期までの集落跡で、竪穴式住居址や土器棺墓がある（森　光晴 1980）。報告は既に刊行されているが、未報告の部分が多く、今回石井地区の遺跡を検討するにあたり、附章として遺物の実測図を掲載した。また近年、北井門町内の調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の集落が広範囲で調査され、周溝墓や竪穴式住居址等多くの遺構・遺物が確認されている（1995 愛媛県埋文）。

古墳時代

石井地区には、5～6世紀に幾つかの集落が存在していたようである。小野川に近い北側には石井幼稚園遺跡1次調査で竪穴式住居址1棟が検出され（栗田茂敏 1994）、内川に近い南側にも北井門町内で竪穴式住居と掘立柱建物が数十棟確認されている。墳墓は、小野川の北、独立丘陵上に多くの群集墳が造営されている。このうち、天山神社北古墳からは環状乳神獣鏡が出土し、高位の墳墓が存在する（長井数秋ほか 1973）。群集墳では東山古墳群が広く知られるところであり、5世紀後半から造営が開始されている（田辺・西尾ほか 1981、田城・高尾 1994）。なお、集落・墳墓群ともに、非陶邑系須恵器が散見され、5世紀後半から6世紀前半には、平野の主要な集落地帯であったことが推測される。

古代～中世

古代においては、石井地区は久米郡石井郷に、浮穴地区は浮穴郡に属している。石井幼稚園遺跡には10世紀代の良好な土器があり、松山平野における古代後半の土器編年の基準になっている。

〔文献〕

重松佳久　1992　「石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
栗田茂敏　1994　『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1980　『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会
㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1995　『北井門遺跡埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料Ⅱ』
長井数秋ほか　1973　『天山・櫻谷遺跡発掘報告書』松山市教育委員会
田辺昭三・西尾幸則ほか　1981　『東山鳶が森古墳群調査報告書』松山市教育委員会
田城武志・高尾和長　1994　『東山古墳群－4・5次調査』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第２章

浮穴小学校構内遺跡

― ３次調査地 ―

第２章　浮穴小学校構内遺跡３次調査地

１．調査の経過

（１）調査の経緯

本調査は、浮穴小学校の校舎新設に伴う事前の発掘調査である。

浮穴小学校では、これまでに弥生時代を主体とする遺構や遺物が調査により確認され、構内一帯が遺跡であることが判明している。

１次調査地は、構内の東側、現在のプール西にある国旗掲揚台の建設時に調査を行ったもので、多くの弥生土器と少量の石器・須恵器が出土している（本書附章１）。遺構は未検出である。

２次調査地は、本調査地の西で、給食室の建設に伴い発掘調査を行ったものである。調査では、弥生時代後期後半の土器棺墓と溝を検出した。土器棺墓は３基が群集し、溝からはシジミが多量に出土している（森　光晴 1980）。

このほか、プールの改築に際し、工事関係者が土器を採集している。

以上のことより、校舎建設に伴って遺跡が消失する部分に対し、昭和59年５月１日～同年６月20日の間に発掘調査を実施したものである。

（２）調査組織

調 査 地　松山市森松町832（浮穴小学校構内）

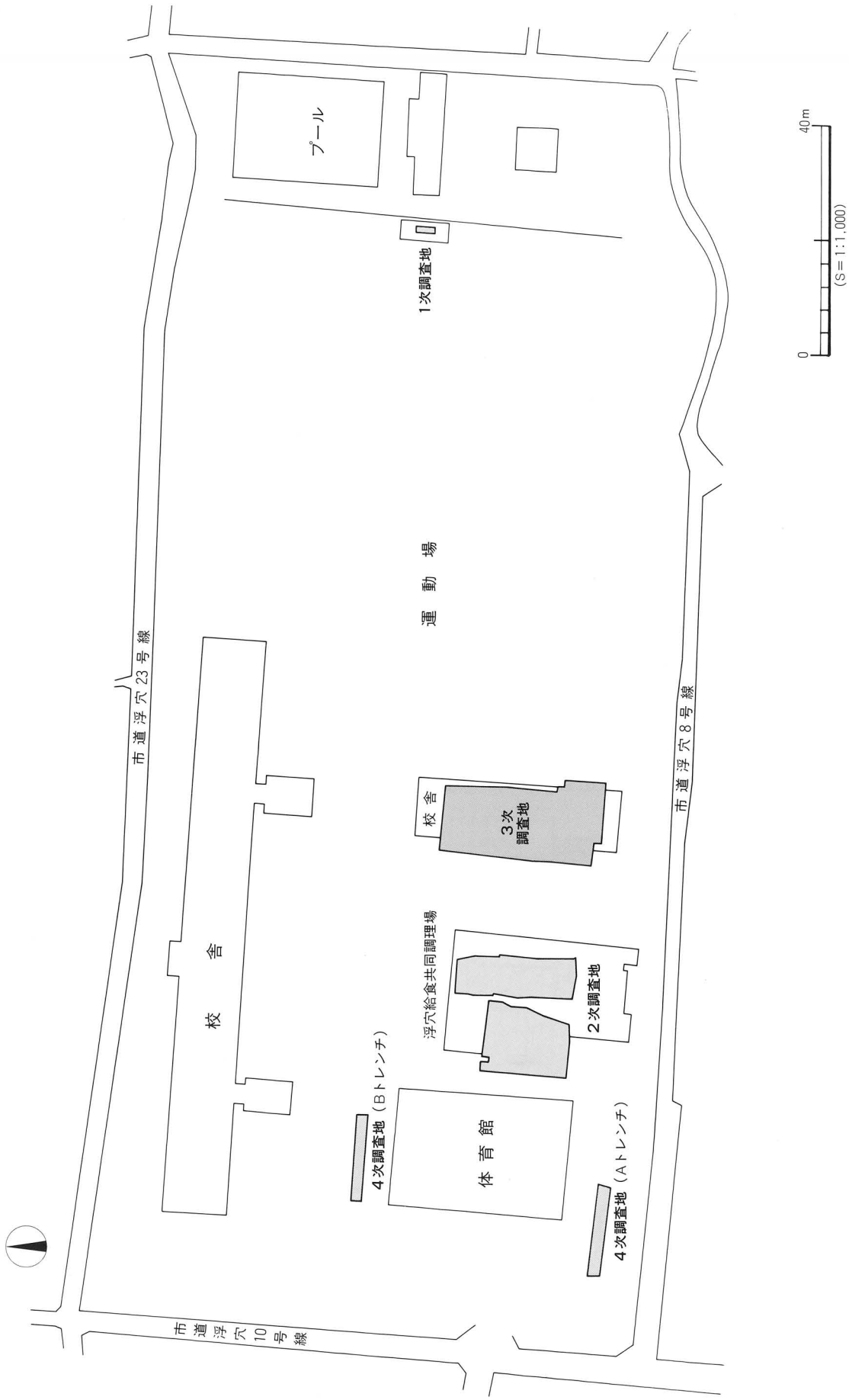
遺 跡 名　浮穴小学校構内遺跡３次調査地

調査期間　昭和59年５月１日～同年６月20日

調査面積　1,400㎡

調査担当　西尾幸則（現、松山市教育委員会文化教育課）

第３図　調査地位置図（Ｓ＝１：4,000）


プール
1次調査地
運動場
校舎
3次調査地
浮穴給食共同調理場
2次調査地
校舎
体育館
4次調査地（Bトレンチ）
4次調査地（Aトレンチ）
市道浮穴23号線
市道浮穴8号線
市道浮穴10号線
0
40m
(S=1:1,000)

第４図　調査地位置図

2．層　位（第５図）

基本層位は、第Ⅰ層近現代土、第Ⅱ層黄灰色粘質土、第Ⅲ層黒色粘質土、第Ⅳ層黄色粘質土、第Ⅴ層暗茶褐色粘質土、第Ⅵ層黄褐色粘質土である。

第Ⅰ層は、近現代の造成土をあてた。造成土は20～30cmの厚さである。調査区の南側には近現代の構築物の基礎があり、土層の多くと遺構が削平されている。

第Ⅱ層は黄灰色粘質土で、10cm前後の厚さとなる。近現代に削平され、本来の厚さではない。

第Ⅲ層は黒色粘質土で、南側では10cm前後の堆積となるが、北側では緑灰色粘質土を挟み約30cmの厚さを測る。北側の堆積土は、遺構埋土の可能がある。

第Ⅳ層は黄色粘質土で、東壁の検出状況では北部及び南部に堆積がみとめられない。堆積は10cm前後を測る。なお、中央部付近では、第Ⅱ層との混合土が形成されている。

第Ⅴ層は暗茶褐色粘質土で、中央から北に分布する。堆積は10～30cmを測る。

第Ⅵ層は黄褐色粘質土で、20cmほど掘り進めたが、以下は未確認である。

基本土層以外に、北側には第Ⅱ層と第Ⅴ層との間に、淡褐色粘質土が20cm堆積している（③層）。

遺構は東壁によると、第Ⅱ層直下で溝２条が検出されるが、第Ⅲ層黒色土との関係はつかめない。

3．遺構と遺物

検出遺構は、弥生時代の溝２条、古墳時代の竪穴式住居址１棟、時期不明の土坑１基である。

（1）弥生時代

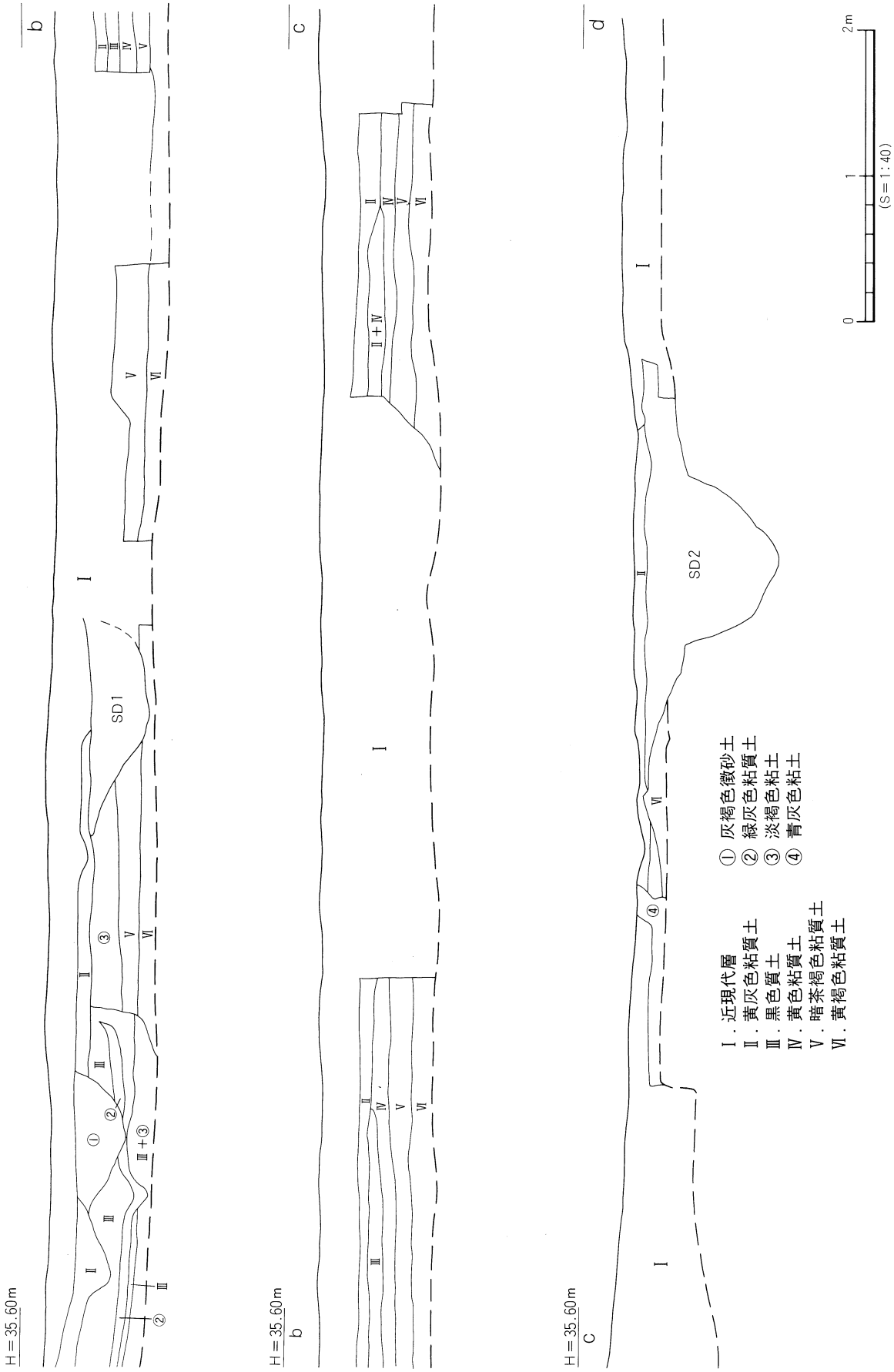
弥生時代の遺構には溝２条がある。

ＳＤ２（第７図、図版２～４）

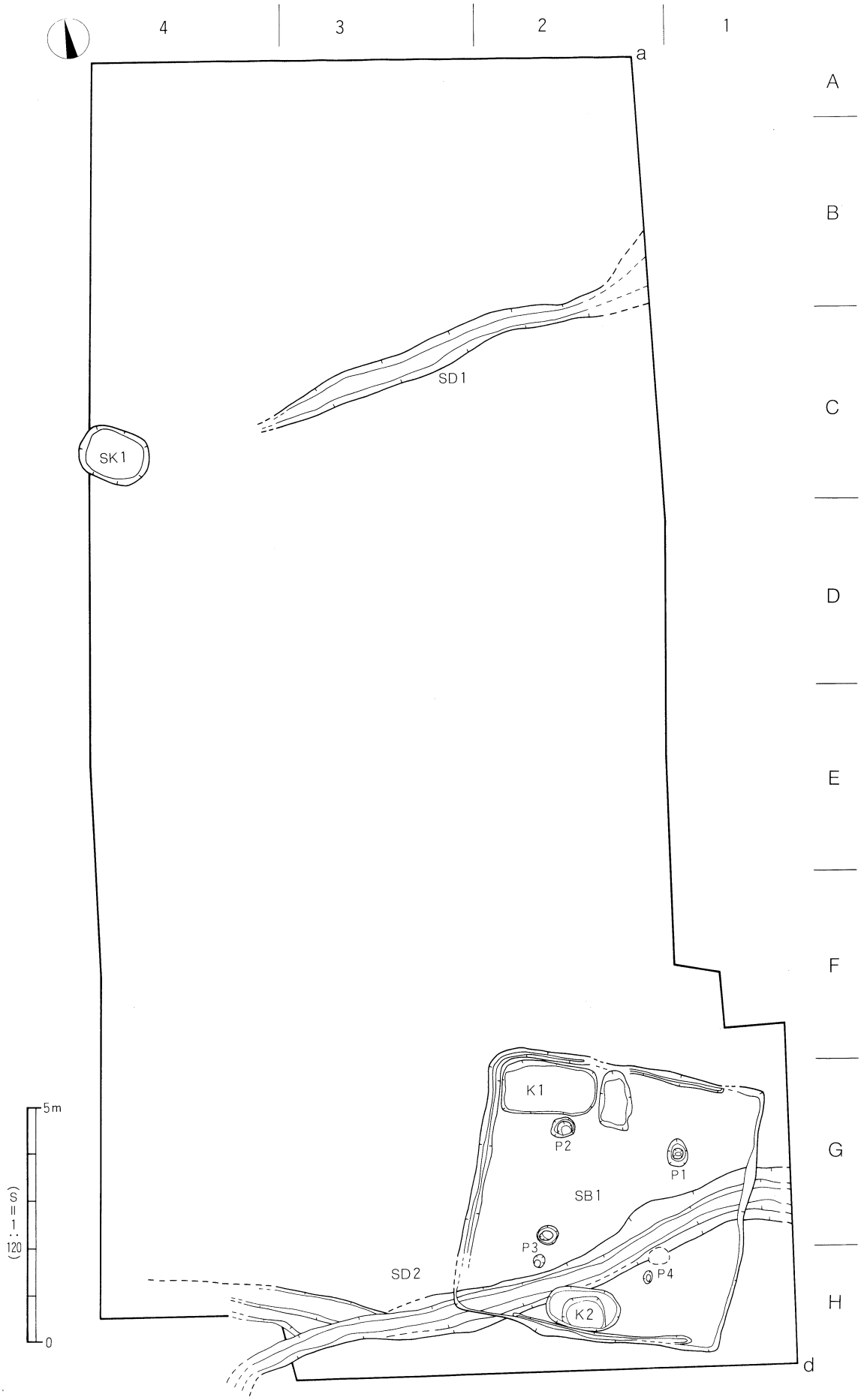
調査区の南端部にあり、ＳＢ１に切られる。調査地の西端では２つに分かれている。規模は検出長12m、上幅0.7～1.1m、深さ44cmを測る。断面形態は、概ね逆台形状を呈すが、北側の斜面は１～２ヶ所の段をもち、南側斜面よりもゆるやかに基底部にいたる。南側斜面は段を１ヶ所もち、傾斜が急角度をなす。基底部は20～30cm幅で、平坦になる。埋土は細分されるが、最下層は砂層で、地点により埋土中位にも砂層がみとめられる。遺物は、埋土中～上位を主体に、土器と石器が多数含まれている。

出土遺物（第８～13図、図版７～９）

甕形土器（１～42）　１～24は口頸部片である。口縁部は内面に稜をもって外反するものがほとんどである。１～７は叩き痕が看取できるもので、１～４は胴部にやや張りをもち、６・７は胴上半部はほとんど張らない。８～24は胴部外面が刷毛目調整痕に限られるもので、20～23は内面に鋭い稜をもつ。24は頸部が強くしまり、口縁部は長く、上外方に開くものである。形態が壺形土器に近い。25～36は胴下半部～底部の破片である。25～31は叩き痕を看取するもので、胴下半部にふくらみをもつものが多い。底部はたちあがりが不明瞭で、平底となる。32～36は外面に刷毛目調整痕だけが看取されるものである。32～34は直立するたちあがりをもち、底部外面中央がわずかに凹む。35・36は底部のたちあがりは不明瞭で、平底になる。37～42は外来系の土器である。37～39は口縁部片で、口縁内端部がわずかに突出する。40～42は胴上位にケズリ痕をもつもので、40・41は頸部直下、42は頸部の稜に沿ってケズリがなされる。


b
H＝35.60m
SD1
SD2
c
d
Ⅰ．近現代層
Ⅱ．黄灰色粘質土
Ⅲ．黒色質土
Ⅳ．黄色粘質土
Ⅴ．暗茶褐色粘質土
Ⅵ．黄褐色粘質土
① 灰褐色微砂土
② 緑灰色粘質土
③ 淡褐色粘土
④ 青灰色粘土
0
1
2m
(S＝1：40)

第５図　東壁土層図



第6図　遺構配置図

壺形土器（43～71）　43～57は複合口縁壺である。43～45は大型品で、二次口縁部に加飾がなされる。43は口縁端部、二次口縁部、一・二次口縁の接合部外面に沈線文、斜格子目文、刻目文が施される。44は棒状浮文が２ヶ１組で施されるが、マメツが著しく施文の全てであるかは判断できない。46～48は口縁接合部が稜をなすもので、口縁外面は無文となる。49は頸部下端に押圧斜格子の刻目突帯文をもつ。50～52は頸下半部で、50・51は刻目突帯文、52は「ノ」の字状の刺突文をもつ。53～57は胴下半部～底部の破片である。底部はあいまいなたちあがりをもち、平底になる。58～71は複合口縁ではなく単純に外反する口縁部をもつものである。58・59は頸部がしまり、短い口頸部をもつものであり、58は口縁端部を強くヨコナデし、明瞭な面をつくる。60・61は内傾する頸部に、短く外反する口縁部をもつものである。62～68は長い口頸部をもつものである。69は扁平球の胴部で、口頸部が長いものである。70・71は直立する頸部に、大きく外反する口縁部をもつもので、71は口縁端部を垂下させ、端面にクシ描波状文を施すものである。

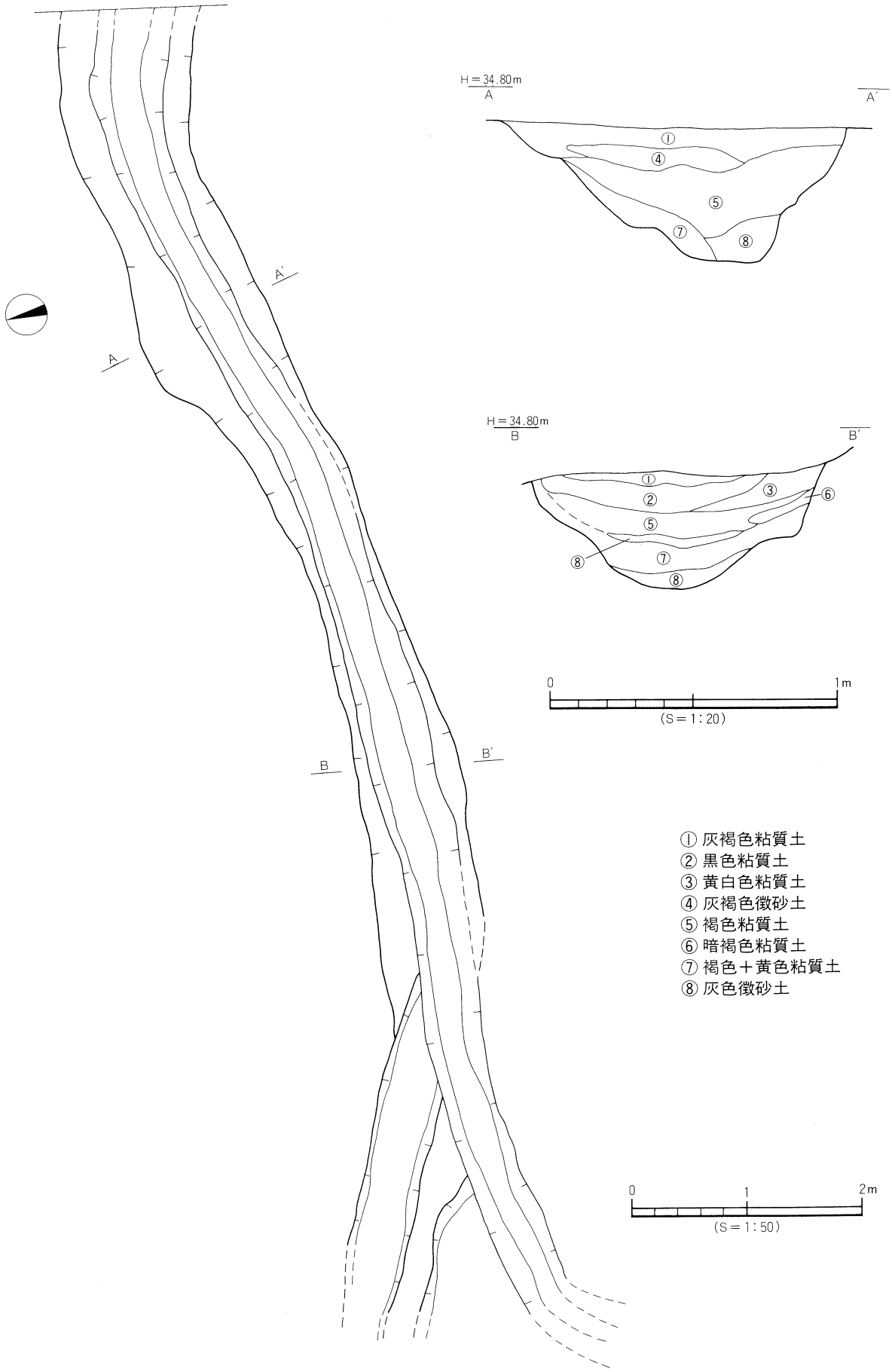
鉢形土器（72～83）　72～79は口縁部が外反するものである。72は口縁部が著しく長い。77は口縁部を欠損するもので、胴上半に張りをもち、底部は平底で直立するたちあがりをもつ。78・79は外反する口縁部がつくもので、79は長い口縁部をもつものである。80～82は直口口縁となるものである。83は外来系土器で、内湾してたちあがる口縁部をもつ。外面の口縁直下にはケズリによるあいまいな稜線がある。器壁が薄い。

高坏形土器（84～89）　84は坏部片で、口縁部は直線的に上外方に開く。器壁は薄く、固い。外来系。85～88は、柱部がエンタシス状に、裾部は二段、坏部は著しく長い口縁部をもつ高坏である。85・86は口縁部片で、口縁端部が垂下し、86には端面に沈線文を施す。87は裾部を欠くもので、坏下半部に稜をもって、長く大きい口縁部をもつ。88は裾部片で、上・下段部に円孔と半截竹管文を施している。89は小型品で、上下２段の円孔をもつ。

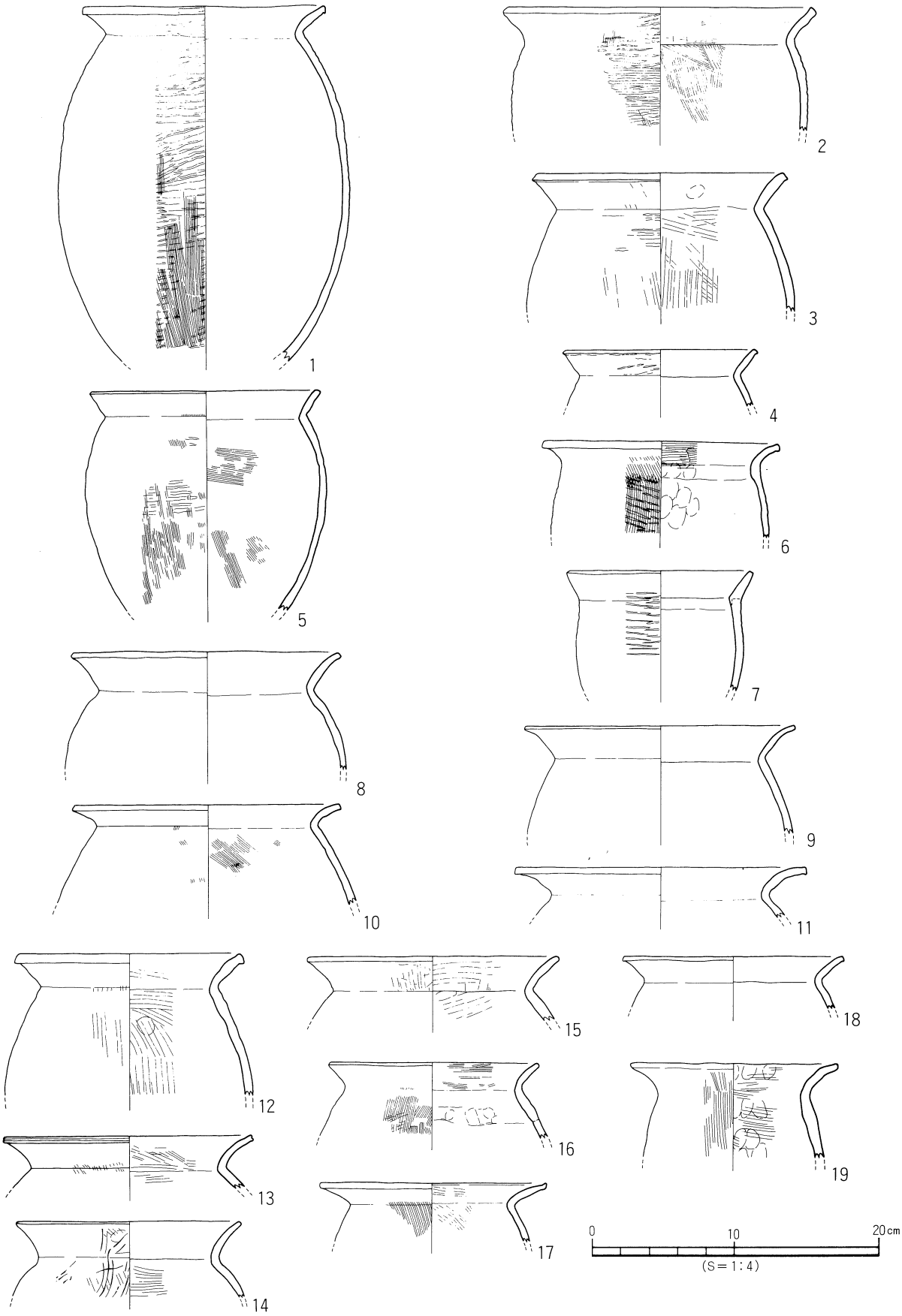
その他の器種（90～93）　90は支脚形土器である。台形状の体部に、受部は傾斜し、突起部を１ヶもつ。体部は中空で、受部の中央には円孔をもつ。91はミニチュア品で、形状は甕形土器に似る。底部は平底で、ややひずんでいる。92は土板状土製品で、器種・器形が判断できない。93は支脚状の土製品である。棒状で、図上部は溝状の大きな凹みをもつ。さらに凹みの中央には、未貫通の小穴がある。図下部は欠損している。

石製品（94～96）　94は結晶片岩製の石庖丁である。紐孔を２ヶもつ。95は叩き石の完形品である。96は石材が安山岩とみられるもので、土掘り具であろう。

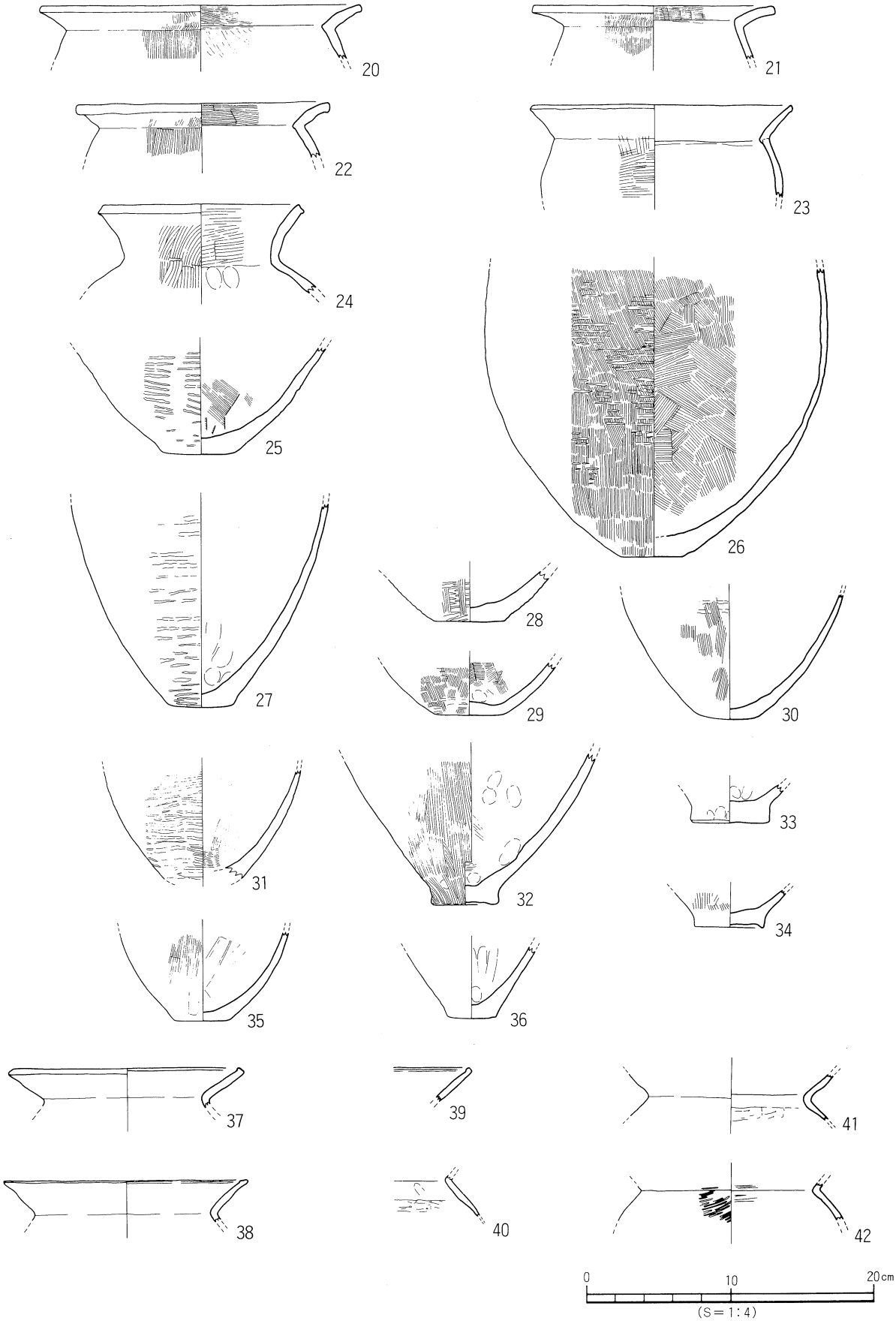
時期：ＳＤ２の時期は出土品より、弥生時代後期終末に時期比定する。


H＝34.80m
A
A′
①
④
⑤
⑦
⑧
H＝34.80m
B
B′
①
②
③
⑥
⑤
⑧
⑦
⑧
0
1m
(S＝1：20)
A′
A
B
B′
① 灰褐色粘質土
② 黒色粘質土
③ 黄白色粘質土
④ 灰褐色微砂土
⑤ 褐色粘質土
⑥ 暗褐色粘質土
⑦ 褐色＋黄色粘質土
⑧ 灰色微砂土
0
1
2m
(S＝1：50)

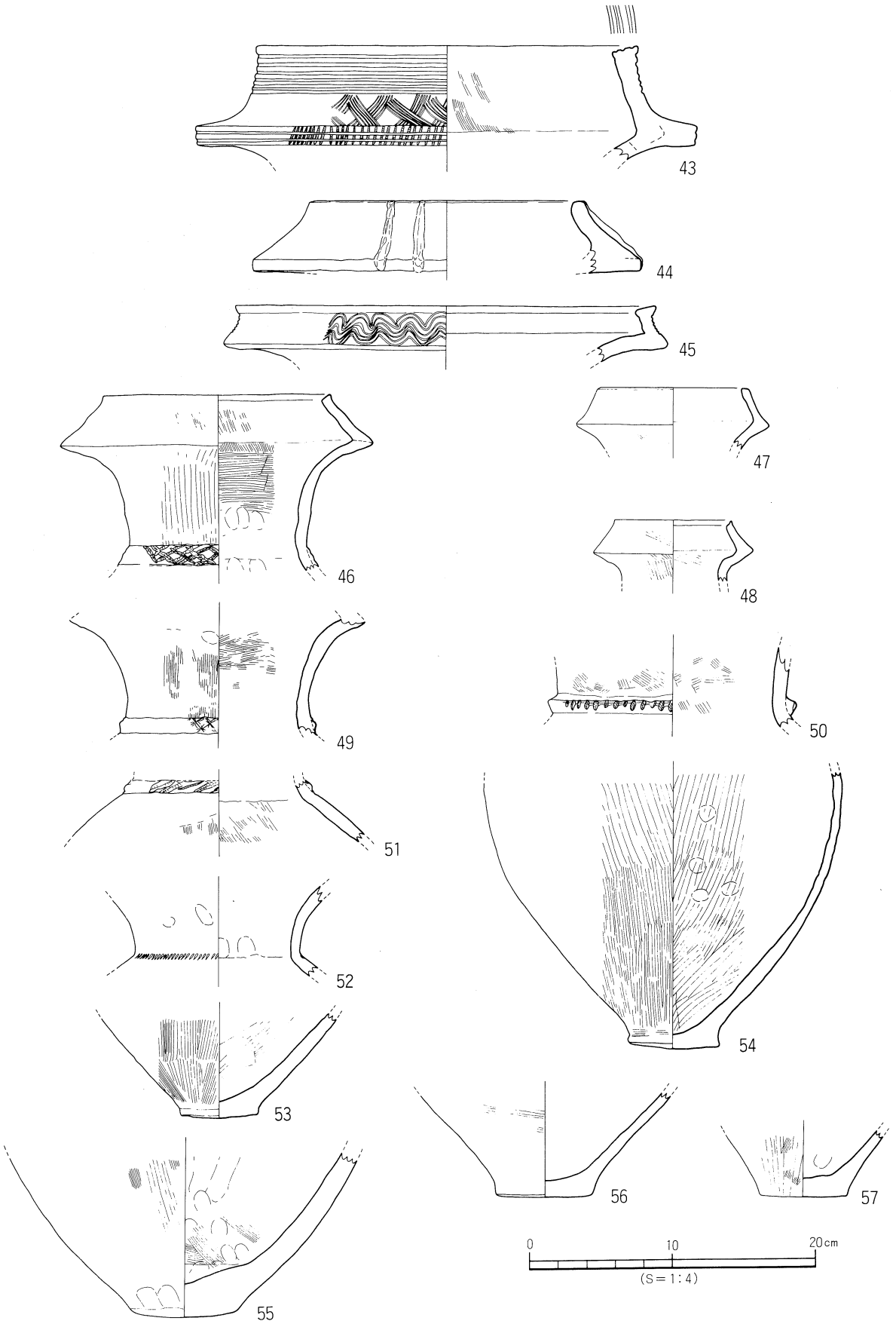
第７図　SD２測量図



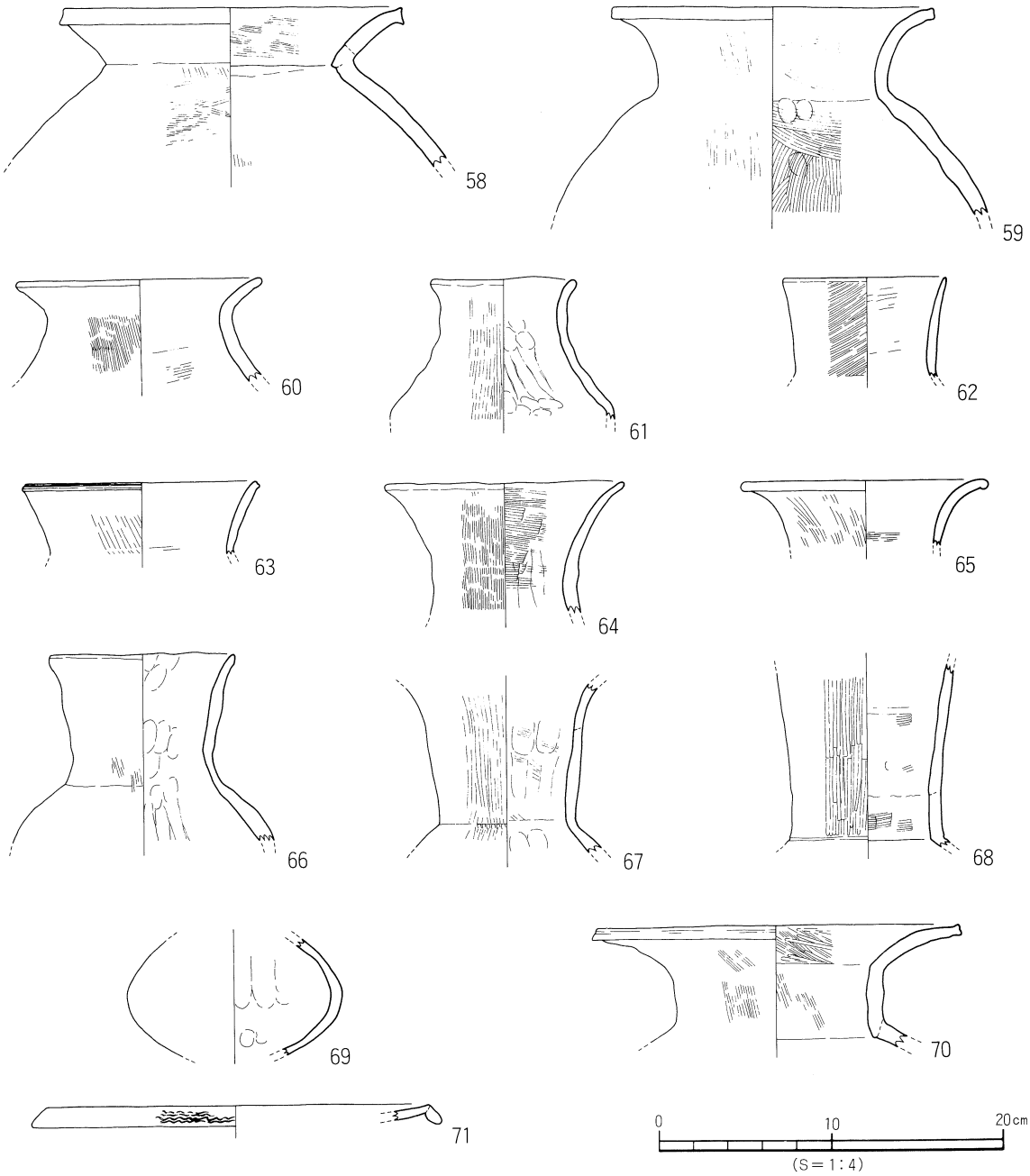
第８図　SD２出土遺物実測図（1）



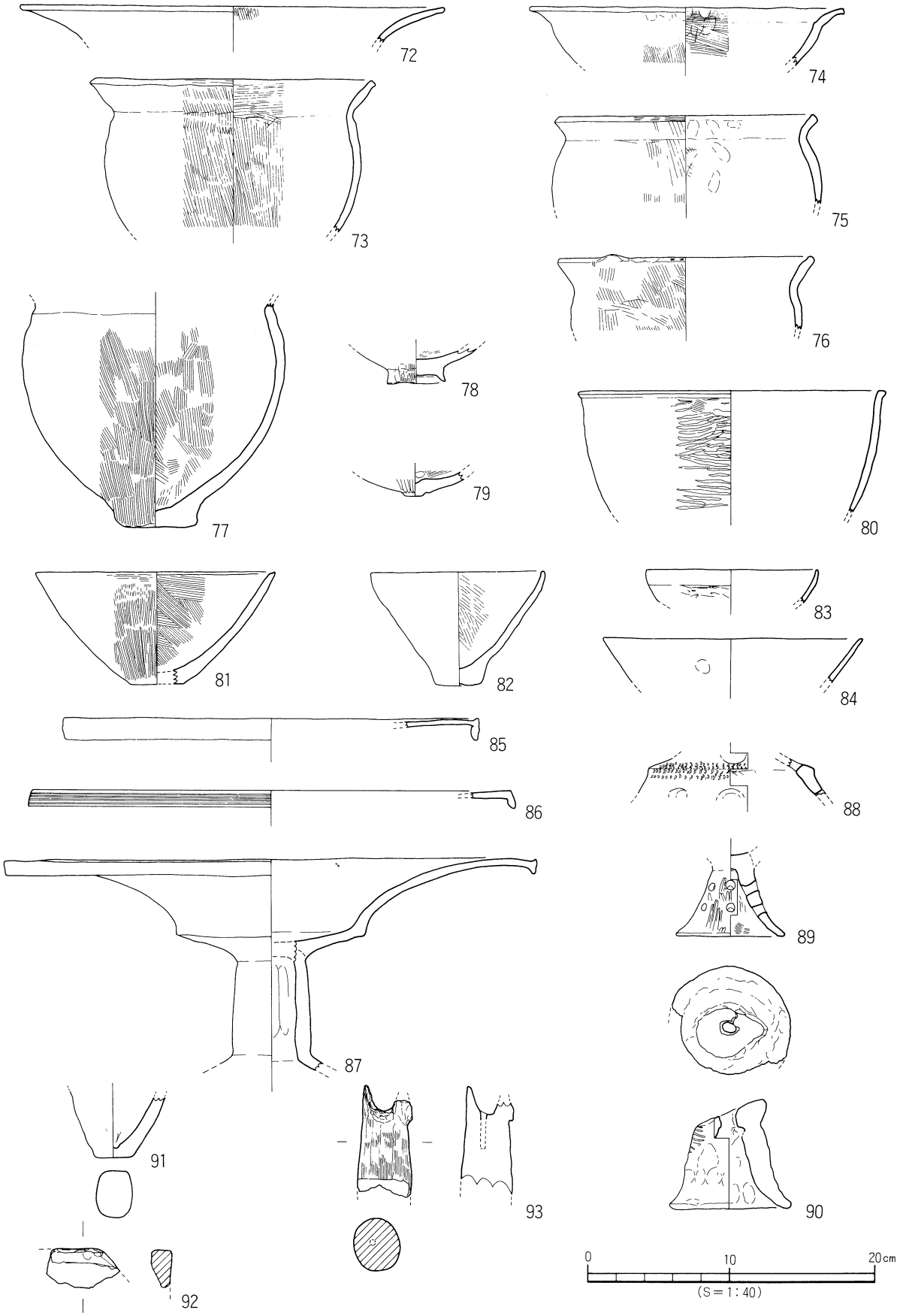
第9図　SD2出土遺物実測図（2）



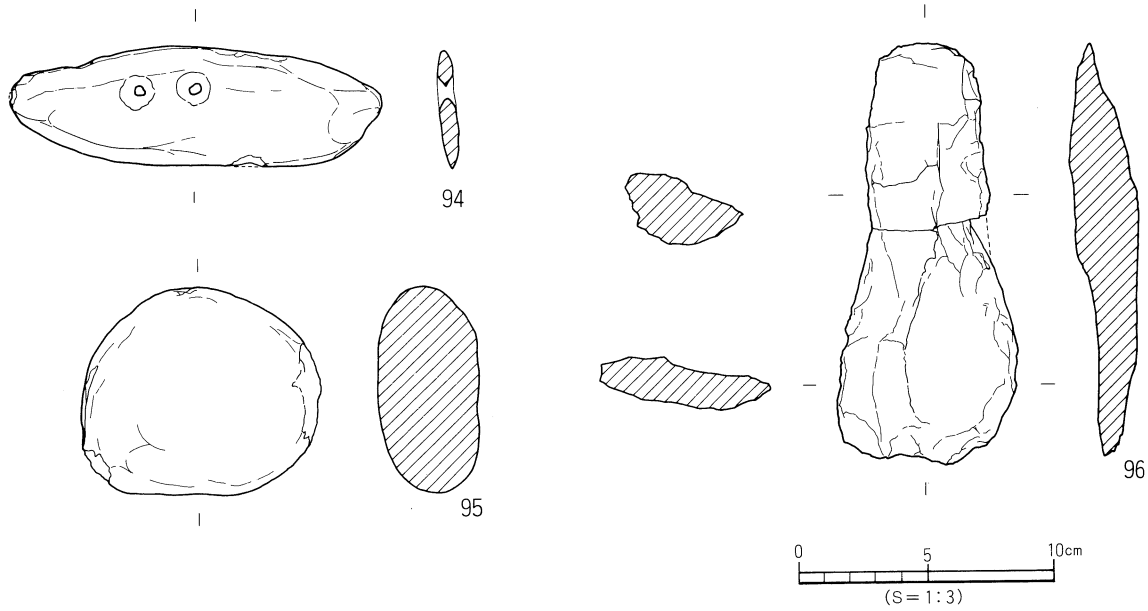
第10図　SD２出土遺物実測図（3）



第11図　SD 2 出土遺物実測図（4）



第12図　SD２出土遺物実測図（5）



第13図　SD２出土遺物実測図（6）

ＳＤ１（第14図）

調査地の北側に位置する。規模は、検出長8.5m、幅0.6m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は青灰色粘質土で、出土遺物は少ない。

出土遺物（第14図）

97～99は壺形土器である。97は複合口縁壺の口縁部片で、口縁部には沈線文が施される。98は頸部片で、斜格子目の刻目突帯文をもつ。99は胴部片で、胴部全体に張りをもち、胴中位が最大径になる。100は高坏形土器の脚部片で、円孔が上・下二段に施される。101は台付鉢の脚部片で、裾部に円孔をもつ。

時期：出土物より、弥生時代後期後葉～終末に時期比定しておく。

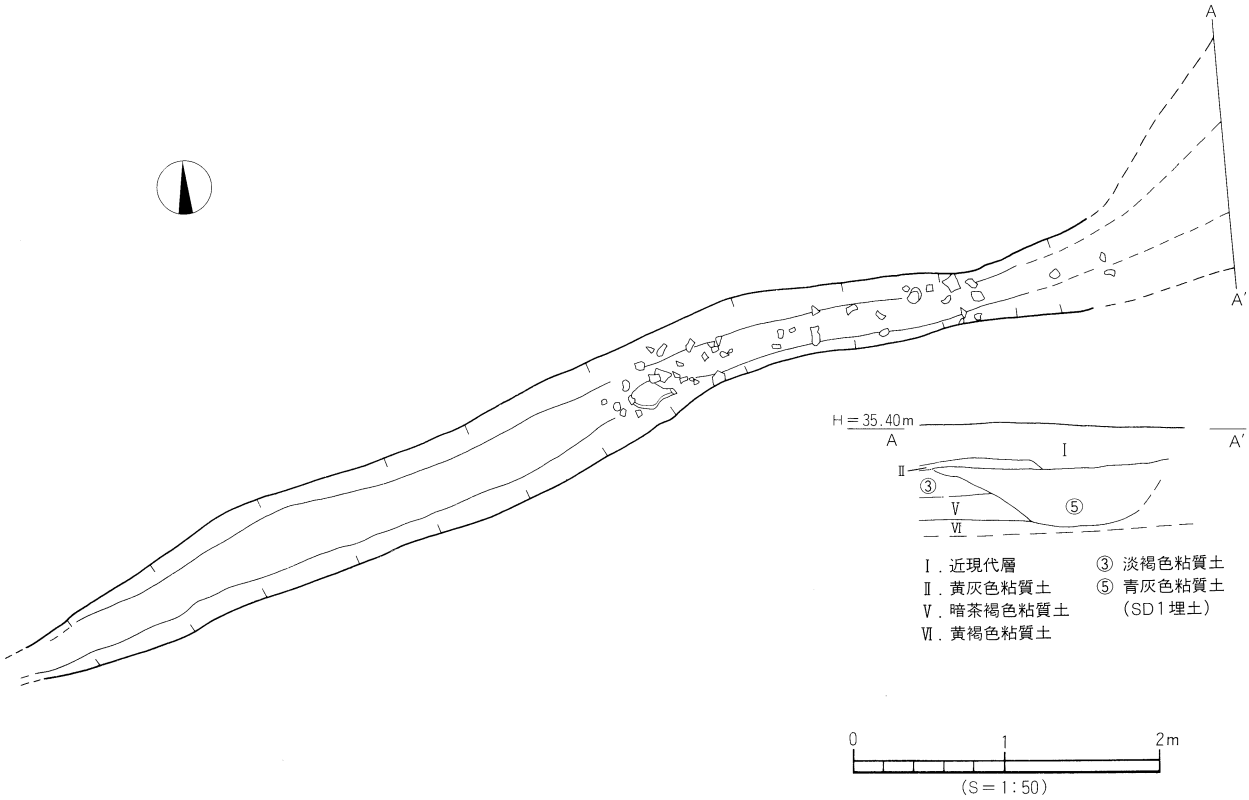
（２）古墳時代

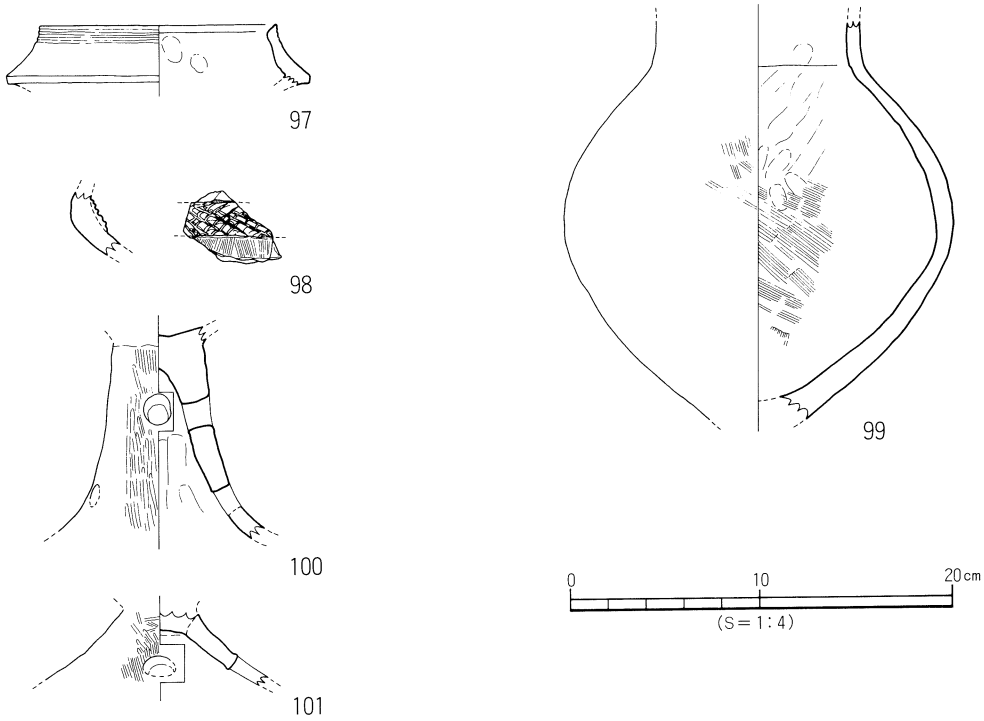
古墳時代の遺構は、竪穴式住居址ＳＢ１の１棟である。

ＳＢ１（第15図、図版４・５）

調査地の南東隅にあり、ＳＤ２を切る。平面形態は方形を呈し、規模は南北5.9m、東西5.8m、深さ26cmを測る。屋内施設には、主柱穴、カマド、土坑がある。

主柱穴は３基を検出したが、南東隅の主柱穴はＳＤ２との切りあい部分にあり、検出が困難であった。よって、本来は４本の主柱をとるものと考えられる。主柱穴の規模は直径42～58cm、深さ40～54cmで、二段掘りとなる。南側の主柱には、支柱が各々配される。支柱穴の規模は直径30cm、深さ60cmを測る。カマドは、北壁の中央にあり、検出は基底部に限られる。平面形態は長い馬蹄形を呈し、深さ30cmの凹みをもつ。規模は長軸1.3m、南側たき口部分は0.58mを測る。粘土と焼土を検出している。カマド内からは高坏の破片が出土している。





第14図　SD１測量図・出土遺物実測図

土坑は、北東隅にＫ１、南壁に沿って中央部にＫ２がある。Ｋ１は平面形態が隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長辺２ｍ、短辺1.2ｍを測る。埋土は下部に粘性土、中位に焼土、上部に焼土と黒色の灰が混合した土壌が堆積している。最上部には四角形の扁平な石が中央にある。出土物は中央の石以外に、土器片と礫１点がある。

Ｋ２は、南壁沿いの中央部にある。平面形態は長楕円形状を呈し、２段掘りとなる。断面形態は逆台形状で、南側は基底部まで直線的に下るが、東・西・北側は段をもって、基底部にいたる。規模は長軸が1.6ｍ、短軸が０.89ｍとなり、深さは上部から段までが14㎝、上部から基底部までが32㎝となる。埋土は上下二層に分かれ、下部は黒色粘質土と黄色粘質土との混合土、上部は黒色粘性土となる。遺物は完形にちかい土師器の甕や須恵器の坏蓋などが破片の状況で出土している。

出土遺物（第16図、図版９）

住居址埋土出土品（102～110）

102～106は土師器で、102～104が甕、105・106は高坏である。102～104は内湾してたちあがる口縁部をもち、口縁端部は水平～わずかに内傾し面をなす。内面には、頸部のやや下からケズリ痕が看取される。105・106は高坏の坏部片で、105は口縁部がわずかに外反する。107～110は須恵器である。107・108は坏蓋で、稜をもち、口縁端部は内傾する。109は高坏の坏部で、体部はやや扁平となる。110は高坏の裾部片である。

Ｋ２出土品（111～115）

111～113は土師器である。111は甕で、底部を欠く。扁平球の胴部は、肩部が強く張る。口縁部は内湾傾向をもって上外方にたちあがる。口縁端部は内傾し、内端部が小さく突出する。112は甕の口縁部片で、口縁部は内湾してたちあがる。113は鉢で、内湾してたちあがる口縁部は直口となる。114・115は須恵器の坏蓋片である。稜をもって、口縁端部は内傾する。

時期：出土品より、５世紀末～６世紀初頭に時期比定する。

（３）時期不明

時期不明の遺構は、土坑ＳＫ１の１基である。

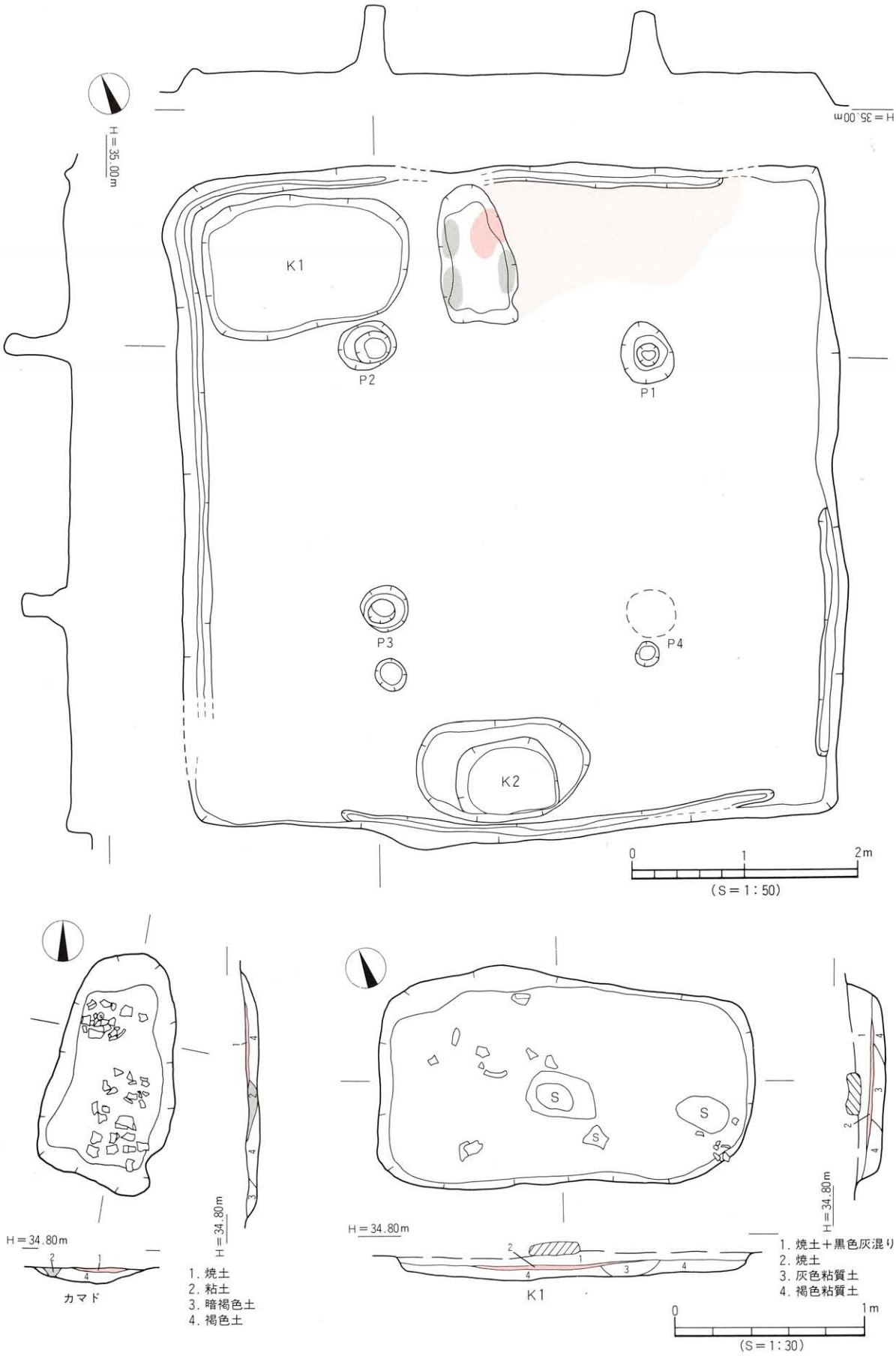
ＳＫ１（第17図、図版９）

調査地の北西部にある。平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形を呈する。規模は、長軸１.46ｍ、短軸1.1ｍ、深さ30㎝を測る。出土遺物には砥石が１点ある。第17図116はＳＫ１出土の砥石で、石材は砂岩と思われる。四面は使用マメツが著しい。大きさは13.６×６.４×5.3㎝で、重さは840ｇである。土坑の性格は判断できない。

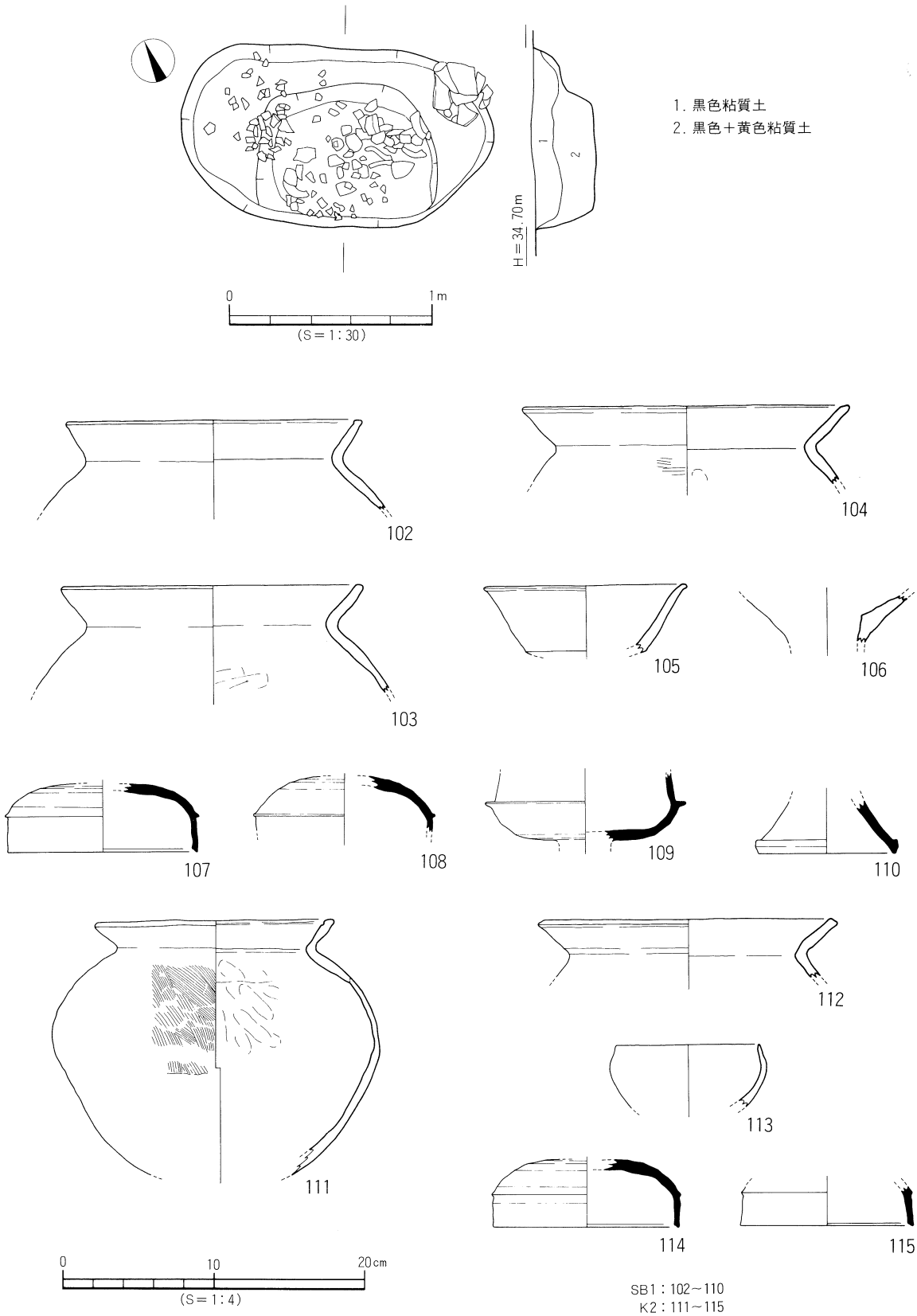
（４）その他

出土地点が不明な土器を取り上げておく。（第18図）

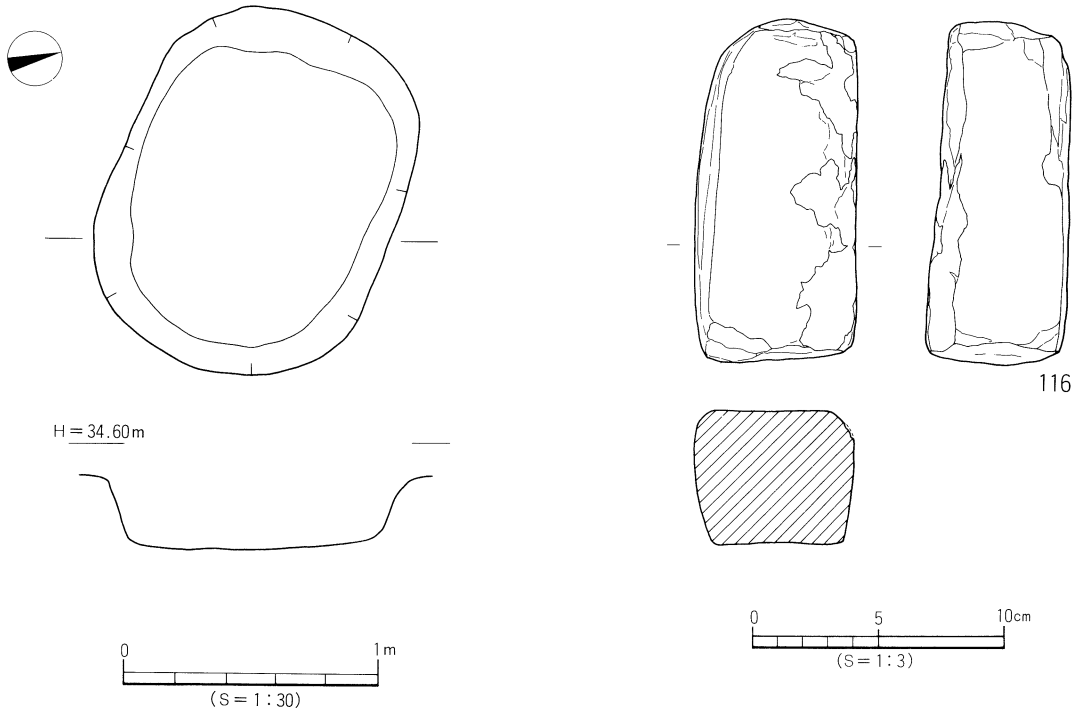
117～122は弥生土器である。117・118は甕形土器で、117は内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。118は胴下半部～底部までの破片で、胴下半部は張りが弱く、底部は平底になる。117・118ともに外面に叩き痕を看取する。119は複合口縁壺で、口縁部は無文、頸部下端には斜格子目の刻目突帯文をもつ。120・121は鉢形土器で、直口口縁となる。122は高坏形土器で、長く大きく外反する口縁部をもつ。123は須恵器の坏蓋で、稜と内傾する口縁端部をもつ。



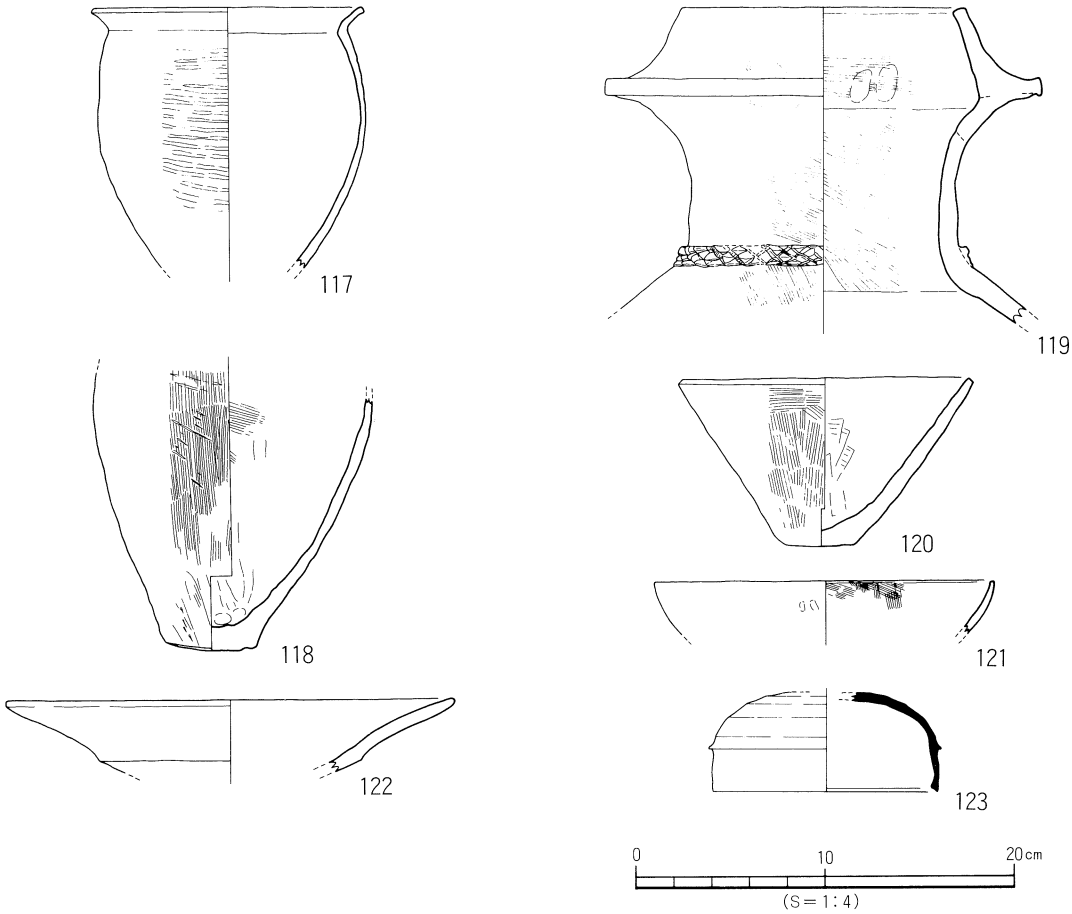
第15図　SB１・SB１内カマド・K１測量図



第16図　K２測量図・SB１・K２出土遺物実測図



第17図　SK１測量図・出土遺物実測図



第18図　地点不明遺物実測図

4．小　結

本調査では、弥生時代後期末と古墳時代の遺構・遺物を確認することができた。

弥生時代

ＳＤ２は、砂層が堆積していることより、水利に伴う溝と判断される。出土物は、大型破片を含む多くの土器が出土しており、集落に伴う廃棄品とみることができる。出土土器は、甕形土器に叩き痕を残すものが半数含まれるが、胴部下半のふくらみが弱いことから、後期終末でもやや古い形状をもつものと考えている。なお、甕形土器37～42は近畿地方の布留傾向甕の特徴をもつもので、近畿地方の土器編年との併行関係を考える一つの資料といえる。

ＳＤ１は、その延長上に調査地西の２次調査地ＳＤ１があるため、同一の溝と考えることができる。さて、３次調査ＳＤ１とＳＤ２の時間的前後関係は、ＳＤ１が出土物少量のため時期比定を難しくしているが、あえて言及すれば、ＳＤ１はＳＤ２と同時か、それよりも一段階古いもの（後期後葉）といえる。

古墳時代

竪穴式住居址ＳＢ１は、浮穴小学校構内遺跡のなかでは唯一の古墳時代遺構である。平面形態、カマド、主柱穴等の形状と数からは、５世紀末～６世紀初頭の松山平野の典型的な竪穴式住居の形態にあたる。住居址内の構造では、土坑の検出が注目される。北西隅のＫ１からは焼土や灰が検出され、カマドに伴うものか、カマドとは別の火所かは課題となった。また、南壁に沿うようにあるＫ２からは完形品にちかい土器があり、貯蔵施設としての機能が考えられる。

以上、浮穴小学校構内遺跡３次調査の報告を行った。最も大きな調査成果は、古墳時代の竪穴式住居址を確認したことである。一帯には数棟の竪穴式住居が展開していることが充分に推察される。

浮穴地区内では、発掘調査事例が少なく、浮穴小学校構内での調査資料は、同地区の考古学資料の基礎をなすものである。今後とも小学校構内の継続的な調査は不可欠であろう。

本報告に関しては、西尾幸則氏、栗田茂敏氏、栗田正芳氏には助言と協力とを得た。なお、調査中ガラス小玉１点が出土しているが、詳細は不明。

遺構・遺物一覧　（作成者：梅木謙一・水口あをい）

表2　竪穴式住居址一覧　※凡例は、77ページを参照

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	5～6C初頭	方　形	5.9×5.8×0.26	黒・黄色粘質土	34.2	4		○		○	○	SD2を切る

表3　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	BC～C3	逆台形状	8.5×0.66×0.4	東西	青灰色粘土	弥生	弥生時代後葉～終末	
2	G1～H4	逆台形状	12.0×0.7～1.1×0.44	東西	褐色粘性土	弥生・石庖丁	弥生時代終末	SB1に切られる

表4　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面図	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C4	隅丸長方形	逆台形	1.46×1.1×0.3	1.6	不　明	砥　石	不　明	

表５　SD２出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(16.9) 残高 25.1	胴部は全体にふくらみをもって長い。稜をもって外反する口縁部。	(胴上)タタキ (胴下)タタキ→ハケ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石、長（1～3） シャモット ○		7
2	甕	口径(21.0) 残高 8.7	稜をもって外反する口縁部。	タタキ(1部ハケ)	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	黄茶褐色 茶褐色	石、長（1～5） 金 ◎		7
3	甕	口径(17.2) 残高 9.8	稜をもって外反する口縁部。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)タタキ→ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	茶褐色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
4	甕	口径(13.7) 残高 4.0	稜をもって外反する口縁部。	タタキ	ナデ（マメツ）	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～2） 安 ◎		
5	甕	口径(15.2) 残高 15.5	稜をもって外反する口縁部。口縁部は短かい。肩部がやや張る。	(口)マメツ (胴)タタキ→ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(1部ナデ)	乳灰色 灰茶色	石、長（1～3） 金、安 ◎		
6	甕	口径(16.7) 残高 6.5	ゆるやかに外反する口縁部。内面に接合痕。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)タタキ→ハケ	(口)ハケ (胴)ナデ	橙褐色 橙褐色	石、長（2～5） ○		7
7	甕	口径(13.0) 残高 8.5	稜をもって外反する口縁部。口縁部は短かい。	(口)タタキ→ナデ (胴)タタキ	マメツ	淡橙色 淡橙色	石、長（1～3） ○		7
8	甕	口径(18.7) 残高 8.3	長く大きく開く口縁部。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石、長（2～3） シャモット ○		
9	甕	口径(17.8) 残高 7.6	稜をもって外反する長い口縁部。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳黄色	石、長（1～4） ◎		
10	甕	口径(18.4) 残高 7.1	ゆるやかに外反する短い口縁部。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(マメツ)	(口)マメツ (胴)ハケ	淡乳色 乳茶色	石、長（1～5） 金、安 ◎		
11	甕	口径(20.2) 残高 3.5	稜をもって外反する長い口縁部。	ナデ	マメツ	暗黄褐色 暗灰色	砂粒 ◎		
12	甕	口径(15.2) 残高 10.0	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(マメツ)	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	砂粒 ○		
13	甕	口径(17.0) 残高 3.8	稜をもって外反する長い口縁部。口縁端部はナデ凹み。	ハケ→ナデ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～3） ◎		
14	甕	口径(15.6) 残高 5.3	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	(口)マメツ (胴)ハケ	茶褐色 乳灰茶色	石、長（1～3） ◎		
15	甕	口径(17.1) 残高 4.6	稜をもって外反する口縁部。	ハケ（マメツ）	ハケ	淡黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
16	甕	口径(14.4) 残高 5.3	あいまいな稜をもって外反する口縁部。内面には接合痕。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(1部ナデ)	(口)ハケ (胴)ナデ	灰褐色 茶褐色	石、長（1～4） 安 ◎		
17	甕	口径(15.9) 残高 4.2	あいまいな稜をもって外反する長い口縁部。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	ハケ	褐色 褐色	砂粒 金 ◎		
18	甕	口径(15.6) 残高 3.8	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳灰色	長、安（2～4） ◎		
19	甕	口径(15.6) 残高 3.6	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ	ナデ→ハケ	黄橙色 黄橙色	石、長（1～3） シャモット ◎		

SD2出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	口径(22.0) 残高 3.8	稜をもって強く屈折する口縁部。	ハケ	㊐ハケ ㊗ハケ→ナデ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～6） ◎		
21	甕	口径(17.1) 残高 3.8	稜をもって強く屈折する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ハケ ㊗ハケ→ナデ	乳黄茶色 乳灰茶色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
22	甕	口径(17.6) 残高 4.0	稜をもって強く屈折する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ハケ ㊗ナデ	茶褐色 黄灰色	砂粒 ◎	黒斑	
23	甕	口径(18.3) 残高 6.5	稜をもって強く屈折する長い口縁部。	㊐マメツ ㊗ハケ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石、長（2～5） シャモット ◎		
24	甕	口径(13.6) 残高 6.3	上外方に長くのびる口縁部。	ハケ（1部ナデ）	㊐ハケ ㊗ナデ	淡褐色 褐色	砂粒 ◎		
25	甕	底径（5.1） 残高 7.3	あいまいなたちあがりをもつ平底。	タタキ(1部ナデ)	ハケ	茶褐色 淡茶褐色	長、安（1～5） ◎	黒斑	
26	甕	底径 4.5 残高 20.4	胴下半部はふくらみをもつ。平底。	タタキ→ハケ	ハケ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～2） ◎		
27	甕	底径 4.5 残高 14.4	胴下半部は直線的に底部へつづく。あいまいなたちあがりをもつ平底。	タタキ	ナデ（マメツ）	灰茶色 灰茶色	石、長、安（1～5） ◎		
28	甕	底径 5.0 残高 3.5	大きな平底。	タタキ→ハケ	マメツ	黄茶褐色 灰色	石、長（1～4） ○		
29	甕	底径（4.8） 残高 3.7	平底。器壁は薄い。	タタキ→ハケ	ハケ	乳黄灰色 乳黄灰色	石、長（1～2） ◎		
30	甕	底径 4.4 残高 8.7	胴下半部はふくらみをもつ。平底。	タタキ→ハケ	マメツ	灰黄褐色 黒灰色	石、長、安（2～4） ◎		
31	甕	残高 7.7	胴下半部はわずかにふくらむ。	タタキ	ハケ	暗黄色 黒灰色	石、長（1～3） ◎		
32	甕	底径 4.8 残高 10.6	直立するたちあがりをもつ平底。	ハケ	ナデ（1部ハケ）	黄茶褐色 暗褐色	石、長、安(1～4) ◎		
33	甕	底径 5.5 残高 2.7	直立するたちあがりをもつ平底。	ナデ	ナデ	乳灰褐色 黒灰色	石、長（1～2） ◎		
34	甕	底径 4.8 残高 3.7	直立するたちあがりをもつ上げ底。	ハケ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石、長、安(1～4) ◎	黒斑	
35	甕	底径 3.8 残高 6.2	胴下半部はふくらみをもつ。平底。	ハケ	ハケ	灰茶褐色 淡灰色	石、長（1～2） ◎		
36	甕	底径 3.4 残高 5.1	あいまいなたちあがりをもつ平底。	ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長、安(1～4) ◎	黒斑	
37	甕	口径(16.5) 残高 2.8	口縁部は内湾ぎみにたちあがる。口縁端部は面をもち、小さく央出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 灰茶色	密、金 ◎		7
38	甕	口径(17.1) 残高 2.9	口縁部は外反してたちあがり、口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	マメツ	乳橙褐色 乳橙褐色	石、長（1～3） 金 ◎		7

SD２出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	甕	残高 2.4	直線的に上外方にたちあがる。口縁端部は面をなす。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		7
40	甕	残高 2.9	肩部内面にケズリによる稜をもつ。	マメツ	ケズリ	淡茶色 灰色	密、金 ◎		7
41	甕	残高 3.3	肩部内面にケズリによる稜をもつ。	ヨコナデ	㊐ナデ ㊐ケズリ	乳黄色 乳茶色	密、金 ◎		7
42	甕	残高 2.5	ケズリは頸部にまで達する。	タタキ	ケズリ	淡灰色 淡灰色	石、長（1～2） ◎		7
43	壺	口径(26.4) 残高 8.0	口縁端面は3条沈線。口縁外面には6条沈線＋クシ6条の斜格子目文。接合部外面は沈線2＋刻目文。	ヨコナデ→施文	ハケ→ヨコナデ	褐色 褐色	石、長（1～3） ○		7
44	壺	口径(17.0) 残高 5.1	タテ方向の棒状浮文一組。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～5） ◎		7
45	壺	口径(29.2) 残高 4.0	6条のクシ描き波状文。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	淡褐色 淡黄褐色	密 ◎		7
46	壺	口径(15.6) 残高 13.4	口縁部無文。頸部下端に板状木口による斜格子目の刻目突帯。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	褐色 褐色	石、長（1～2） ◎		
47	壺	口径(10.7) 残高 4.2	接続部分は「く」の字状。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	明褐色 淡褐色	砂粒 ◎		
48	壺	口径 8.2 残高 4.3	接続部分は「く」の字状。口縁部は無文。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ(1部ヨコナデ)	㊐ヨコナデ ㊐ハケ(1部ナデ)	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
49	壺	口径(14.2) 残高 11.1	頸部下端に斜格子目の刻目突帯。	㊐ハケ(マメツ) ㊐ハケ(1部ナデ)	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	明褐色 明褐色	石、長（1～3） ◎		
50	壺	残高 5.6	頸部下端に刻目突帯。	㊐ハケ(1部ナデ)	㊐ハケ(1部ナデ)	乳黄褐色 乳黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
51	壺	残高 4.3	頸部下端に「ノ」の字状の刻目突帯。	マメツ	ハケ	黄褐色 乳黄褐色	石、長（1～5） ◎		
52	壺	残高 6.0	頸部下端に「ノ」の字状の刻目。	ナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
53	壺	底径 5.4 残高 7.4	ちいさくたちあがる平底。中央部はやや厚い。	ハケ	ハケ	黄褐色 乳灰色	安（1～3） ○		
54	壺	底径 6.5 残高 19.5	直立するたちあがりをもつ平底。	ハケ	ハケ	乳褐色 黄灰色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
55	壺	底径 (5.8) 残高 10.0	あいまいなたちあがりをもつ厚い平底。	ハケ（マメツ）	ハケ(1部ナデ)	淡茶色 乳茶色	石、長（1～5） ◎		
56	壺	底径 6.8 残高 7.4	たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石、長、安(1～5) ◎		
57	壺	底径 5.9 残高 4.7	平底。	ハケ（マメツ）	ナデ	灰茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～3） ◎		

SD2出土遺物観察表（土製品）

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
58	壺	口径 19.5 残高 9.4	直線的に上外方に開く口縁部。口縁部は面をなす。	口ハケ(マメツ) 胴ハケ	口ハケ 胴マメツ	淡黄褐色 淡灰黄色	長、安（1～5） ◎		
59	壺	口径(18.6) 残高 12.0	外傾外反して開く口縁部。	マメツ	口ハケ→ヨコナデ 胴ハケ	淡褐色 淡褐色	石、長、安(1～3) ○		
60	壺	口径(14.0) 残高 6.1	ゆるやかに開く短い口縁部。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴ハケ→ナデ	茶褐色 乳黄茶色	石、長、安(1～3) ◎		
61	壺	口径 8.4 残高 8.2	直立ぎみにたちあがる頸部に、短く開く口縁部。	ハケ	ナデ	黄褐色 黄褐色	長、安（2～5） ○		
62	壺	口径 (9.4) 残高 6.0	直線的に長くのびる口頸部。	ハケ	ハケ（マメツ）	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～2） ◎		
63	壺	口径(13.4) 残高 4.3	外反する口頸部。	ハケ(1部ヨコナデ)	ナデ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
64	壺	口径(14.0) 残高 7.7	長く大きく開く口頸部。	ハケ	ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） ○		
65	壺	口径(14.4) 残高 3.9	長く大きく開く口頸部。	ハケ（1部ナデ）	ヨコナデ	褐色 暗褐色	砂粒 金 ◎		
66	壺	口径 11.0 残高 11.0	直線的に上外方にたちあがる長い口頸部。	ハケ→ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～4） ◎		
67	壺	残高 9.1	直線的に上外方にたちあがる長い頸部。	ハケ	ハケ→ナデ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～4） ◎		
68	壺	残高 10.8	直線的に上外方にたちあがる長い頸部。	ミガキ	ハケ（マメツ）	灰黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎		
69	壺	残高 6.8	扁平球の胴部。	マメツ	ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～2） ◎		
70	壺	口径 21.2 残高 7.2	直立する頸部に、大きく開く口縁部。	ハケ（マメツ）	口ハケ→ミガキ 頸ハケ→ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～2） ○	ベンガラ	8
71	壺	口径 22.2 残高 1.2	口縁端部は垂下する。口縁端面には2条のクシ描波状文2段。	マメツ	ナデ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎		
72	鉢	口径(29.4) 残高 2.4	大きく開く長い口縁部。	ナデ	ミガキ(マメツ)	褐色 橙褐色	密 ◎		
73	鉢	口径(20.0) 残高 10.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ	ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） ○		
74	鉢	口径(22.0) 残高 4.0	稜をもって外反する口縁部。	口頸ハケ→ヨコナデ 胴ハケ	ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～2） ○		
75	鉢	口径(21.0) 残高 6.3	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長、安(1～4) ◎		
76	鉢	口径(17.9) 残高 5.1	ゆるやかに上外方に開く口縁部。	ハケ	口ヨコナデ 胴ナデ	褐色 淡褐色	安（2～3） ◎		

SD２出土遺物観察表（土製品）

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
77	鉢	底径 5.9 残高 15.8	直立するたちあがりをもつ平底。胴上半分はやや張る。	ハケ	ハケ(1部ナデ)	黄褐色 黄褐色	石、長、安(1~4) ◎	黒斑	
78	鉢	底径 4.0 残高 2.4	直立するたちあがりをもつ上げ底。 底部壁は厚い。	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ	茶褐色 茶褐色	石、長（1~2） ◎		
79	鉢	底径 1.2 残高 1.8	ボタン状の小さい平底。	ミガキ	ハケ	黒色 灰色	密 ◎		
80	鉢	口径(20.2) 残高 8.6	口縁端部はわずかに開く。	ハケ→タタキ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長、安(1~4) ◎		
81	鉢	口径(17.0) 器高 8.9 底径 3.8	直口口縁。	ハケ (1部ヨコナデ)	ハケ	淡黄褐色 淡茶褐色	石、長（1~3） ○	黒斑	
82	鉢	口径(11.8) 器高 8.0 底径 3.2	直立してたちあがる直口口縁。	マメツ	ハケ	淡灰褐色 淡褐色	石、長、安(1~4) ○	黒斑	
83	鉢	口径(12.0) 残高 2.2	内湾してたちあがる口縁部。器壁は薄い。	口ヨコナデ 胴ケズリ	ヨコナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石、長（1~2） 金 ◎	外来系	7
84	高坏	口径(18.1) 残高 2.9	直線的に上外方にたちあがる口縁部。器壁は薄い。	ナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	密 ◎	外来系	
85	高坏	口径(28.6) 残高 1.5	口縁端部は垂下する。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1~2） ◎		
86	高坏	口径(33.4) 残高 1.3	口縁端部は垂下する。口縁端面には4条のクシ描沈線文。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1~4） ◎		
87	高坏	口径(37.0) 残高 14.9	柱部はエンタシス状。坏部は大きく開く。口縁端部は上下に拡張。充塡技法。	マメツ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石、長（1~3） シャモット ○		8
88	高坏	残高 2.6	裾部は二段からなる。上部には円孔（φ2cm前後）と半截竹管文。下部にも半截竹管文と円孔（φ2cm前後）。	ナデ	マメツ	茶褐色 乳茶褐色	砂粒 ◎		8
89	高坏	底径 7.6 残高 5.9	円孔は2段。上段は6ヶ、下段は6ヶ（φ6~7mm）。	ミガキ	ハケ (1部シボリ痕)	乳黄色 乳黄色	石、長（1~3） ◎		8
90	支脚	底径 (8.5) 器高 7.7	受部に突起を1ヶもつ。受部中央に孔をもつ。	ナデ(1部タタキ)	ナデ	褐色 暗褐色	石、長（1~3） ◎	黒斑	8
91	ミニチュア	底径 2.4 残高 4.2	平底。	ナデ？	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1~3） ◎	黒斑	
92	土製品	残高 2.8	土板状の土製品。器形不明。	ナデ		茶褐色	石、長（1~2） 金 ◎		
93	土製品	残高 7.9	器種・器形は不明。溝状の凹みがあり、その中央に円孔がある。	ハケ		灰褐色	石、長（1~3） ◎		8

SD2出土遺物観察表（石製品）

(6)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
94	石庖丁	完形	結晶片岩	14.5	4.7	0.7	87.69		9
95	叩き石	完形	不明	8.2	9.5	3.9	480.0		9
96	土掘り具	ほぼ完形	安山岩系？	16.7	7.0	2.7	296.58	打製	9

表6　SD1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)	焼成		
97	壺	口径(12.5) 残高 2.3	複合口縁壺。口縁部には3条の沈線文。	マメツ	マメツ	灰黄色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
98	壺	残高 3.3	頸部に斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	マメツ	茶褐色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
99	壺	残高 21.1	胴部は中位付近に張りをもつ。頸部は直立してたちあがる。	ハケ→ナデ	(胴上)ナデ (胴下)ハケ	乳灰茶色 灰色	石、長（1～2） ◎		
100	高坏	残高 11.2	円孔2段。上段は円孔3ヶ（φ1.7cm）、下段は円孔1ヶ以上。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡褐色 乳灰褐色	石、長、安(1～4) ◎	黒斑	
101	台付鉢	残高 4.1	円孔1ヶ以上。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡褐色 乳茶褐色	石、長、安(1～5) ◎		

表7　SB1関連出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)	焼成		
102	甕	口径(19.2) 残高 6.0	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は面をなす。	(口)ヨコナデ (胴)マメツ	(口)ヨコナデ (胴)マメツ	橙褐色 褐色	石、長（1～3） ◎	SB1	
103	甕	口径(20.0) 残高 7.2	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は面をなす。	(口)ヨコナデ (胴)マメツ(ハケ?)	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎	SB1	
104	甕	口径(21.8) 残高 5.2	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は面をなす。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎	SB1	
105	高坏	口径(13.0) 残高 4.6	口縁端部はわずかに外反する。	マメツ	マメツ	明褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎	SB1	
106	高坏	残高 3.1	坏底部の充填は欠落。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石、長（1～2） 金 ◎	SB1	
107	坏蓋	口径(12.4) 残高 4.4	稜をもち、口縁端部は内傾する。	(口)回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SB1	9
108	坏蓋	残高 3.7	稜をもつ。	(口)回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SB1	
109	高坏	残高 4.6	内傾する直線的なたちあがり。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SB1	
110	高坏	底径(9.0) 残高 3.5	「ハ」の字状の脚部。端部はあいまいな段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎	SB1	

SB1 関連 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
111	甕	口 径(15.9) 残 高 17.2	肩部から張る扁平球の胴部。口縁部は内湾してたちあがり、端部は面をもつ。	㊐ナデ ㊥ハケ(1部ナデ)	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	乳灰黄色 灰茶色	石、長（1～2） ◎	SB1内 K2	9
112	甕	口 径(19.3) 残 高 3.9	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は面をなす。	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	砂粒 ◎	SB1内 K2	
113	鉢	口 径 (9.6) 残 高 4.2	内湾･内傾する直口口縁。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	黄褐色 黄褐色	密 ◎	SB1内 K2	
114	坏蓋	口 径(12.6) 残 高 4.6	稜をもち、口縁端部は内傾する。	㊐回転ナデ ㊤回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SB1内 K2	
115	坏蓋	口 径(11.6) 残 高 2.6	稜をもち、口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎	SB1内 K2	

表8　SK1 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
116	砥石	完形	砂岩？	13.6	6.4	5.3	840.0	砥面4	9

表9　地点不明 遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
117	甕	口 径(14.4) 残 高 13.8	稜をもって外反する短い口縁部。	㊐ヨコナデ ㊥タタキ	ナデ	乳灰色 乳灰黄色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
118	甕	底 径 4.8 残 高 13.3	あいまいなたちあがりをもつ平底。	タタキ→ハケ (1部ケズリ)	ハケ→ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
119	壺	口 径(14.8) 残 高 16.3	複合口縁壺。口縁部は無文。頸部下端に板状木口による斜格子の刻目突帯。	ハケ	㊐ハケ→ナデ ㊦ハケ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
120	鉢	口 径(15.8) 器 高 3.7 底 径 9.0	直口口縁。平底。	ハケ	ハケ（マメツ）	灰褐色 灰黄色	石、長、安(1～4) ◎	黒斑	
121	鉢	口 径(18.1) 残 高 2.8	直立する直口口縁。	ナデ	ハケ	灰黄褐色 黒灰色	石、長（1～3） ◎		
122	高坏	口 径(23.4) 残 高 3.9	大きく開く口縁部。	ナデ	ミガキ	淡茶褐色 淡褐色	石、長（1～3） ◎		
123	坏蓋	口 径(11.9) 残 高 5.3	稜をもち、口縁端部は内傾する。	㊐回転ナデ ㊤回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

第３章

石井東小学校構内遺跡

第３章　石井東小学校構内遺跡

１．調査の経過

（１）調査と報告の経緯

本調査は、市内越智町に新設される小学校建設に伴い実施されたもので、調査は、昭和52年11月から昭和53年１月までに行われた。調査実施地は、現在の構内西側にあたり、グランドと校舎の一部になっている。

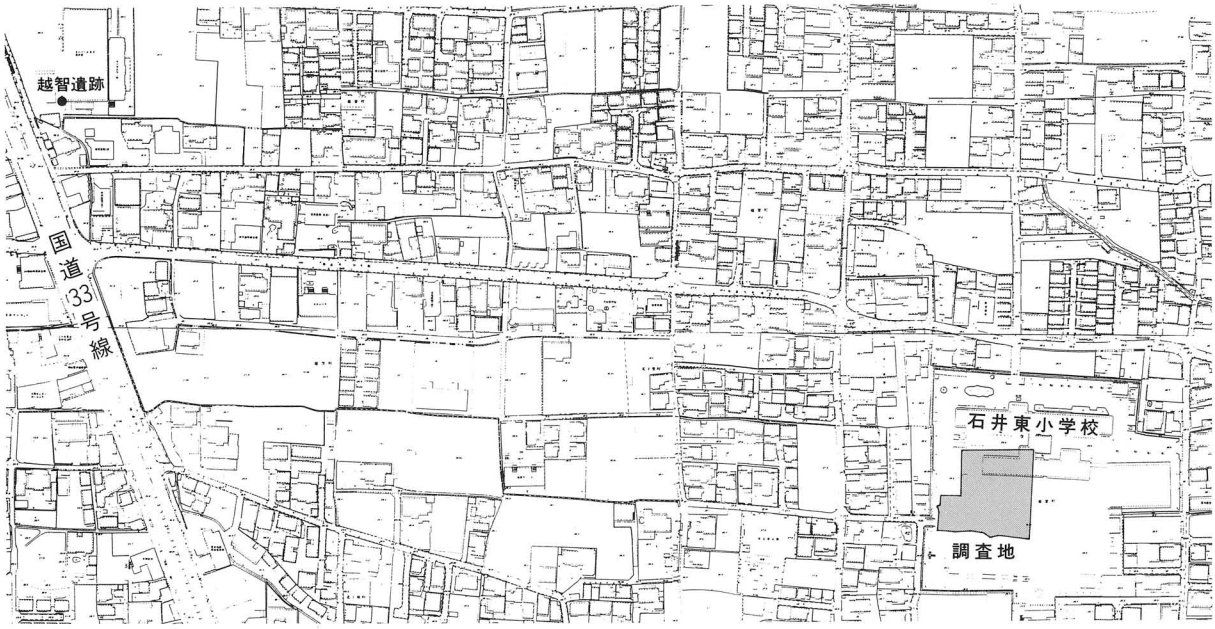
調査終了後は、配置図の作成や土器の整理などを行った。調査の内容は、『松山市史料集　第一巻』（昭和55年４月発行）、『愛媛県史　資料編 考古』（昭和61年１月発行）、『松山市史料集　第二巻 考古２他』（昭和62年４月発行）に、その概要が掲載されている。ところで、本調査地の遺跡名は、「今在家遺跡」、「石井東小学校遺跡」、「石井東遺跡」など概要報告に際し異なる遺跡名が使用されている。本報告では、現在までに最も多く使用されている「石井東小学校遺跡」をもとに、近年の調査による遺跡名称を加味し、『石井東小学校構内遺跡』とし、本報告とするものである。

報告書は、平成９年度に調査資料の整理と出土遺物の実測、トレース等の作業を行い、調査担当者の協力と助言を得て作成した。報告に際しては、既に公表された資料をもとに、整理によって明らかになったことを加筆修正し、執筆と図の掲載を行っている。

なお、報告書作成時点では遺構測量図の所在が明らかでなく、各遺構の測量図を掲載することはできなかった。また、遺構配置図は、『愛媛県史　資料編 考古』掲載資料を原図とし、遺構の測量値はそれより求めた。

〔文献〕

松山市史料集編集委員会　1980　『松山市史料集　第一巻』「三 弥生時代　１越智町今在家の土壙墓と焼成遺構」
森　光晴　1986　『愛媛県史　資料編 考古』「石井東小学校遺跡」愛媛県史編さん委員会
松山市史料集編集委員会　1987　『松山市史料集　第二巻 考古他』「石井東遺跡」



第19図　調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）

（2）調査組織

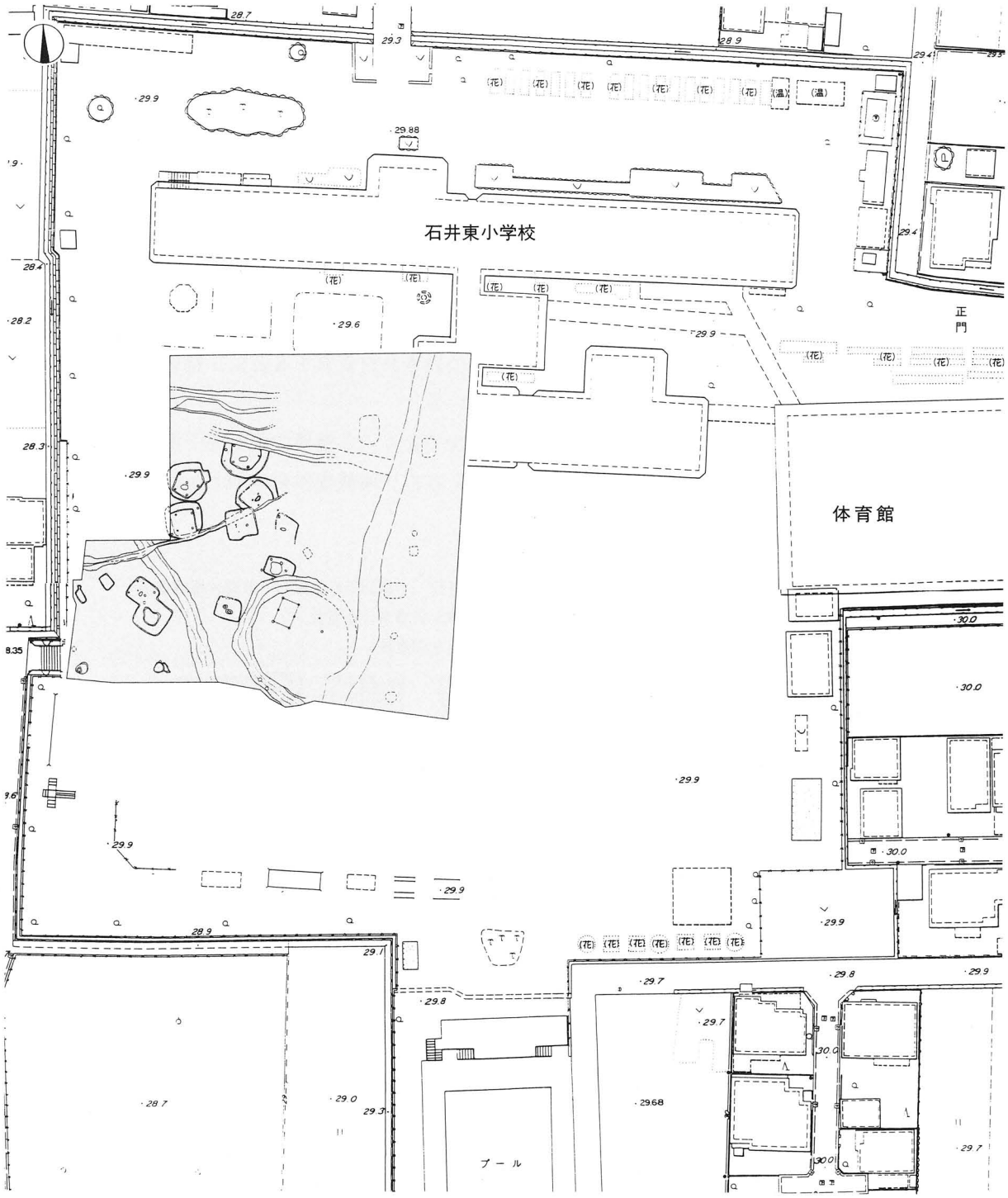
調 査 地　松山市越智町27－1

遺 跡 名　石井東小学校構内遺跡

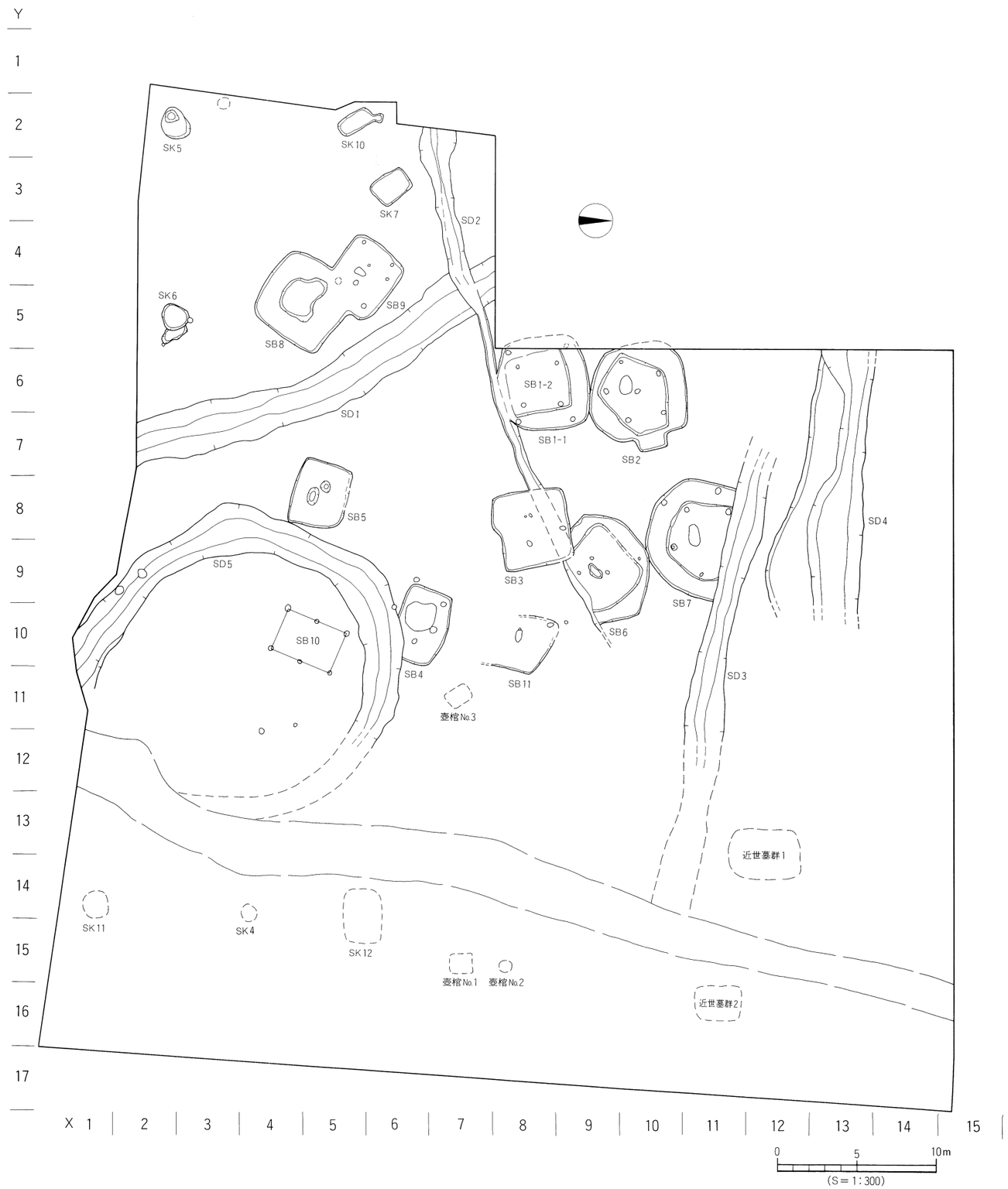
調査期間　昭和52年11月21日～昭和53年1月31日

調査面積　3,600㎡

調査担当　森　光晴（当時、文化財指導員）



第20図　調査区位置図（S＝1：1,000）


Y
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
X 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
SK5
SK10
SK7
SD2
SK6
SB9
SB8
SD1
SB1-2
SB1-1
SB2
SB5
SD5
SB3
SB7
SD4
SB6
SB10
SB4
SB11
SD3
壺棺No.3
近世墓群1
SK11
SK4
SK12
壺棺No.1
壺棺No.2
近世墓群2
0
5
10m
(S＝1:300)

第21図　遺構配置図

2．遺構と遺物

調査実施地は、第20図に示すように、現在の構内西側部分に限られている。

土層は、30cmの耕作土と、10cmの水田床土があり、その下で遺構の検出を行った。遺物包含層は北側に古代～中世の遺物を含む土層を検出したが、調査地全域にあるものではない。

検出した遺構は、弥生時代・古墳時代・古代～中世・近世～現代に属するもので、以下、時代ごとに内容を記述する。

（1）弥生時代

弥生時代の遺構には、竪穴式住居址11棟、土坑７基、墓３基がある。

1）竪穴式住居址…11棟

ＳＢ１（第21図、図版12）

調査地中央にあり、ＳＤ２に切られ、２棟が重複している。北側の大きい住居址をＳＢ１－１、小さい住居址をＳＢ１－２とする。２棟の切りあいは判断されていない。

ＳＢ１－１：平面形態は隅丸方形で、規模は南北5.8m、東西検出長5.0m、検出面積29㎡である。主柱穴は４本で、壁体近くにある。

ＳＢ１－２：平面形態は方形で、規模は検出長で一辺が3.8m、検出面積は14.4㎡である。主柱穴は４基で、壁体に近い位置にある。

出土物は、破片が全体に散在し、帰属する住居址は確定していない。

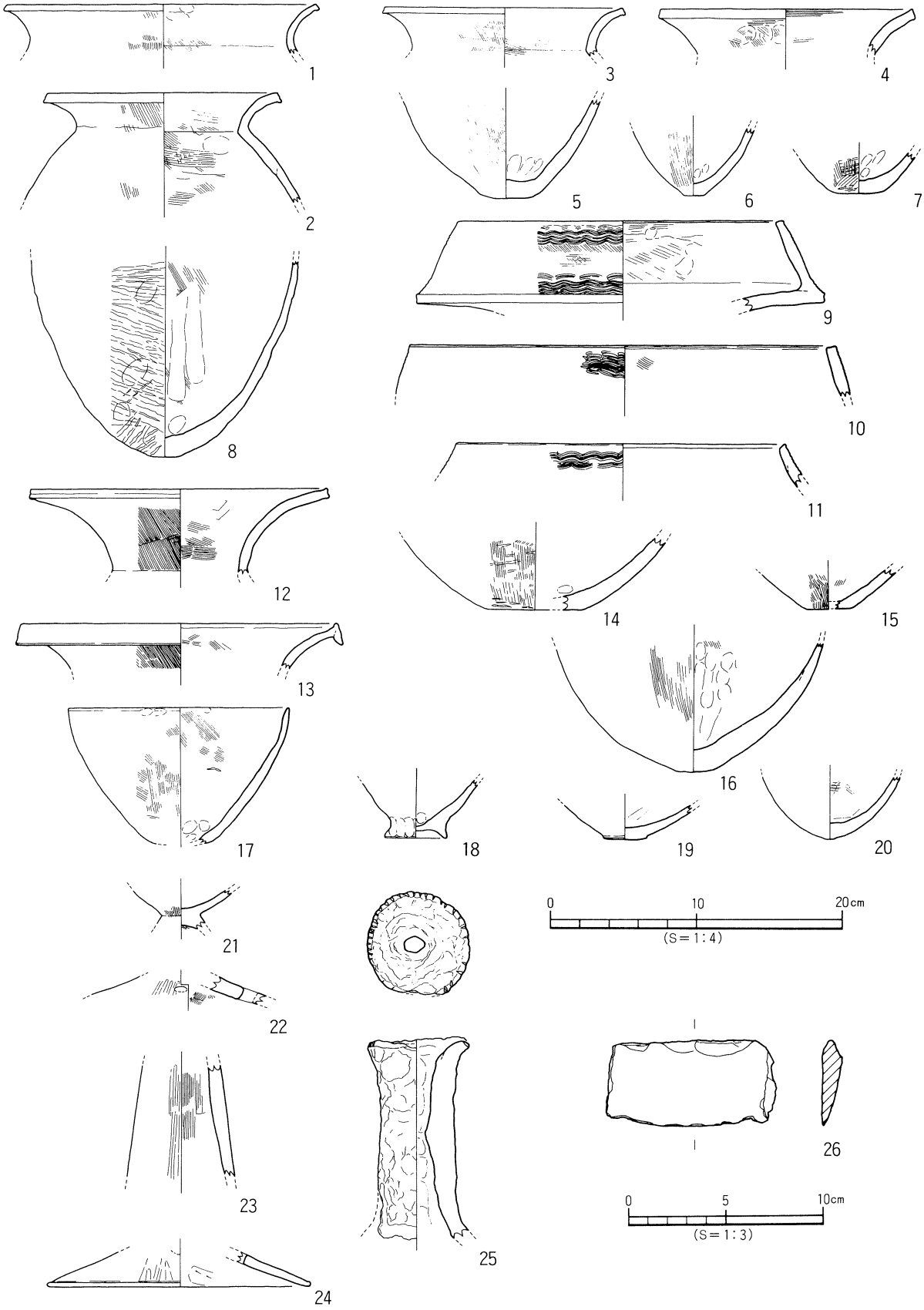
出土遺物（第22図１～26、図版22）

１～８は甕形土器である。１～４は口縁部で、内面に稜をもって外反するものである。５～８は胴下半部～底部で、胴下半部はややふくらみをもち、小さい平底になる。５・６は刷毛目調整、７・８は叩き痕がある。９～16は壺形土器である。９～11は複合口縁壺で、口縁部にはクシ描波状文をもつ。12・13は大きく開く口頸部をもつもので、13は口縁端部を垂下する。14～16は胴下半部～底部で、14・15は平底、16はやや丸みのある小さい平底になる。17～22は鉢形土器で、17は直口口縁になり、類似品からすると底部に円孔をもつ可能性がある。18～20は底部で、18は上げ底、19・20は平底である。21・22は台付鉢で、22には円孔がみられる。23・24は高坏形土器で、23は柱部、24は裾部片である。25は支脚形土器で、受部には刻目をもつ。26は未製品の石庖丁で、石材は結晶片岩である。一面には自然面が残る。

時期：甕形土器の胴下半部には叩き痕がみられることや、垂下口縁の壺形土器が出土していることより、弥生時代終末に時期比定する。

ＳＢ２（第21図、図版12）

調査地中央、ＳＢ１の北に接する。平面形態は、隅丸方形から五角形状を呈し、張り出し部を１ヶ所もつ。規模は一辺が6.1m前後で、検出面積は35.3㎡となる。張り出し部は短辺が0.9m、長辺が1.9mとなる。主柱穴は、中央に１本と周囲に５本がみとめられる。炉は中央やや南にある。炉や主柱穴を含む中央部の床面は一段低くなり、よって周囲は地山削り出しによる高床部をもつことになる。遺物は、大型の土器や炭化材、礫などが、住居全体に散在している。出土量は多くはない。一部に後世の遺物が混入している。



第22図　SB１出土遺物実測図

出土遺物（第23・24図27～65、図版22）

27～37は甕形土器である。27～34は口縁部～胴上半部の破片である。27～31は外面が刷毛目調整、32～34は叩き痕がみとめられるものである。32は長胴で、胴部全体にふくらみをもっている。35～37は胴部～底部で、胴部は長く、胴下半部に弱いふくらみをもつ。底部は平底で、35は刷毛目調整、36・37は叩き痕がみられる。38～45は壺形土器である。38～40は複合口縁壺で、38の口縁部にはクシ描波状文、40の頸部下端には刻目突帯文が施される。41～44は、長い口頸部が大きく開くものである。45は底部片で、底部は平底で厚くなる。46～54は鉢形土器である。46・47は口縁部が外反するもので、48～53は口縁部が直口となるものである。後者のうち、48は口縁端部が小さく外に開き、49・50は平底、52はあいまいな小さい平底、51はくびれの上げ底をもつ。54は底部片で、平底でたちあがりをもつ。55～58は高坏形土器である。55は坏部で、長い口縁部は大きく開く。56・57は柱部片、58は裾部片である。59は器台形土器で、大きく開く口縁部をもつ。60は支脚形土器で、受部が角状突起をもつもので、本品は突起部片である。

61～65は後世の遺物である。61は器種不明の須恵器で、口縁部片である。62～64は坏底部片で、円板高台の底部をもつ。10世紀。65は高坏の脚部片である。古墳時代５～６世紀。

時期：出土遺物には、叩き痕を残す甕形土器や角状突起をもつ支脚形土器が含まれることから、住居址の時期は弥生時代終末に比定する。

ＳＢ３（第21図、図版12）

調査地中央にあり、ＳＤ２に切られ、ＳＢ６を切る。平面形態は方形で、規模は一辺が4.8m、面積は23.0m²になる。主柱穴はない。住居址内にはピットがあるが、本住居に伴うかは判断できない。出土物は、土器片が少量ある。

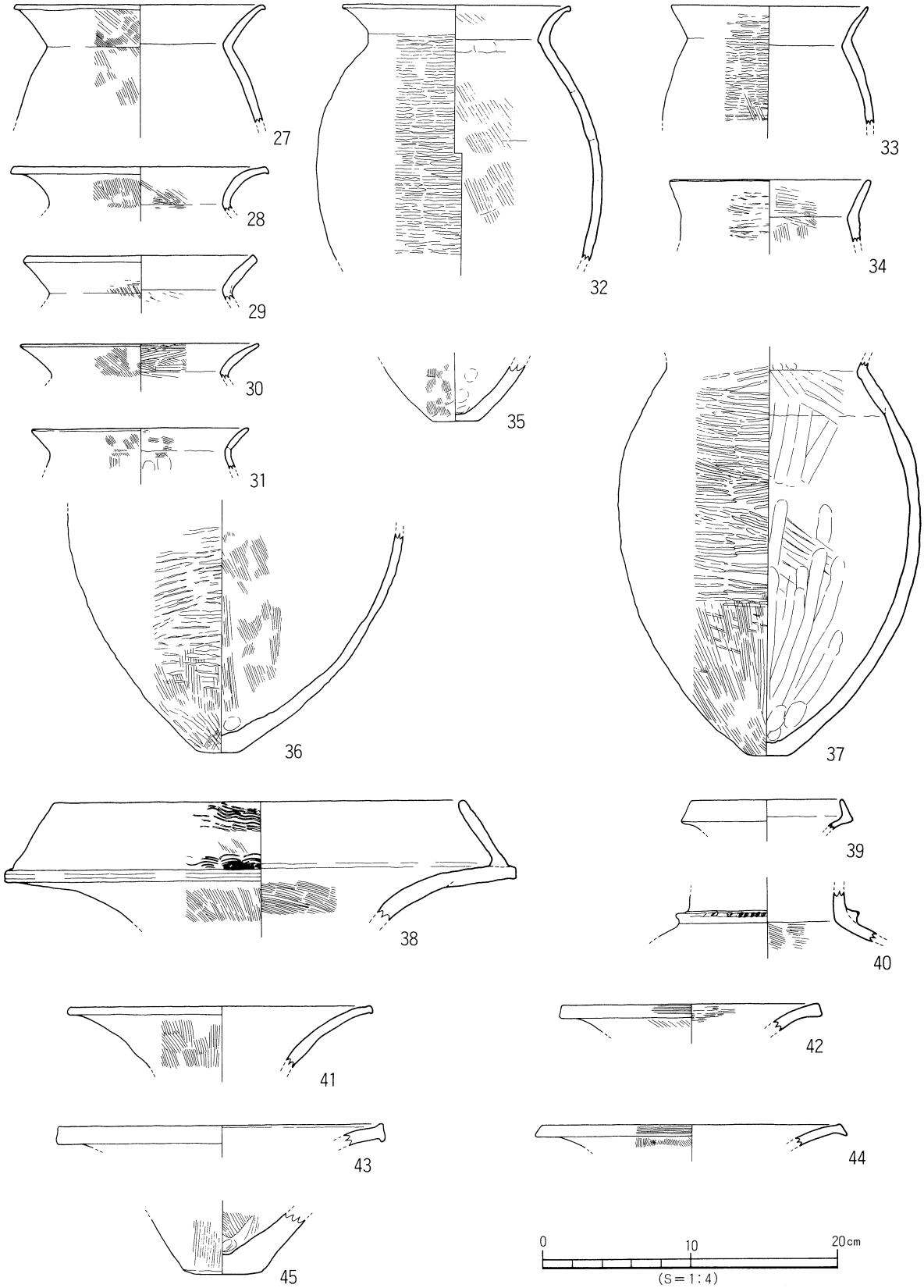
出土遺物（第25図66～75）

66～70は甕形土器である。66は口縁部片、67～70は底部片である。67～69は小さい平底、70はたちあがりをもつ大きな平底となる。71～74は壺形土器である。71は複合口縁壺、72・73は大きく開く口頸部をもつものである。74は大型品の底部片で、平底をなす。75は高坏形土器の坏部で、口縁部は水平に開く。

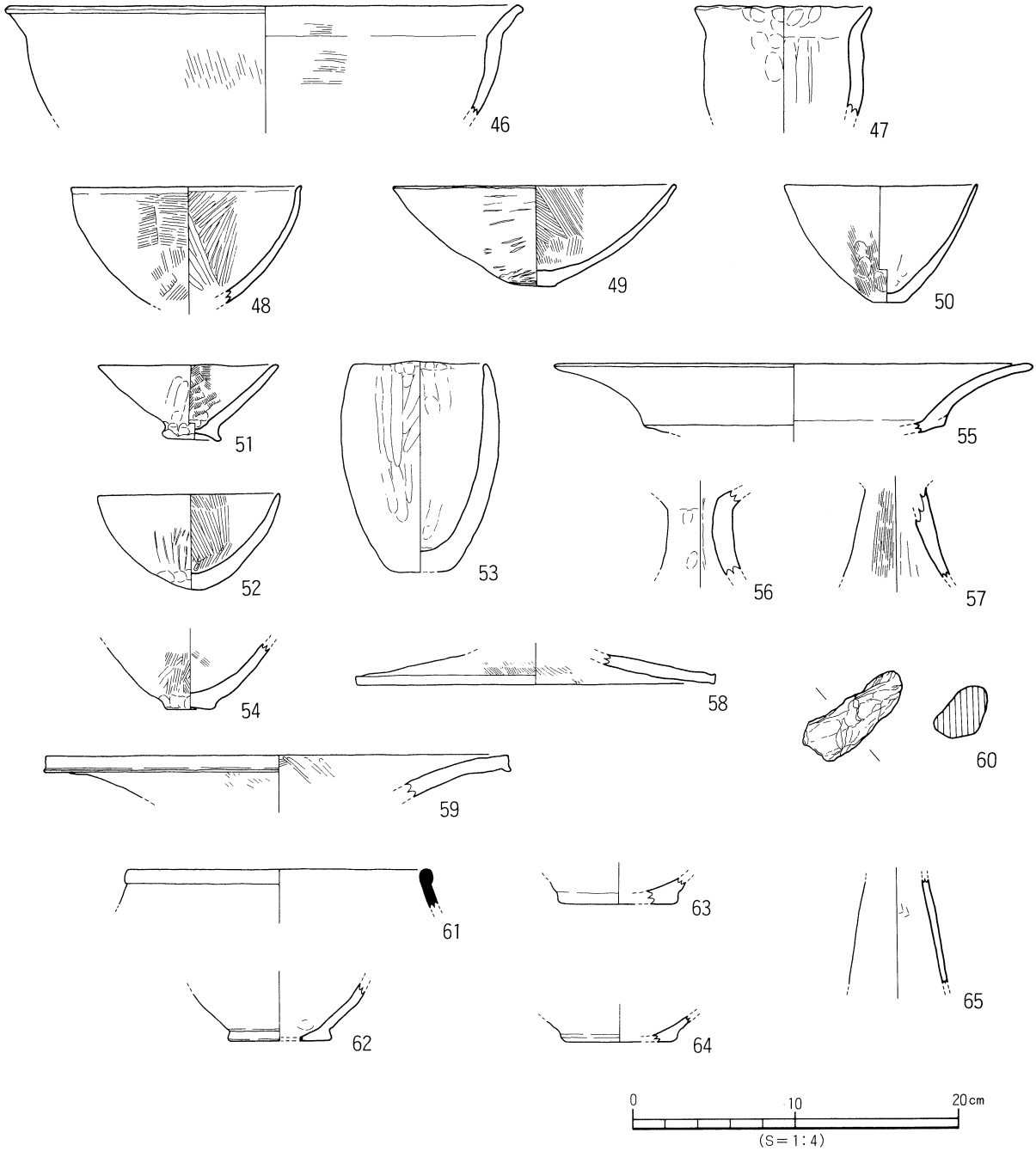
時期：甕形土器の底部は小さい平底であるため、弥生時代終末に時期比定しておく。

ＳＢ４（第21図、図版14）

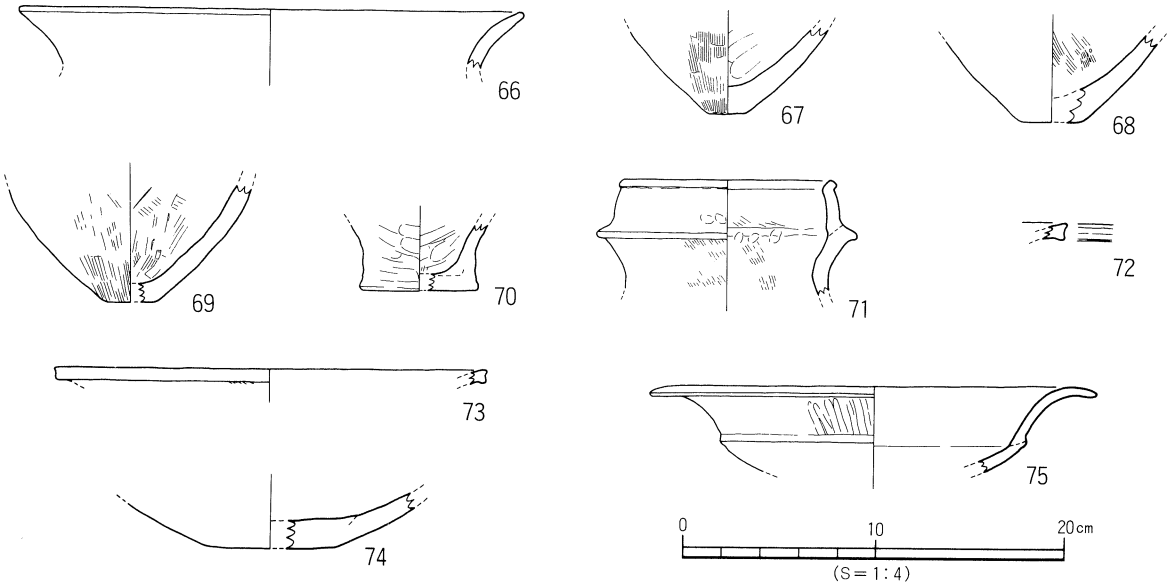
調査地中央やや南東にあり、ＳＤ５に切られる。平面形態は長方形で、規模は長辺4.8m、短辺3.2m、検出面積15.3m²である。主柱穴は未検出である。床面でピットを数基検出したが、本住居址に伴うかは判断できない。出土物は中央付近に炭化材、土器片、石器があり、土器には復元完形品になるものがある。



第23図　SB 2 出土遺物実測図（1）



第24図　SB 2 出土遺物実測図（2）



第25図　SB３出土遺物実測図

出土遺物（第26図76～87、図版23）

76・77は甕形土器である。76は復元完形品で、内面に稜をもって外反する口縁部に、やや厚い平底をもつ。77は胴中位に叩き痕をもつ。78～80は壺形土器である。78は大きく開く口頸部をもつ。79は肩部が張る胴部に、平底の底部をもつ。80は底部片で、平底を呈す。81～83は鉢形土器で、直口口縁をもつ。底部は、81が平底、82は上げ底、83はたちあがりをもつ平底になる。84は高坏形土器で、脚部片である。85・86は石製品である。85は砥石で、砥面を２面もち、石材は砂岩となる。86は用途不明品で、円形で板状となる。87は土師器の坏で、10世紀のものである。後世の混入品。

時期：出土物は、その特徴より弥生時代終末に属し、住居址も同時期に比定する。

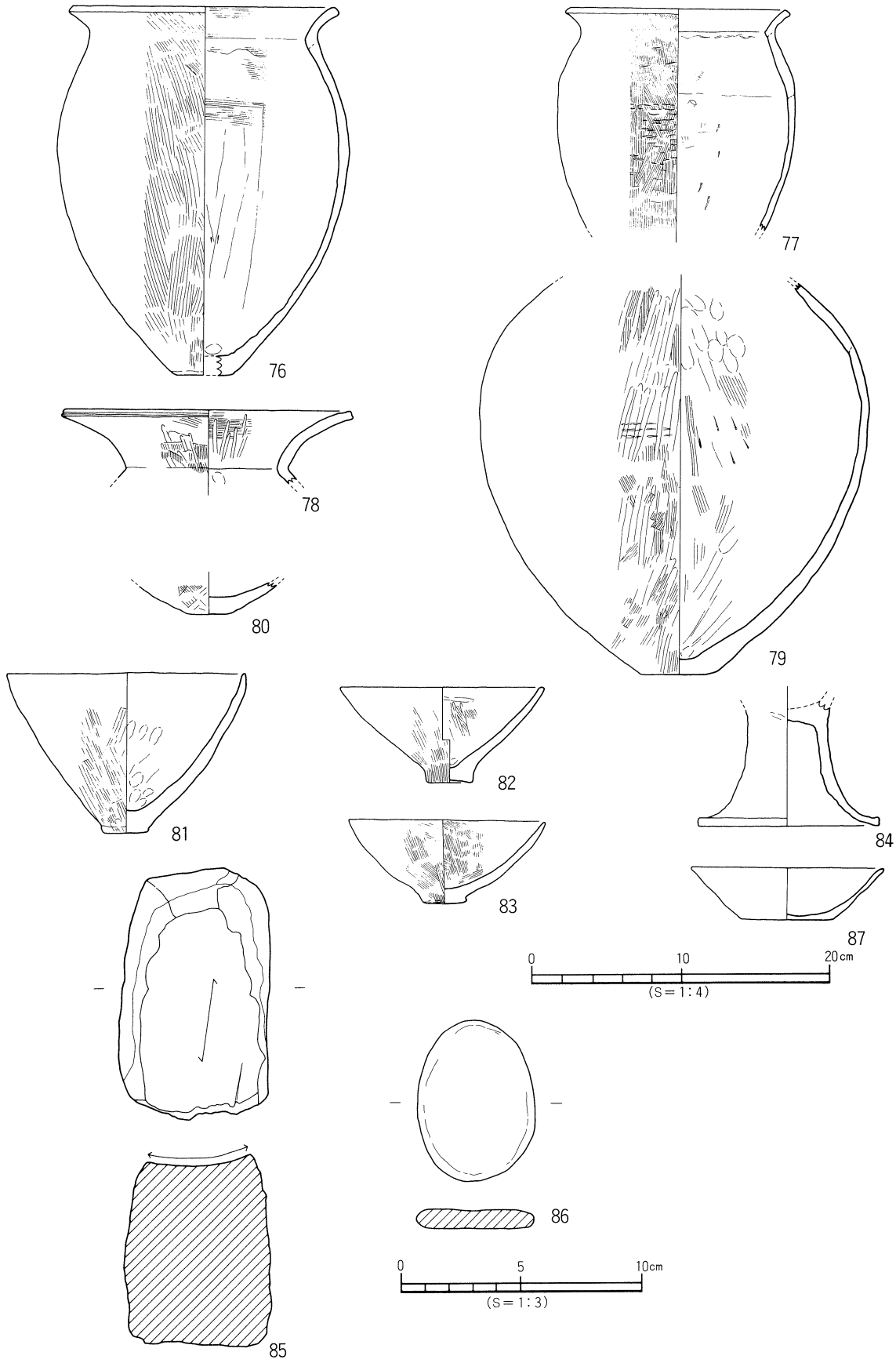
ＳＢ５（第21図、図版13）

調査地中央南側にある。平面形態は長方形で、規模は、東西4.3m、南北3.5m、検出面積15.0m²である。主柱は明確でない。中央には炉がある。遺物は中央に礫と大きめの土器片が数点あるが、住居内からの出土量は少ない。

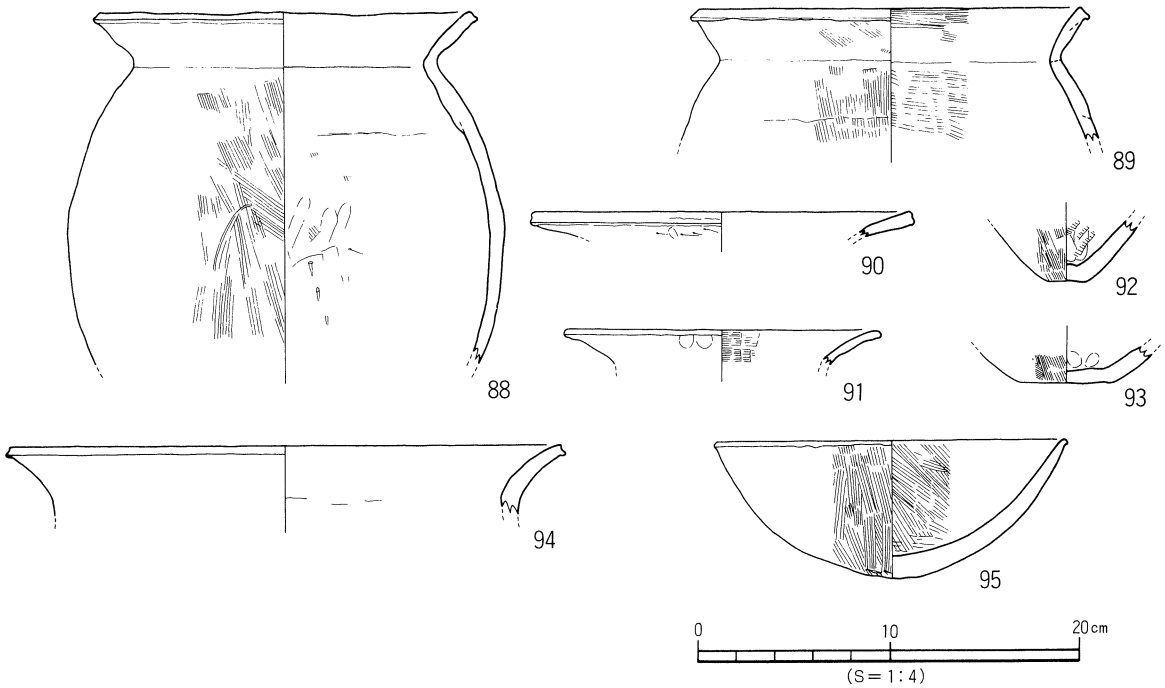
出土遺物（第27図88～95）

88～92は甕形土器である。88～91は口縁部～胴部の破片で、内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。92は底部で、平底となる。93は壺形土器の底部で、薄く大きい平底となる。94・95は鉢形土器である。94は大型品で、95は直口口縁をもつものである。

時期：出土物は弥生時代終末に属するもので、住居址も同じ時期に比定する。



第26図　SB 4 出土遺物実測図



第27図　SB５出土遺物実測図

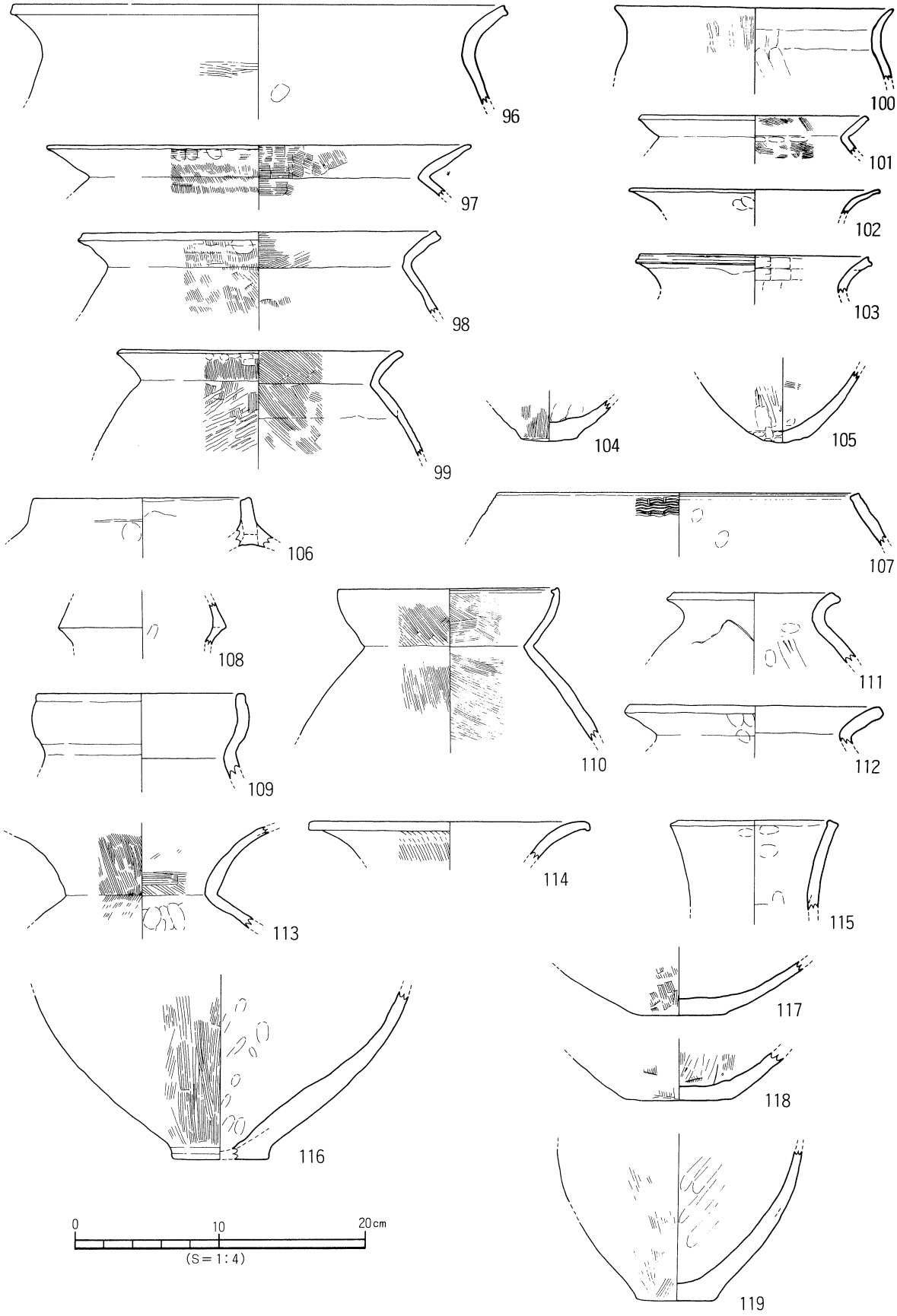
ＳＢ６（第21図）

調査地中央にあり、ＳＤ２・ＳＢ３に切られる。平面形態は多角形で、六角形になる可能性が高い。規模は東西6.8m、南北検出長4.5m、検出面積30.6㎡となる。中央には長方形の炉がある。炉の周囲にはピットが３基あるが、これが本住居の主柱穴になるかは不明である。壁体の周囲には地山削り出しの高床部がある。遺物は完形の鉢３個体を含む土器片や完形の石庖丁、砥石などの石製品が出土している。

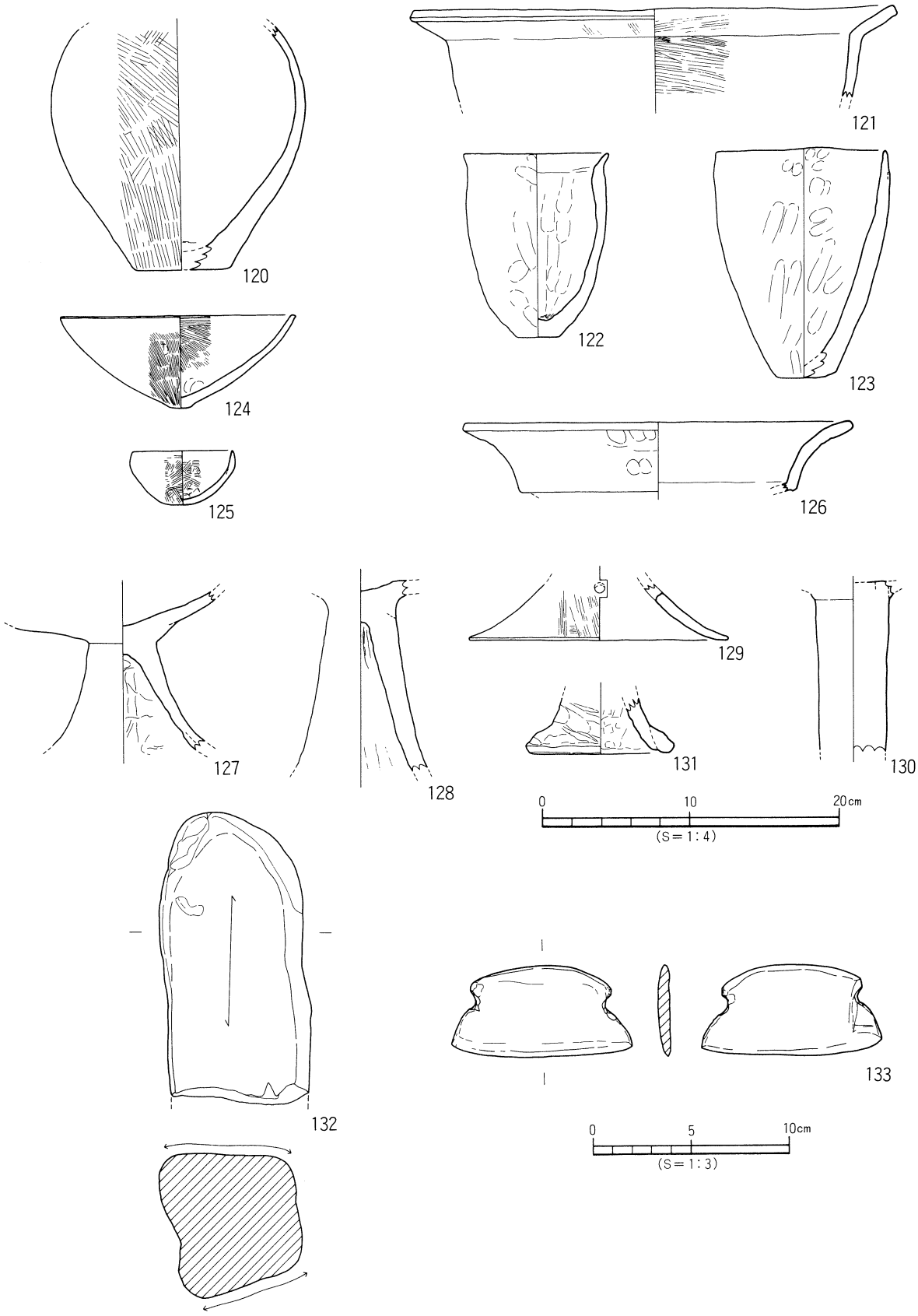
出土遺物（第28・29図96～133、図版23）

96～105は甕形土器である。96は大型品で、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。97～103は口縁部片で、内面に稜をもって外反するものが多い。104・105は底部で、104は平底、105は突出し、ふくらみをもった底部になる。106～120は壺形土器である。106～109は複合口縁壺で、107は口縁部にクシ描波状文、109は口縁部が袋状を呈する。110～112は短く外反する口縁部をもつもので、110は口縁部が内湾してたちあがる。113・114は大きく開く長い口縁部をもつ。115は直立・外傾する長い口頸部をもつもので、口縁部は直口となる。116～120は胴部～底部の破片で、116はたちあがりをもつ平底、117・118は薄い大きな平底、119・120はやや厚い平底になる。121～125は鉢形土器で、121・122は口縁部が外反し、123～125は直口口縁をもつ。126～129は高坏形土器である。126は坏部で、外傾・外反する口縁部をもつ。127～129は裾部片で、129の裾部には円孔を施している。130・131は支脚形土器である。130は中実の円柱状の柱部をもつもので、器形がはっきりとしない。131は裾部片となる。132・133は石製品である。132は砥石で、砥面が２面ある。133は石庖丁の製品で、平面形態は台形状を呈し、両側部に抉りをもつ。石材は結晶片岩である。

時期：出土物はその特徴より弥生時代終末に属するものであり、住居址も同じ時期に比定しておく。



第28図　SB 6 出土遺物実測図（1）



第29図　SB 6 出土遺物実測図（2）

ＳＢ７（第21図、図版15）

調査地中央やや北にある。ＳＤ３に切られ、ＳＢ６には接するほどの近さにある。平面形態は多角形を呈する。規模は東西7.2m、南北検出長4.9m、検出面積40.6㎡となる。中央には炉がある。炉は長方形を呈し、浅い掘り込みで、炭化物を含んでいる。本住居址には壁体に沿って高床部が巡る。高床部は地山を削り出して築造されている。高床部にも２基の穴があるが、性格は不明。主柱穴には、炉と同じ床面（基底面）に４基を検出している。遺物は、基底面上にあり、土器片や礫が出土している。

出土遺物（第30図134～158）

134～145は甕形土器である。134～136は口縁部で、内面に稜をもって外反する。137～139は胴部片で、137・138には叩き痕がある。140～145は底部片で、140・141はたちあがりをもち、底部がわずかに凹みをもつ。142～145は底部が平底となり、143には叩き痕がある。146～153は壺形土器である。146・147は複合口縁壺の口縁部片である。148・149は短く外反する口頸部をもつ。150は口縁部片で、口縁端部は面をなす。151・152は頸部片で、頸部下端に刻目の突帯文をもつ。153は底部片で、厚い平底をなす。154・155は鉢形土器で、直口口縁をもつ。154は叩き痕がある。156・157は高坏形土器である。156は坏部片で、157は口縁部片となる。158は支脚形土器で、「ハ」の字状に開く裾部をもつ。

時期：出土物はその特徴より弥生時代終末に属するものであり、住居址も同時期に比定しておく。

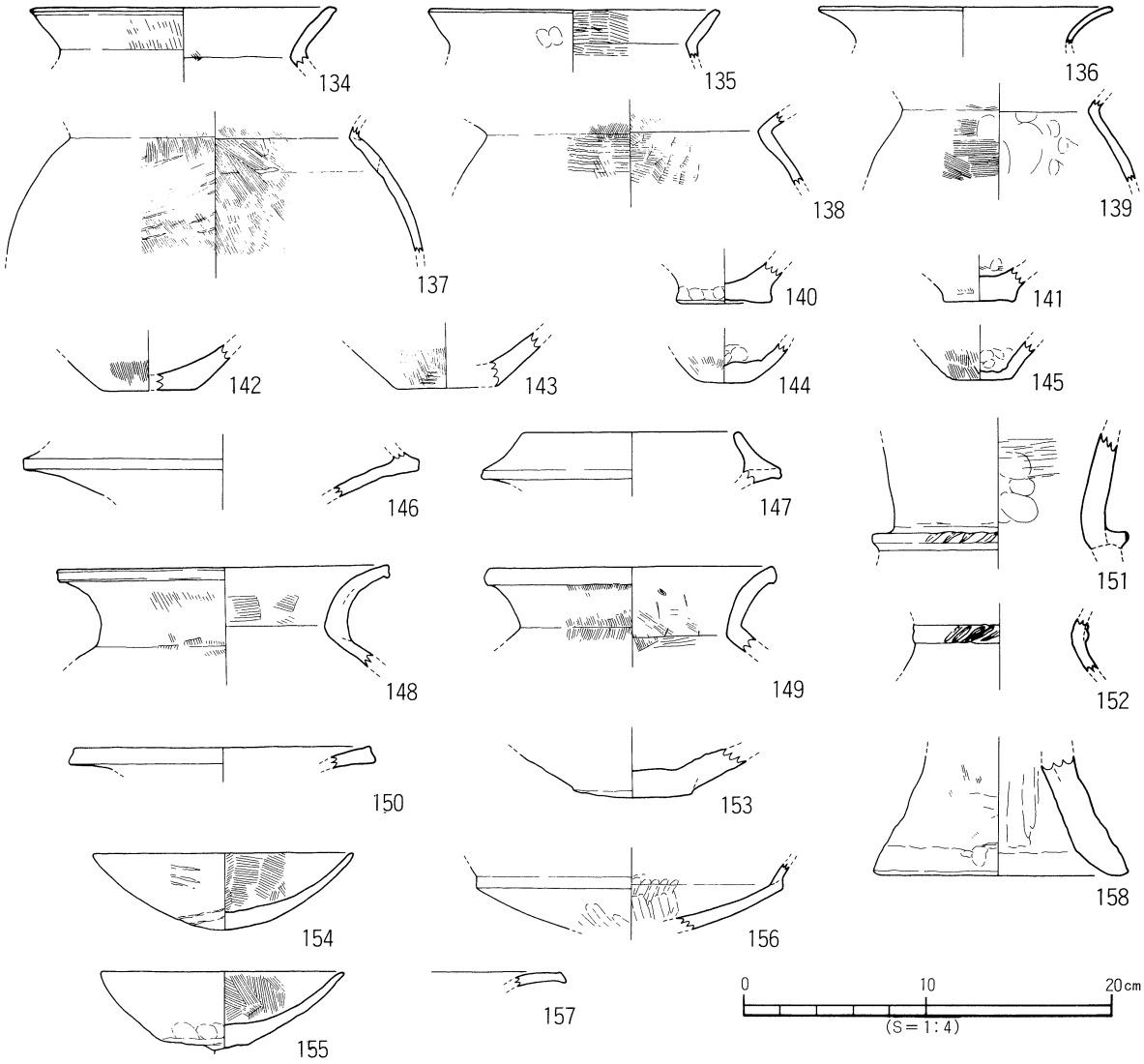
ＳＢ８（第21図、図版16）

調査地南西部にある。ＳＢ９との切り合い関係にあるが、新旧については判断されていない。平面形態は方形で、規模は一辺が5.2～5.3m、面積は27.5㎡となる。中央には不整形な凹みがあり、土器や礫が数多く出土している。主柱穴は未検出である。

出土遺物（第31～33図159～217）

159～179は甕形土器である。159～169は内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。165～169は外面に叩き痕をもつ。170は小型品で、胴部の張りが弱く、鉢形土器に近い形状をもつ。171～179は底部で、胴下半部がふくらみ、平底となる。176～179には叩き痕がある。180・181は甕形土器か壺形土器の胴部で、器種認定が難しい。182～199は壺形土器である。182～186は複合口縁壺で、182には多条沈線、クシ描波状文、刻目が施されている。187は短い口頸部をもつもので、口縁部は内湾してたちあがる。188～190は長い口頸部が大きく開くもので、189・190の頸部下端には刻目の突帯文を施している。191は胴部で、肩部が強く張り、全体にふくらみをもつ。外面には叩き痕をもつ。192～199は胴下半部～底部の破片である。199を除くと胴下半部はふくらみをもち、底部はやや厚い平底をなす。199は胴下半部の張りが弱いもので、あいまいながら外傾するたちあがりをもつ。200～206は鉢形土器である。200・201は外反する口縁をもち、202・203は直口口縁となる。204～206は底部で、204・205は平底、206は丸みのある尖底となる。207・208は器台形土器である。いずれも口縁部片で、207は端部を垂下し、端面には羽状文状の刺突文を施す。209～216は支脚形土器である。209～212は円筒形の体部に、ゆるやかに開く口縁部をもつもので、209・210の口縁端部には刻目文がある。213～216は、受部に突起をもつものである。217は弥生前期前半の大型壺の口縁部片で、口頸部境は段となる。

時期：出土物は弥生時代終末に属するもので、住居址も同時期に比定しておく。

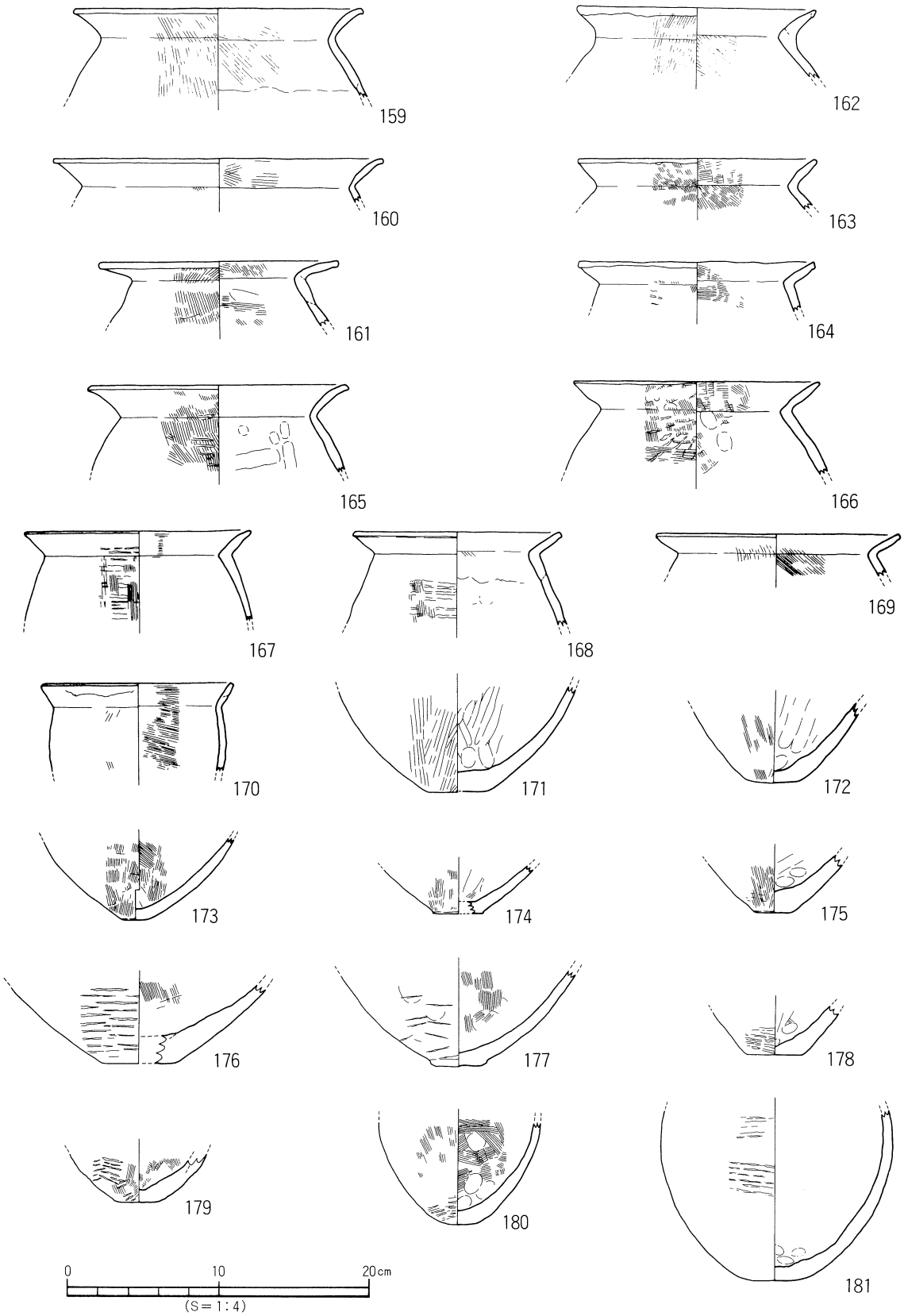


第30図　SB７出土遺物実測図

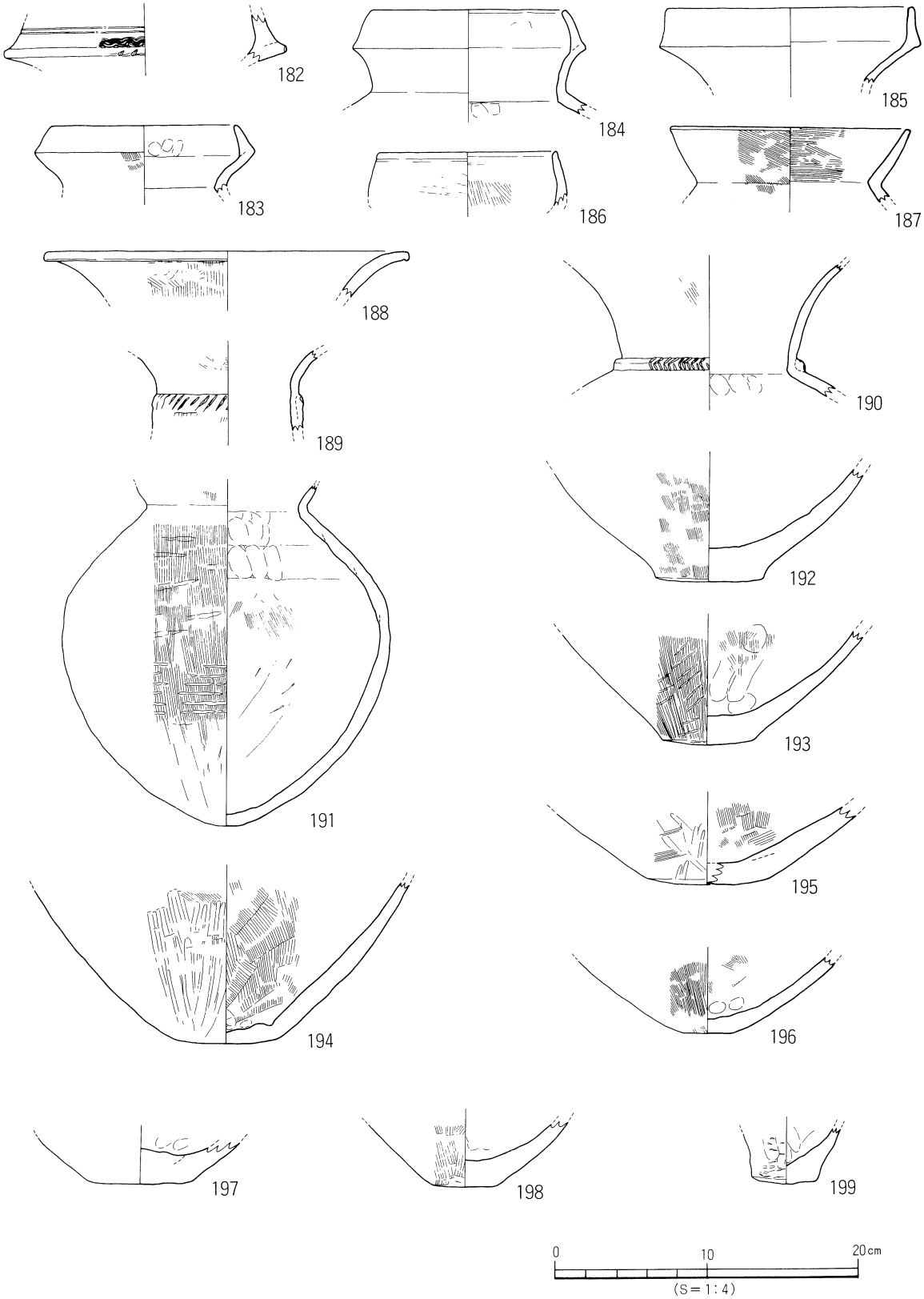
ＳＢ９（第21図、図版14）

調査地南西部にあり、ＳＢ８との切り合い関係にあるが、新旧については判断されていない。平面形態は方形で、長辺4.5m、短辺3.9m、面積17.0m²となる。炉は中央にあり、平面形態は楕円形を呈する。主柱穴は４基を検出した。また、炉を挟む柱穴が２基ある。遺物は、図化できるものがない。

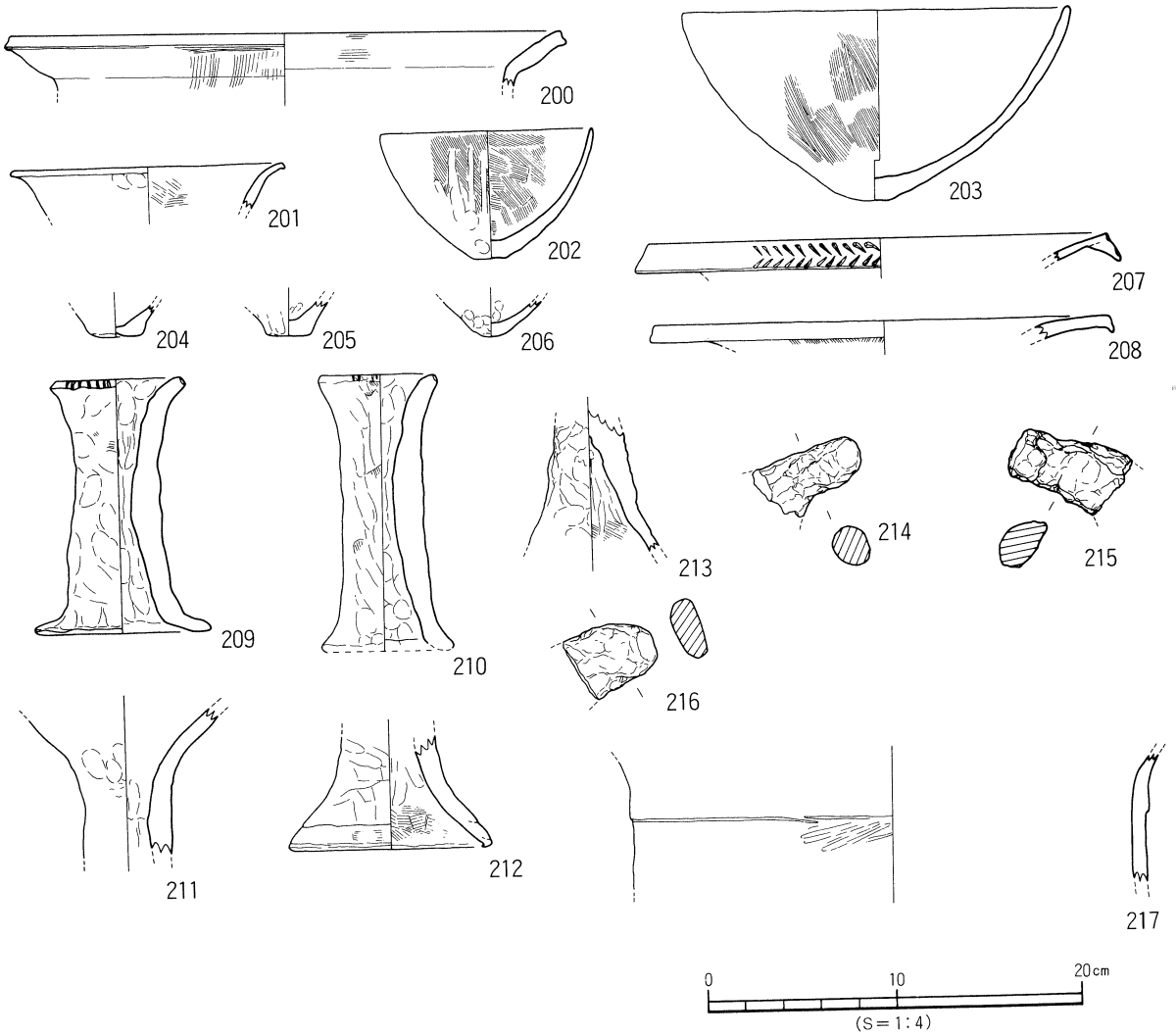
時期：出土遺物やＳＢ８との切り合いでは、時期はもとめられない。遺構の形状と周辺の遺構分布より、弥生時代終末に時期比定しておく。



第31図　SB 8 出土遺物実測図（1）



第32図　SB 8 出土遺物実測図（2）



第33図　SB 8 出土遺物実測図（3）

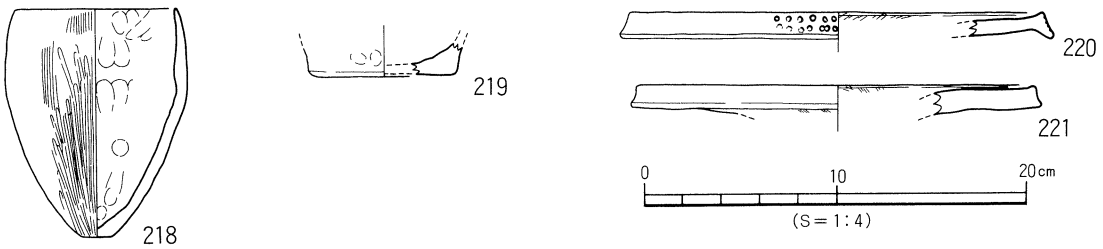
ＳＢ11（第21図、図版15）

調査地中央部にあり、充分に調査されていない。平面形態は四角形になる可能性がある。規模は長辺3.5m、短辺検出長2.8m、検出面積9.8m²になる。中央部に炉がある。遺物には完形にちかい鉢形土器１点と土器片がある。

出土遺物（第34図218～221）

218は鉢形土器である。口縁部は直口口縁で、胴部は長く、小さい平底をもつ。219は壺形土器の底部である。220・221は器台形土器の口縁部片で、220は端部を垂下し、端面には竹管文を二段施す。

時期：出土遺物は、弥生時代終末に属するもので、住居址も同時期に比定しておく。



第34図　SB11出土遺物実測図

2）土　坑

弥生時代に時期比定できる土坑はＳＫ５・６・７・10・11・12の６基である。

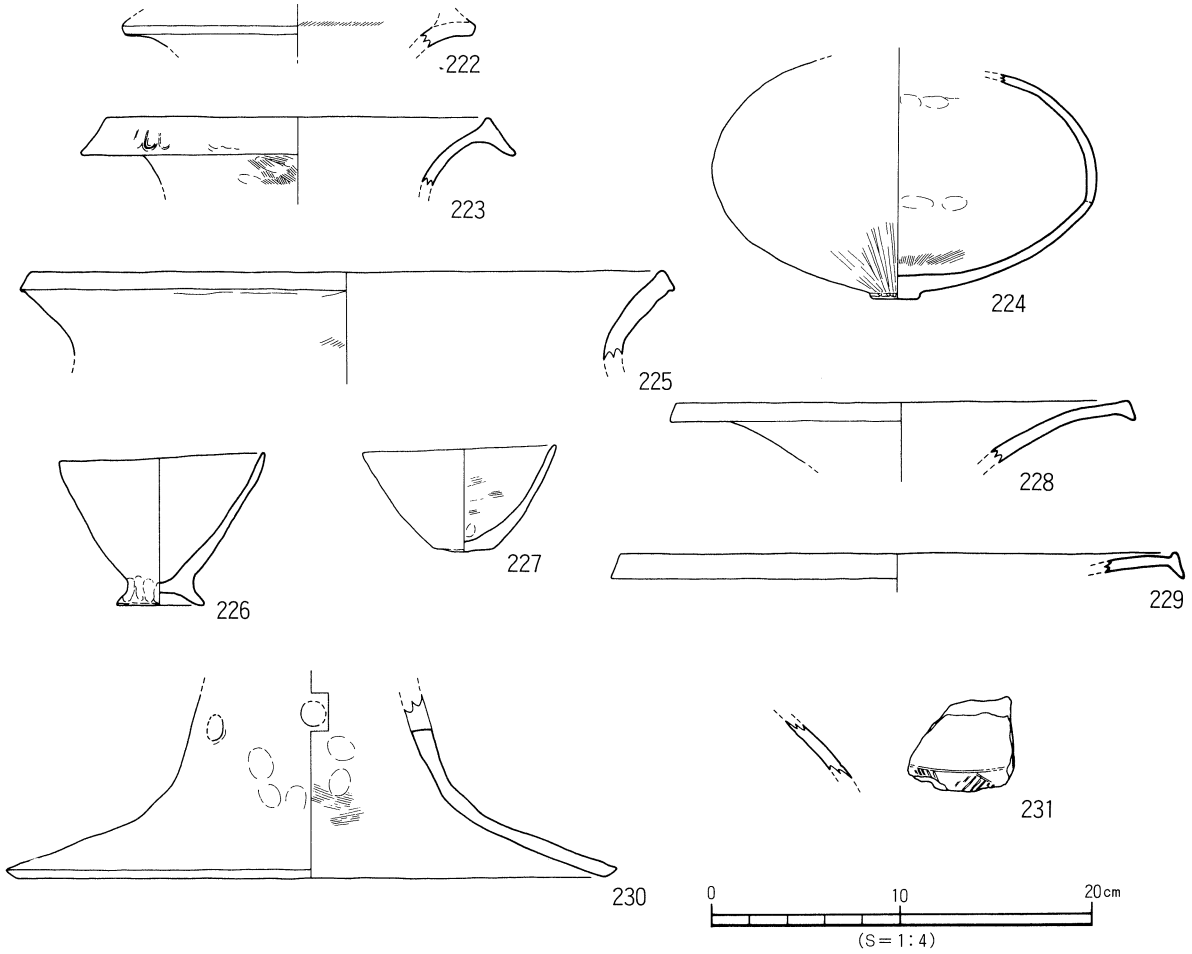
ＳＫ５（第21図、図版17）

調査地南西隅にある。平面形態は楕円形を呈し、規模は直径1.9～2.0m、上場面積は3.0㎡となる。床面には小穴がある。遺物は、完形の小型鉢２点を含め多くの土器片が出土している。

出土遺物（第35図222～231）

222～224は壺形土器である。222は複合口縁壺で、二次口縁部が下落している。223は大きく開く長い口縁部をもち、口縁端部は垂下する。224は細長頸壺の胴部片で、扁平球の胴部に、小さく突出する底部をもつ。225～227は鉢形土器である。225は大型品で、外反口縁をもち、226・227は小型品で、直口口縁をもつ。228～230は器台形土器である。228・229は口縁部片で、口縁端部は垂下する。229は高坏形土器の口縁部になる可能性をもつ。230は柱下部～裾部で、柱部には円孔をもつ。231は弥生時代前期の壺形土器胴部片である。肩部には、ヨコ沈線文と斜線文充塡の三角文をもつ。

時期：出土物は弥生時代終末に属するもので、土坑も同時期に比定しておく。



第35図　SK５出土遺物実測図

ＳＫ６（第21図、図版17）

調査地南部やや西にある。平面形態は円形を呈し、北東部側に不整形な穴が検出されているが、ＳＫ６との関係は分からない。規模は、直径1.6～1.7m、上場面積は2.0m²となる。遺物は検出面で礫が出土しているが、図化できる土器はない。

時期：平面形態と規模がＳＫ５に類似しているため、ＳＫ５と同時期、弥生時代終末とする。

ＳＫ７（第21図、図版17）

調査地西部にある。平面形態は長方形で、規模は長辺2.4m、短辺1.8m、上場面積は4.3m²となる。遺物は検出面の広い範囲で出土し、土器の大型破片を含む多くの遺物がある。

出土遺物（第36図232～249）

232～236は甕形土器である。232～234は、稜をもってゆるやかに外反する口縁部をもつもので、胴上半部には張りをもつ。外面には叩き痕がある。235・236は底部片で、平底となる。237～239は壺形土器で、複合口縁壺になる。238は、二次口縁部が直線的に外傾してたちあがる。239は頸部下端に斜格子目の刻目突帯文をもつ。240～244は高坏形土器である。240は坏部で、外傾・外反する口縁部をもつ。241～244は脚部で、円孔を一段施す。245は鉢形土器で、直口口縁で、端部がわずかに外傾する。246～249は支脚形土器である。246は円柱状を呈し、247は円筒形の体部に、外反する口縁部をもち、口縁端部には刻目を施している。248・249は受部に突起がつくものである。

時期：出土物は弥生時代終末に属するもので、土坑も同じ時期に比定しておく。

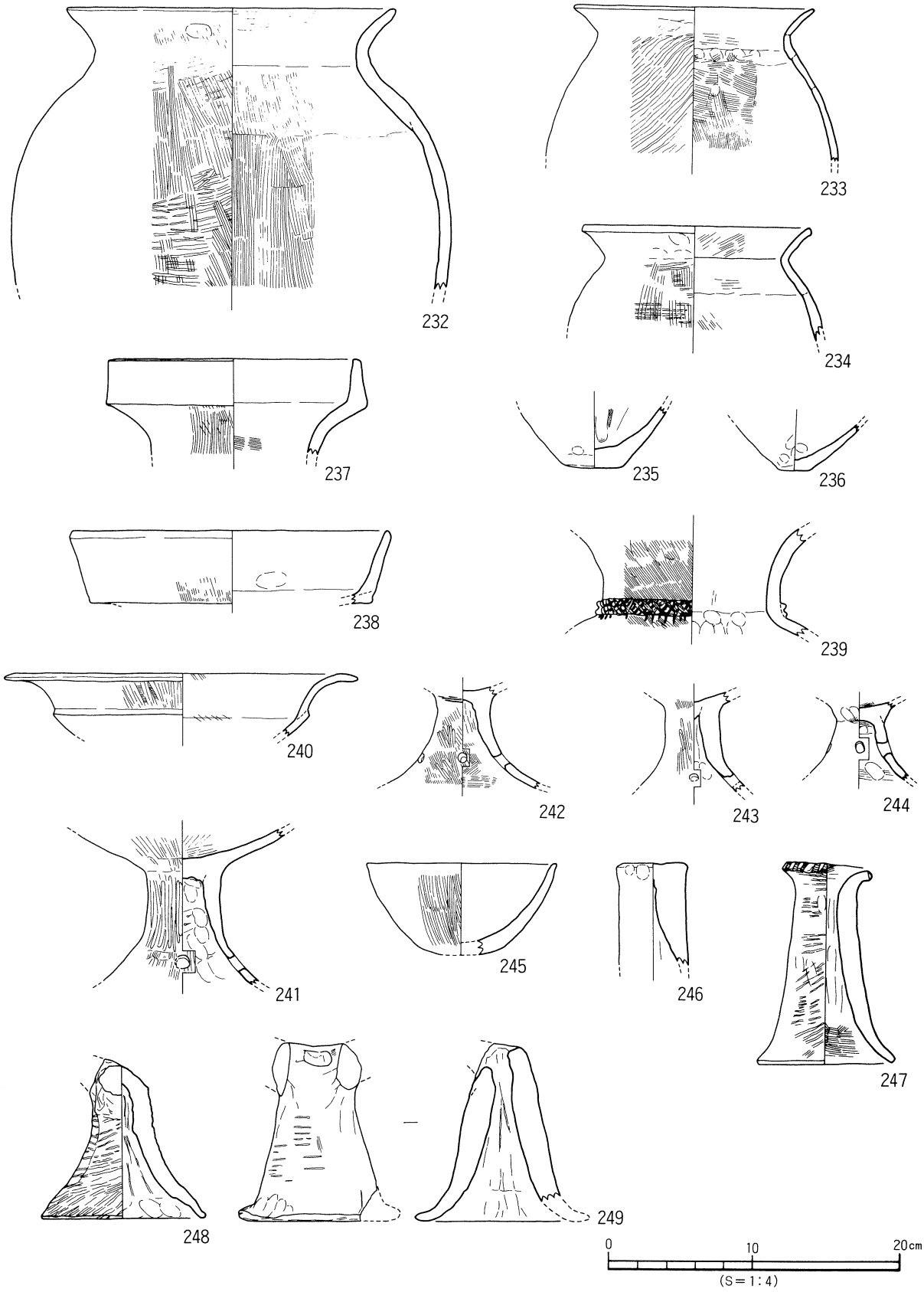
ＳＫ10（第21図、図版18）

調査地西部にある。平面形態は長方形を呈し、北東部に円形の穴を検出している。長方形部分の規模は、長辺2.0m、短辺1.2m、深さ45cm、面積2.4m²となる。北東部の円形の穴は直径15～18cmを測る（測量値は概要のものを使用）。遺物は多くの炭化材と少量の土器片が出土している。また、南側では灰層が検出された。なお、本遺構は、『愛媛県史　資料編 考古』「石井東小学校遺跡」ではＳＦ１として報告されているものである。

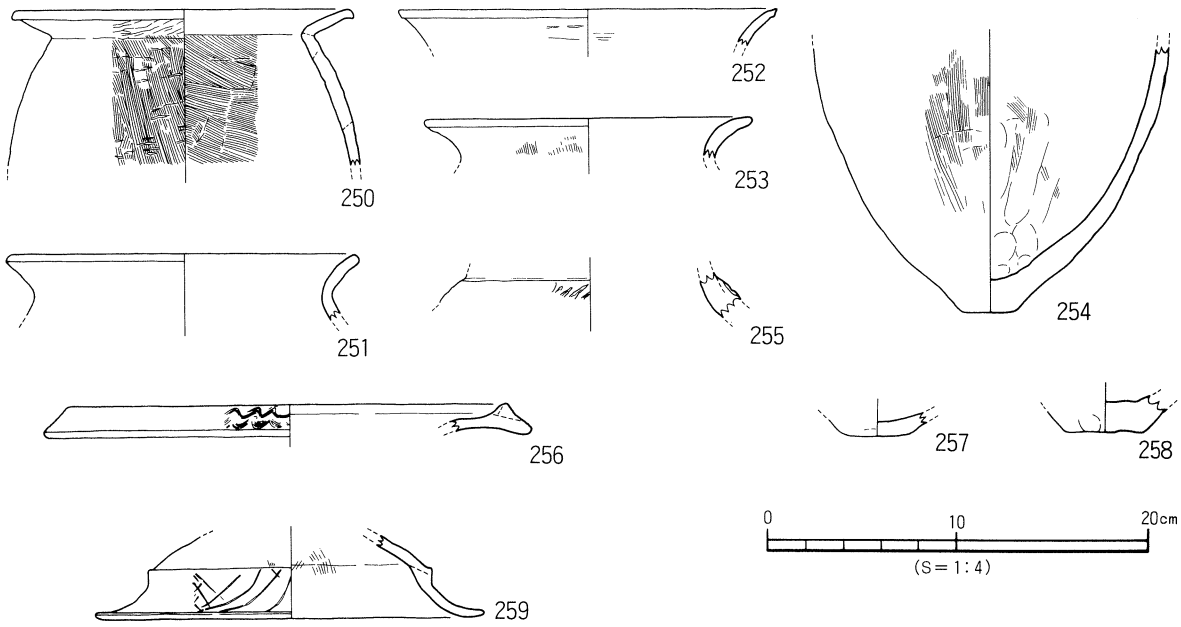
出土遺物（第37図250～259、図版24）

250～254は甕形土器である。250～253は口縁部で、250・252には叩き痕がある。254は胴下半部～底部で、胴部下半の張りは弱く、底部はたちあがりをもつ厚い平底になる。255～258は壺形土器である。255は頸部片で、刻目突帯文をもつ。256は口縁部片で、口縁端面にはクシ描波状文を施している。257・258は底部片で、257は平底、258は厚い平底で、わずかに凹む部分をもつ。259は高坏形土器である。柱部がエンタシス状で、裾部が二重に開く形状を呈するもので、裾部下段には斜線が施されている。

時期：出土物は弥生時代終末に属することより、土坑もこの時期に比定しておく。



第36図　SK 7 出土遺物実測図



第37図　SK10出土遺物実測図

ＳＫ11

調査地南東部にある。平面形態は円形を呈し、規模は直径１～２ｍと思われる（調査における写真より）。土坑からは土器が数多く出土しており、少量の石器もある。

出土遺物（第38～40図260～305、図版24）

甕形土器（260～271）　260～265はゆるやかに外反する口縁部をもつもので、260・261の口縁端部には刻目を施している。266は復元による完形品である。ゆるやかに外反する口縁部に、胴中位に段をもつもので、底部は大きな平底となる。口縁端部には刻目、口縁部やや下には沈線１条をもつ。267は胴部に段をもつものである。268～271は底部片で、268・269は上げ底、270・271は平底になる。

壺形土器（272～292）　272～277は口縁部で、273～275は口頸部境に段をもつ。276は口頸部境が無文となる。278～280は頸～胴部片で、278は口頸部境が無文で、頸胴部境には沈線をもつ。279・280は頸胴部境に弱い段をもつものである。281～292は底部片で、たちあがりをもつ、大きな平底となる。

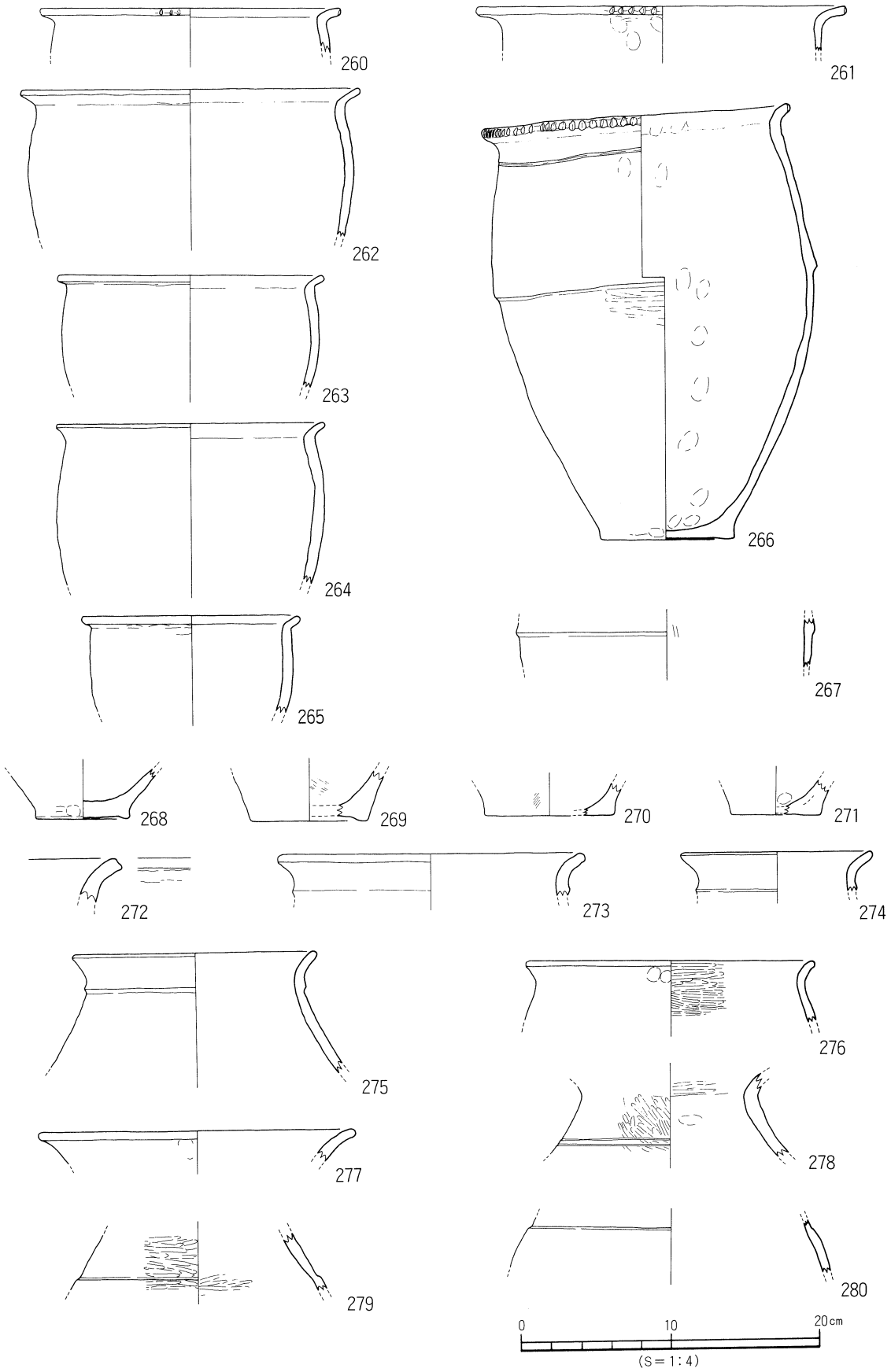
鉢形土器（293～296）　293は口縁部が外反するもので、294～296は直口口縁を呈するものである。294・295の口縁部は内湾し、296は外傾してたちあがる。

蓋形土器（297）　297は甕用の蓋形土器の口縁部片である。

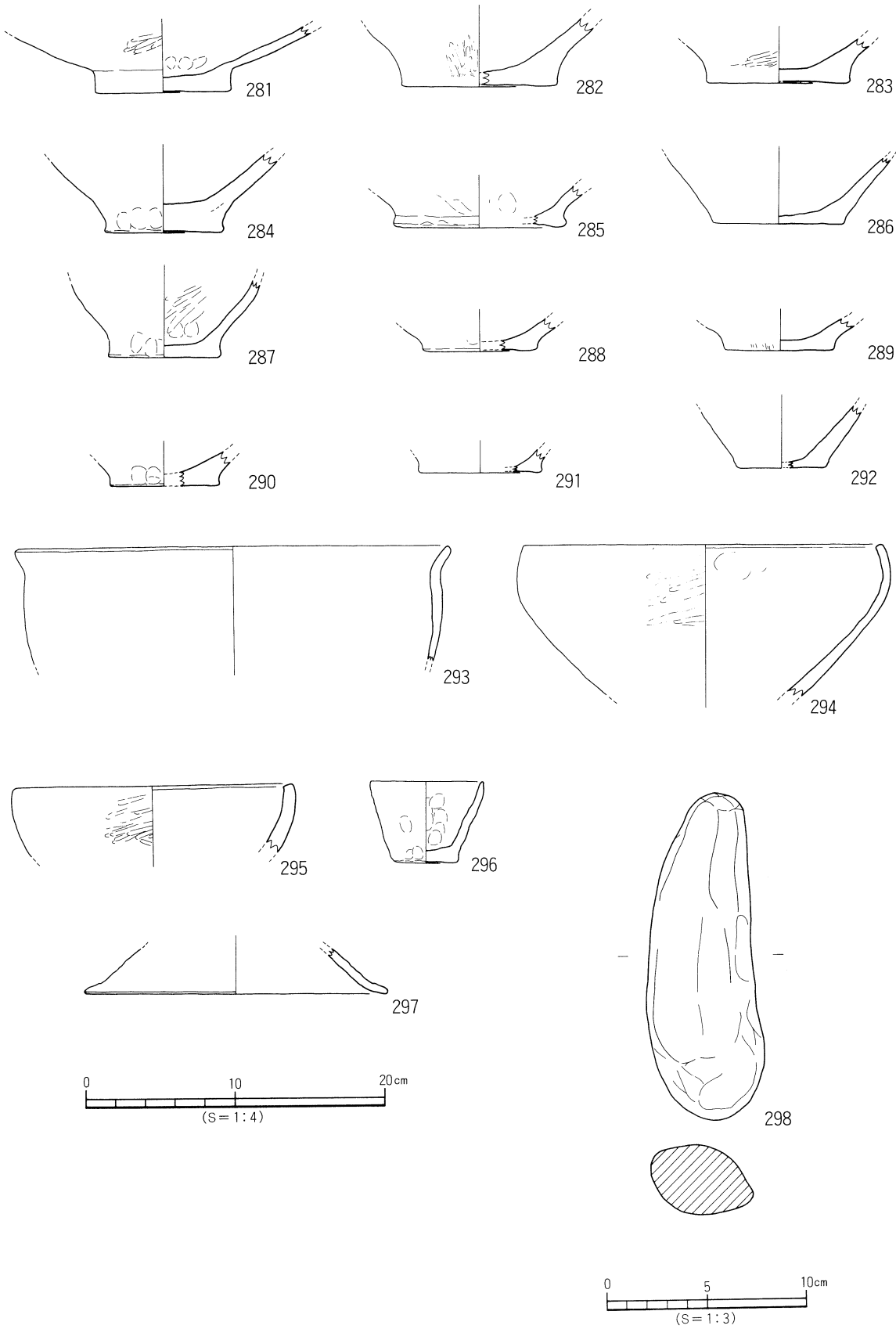
石製品（298）　柱状の石製品で、長楕円形を呈す。重さは450ｇである。

その他（299～305）　299～305はグリットで取り上げられたもので、出土地点よりＳＫ11と考えられるものである。299は甕形土器で、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。300～303は壺形土器である。300は口頸部境の段上に刻目を施したものである。301は頸部と胴部の境は段をなし、その上下に沈線文と刺突文を施している。また、胴上半部に重弧文と、胴部の屈曲部分には沈線文と刺突文を施している。302は木葉文、303は斜線文が施されている。304は鉢形土器で、直口口縁と大きな平底をもつ。305は石製品で、叩き石となる。重さは625ｇである。

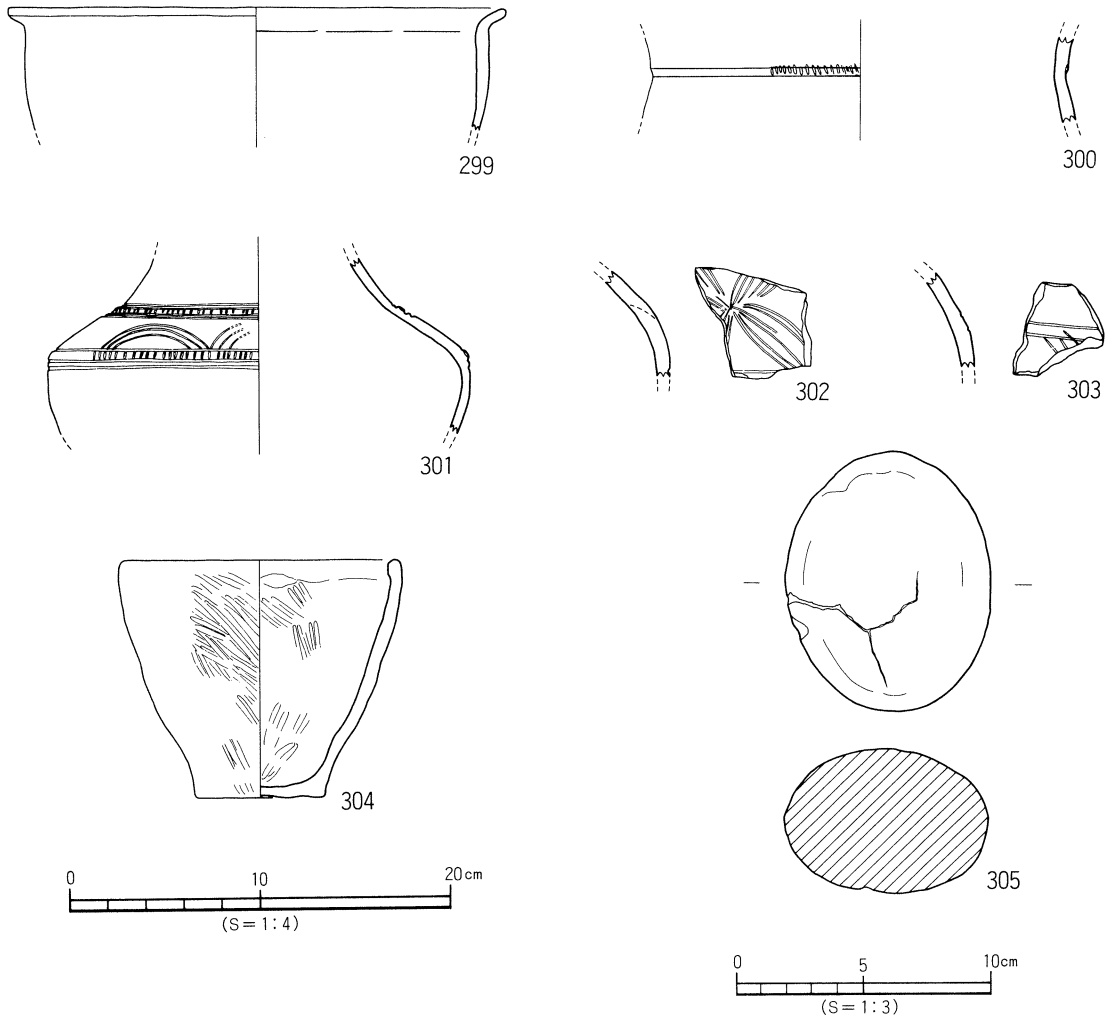
時期：出土遺物は弥生時代前期前半に属するもので、土坑も同時期に比定しておく。



第38図　SK11出土遺物実測図（1）



第39図　SK11出土遺物実測図（2）



第40図　SK11出土遺物実測図（3）

ＳＫ12

調査地西部やや南にある。平面形態は長方形状を呈する。土器片が少量出土している。なお、この土坑一帯のグリット（４ｍ四方）で、第48図362の線刻をもつ壺形土器が出土している。

時期：出土土器片は弥生土器で、第48図362がこの土坑に伴うとすれば弥生時代終末の遺構になる。

３）墓

墳墓は１～３号墓の３基があり、いずれも壺形土器を棺に使用し、前期前半に比定される。

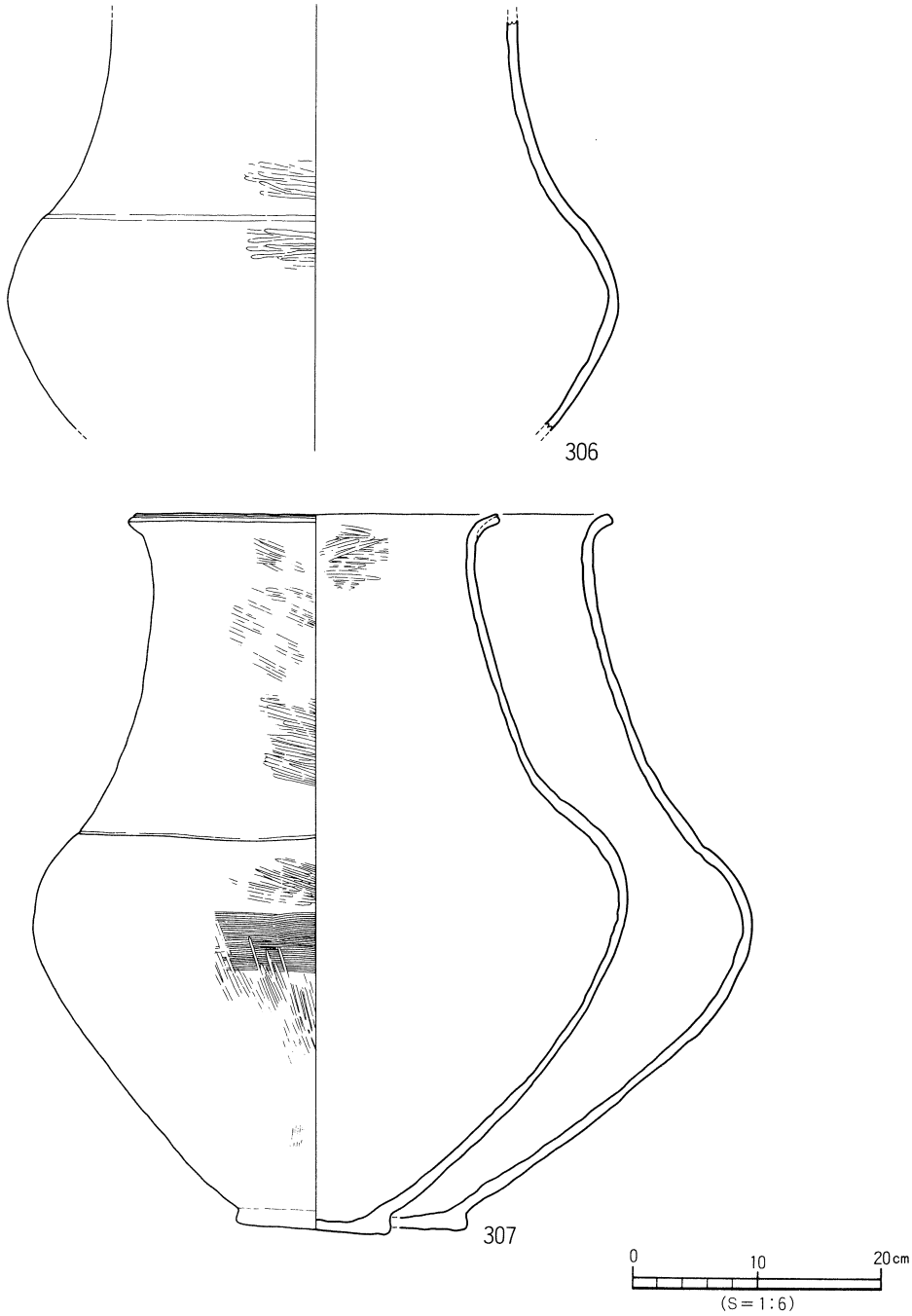
１号墓（図版19）

調査地の東部にある。平面形態は方形で、規模は一辺1.2ｍ、深さ25㎝となる。方位は、棺身の上半部が西を向いている。埋葬施設には土器棺を使用する。土器棺は、大型壺を棺身・棺蓋とし、第41図307が棺身、306が棺蓋となる。棺蓋の大型壺は、口頸部と底部を打ち欠いて使用している。

出土遺物（第41図306・307、図版25）

306は棺蓋である。口縁部と底部を打ち欠いて使用している。大型壺で、内傾する頸部は、肩部との境に段をもつ。肩部は強く張り、胴下部へつづく。

307は棺身である。内傾する長い頸部に、外反する短い口縁部がつく。口頸部境は無文で、境が不

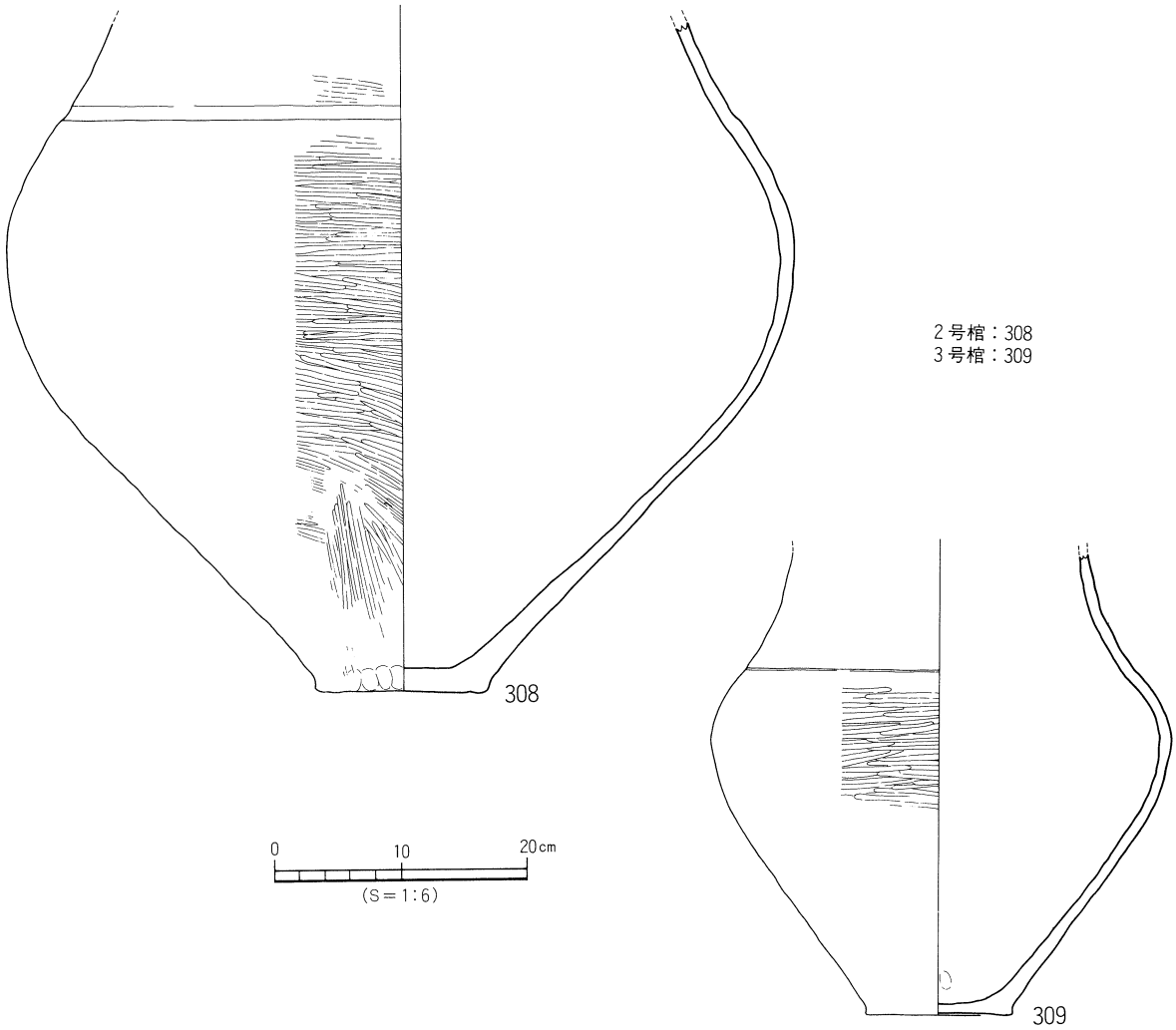


第41図　1号壺棺実測図

明瞭である。口縁端部はナデ凹む。胴部は、肩部が張り、直線的に底部まですぼまる。底部は大きな平底で、明瞭なたちあがりをもつ。赤色で塗彩された可能性をもつ。

2号墓（図版19）

調査地東部、1号墓の北数mの地点にある。掘り方は未検出である。埋葬施設として土器棺が使用され、第42図308が棺身となる。後世に削平を受けており棺身も2分の1が遺存するにすぎず、棺蓋については資料に乏しい。方位は、概ね南北となる。



第42図　2・3号壺棺実測図

出土遺物（第42図308、図版25）

308は棺身に使用されたもので、大型品である。頸部は内傾し、頸胴部境には段をもつ。肩部は強く張り、直線的に底部にむかってすぼまる。底部は大きな平底で、直立～外傾するたちあがりをもつ。

3号墓（図版19）

調査地中央やや東にある。削平が著しく、掘り方は不明で、埋葬施設となる土器棺の一部が検出されたにすぎない。土器棺は棺身に壺形土器を使用している。第42図309がそれであるが、口頸部を打ち欠いて用いる。1・2号墓の棺身よりは小さい法量である。棺蓋の資料はない。

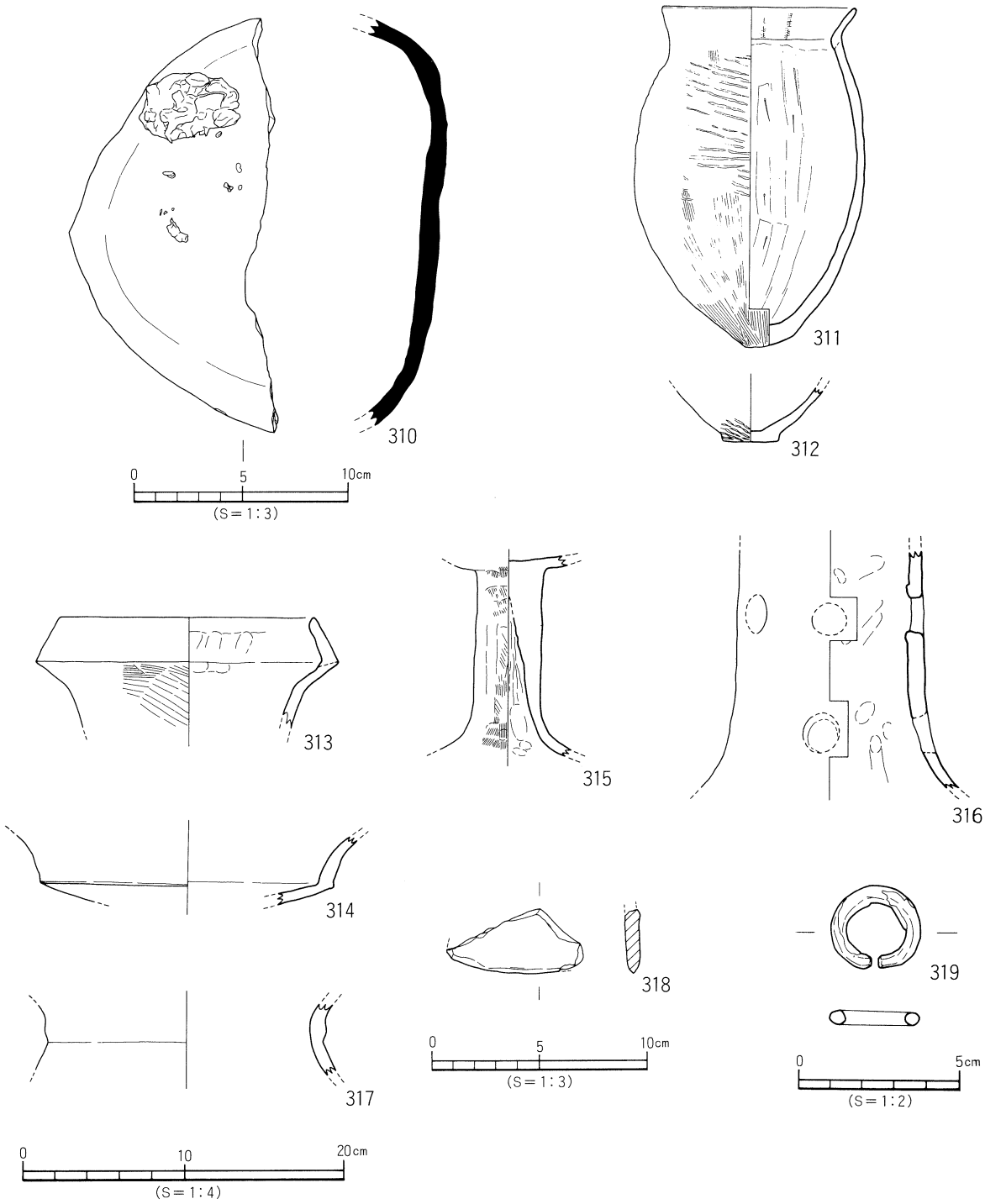
出土遺物（第42図309、図版26）

309は棺身で、大型品のなかでは小さい法量に属するものである。内傾する長い頸部に、頸胴部はわずかな段をもつ境となす。肩部は張り、底部にすぼまりながらつづく。底部は大きく、わずかに凹みをなし、たちあがりをもつ。

（2）古墳時代～中世

ＳＤ１（第21図、図版20）

調査地の西部から南壁中央の間をはしり、ＳＤ２に切られる。方位は、北西－南東である。規模は、検出長25m、幅3.0mで、断面形態は逆台形状を呈する。遺物は、埋土中より須恵器、砥石、耳環、弥生土器等が出土している。



第43図　SD１出土遺物実測図

出土遺物（第43図310～319、図版26）

310は須恵器提瓶の体部片である。内面には回転ナデのあとがみとめられる。古墳時代６世紀。311～317は弥生土器で、311・312は叩き痕をもつ甕形土器、313は複合口縁壺、314・315は高坏形土器で、316は器台形土器である。311～316は弥生時代後期。317は壺形土器の口頸部片で、口頸部境には段をもつ。弥生時代前期。318は磨製石器の欠損品で、石材は結晶片岩である。319は耳環である。表面は劣化が著しく、銀がわずかにみとめられる。外径2.8㎝、内径1.8㎝、重さ7.4ｇである。

時期：埋土の遺物では６世紀の須恵器が最も新しい。一方、調査地内には古代の遺物を含む土層や遺構があるが、古代の遺物は混入していないため、６～９世紀の間に埋没していたと考えられる。

ＳＤ２（第21図、図版20）

調査地の中央部から西壁の間にある。西側は検出が明確であるが、調査地中央部分では不明瞭になる。ＳＤ１、ＳＢ１・３・６を切る。規模は、検出長が34ｍ、幅は西部で上場2.3ｍを測る。断面形態は、逆台形状を呈し、基底部は部分的に弧をえがく。

なお、基底部下では完形に近い大型の弥生土器片が出土しており、ＳＤ２の下には弥生時代の遺構があったものと考えられる。

出土遺物（第44図320～326、図版26）

埋土出土品：320は、須恵器の坏蓋である。天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描く。口縁端部は丸い。

ＳＤ２下部遺構出土品：321は甕形土器で、内面に稜をもって上外方に開く口縁部をもつ。胴部は短く、ふくらみをもつ。322は鉢形土器で、直口口縁をもつ。底部はわずかに突出し、あいまいな平底をもつ。323は壺形土器の底部で、たちあがりのある平底となる。

時期：埋土出土品で最も新しい時期を現すのは320の須恵器で、６世紀後半となる。よって、埋没時期は古くて６世紀後半。また、周辺の状況を加味すると９世紀までとなる。

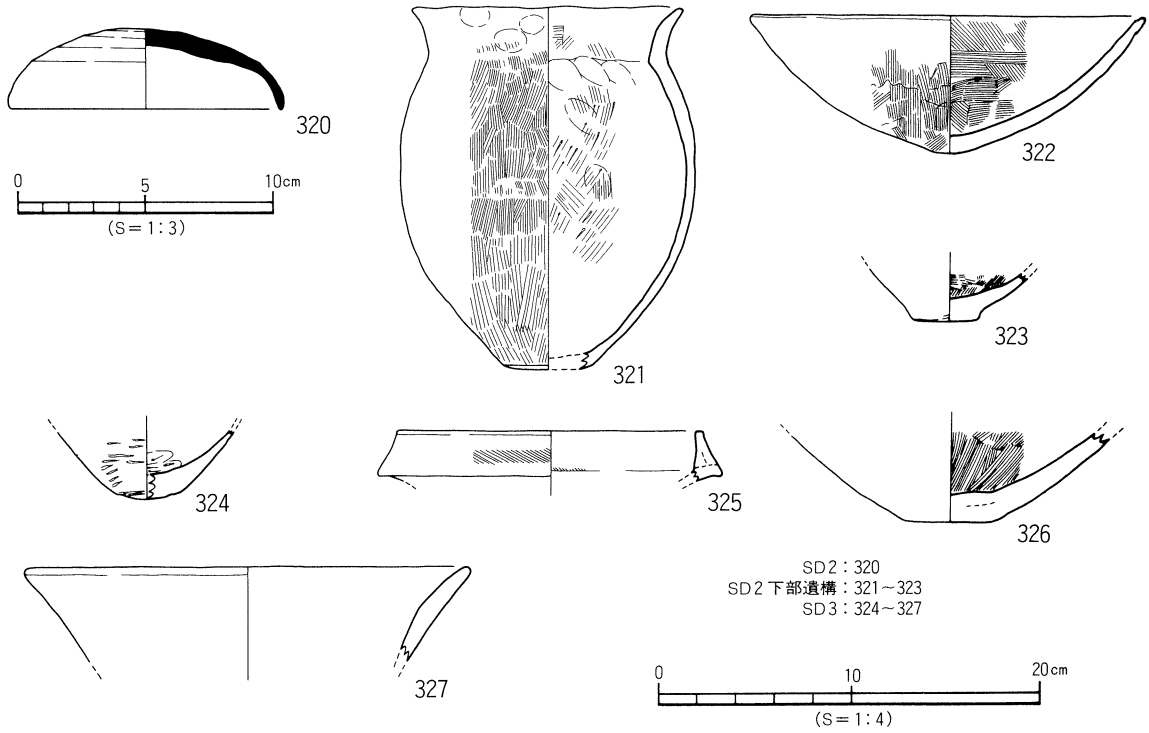
ＳＤ３（第21図）

調査地の中央やや北を、東西にはしり、ＳＢ７を切る。遺構の東側は未調査である。規模は、検出長18ｍ、検出幅２.５ｍとなる。遺物は弥生土器と須恵器が出土している。

出土遺物（第44図324～327）

324は甕形土器で、底部は丸みをもち、叩き痕がみられる。325は壺形土器で、複合口縁壺の口縁部である。326は壺形土器の底部で、やや厚い平底をもつ。327は大きく開く長い口縁部をもつ。

時期：埋土中には須恵器があり、埋没時期は古くは６世紀、新しくは９世紀までとなる。



第44図　SD２・３出土遺物実測図

ＳＤ５（第21図、図版21）

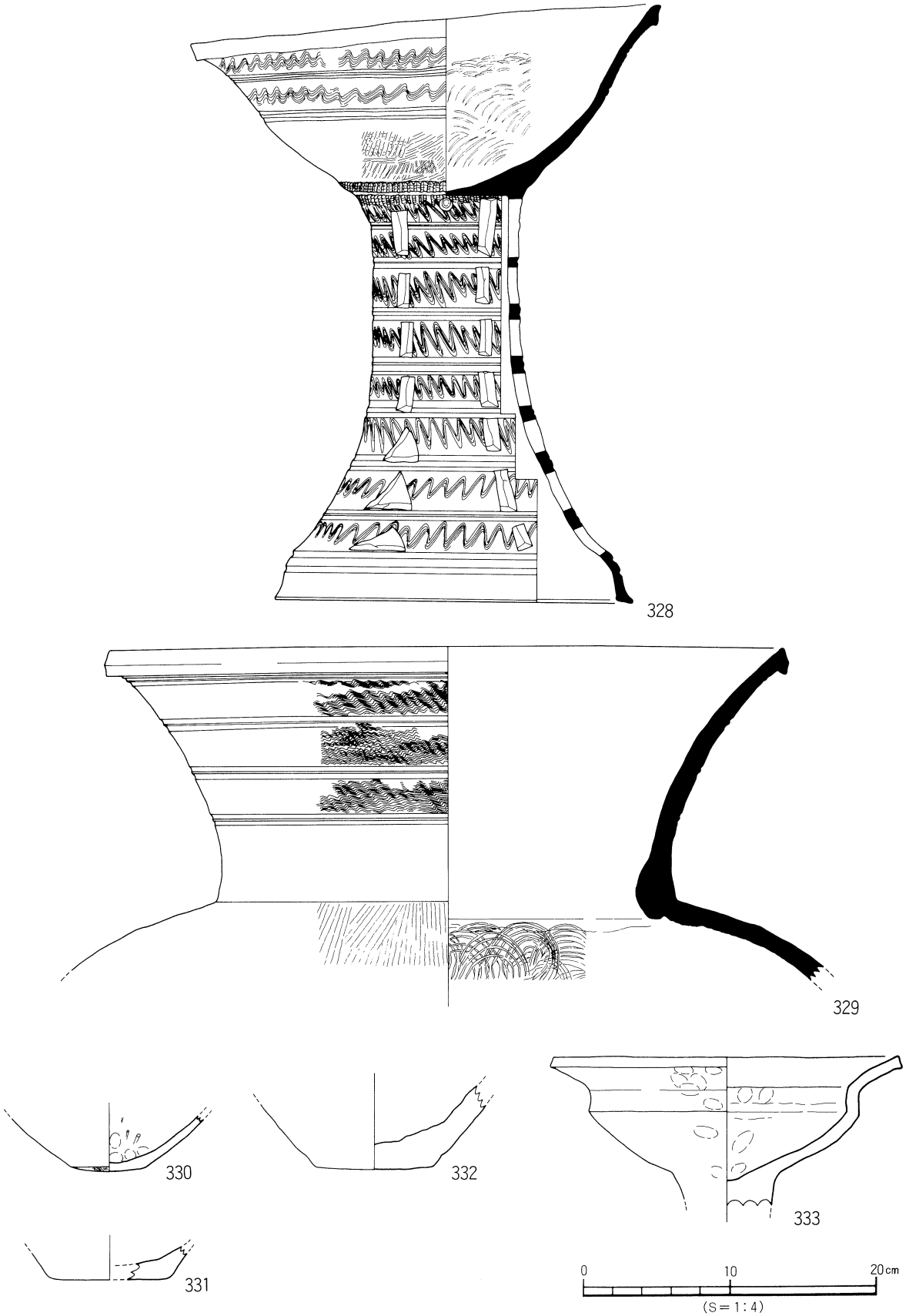
調査地の南西部にあり、南端部は未調査となり、ＳＢ４を切る。溝は円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈するが、基底部は弧をえがく。規模は上場幅2.6mで、溝の南北間は20.7mとなる。遺物には須恵器、弥生土器等がある。本溝は、形状・規模・出土遺物より円墳の周溝と考えられる。なお、掘立柱建物ＳＢ10との関係は定かでない。

出土遺物（第45図328～333、図版27）

328・329は須恵器である。328は器台である。坏部と脚部の境には、二段のキザミと、未貫通の円孔が４ヶ所に施される。脚部のスカシの形状は上四段は５ヶ所とも長方形、下三段は３ヶ所が三角形、２ヶ所が長方形である。329は大型甕である。口頸部は大きく開き、口縁部下端を肥厚させる。２条一組の凹線の間に、波状文を施す。

330～333は弥生土器である。330～332は底部で、330が甕形土器、331・332は壺形土器である。333は高坏形土器で、坏部片である。口縁部は直立後外傾してたちあがる。器壁が著しく厚い。

時期：器台と大型甕は、ＳＤ５に築かれた古墳に伴う遺物と考えられ、ＳＤ５は６世紀後半に時期比定しておく。



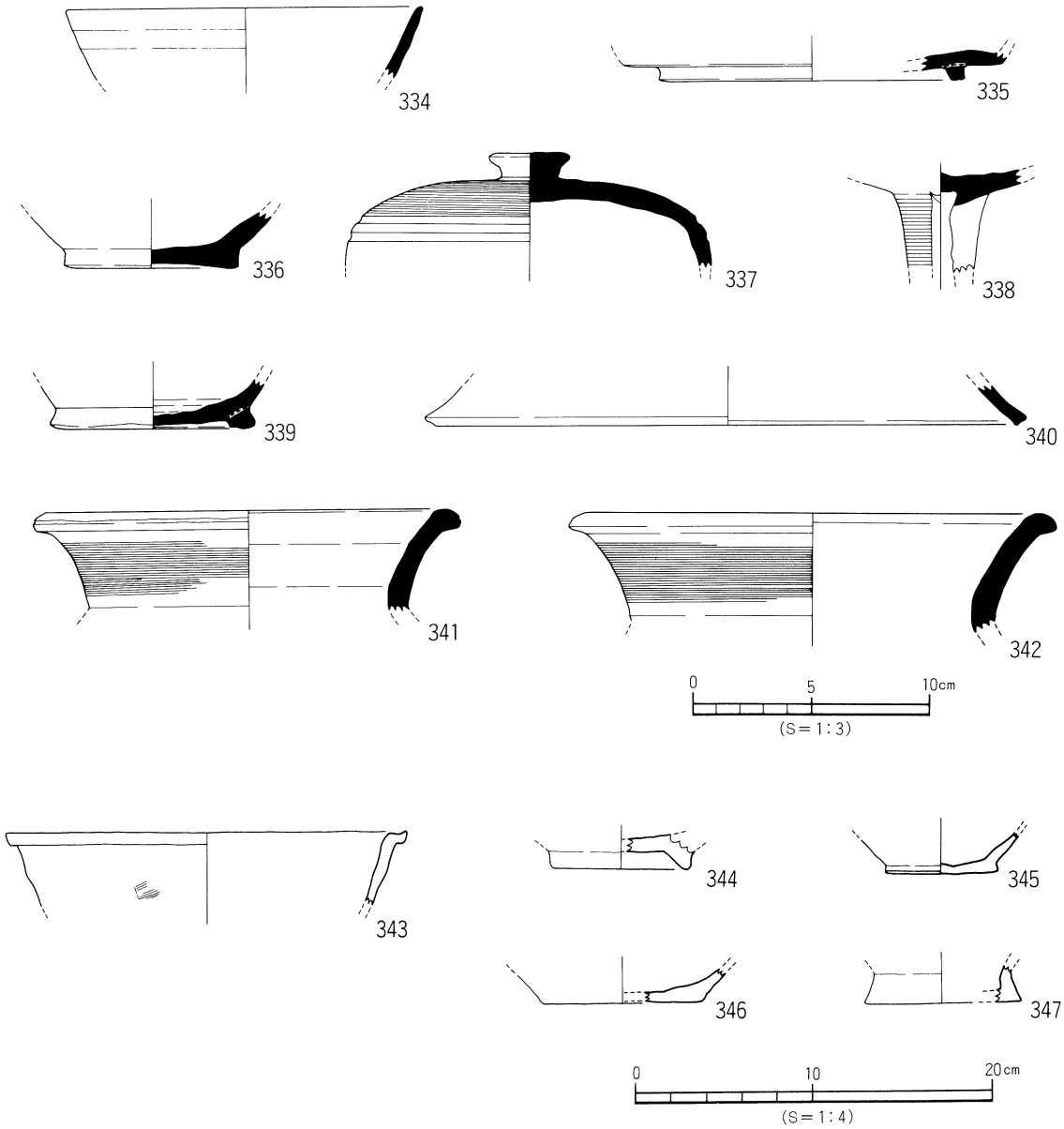
第45図　SD 5 出土遺物実測図

ＳＤ４（第21図）

調査地の北側にあり、東西にはしる溝である。遺構の東側は未調査となる。規模は、検出長17m、上場幅3.5～6.0mとなる。溝は南側にゆるやかな傾斜面をもって、急激に下る。断面形態は、逆台形状を呈し、深さは概ね50～60cmとなる。遺物には、中世～古代の土師器、須恵器、弥生土器などの破片資料が多くある。

出土遺物（第46図334～347、図版27）

334～342は須恵器である。334は坏の口縁部である。底部形態は不明。口縁部は直立気味にたちあがる。335は高台付の坏底部である。底部と体部の境は明瞭である。高台の接地面はわずかに凹み、高台は底部端よりかなり内側に「ハ」の字状に付く。336は円盤高台の坏の底部である。底部外面中央部がやや凹む。底部内面にはあて具痕、外面にはやや磨滅するが、回転糸切り痕がみられる。337



第46図　SD４出土遺物実測図

は有蓋高坏の蓋である。つまみ上部は平らになる。天井部の外面全体に回転カキ目調整を施す。天井部と口縁部の境には丸みのある２条の沈線が巡る。338は高坏脚部である。三方向に長方形スカシをもつ。スカシは二段になるものと思われる。外面は回転カキ目調整の後、回転ナデ調整を施す。339は台付長頸壺の底部片である。底部端にやや幅広の「ハ」の字状の高台が付く。高台内端面がやや凹む。内面には粘土紐巻き上げ痕がみられる。340は小片のため器種は不明だが、器台の脚部の可能性がある。脚部端面はわずかに凹み、内側はわずかに肥厚する。341・342は甕の口頸部である。口縁端部を珠玉状におさめている。頸部外面は回転カキ目調整。口縁端部内面には稜線がみられる。341の口縁端部外面には沈線状の凹みがある。343は鉢で、逆「Ｌ」字状に外反する口縁部をもつ。平野での類例がない。香川県十瓶窯の形態に類似する。344～347は土師器の坏である。344は輪高台をもつ。345は円盤高台、346は平底、347は「ハ」の字にたちあがる底部をもつ。344～347は10世紀。

時期：埋没時期は埋土出土品に求め、10世紀に比定しておく。

（３）その他

１）遺　構

ここでは、時期が全く推測できない遺構と近世以後の遺構を取り上げる。

掘立柱建物ＳＢ10（第21図、図版21）

調査地の中央やや南東にあり、ＳＤ５の内側に位置する。方位は南東－北西をとる。桁行は２間で、柱間が2.0m、梁行は１間で、柱間が3.8mとなる。床面積は15.2㎡。柱穴からの遺物はない。時期を推定する資料がなく、遺構の時期比定は保留しておく。

自然流路

調査地西部にあり、調査地を南北に横断する自然流路である。調査の日程上、未調査となった。流路の幅は概ね３～４ｍで、深さは１ｍ程をトレンチで確認した。時期は特定できない。

近世墓群１・２

調査地の北東部に２ヶ所の近世墓群を検出した。近世墓群１は長方形に配される礫を検出し、その下で埋葬施設を２基確認した。近世墓群２は近世墓群１の東約10mで礫を伴って検出した。出土物はない。

近世墓ＳＫ４

調査地の南東部、自然流路の東２～３ｍの地点にある。平面形態は円形を呈し、規模は直径１ｍ前後で、深さは40～50㎝となる。基底部には礫がつまっていた。出土物はない。

2）遺　物

ここでは、グリットや出土地点が明確でない遺物を取り上げる。

ｉ）弥生時代遺物（第47・48図348～387、図版27・28）

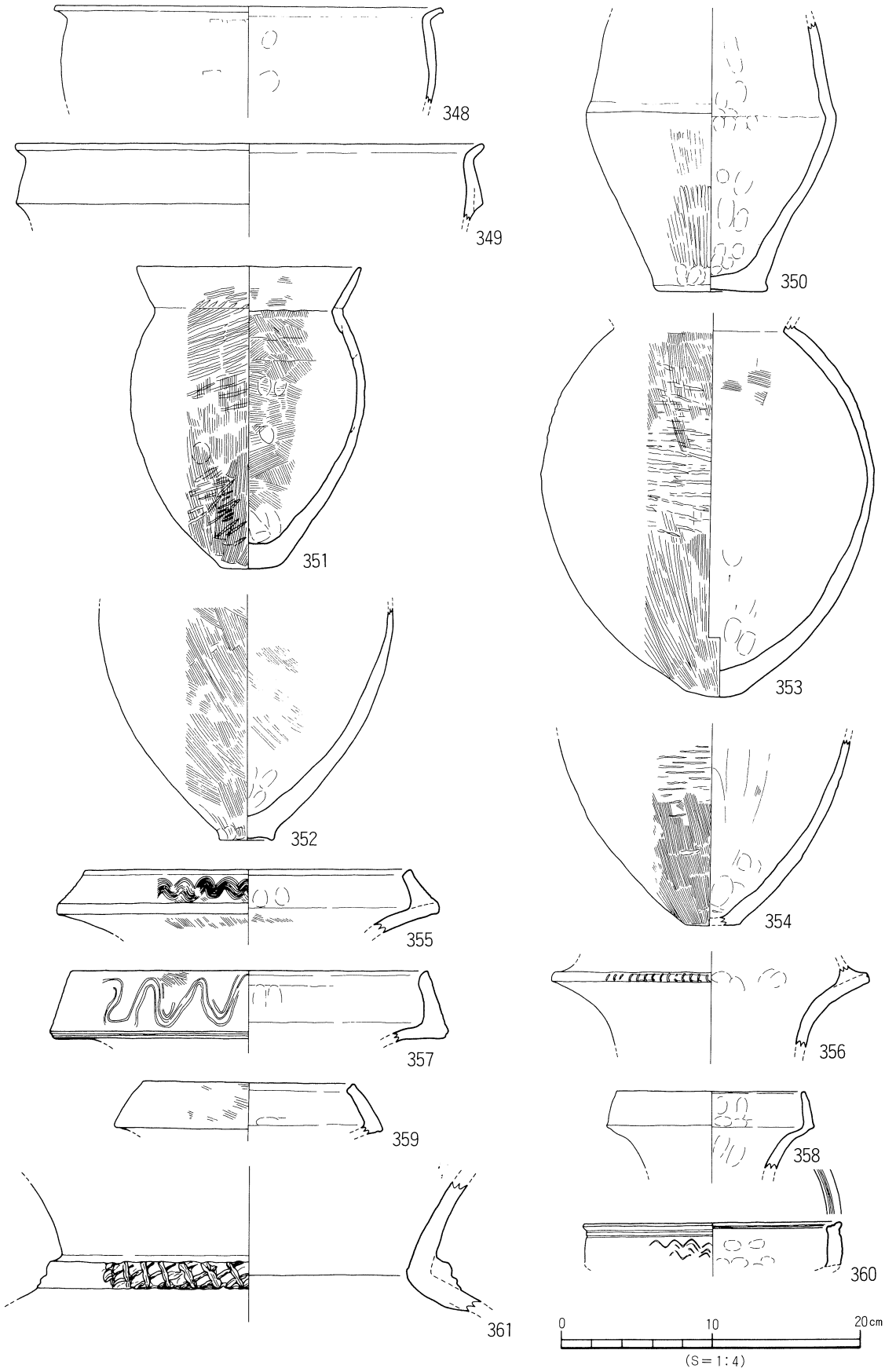
348～350は甕形土器である。349は口縁下に段、350は胴中位に段をもつ。348～350は弥生時代前期前半。

351～354は甕形土器である。351はＳＢ３ないしＳＢ６出土品で、ほぼ完形品である。352～354は胴下半部で、353・354は平底で、叩き痕をもつ。355～365は壺形土器である。355～361は複合口縁部で、355・357・360の口縁部にはクシ描波状文および多条沈線文が施されている。356は口縁接合部に半截竹管の刺突文をもつ。361は頸部片で、斜格子目の刻目突帯文をもつ。362は大きく開く長い口頸部をもつもので、口縁内面に線刻がある。名本二六雄氏によれば「直弧文が描かれている」とのことである。363は小型品で、短く外反する口頸部をもつものである。364は長頸壺の胴部片で、扁平球を呈している。365は胴部～底部の破片である。366～372は鉢形土器である。366～368は口縁部が外反するもので、366は大型品で、頸部に斜格子目の刻目突帯文をもつ。369～371は直口口縁をもつ。372は出土地点よりＳＢ６の可能性をもち、直口口縁をもつ鉢形土器となる。373～378は高坏形土器である。373～375は柱部から裾部までが連続して「ハ」の字状に開くもので、376～378は柱部がエンタシス状、裾部が二段に開くものである。374の柱部には円孔が一段、376の口縁端部には小円形浮文、377の下段の裾部には円孔、378は上・下段の裾部に円孔が施されている。379～381は器台形土器である。379・380は口縁部片で、379は上端部が剝離し、端面には半截竹管の刺突文が施され、380の口縁端面には斜線充塡の三角文がある。381は脚端部片で、端部は面をもって直立し、端面には竹管文が二段ある。382～384は支脚形土器である。382・383は柱部が円筒形で、口縁部はわずかに外反するものがつく。384は、器高が低い支脚形土器である。上げ底状になる。385は小型品で、鉢形土器を模したものである。386・387は土製の小玉である。386は洋ナシ状を呈し、上部に小さい貫通孔をもち、387は中央部に小さい貫通孔をもつ。以上351～387は弥生時代終末に属するものである。

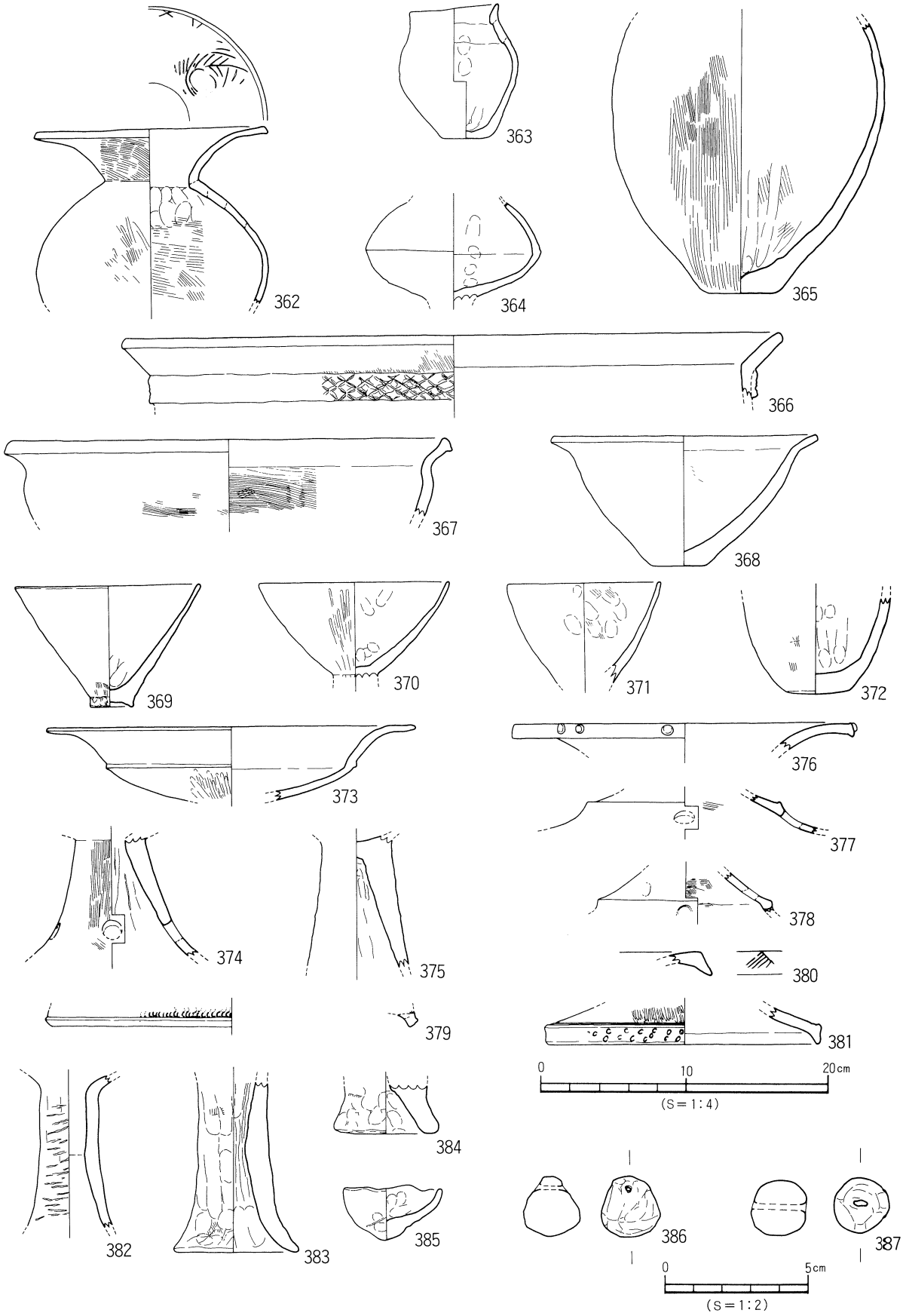
ii）古墳時代～中世（第49・50図388～416）

土師器（388～390）　388は甕の口縁部である。口縁部は内湾してたちあがり、口縁端部は面をもって内傾する。389・390は高坏である。389は完形品で、坏口縁部は外傾してたちあがり、脚部は「ハ」の字状の柱部に、大きく開く裾部をもつ。390は脚部片で、柱部に小円孔が１ヶ穿たれている。

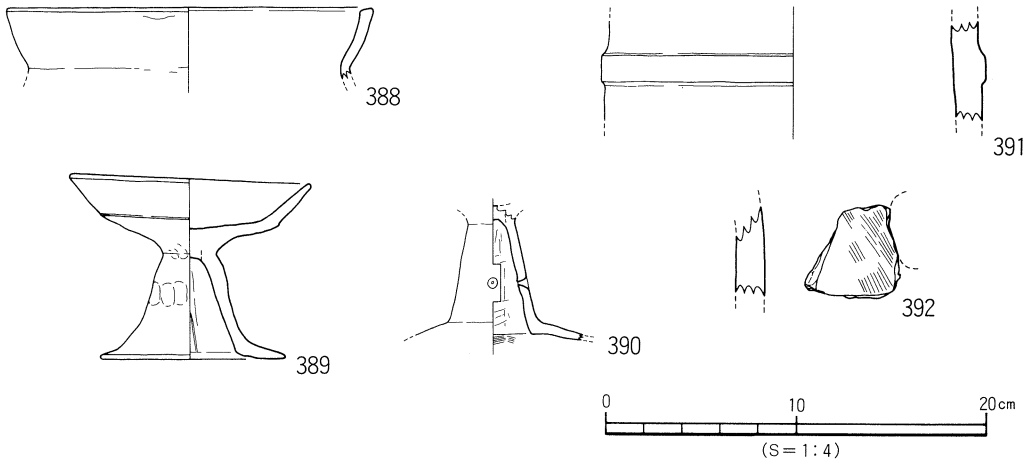
埴輪（391・392）　391はタガ部が残る埴輪片で、扁平な四角形のタガをもつ。６世紀。392は円孔部分の小片である。



第47図　グリッド・地点不明遺物実測図（1）



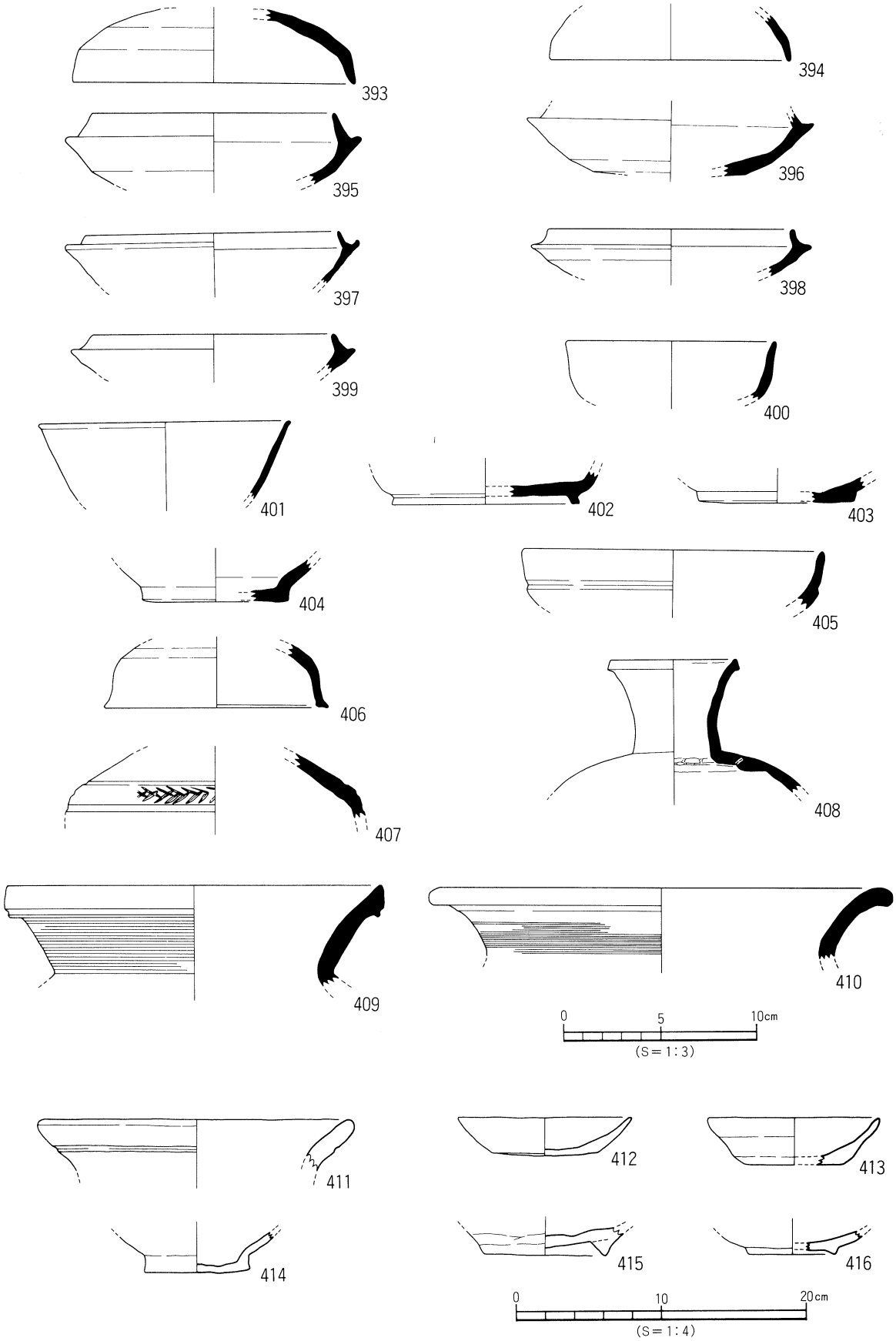
第48図　グリッド・地点不明遺物実測図（2）



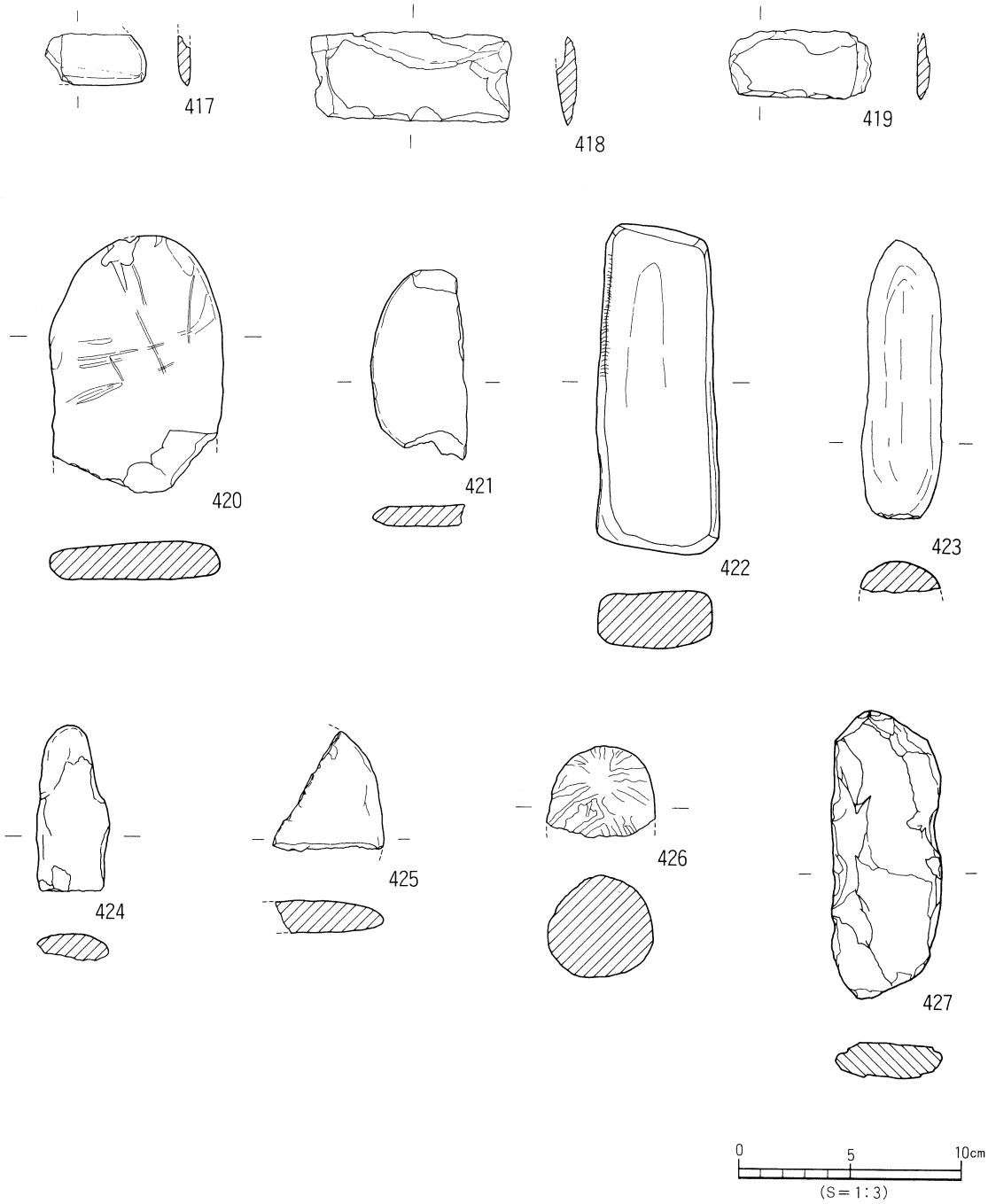
第49図　グリッド・地点不明遺物実測図（3）

須恵器（393～410）　393・394は坏蓋である。393は丸みのある天井部から口縁部にかけてわずかに屈曲している。口縁端部は先細り気味に仕上げる。天井部は回転ヘラ削り調整を施しているが、磨滅している。394は天井部と口縁部の境が不明瞭である。口縁端部は丸く仕上げる。内外面とも磨滅しているため調整は不明。395～399は坏身である。395の口縁部は内傾し、端部は丸みをもつ。受部は上外方へのびる。受部端には重ね焼きの痕跡が残る。396は口縁部・底部が欠損するが、底部は台形を呈するものと思われる。受部はほぼ水平にのびる。底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。397も底部を欠損する。全体に器壁が薄い。口縁部は短く内傾し、受部はやや上外方にひねり出されている。398の口縁部は短く内傾してたちあがる。受部は水平になる。体部は浅い。399は体・底部が欠損する。口縁部は短く内傾し、受部も短い。400・401は坏の口縁部である。400は体部から底部にかけて内湾し、口縁部は外反してたちあがる。口径は10.6cmと小さい。401は400よりも新しい。底部形態は不明。口縁部は直立気味にたちあがる。器壁が薄く、口縁部は端部付近でわずかに外反する。402は高台付の坏底部である。底部から体部にかけて内湾する。非常に細く接地面が凹む高台は、底部端より少し内側に「ハ」の字状に付く。403・404は円盤高台の坏の底部である。底部外面はナデられており、切り離しの技法は不明。403の底部内面中央部は凹む。405は無蓋高坏の坏部である。口縁端部は尖り気味に丸い。口縁部下位に凹線状の凹みが１条巡る。406は短頸壺の蓋である。天井部から口縁部にかけて丸みをもつ。口縁端部は外方に拡張し、端面は内傾する面をもつ。407は長頸壺の肩部片である。外面には２条の凹線の間に羽状文が施される。408は横瓶である。口頸部は外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。409・410は甕の口頸部である。頸部外面に回転カキ目調整を施す。409は口縁部下に１条の凸線が巡っている。410は口縁端部を珠玉状におさめている。

土師質土器（411～416）　411は、鍋もしくは甕の口縁部片である。412～415は坏である。412・413は平底で、412はヘラ切り、413は口縁部にふくらみをもつ。414・415は高台付きの底部で、414にはヘラ切りとスノコ痕がみられ、415は輪高台となる。416は内黒椀で、在地製品である。



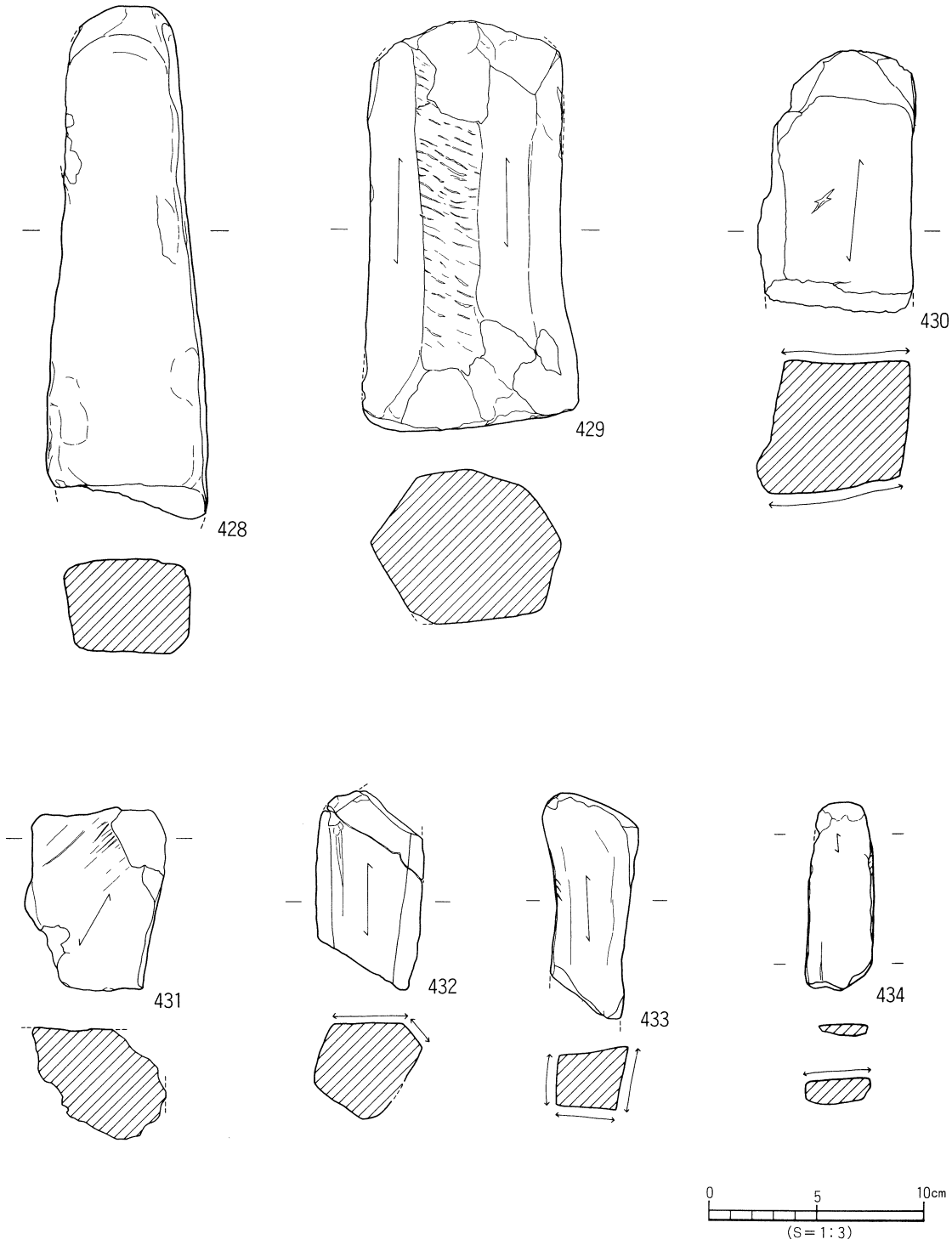
第50図　グリッド・地点不明遺物実測図（4）



第51図　グリッド・地点不明遺物実測図（5）

iii）石製品（第51・52図417～434、図版28・29）

417～424は結晶片岩製の石製品である。417～419は石庖丁で、417は刃部が直線刃となる。418は方形で、打製、両側部に抉りをもつ。平野では類例が極めて少ない。小型品で、一部に刃部をみる。製品か。420～422は石器素材である。420・421は円板状で、扁平なもので、422は柱状を呈する。側部には刻目の痕がみられる。423・424は用途不明品で、棒状を呈している。425～427は石材が判断できなかったものである。425は磨き石の破片、426は用途不明品、427は側部に抉りの痕があり土掘具の



第52図　グリッド・地点不明遺物実測図（6）

可能性をもつ。428～434は砥石である。石材は、428～430は特定できず、431・432は石英粗面岩、434は白色凝灰岩であろう。

3．小　結

本調査では、弥生時代・古墳時代・古代・近世の遺構と、中世を含めた遺物を確認した。

弥生時代

竪穴式住居址11棟を検出したが、いずれも弥生時代終末に属するものである。一部に切り合いや隣りあう住居址があるが、新古の関係を出土物から明確にすることはできなかった。これは遺物の出土量と遺存状況（小破片が主体となる住居址がほとんど）によるものである。ただし平野における当該期の土器編年の遅れによるところも少なくない。しかしながら、これ等の住居址は一集落内における短期間での建て替えの様子を示しているものと考えてよく、編年が整えば集落の時間的変化を詳細におうことができるであろう。

これとは別に、住居址の平面形態や規模等において、４類系の整理ができそうである。１類は多角形状で、面積が最も大きく30㎡以上となるＳＢ２・６・７である。２類は隅丸方形を呈し、面積が１類より狭く20㎡代となるＳＢ１－１・３・８である。３類は隅丸方形で、床面積が10㎡代のものＳＢ１－２・９、４類は長方形を呈し、床面積が15㎡前後のものＳＢ４・５である。

弥生時代終末の松山平野では束本遺跡４次調査によって、集落内の竪穴式住居址の組み合わせが一部明らかになっている。束本遺跡では、円形大型１棟、方形中～大型１棟、方形小型２棟で一群となることが指摘されている。本調査地内も、多角形大型の１類、方形中～大型の２・３類、長方形小～中型の４類で一群となる可能もあるが、時期比定を確実にしたのちに再検討したい。

遺物では、ＳＫ11の前期前半の資料が注目される。甕形土器はヘラ描沈線文をもつものが１点あり、壺形土器は口頸部境に段をもつものが大多数を占めている。これらの特徴は、前期Ⅱに属するものであり、松山平野においては文京遺跡４次ＳＢ１・２や山越遺跡２次ＳＤ３出土資料がこれにあたる。

また、土器棺３基は、前期前半に属するもので、平野の弥生時代墓としては最も古いものとなる。

古墳時代

ＳＤ５は、形状と出土物より円墳の周溝の可能性が高い。ＳＤ１からは耳環、調査地内からは埴輪片があることから、周囲にも古墳があったものと考えられる。６世紀後半以降、平野の微高地に古墳が築造されることになるが、この状況をよく現したものといえる。

ＳＤ１・２・３は、古墳時代６世紀にはじまり、遅くとも古代９～10世紀までには埋没していたものと考えられる。性格は今後の調査により解決したい。

古代～中世

ＳＤ４がこの時代に掘削されている。二段に掘り込まれており、特徴的な掘り方をみる。遺物の出土は、周辺地に居住域をうかがわせており、周辺地の調査を期待したい。

注目されるのは第46図343の鉢である。香川県十瓶窯産の形状をもつものであるが、胴上半部の形状に弱干の違いをみせるとのことで、産地を含め検討課題となった。

その他

調査地内からは、石製品が20点余り出土したが、砥石の出土が多く約３分の１を占めた。また、石庖丁は製品及び未製品が出土し、未製品は穿孔前のものが多い。これ等の石器が帰属する遺構が明確であれば、集落論の良好な資料になりえていた。

小　　結

以上、石井東小学校構内遺跡の調査について報告を行った。調査では平野の中央部にあたる石井地区の遺跡について、その一部を明らかにすることになった。特に、弥生時代前期前半の土器棺墓は、平野で最も古いものである。今後の周辺地域の調査が進めば、弥生時代前期前半の集落構造が明らかとなり、重要な遺跡地帯になるであろう。

本調査は、野外調査から報告書刊行までに、20年を費やした。この間調査担当者は離任し、調査資料も充分に保管されなかった。よって、本報告は、調査時の成果に比べると半減していることは確かである。

報告に際しては、担当者である森　光晴氏はじめ調査関係者の皆様方には多大の協力と助言を賜った。末尾ながら記して感謝の意を表するものである。

なお、報告書作成において、概要報告における誤植・修正などを提示する必要性が生じた。主なるものを以下に記すものである。

①『松山市史料集　第一巻』P.194、図版第28図２上の写真は、ＳＢ８の遺物出土状況写真である。

②同上P.198、図版第28図６上の写真にある掘立柱建物址は、資料が全くなく報告していない。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺構一覧は水口が、遺物観察表は梅木・水口が作成した。

（２）遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
　例）口→口縁部、胴部→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、安→安山岩、密→精製土。
　（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　例）砂・長（１～４）、多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表10　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考
						高床	土坑	炉	カマド		
1-1	弥生時代終末	隅丸方形	5.8×5.0α×	29.0α	4						SD2に切られる
1-2	弥生時代終末	方形	3.8α×3.8α×	14.4α	4						
2	弥生時代終末	隅丸方形	6.1×5.8α×	35.3α	5+1	○		○			張り出し部を持つ
3	弥生時代終末	方形	4.8×4.8×	23.0							SB6を切る SD2に切られる
4	弥生時代終末	長方形	4.8×3.2×	15.3α							SD5に切られる
5	弥生時代終末	長方形	4.3×3.5×	15.0α				○			
6	弥生時代終末	六角形か	6.8×4.5α×	30.6α		○		○			炉の横に柱穴3本 SD2・SB3に切られる
7	弥生時代終末	多角形	7.2×4.9α×	40.6α	4α	○		○			SD3に切られる
8	弥生時代終末	方形	5.3×5.2×	27.5							
9	弥生時代終末	方形	4.5×3.9×	17.0	4			○			炉の横に柱穴2本
11	弥生時代終末	四角形か	3.5×2.8α×	9.8α				○			

表11　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁　行		梁　行		方　位	床面積(㎡)	時　期	備　考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
10	1×2	南東～北西	4.0	2.0・2.0	3.8	3.8	南東―北西	15.2		

表12　溝一覧

土坑(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	出土遺物	時　期	備　考
1	X2Y7～X7Y5	逆台形	25×3.0	北西―南東	須恵・砥石 耳環・弥生		SD2に切られる
2	X7Y2～X9Y9	逆台形	34×2.30	東西	弥生・須恵		SD1・SB1・3・6を切る
3	X12Y7～X11Y12		18×2.50	東西	弥生・須恵		SB7を切る
4	X13Y6～X13Y10	逆台形	17×3.5～6.0×0.5～0.6	東西	須恵・土師	10C	
5	X1Y11～X6Y10		×2.6		須恵・弥生	6C後半	内側周溝間16.3 SB4を切る

表13　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面図	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	面積(㎡)	出土遺物	時　期	備　考
4	X3・4Y14	円形	1～2				近世墓
5	X2Y2	楕円形	2.0×1.9×	3.14	弥生	弥生時代終末	
6	X2・3Y5	円形	1.7×1.6×	2.26		弥生時代終末	
7	X6Y3	長方形	2.4×1.8×	4.32	弥生	弥生時代終末	
10	X5Y2	長方形	2.0×1.2×0.45	2.4	弥生	弥生時代終末	
11	X1Y14	円形	1～2		弥生・石器	弥生時代 前期前半	
12	X5・6Y14	長方形				弥生時代終末	

表14　SB1出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(20.6) 残高 3.3	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	明褐色 明褐色	石、長（1～4） ◎		
2	甕	口径(15.4) 残高 7.5	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	乳茶色 乳黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
3	甕	口径(15.8) 残高 3.3	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	ハケ→ヨコナデ	黄茶色 黄茶褐色	石、長（1～2） ◎		
4	甕	口径(17.0) 残高 2.9	外反するやや長い口縁部をもつ。	ハケ	ハケ→ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	砂粒 金 ◎		
5	甕	底径 3.3 残高 6.7	底部。平底。	ハケ	マメツ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～5） ◎		
6	甕	底径 1.4 残高 4.6	小さい平底。たちあがりをもつ。	ハケ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～2） ◎		
7	甕	底径 3.1 残高 2.8	底部。平底。	タタキ→ハケ	ナデ	暗灰色 乳灰色	砂粒 ◎		
8	甕	底径（1.9） 残高 13.4	胴下半分にふくらみをもつ。平底。	タタキ	ハケ→ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～5） ◎		
9	壺	口径(22.0) 残高 6.2	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文7条2段。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
10	壺	口径(27.4) 残高 3.5	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文8条。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
11	壺	口径(22.0) 残高 3.0	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文5条。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	砂粒 ◎		
12	壺	口径 20.0 残高 5.8	大きく開く長い口頸部。	(口端)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ	(口端)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ	茶褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
13	壺	口径(21.2) 残高 3.1	大きく開く長い口頸部。口縁端部は垂下する。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	ハケ→ヨコナデ	暗褐色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
14	壺	底径（6.2） 残高 5.0	底部。平底。	タタキ→ハケ	マメツ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
15	壺	底径（2.9） 残高 2.4	底部。平底。	ハケ	マメツ(ハケか?)	暗茶褐色 暗茶褐色	密 ◎		
16	壺	底径 2.8 残高 8.9	胴下半分は丸みをもつ。底部は丸平底。	ハケ（マメツ）	ナデ	乳灰色 乳灰色	石、長（1～5） 金 ◎		
17	鉢	口径(14.8) 残高 9.3	底部は欠損するが、内面にわずかに焼成前穿孔の一部があり。コシキ形土器の可能性をもつ。	ハケ	ハケ→ナデ	乳黄褐色 灰黄色	石、長（1～2） ◎		
18	鉢	底径（4.2） 残高 4.0	底部。くびれの上げ底。	マメツ(1部ナデ)	マメツ	灰黄色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
19	鉢	底径 3.0 残高 2.4	底部。平底でわずかにたちあがりをもつ。	マメツ	マメツ	黄茶色 乳灰茶色	石、長（1～3） 金 ◎		

SB1 出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
20	鉢	底径 (0.7) 残高 4.2	胴下半分はふくらむ。小さい丸平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 黄灰色	石、長 (1~3) ◎		
21	鉢	残高 2.1	台付鉢。底部片。	マメツ(1部ハケ)	マメツ	乳褐色 灰褐色	石、長 (1~3) ◎		
22	鉢	残高 1.9	台付鉢。脚部片。円孔（φ1.0cm）をもつ。	ミガキ	ハケ	明褐色 明褐色	砂粒 金 ◎		
23	高坏	残高 7.6	柱部。	ミガキ	ハケ(1部ナデ)	淡茶色 茶色	砂粒 ◎		
24	高坏	底径(17.8) 残高 2.4	裾部。「ハ」の字状に大きく開く。	ミガキ	ナデ	明褐色 明褐色	石、長 (1~4) 金 ◎		
25	支脚	受部径 6.9 残高 12.8	円筒状の柱部に、短く外反する口縁部。口縁端部に刻目。	ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長 (1~2) 金 ◎		22

SB1 出土遺物観察表（石製品）　(3)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
26	石庖丁	完形	結晶片岩	8.6	4.4	1.0	60.0	未製品	22

表15　SB2 出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	甕	口径(16.6) 残高 8.1	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ナデ ㊟ハケ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長、安(1~4) ◎		
28	甕	口径(16.7) 残高 3.0	稜をもって外反する口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	黄茶色 乳黄茶色	石、長 (1~3) 金 ◎		
29	甕	口径(15.4) 残高 3.0	稜をもって外反する口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳黄茶色 黄茶褐色	石、長 (1~2) ◎		
30	甕	口径(15.7) 残高 2.3	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	ハケ	黄茶色 乳黄色	石、長 (1~4) 金 ◎		
31	甕	口径(14.4) 残高 3.1	稜をもって外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長 (1~3) ◎		
32	甕	口径 15.1 残高 17.3	胴部はふくらみをもって長い。稜をもって外反する。	㊐ヨコナデ ㊟タタキ	㊐ハケ(マメツ) ㊟ハケ(1部ナデ)	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長 (1~3) ◎		22
33	甕	口径(13.2) 残高 7.9	稜をもって外反する口縁部。	タタキ→ナデ ㊟タタキ(1部ハケ)	マメツ	乳黄色 乳灰色	砂粒 ◎		
34	甕	口径(13.6) 残高 4.2	稜をもって外反する口縁部。	タタキ	ハケ	灰色 灰黄茶色	砂粒 ◎		
35	甕	底径 (3.2) 残高 3.9	底部。平底。	ハケ	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石、長 (1~3) ◎		
36	甕	底径 3.1 残高 14.9	胴下半分はふくらみをもつ。小さい平底。	タタキ→ハケ	ハケ	黄灰色 黄灰色	石、長 (1~3) ◎		

SB2出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
37	甕	底径 2.2 残高 26.4	胴部は長く、全体に弱いふくらみをもつ。	(胴上)タタキ (胴下)タタキ→ハケ	ハケ(工具痕) →ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		22
38	壺	口径(26.3) 残高 7.8	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文2段（上8条、下6条以上）。	(口)ハケ→施文 (頸)ハケ	(口)マメツ (頸)ハケ	淡茶褐色 淡黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
39	壺	口径 (9.5) 残高 2.7	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎		
40	壺	残高 3.6	複合口縁壺。頸部に刻目突帯文。	ナデ	(頸)マメツ (胴)ハケ	乳灰色 乳灰色	砂粒・安 ◎		
41	壺	口径(20.0) 残高 4.2	複合口縁壺。口縁部は欠落する。	ハケ（1部ナデ）	マメツ	乳黄茶色 乳灰黄色	石、長（1～3） ◎		
42	壺	口径(17.2) 残高 1.9	口縁部片。口縁端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	ハケ	乳橙茶色 暗褐色	石、長（1～2） ◎		
43	壺	口径(21.5) 残高 1.5	口縁部片。口縁端部は上下にやや拡張	マメツ	ヨコナデ	茶褐色 黒灰色	石、長（1～2） ◎		
44	壺	口径(20.8) 残高 1.5	口縁部片。口縁端部は垂下する。	ハケ（1部ナデ）	ヨコナデ	茶褐色 乳茶褐色	密 ◎		
45	壺	底径 5.4 残高 4.2	底部。厚い大きな平底。	ハケ	ハケ	灰黄色 乳黄茶色	石、長（1～3） ◎		
46	鉢	口径(36.0) 残高 7.9	稜をもって折れ曲がる口縁部。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(マメツ)	マメツ	淡黄茶色 淡黄灰色	石、長（1～5） ◎		
47	鉢	口径(10.9) 残高 6.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ナデ	ナデ	茶褐色 黄茶褐色	密 ◎	黒斑	
48	鉢	口径(13.8) 残高 7.2	直口口縁。	ハケ	ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	砂粒 ◎		
49	鉢	口径 17.1 器高 6.3 底径 3.2	口縁部の一部を欠損。 直口口縁。やや厚い平底。	タタキ→ナデ	ハケ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	22
50	鉢	口径(11.8) 器高 7.3 底径 2.1	口縁部の２分の１を欠損。 直口口縁、小さい平底。	(口)マメツ (胴下)ハケ	マメツ	乳黄茶色 乳灰色	砂粒 ◎		22
51	鉢	口径(10.8) 器高 4.8 底径 3.5	口縁部の２分の１を欠損。 直口口縁、くびれの上げ底。	ナデ	ハケ	乳黄茶色 乳茶褐色	砂粒 ◎		22
52	鉢	口径(10.9) 器高 5.9 底径 1.2	口縁部の２分の１を欠損。 直口口縁、小さい平底。	ナデ（工具痕）	ハケ	淡黄茶色 淡黄茶色	密・金 ◎	黒斑	22
53	鉢	口径 (8.2) 器高 12.8 底径 (3.7)	長胴、直口口縁、平底。 器壁が厚い。	ナデ	ナデ	乳黄茶色 灰黄茶色	密 ◎		22
54	鉢	底径 2.8 残高 4.1	底部。たちあがりをもつ上げ底。	ハケ	マメツ	乳茶褐色 乳灰色	砂粒 ◎	黒斑	
55	高坏	口径(28.9) 残高 4.3	坏部。稜をもって大きく開く長い口縁部。	マメツ	ナデ	乳茶褐色 乳黄茶色	石、長（1～2） ◎		
56	高坏	残高 5.2	柱部。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～4） 金 ◎		

SB2出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
57	高坏	残高 5.8	柱部。	ハケ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
58	高坏	底径(16.6) 残高 1.9	裾部。大きく開く長い裾部。	ハケ	ハケ	淡茶褐色 淡黄茶色	石、長（1～2） ◎		
59	器台	口径(28.0) 残高 2.6	受部。口縁部は大きく開き、端部は上下にわずかに拡張。	ハケ→ナデ	ミガキ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～4） ◎		
60	支脚	残長 2.5	受部。角状突起片。	ナデ		灰茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
61	器種不明	口径(17.5) 残高 2.3	内傾する体部上半。口縁端部は玉縁状になる。	回転ナデ	回転ナデ	乳橙色 灰黄色	密 ○		
62	坏	底径（6.1） 残高 3.5	円板高台。	㊐回転ナデ ㊞回転糸切り	マメツ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
63	坏	底径（7.0） 残高 1.7	円板高台。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	密 ◎		
64	坏	底径（6.4） 残高 1.6	円板高台。	回転ナデ	マメツ	黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
65	高坏	残高 5.5	柱部。器壁は薄い。	マメツ	マメツ	淡橙茶色 黄褐色	密 ◎		

表16　SB3出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
66	甕	口径(25.6) 残高 3.1	外反するやや長い口縁部。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
67	甕	底径 2.0 残高 4.5	底部。厚く小さい平底。	ハケ	ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	石、長（1～3） ◎		
68	甕	底径（3.3） 残高 4.7	底部。平底。	マメツ	ハケ	茶褐色 灰黄茶色	密 ◎		
69	甕	底径（2.4） 残高 6.2	底部。平底。	ハケ	ハケ	淡黄茶色 淡黄灰色	石、長（1～4） ◎		
70	甕	底径（5.8） 残高 3.4	底部。直立するたちあがりをもつ大きい平底。	ナデ	ナデ	灰黄色 淡黄茶色	石、長（1～4） ◎		
71	壺	口径(10.8) 残高 6.4	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊀ナデ ㊁ハケ→ヨコナデ	㊀ナデ ㊁ハケ→ナデ	乳白色 乳灰色	砂粒 ◎		
72	壺	残高 0.9	口縁部小片。口縁端部はナデ凹む。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
73	壺	口径(22.4) 残高 0.8	口縁部小片。口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ	灰黄色 淡黄茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
74	壺	底径（6.9） 残高 3.0	底部。やや厚い大きな平底。	マメツ	マメツ	乳黄色 灰色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
75	高坏	口径(23.5) 残高 4.5	坏部。稜をもって外反する長い口縁部。	ミガキ(マメツ)	マメツ	茶褐色 乳白色	石、長（1～2） 金 ◎		

表17　SB4出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
76	甕	口径(17.4) 器高 19.8 底径 (4.2)	肩部にやや張りをもつ。稜をもって外反する口縁部。平底。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊟ハケ	㊐ハケ ㊟ハケ→ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎		23
77	甕	口径(14.9) 残高 14.9	肩部にやや張りをもつ。稜をもって外反する短い口縁部。	㊐ハケ ㊟タタキ→ハケ	㊐マメツ ㊟ケズリ	乳黄茶色 乳灰茶色	石、長（1～3） ◎		
78	壺	口径(19.1) 残高 4.9	大きく開く長い口頸部。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	乳灰黄色 乳黄茶色	石、長（1～4） ◎		
79	壺	底径 5.0 残高 26.3	肩部が張り、全体に丸みをもつ。平底。	ハケ→ミガキ （1部タタキ?）	ハケ→ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
80	壺	底径 2.8 残高 2.1	平底の底部。	ハケ	マメツ	黄茶褐色 灰黄色	石、長（1～3） ◎		
81	鉢	口径(15.9) 器高 10.7 底径 2.8	口縁部の一部を欠損する。直口口縁。小さい平底。	ハケ→ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎		23
82	鉢	口径(13.0) 器高 6.4 底径 3.1	直口口縁。たちあがりをもつ上げ底。	ハケ	ハケ→ミガキ	明褐色 明褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
83	鉢	口径 12.9 器高 5.8 底径 3.0	口縁部の一部を欠損する。直口口縁。小さい平底はたちあがりをもつ。	ハケ	ハケ	灰黄色 乳黄色	石、長（1～3） ◎		
84	高坏	底径(12.2) 器高 8.4	脚部。ゆるやかに開く裾部。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～3） ◎		
87	坏	口径(12.8) 器高 3.5 底径 6.2	平底。口縁端部はわずかに開く。	回転ナデ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		

SB4出土遺物観察表（石製品）

(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
85	砥石	完形	砂岩	12.4	7.3	9.7	1245.0	砥面2	
86	用途不明	完形		8.1	5.8	1.0	85.0		

表18　SB5出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
88	甕	口径(20.0) 残高 18.6	胴部は、全体がややふくらみ長胴。口縁部は稜をもって外反する。	㊐ヨコナデ ㊟ハケ	㊐マメツ ㊟上ハケ→ナデ ㊟中ナデ	黄茶色 乳黄灰色	石、長（1～3） ◎		
89	甕	口径(19.8) 残高 7.0	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ナデ ㊟ハケ	ハケ	淡黄茶色 淡黄灰色	石、長（1～4） ◎		
90	甕	口径(19.2) 残高 1.3	口縁部小片。外反する口縁部。	ヨコナデ	マメツ	暗茶褐色 乳褐色	石、長（1～6） 金 ◎		
91	甕	口径(16.5) 残高 1.8	口縁部小片。外反するやや長い口縁部。	ナデ	ハケ	乳灰黄色 灰茶褐色	石、長（1～3） ◎		
92	甕	底径 2.1 残高 3.2	底部。小さい平底。	ハケ	ハケ→ナデ	乳灰黄色 乳黄茶色	密 ◎		

SB5 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
93	甕	底径 (4.9) 残高 2.0	底部。平底。	ハケ	ナデ	淡灰黄色 乳黄茶色	密 ◎		
94	鉢	口径(28.6) 残高 3.7	大型品。外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	淡茶褐色 乳黄色	石、長（1～2） 金 ◎		
95	鉢	口径(17.1) 器高 7.4 底径 3.0	直口口縁。底部は丸平底。	ハケ	ハケ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～4） ◎	黒斑	

表19　SB6 出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
96	甕	口径(33.3) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁部。	ヨコナデ (1部ハケ)	ヨコナデ	黄茶褐色 乳黄色	石、長（1～4） ◎		
97	甕	口径(28.7) 残高 3.6	稜をもって強く外反する口縁部。	ハケ	ハケ	乳茶色 乳黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
98	甕	口径(24.5) 残高 5.4	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	㊐ハケ ㊐ハケ→ナデ	茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～3） ◎		
99	甕	口径(19.4) 残高 7.3	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ ㊐タタキ→ハケ	ハケ	乳白色 乳白色	砂粒 ○		
100	甕	口径(19.1) 残高 5.0	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎		
101	甕	口径(15.2) 残高 2.7	稜をもって強く外反する短い口縁部。	マメツ	ハケ	灰褐色 灰褐色	石、長（1～2） ◎		
102	甕	口径(17.1) 残高 1.7	外反する口縁部。	ナデ	ナデ	乳黄茶色 乳黄褐色	石、長（1～4） ◎		
103	甕	口径(15.8) 残高 2.6	外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
104	甕	底径 3.8 残高 2.8	底部。平底で厚い。	ハケ	ナデ	暗赤褐色 黄灰褐色	石、長（1～4） ◎		
105	甕	底径 3.4 残高 5.0	底部。丸平底。	ミガキ	マメツ	暗茶褐色 淡灰褐色	石、長（1～5） ◎		
106	壺	口径(14.9) 残高 2.8	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	砂粒 ◎		
107	壺	口径(24.8) 残高 3.7	複合口縁壺。口縁部はクシ描波状文7条。	マメツ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
108	壺	残高 3.0	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	乳白色 乳黄色	砂粒 ◎		
109	壺	口径(14.2) 残高 6.0	複合口縁壺。口縁部は袋状を呈し、無文。	㊐マメツ ㊐ヨコナデ	ヨコナデ	橙茶色 橙茶色	石、長（1～4） ○		
110	壺	口径(15.1) 残高 10.6	内湾してたちあがる口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ ㊐ハケ	ハケ	乳黄色 乳黄色	砂粒 ◎		23

SB6出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
111	壺	口径(10.6) 残高 4.9	口縁部は短く外反する。外面には線がみられるが、意図したものではないだろう。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
112	壺	口径(17.7) 残高 2.7	短く外反する口縁部。	ヨコナデ	マメツ	乳茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） ◎		
113	壺	残高 6.0	大きく開く長い口頸部。	(頸)ハケ (胴)ハケ→ナデ	(頸)ハケ (胴)ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
114	壺	口径(19.4) 残高 2.9	大きく開く長い口頸部。	ハケ→ヨコナデ	マメツ	乳黄茶色 乳灰黄色	石、長（1～3） ◎		
115	壺	口径(10.4) 残高 5.2	外傾外反する長い口頸部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 暗褐色	密 ◎		
116	壺	底径（6.4） 残高 11.6	底部。たちあがりをもつ平底。	ハケ	ナデ	茶褐色 灰色	石、長（1～3） ◎		
117	壺	底径 5.8 残高 3.7	底部。胴下半部はふくらみをもつ。大きい平底。	ハケ	マメツ	乳茶褐色 乳灰茶色	石、安（1～4） ◎	黒斑	
118	壺	底径（7.2） 残高 3.3	底部。平底。	マメツ(工具痕)	ハケ	乳黄茶色 灰黄色	石、長（1～7） ◎	黒斑	
119	壺	底径 5.3 残高 10.4	底部。胴下半部はわずかにふくらみをもつ。平底。	ハケ（マメツ）	ナデ	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎		
120	壺	底径（6.1） 残高 16.4	肩部は張る。大きい平底。	ハケ	マメツ	黒褐色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎		
121	鉢	口径(32.0) 残高 6.4	稜をもって折れ曲がる口縁部。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)マメツ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	茶褐色 淡黄茶色	石、長（1～2） ◎		
122	鉢	口径（9.6） 器高 12.4 底径 3.8	長胴で、全体にふくらみをもつ。ゆるやかに外反する口縁部。平底。	ナデ	ナデ	淡黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） ◎		23
123	鉢	口径 11.3 器高 15.4 底径（3.8）	長胴。直口口縁。平底。	ナデ	ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎		23
124	鉢	口径(15.5) 器高 6.2 底径（1.3）	直口口縁。小さく突する平底。	(口端)ハケ→ナデ (胴)ハケ	(胴上)ハケ (胴下)ナデ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～3） 金 ◎		23
125	鉢	口径（6.8） 器高 3.7 底径 1.4	ミニチュア。あいまいな底部。内湾してたちあがる直口口縁。	(口端)ハケ→ナデ (胴)ハケ	ハケ（1部ナデ）	乳黄茶色 乳灰黄色	石、長（1～3） ◎		23
126	高坏	口径(26.2) 残高 5.7	坏部。稜をもって外反する長い口縁部。	ナデ	ナデ	灰茶褐色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
127	高坏	残高 10.7	坏底部～柱部。	ナデ	(坏底)ナデ (脚)ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
128	高坏	残高 12.9	柱部。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
129	高坏	底径(21.4) 残高 3.8	裾部。大きく開く長い裾部。円孔（φ0.9cm）。	ハケ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
130	支脚	残高 11.5	柱部。円柱状で長い。	マメツ		黄褐色	石、長（1～3） ◎		
131	支脚	底径（9.3） 残高 3.8	ゆるやかに開く短い裾部。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰茶色	石、長（1～3） ◎		

SB6 出土遺物観察表（石製品）

(3)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
132	砥石	約2/3？		14.3	7.3	7.3	1360.6	砥面2	
133	石庖丁	完形	結晶片岩	9.1	4.7	0.6	45.0		23

表20　SB7 出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
134	甕	口径(16.4) 残高 3.2	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳黄色 淡茶褐色	砂粒 ◎		
135	甕	口径(15.5) 残高 2.5	稜をもって外反する口縁部。	マメツ	ハケ	黄茶色 乳茶褐色	石、長（1～2） ◎		
136	甕	口径(15.9) 残高 2.0	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
137	甕	残高 7.0	肩部が張る胴部。	タタキ→ハケ	ハケ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～5） ◎		
138	甕	残高 3.4	肩部が張る胴部。	タタキ→ハケ	ハケ	黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～4） ◎		
139	甕	残高 4.5	肩部が張る。器壁が薄い。	ハケ	ナデ	黒灰色 乳茶色	石、長（1～5） ○	黒斑	
140	甕	底径 5.1 残高 2.7	底部。たちあがりをもつ上げ底。	ナデ	マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～4） ○		
141	甕	底径 4.0 残高 1.9	底部。平底。	ナデ	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石、長（1～4） ◎		
142	甕	底径 (4.3) 残高 2.5	底部。平底。	ハケ	ナデ	淡茶褐色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
143	甕	底径 (5.3) 残高 2.9	底部。平底。	タタキ→ハケ	ナデ	淡茶褐色 灰色	石、長（1～3） ◎		
144	甕	底径 3.4 残高 2.1	底部。平底。	ハケ	ナデ	淡黄色 淡灰色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	
145	甕	底径 3.0 残高 2.2	底部。あいまいな平底	ハケ→ナデ	ナデ	灰黄色 乳灰色	砂粒 ◎	黒斑	
146	壺	残高 2.4	複合口縁壺。口縁部は欠損。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～4） ○		
147	壺	口径(11.4) 残高 2.1	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～2） ◎		
148	壺	口径(17.6) 残高 5.5	直立する頸部に、外反する口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
149	壺	口径(15.1) 残高 4.7	外反する口頸部。	口ハケ→ヨコナデ 頸ハケ	ハケ→ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～2） ◎		
150	壺	口径(16.4) 残高 1.2	口縁部小片。外反口縁。	ヨコナデ	ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ◎		

SB7出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	壺	残高 6.4	長い頸部をもつ。頸部下端に刻目突帯文。	マメツ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
152	壺	残高 2.9	頸部下端に刻目突帯文。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
153	壺	底径 (5.0) 残高 2.6	底部。やや厚い平底。	マメツ	マメツ	乳黄色 灰色	石、長（1～6） 金 ◎		
154	鉢	口径(13.4) 器高 4.2	直口口縁。底部はあいまいな丸底。	タタキ(マメツ)	ハケ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
155	鉢	口径(12.6) 器高 4.6	直口口縁。底部はあいまいな平底。	ナデ	ハケ	乳黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） ◎		
156	高坏	残高 3.6	坏部。稜をもって外反する口縁部。	ミガキ	ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～3） ◎		
157	高坏	残高 0.8	口縁部小片。口縁端部はわずかに下方に拡張。	ハケ→ミガキ	ヨコナデ	茶褐色 淡茶色	密 ◎		
158	支脚	底径(11.8) 残高 6.6	ゆるやかに開く裾部。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長、安(1～5) ◎		

表21　SB8出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
159	甕	口径(18.7) 残高 5.7	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	ハケ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） 金 ◎		
160	甕	口径(21.6) 残高 2.9	稜をもって外反する口縁部。	マメツ	ハケ	乳白色 乳白色	砂粒 ◎		
161	甕	口径(15.3) 残高 4.2	稜をもって外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	乳黄色 乳灰黄色	石、長（1～2） 金 ◎		
162	甕	口径(15.8) 残高 4.5	稜をもって強く外反する口縁部。	ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） 金 ◎		
163	甕	口径(16.3) 残高 3.2	稜をもって強く外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～2） ◎		
164	甕	口径(15.9) 残高 2.8	稜をもって強く外反する口縁部。	ハケ	㊐ハケ→ナデ ㊥ハケ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
165	甕	口径(16.6) 残高 5.8	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥タタキ→ハケ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
166	甕	口径(16.3) 残高 6.2	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ(1部ナデ) ㊥タタキ→ハケ	㊐ハケ→ナデ ㊥ハケ→ナデ	乳黄褐色 灰黄茶色	石、長（1～2） ◎		
167	甕	口径(14.7) 残高 6.0	稜をもって外反する短い口縁部。	タタキ→ハケ	マメツ	乳茶色 乳茶色	密、金 ◎		
168	甕	口径(13.2) 残高 6.1	稜をもって外反する短い口縁部。	㊐ナデ ㊥タタキ→ハケ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～5） 金 ◎		

SB8出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
169	甕	口径(15.4) 残高 3.3	稜をもって外反する短い口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥タタキ	ハケ	暗黄茶色 暗黄茶色	石、長（1～3） ◎		
170	甕	口径(12.2) 残高 5.9	稜をもって外反する口縁部。	マツメ	ハケ	黄灰色 灰茶色	石、長（1～2） ◎		
171	甕	底径 (3.9) 残高 7.0	底部。厚く平底。	ハケ	ナデ	乳灰黄色 暗灰色	石、長（1～3） ◎		
172	甕	底径 (3.6) 残高 5.5	底部。胴下半にふくらみをもつ。平底。	ハケ	ナデ	黄茶色 灰色	石、長（1～3） ◎		
173	甕	底径 1.8 残高 5.3	底部。小さい平底。	ハケ	ハケ	乳灰黄色 乳黄茶色	石、長（1～2） ◎		
174	甕	底径 (3.0) 残高 3.2	底部。小さい平底。	ハケ	ハケ→ナデ	黒色 黄灰色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
175	甕	底径 (2.8) 残高 3.9	底部。やや厚い平底。	ハケ	ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～4） ◎		
176	甕	底径 (5.2) 残高 5.3	底部。厚い平底。	タタキ	ハケ	淡茶色 黒灰色	石、長（1～2） ◎		
177	甕	底径 (3.0) 残高 6.4	底部。胴下半部にふくらみをもつ。たちあがりのあるあいまいな平底。	工具痕	ハケ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～3） ◎		
178	甕	底径 (5.7) 残高 3.3	底部。平底。	タタキ	ハケ→ナデ	灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～4） ◎		
179	甕	底径 (3.0) 残高 3.2	底部。あいまいな平底。	タタキ→ハケ	ハケ	乳黄色 黒灰色	石、長（1～4） 金 ◎		
180	甕	底径 2.1 残高 6.8	胴下半部にふくらみをもつ。あいまいな平底。小型品。	㊥上ハケ ㊥下タタキ	ハケ	茶褐色 黒灰色	石、長（1～4） 金 ◎		
181	甕	底径 (3.8) 残高 11.3	胴下半部にふくらみをもつ。あいまいな平底。	タタキ	ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
182	壺	残高 3.2	複合口縁壺。口縁部にクシ描沈線文2条以上、クシ描波状文4条。	ナデ→施文	マメツ	灰褐色 灰褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
183	壺	口径(12.0) 残高 4.5	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐マメツ ㊦ハケ	㊐ヨコナデ ㊦ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～4） ◎		
184	壺	口径(12.5) 残高 6.0	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
185	壺	口径(15.9) 残高 4.2	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～4） ◎		
186	壺	口径(11.6) 残高 3.7	複合口縁壺。口縁部小片。口縁部は無文。	マメツ	㊐端ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～3） ◎		
187	壺	口径(15.4) 残高 4.9	内湾してたちあがる口縁部。	ハケ	㊐ハケ ㊥ハケ→ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
188	壺	口径(23.8) 残高 3.0	外反する口縁部。	㊐端ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		

SB8 出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
189	壺	残高 5.3	頸部下端に刻目突帯文。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～4） ◎		
190	壺	残高 8.8	大きく長い口頸部。頸部下端に羽状文状の刻目突帯文。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳黄褐色	石、長（1～6） ○		
191	壺	底径 1.3 残高 22.4	肩部の張る球形の胴部。底部はわずか突出してあいまいなもの。	胴上タタキ→ハケ 胴下ケズリ	胴上ハケ→ナデ 胴下ケズリ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） ◎		
192	壺	底径（7.1） 残高 7.5	底部。たちあがりをもつ厚い平底。	ハケ	マメツ	淡茶色 灰色	石、長、安(1～5) ◎		
193	壺	底径 5.9 残高 7.6	底部。厚い平底。	タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～2） ◎		
194	壺	底径 6.5 残高 10.6	底部。厚い平底。	ハケ→ミガキ	ハケ	乳灰色 乳灰色	石、長、安(1～2) ◎		
195	壺	底径（8.0） 残高 5.2	底部。平底。	ハケ→ミガキ	ハケ	暗灰色 乳茶褐色	石、長（1～4） ◎		
196	壺	底径（3.6） 残高 5.1	底部。平底。	ハケ	ハケ（1部ナデ）	淡黄色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
197	壺	底径 3.5 残高 2.9	底部。厚い平底。	マメツ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～4） ◎		
198	壺	底径 4.2 残高 4.4	底部。厚い平底。	ハケ	マメツ	乳黄茶色 乳茶色	石、長（1～4） ◎		
199	壺	底径 4.1 残高 3.5	底部。たちあがりをもつ平底。	ナデ	ナデ	灰茶褐色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
200	鉢	口径(29.2) 残高 3.0	稜をもって折れ曲がる口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ（マメツ）	暗茶色 黄灰色	砂粒 金 ◎		
201	鉢	口径(14.6) 残高 2.5	ゆるやかに外反する口縁部。	ナデ	ハケ	乳茶色 乳茶褐色	砂粒 ◎		
202	鉢	口径 11.2 器高 6.9 底径 1.6	口縁部を欠く。直口口縁。くぼみぎみの平底。	ハケ→ナデ	ハケ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
203	鉢	口径 20.5 器高 10.3 底径 2.1	口縁部を一部欠く。直口口縁。底部は突出し、あいまいな平底。	ハケ（マメツ）	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～6） ◎		
204	鉢	底径 2.8 残高 1.3	底部。平底で中央部がくぼむ。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石、長（1～3） ◎		
205	鉢	底径 2.3 残高 1.9	底部。小さい平底。	ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	砂粒 ◎		
206	鉢	底径 0.6 残高 1.9	底部。突出するあいまいな底部。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
207	器台	口径(24.4) 底径 1.5	口縁端部は垂下する。口縁端面に羽状文。	ナデ→施文	マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長、安（1～3） ◎		
208	器台	口径(24.2) 底径 1.2	口縁端部はわずかに垂下する。	口端ナデ 口ハケ	マメツ	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎		

SB8 出土遺物観察表（土製品）

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
209	支脚	受部径 (6.5) 器高 13.7 底径 (9.1)	柱部は円筒形、口縁部はわずかに外反し、端部に刻目。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） ◎		
210	支脚	受部径 6.0 器高 14.6 底径 (7.0)	柱部は円筒形、口縁部はわずかに外反し、端部に刻目。	ナデ	ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	石、長（1～4） ◎		
211	支脚	残高 7.9	柱部は円筒形、口縁部大きく開く。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石、長（1～5） 金 ◎		
212	支脚	底径(10.2) 残高 6.1	裾部。ゆるやかに開く。	ナデ	(柱)ナデ (裾)ハケ→ナデ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
213	支脚	残高 6.7	柱～裾部。	ナデ	ナデ（1部ハケ）	灰黄色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
214	支脚	残長 6.5	受部に突起部をもつもので、突起部片である。	ナデ		茶褐色	石、長（1～3） ◎		
215	支脚	残長 7.0	受部に突起部をもつもので、扁平な突起部片である。	ナデ		暗褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
216	支脚	残長 5.0	受部に突起部をもつもので、扁平な突起部片である。	ナデ		淡茶褐色	砂粒 ◎		
217	壺	残高 7.0	胴上半部に粘土接合の段をもつ。	ミガキ(マメツ)	マメツ	乳灰色 乳黄褐色	石、長（1～2） ◎		

表22　SB11 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
218	鉢	口径 (8.4) 器高 12.0 底径 1.7	長胴、直口口縁、小さい平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～2） ◎		
219	壺	底径 (7.6) 残高 1.7	底部。平底。	マメツ	マメツ	淡灰色 乳褐色	石、長（1～2） ◎		
220	器台	口径(21.4) 残高 1.4	口縁部小片。口縁端部に竹管文2段。	ミガキ	ミガキ	黄茶色 乳黄色	砂粒、金 ◎		
221	器台	口径(20.9) 残高 1.5	口縁部小片。口縁端部は面をなす。	(口端)ナデ (口)ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	乳黄色 黄茶色	砂粒 ◎		

表23　SK5 出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
222	壺	残高 1.9	複合口縁壺。口縁部は欠損。	マメツ	ハケ	淡褐色 淡茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
223	壺	口径(20.0) 残高 3.8	大きく開く長い口縁部。口縁端部は垂下し、端面はクシ描波状文。	(口)ナデ→施文 (頸)ハケ→ナデ	マメツ	茶褐色 乳黄褐色	石、長（1～4） ◎		
224	壺	底径 2.3 残高 12.5	細長頸壺。扁平球の胴部に、小さく突出する平底。	ミガキ(マメツ)	(胴上)ヨコナデ (胴下)ハケ	黄褐色 乳灰色	砂粒 ◎		

SK5出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
225	鉢	口径(32.6) 底径 4.7	外反する口縁部。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～5） ◎		
226	鉢	口径 10.8 器高 8.1 底径 4.6	直口口縁。くびれの上げ底。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～5） ◎		
227	鉢	口径(10.0) 器高 5.5 底径 3.1	直口口縁。平底。	マメツ	ハケ（マメツ）	黄茶色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
228	器台	口径(24.5) 残高 3.2	大きく開く長い口縁部。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
229	器台	口径(28.9) 残高 1.3	口縁部片。口縁端部は上下に拡張。	ナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
230	器台	底径(31.8) 残高 9.8	柱部～裾部。柱部に円孔をもつ（φ1.4cm）。	マメツ	ナデ（1部ハケ）	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
231	壺	残高 3.0	肩部片。沈線文と斜線充塡の三角文。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳灰色	石、長（1～3） ○		

表24　SK7出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
232	甕	口径(21.0) 残高 19.3	肩部が張る。ゆるやかに外反する口縁部。	口ハケ→ヨコナデ 胴タタキ→ハケ	口マメツ 胴ハケ	灰黄茶色 灰黄色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
233	甕	口径(16.6) 残高 10.2	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	口ハケ→ヨコナデ 胴タタキ	口ナデ 胴ハケ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～2） ◎		
234	甕	口径(15.4) 残高 7.7	稜をもって外反する口縁部。	口ナデ 胴タタキ→ハケ	口ハケ 胴ハケ（マメツ）	淡黄褐色 乳黄色	石、長（1～2） ◎		
235	甕	底径 4.0 残高 4.2	底部。厚い底部。	ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
236	甕	底径 2.2 残高 3.4	底部。厚く小さい底部。	マメツ	ナデ	褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎		
237	壺	口径 16.6 残高 6.6	複合口縁壺。口縁部は無文。	口ヨコナデ 頸ハケ	マメツ（1部ハケ）	茶褐色 乳黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
238	壺	口径(21.5) 残高 5.1	複合口縁壺。口縁部は無文。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色 淡灰黄色	石、長（1～5） ◎		
239	壺	残高 7.5	頸部下端に押圧による斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	ナデ	黄茶褐色 乳灰黄色	石、長（1～3） ◎		
240	高坏	口径(24.1) 残高 4.3	坏部。稜をもって外反する長い口縁部。	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ	乳黄色 灰黄色	砂粒 ◎		
241	高坏	残高 10.7	脚部。柱部は太くて短い。裾部に円孔（φ1.1cm）。	坏ミガキ 脚ハケ→ミガキ	坏ミガキ 脚ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
242	高坏	残高 7.0	脚部。裾部に円孔4ケ（φ0.8cm）。	ハケ→ミガキ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		

SK7 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
243	高坏	残　高　6.8	脚部。裾部に円孔（φ0.6cm）。	ミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
244	高坏	残　高　5.3	脚部。柱部に円孔4ケ（φ0.9cm）。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
245	鉢	口　径(12.8) 器　高　6.2	直口口縁。あいまいな平底。	ハケ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
246	支脚	残　高　7.1	柱部は円筒形。受部は平坦面となる。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
247	支脚	受部径　6.0 器　高 14.0 底　径　9.3	柱部は円筒形。口縁部は短く外反し端部に刻目。	タタキ	(柱上)ナデ (裾)ハケ	灰黄茶色 乳茶色	砂粒 ◎		
248	支脚	底　径(11.0) 残　高 11.0	受部の突起が2ヶ欠損。	タタキ	ナデ(シボリ痕)	黄茶色 灰黄色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
249	支脚	底　径 11.7 残　高 12.3	受部の突起が2ヶ欠損。 受部にやや大きい貫通孔。	タタキ	ナデ(シボリ痕)	乳黄茶色 黒茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	

表25　SK10 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
250	甕	口　径(17.3) 残　高　8.3	稜をもって外反する口縁部。	(口)タタキ (胴)タタキ→ハケ	(口)ナデ (胴)ハケ	暗灰褐色 暗灰褐色	石、長（1～3） ◎		
251	甕	口　径(17.7) 残　高　3.6	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～3） ◎		
252	甕	口　径(19.4) 残　高　2.0	外反する口縁部。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 灰茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
253	甕	口　径(16.6) 残　高　2.1	外反する口縁部。小片。	ハケ→ヨコナデ	マメツ	淡黄褐色 灰黄色	石、長（1～4） 金 ○		
254	甕	底　径（2.3） 残　高 14.0	胴下半部は、わずかにふくらみをもつ。厚い平底。	ハケ	ハケ→ナデ	淡黄色 淡黄色	石、長（1～6） ◎		
255	壺	残　高　2.0	頸部小片。刻目突帯文。	マメツ	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～2） ◎		
256	壺	口　径(22.5) 残　高　1.7	外反する口縁部。口縁端は上下に拡張、端面にクシ描波状文4条。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～2） ◎		
257	壺	底　径　3.8 残　高　1.3	底部。平底。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳灰色	石、長（1～2） ◎		
258	壺	底　径　4.0 残　高　2.0	底部。厚い平底。	マメツ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～2） ◎		
259	高坏	底　径(20.2) 残　高　4.4	裾部が二段からなる高坏。 下段裾部に線刻。	マメツ	ハケ→ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎		24

表26　SK11出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
260	甕	口　径(19.7) 残　高　2.9	口縁部小片。ゆるやかに外反する口縁部。端部に刻目。	マメツ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎		
261	甕	口　径(24.8) 残　高　2.9	口縁部小片。ゆるやかに外反する口縁部。端部に刻目。	ナデ	マメツ	灰茶色 乳黄茶色	石、長、安(1~2) ◎		
262	甕	口　径(22.3) 残　高　9.9	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はマメツし刻目の有無は判断しがたい。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長、安(1~3) ◎		
263	甕	口　径(17.5) 残　高　7.5	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	茶色 茶色	石、長（1~3） ◎		
264	甕	口　径(17.4) 残　高 11.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はマメツし刻目の有無は判断しがたい。	マメツ	マメツ	淡茶褐色 灰黄褐色	砂粒 ○	黒斑	
265	甕	口　径 13.8 残　高　6.4	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	灰黄色 黄茶色	石、長、安(1~3) ◎		
266	甕	口　径 20.2 器　高 29.1 底　径　8.9	復元完成品。ゆるやかに外反する口縁部は端部に刻目。胴中位に段、口縁下に沈線文をもつ。平底。	ミガキ(マメツ)	㊀ミガキ ㊁マメツ	乳褐色 乳褐色	砂粒 ◎	黒斑	24
267	甕	残　高　3.2	胴部小片。胴中位に段をもつ。	マメツ	マメツ	灰茶色 乳黄茶色	石、長（1~2） ◎		
268	甕	底　径　6.1 残　高　3.3	底部。たちあがりをもつ上げ底。	マメツ	マメツ	暗黄褐色 灰茶色	石、安（1~3） ◎		
269	甕	底　径（7.8） 残　高　3.4	底部。上げ底。	マメツ	ハケ	乳黄褐色 乳黄茶色	石、長、安(1~3) ◎		
270	甕	底　径(8.45) 残　高　2.4	底部。平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 乳茶褐色	石、長、安(1~3) ○		
271	甕	底　径（6.0） 残　高　2.4	底部。平底。	マメツ	マメツ	暗褐色 黄茶色	石、長（1~3） ◎		
272	壺	残　高　2.9	口縁部小片。口縁部のなかほどで外反する。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
273	壺	口　径(19.5) 残　高　2.9	口縁部小片。口頸部境に段をもつ。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長、安(1~3) ◎		
274	壺	口　径(12.4) 残　高　2.7	口縁部小片。口頸部境に段をもつ。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1~2） ◎		
275	壺	口　径(15.4) 残　高　8.0	口頸部境に段をもつ。内傾する長い頸部。	マメツ	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石、長（1~2） 金 ◎		
276	壺	口　径(19.7) 残　高　3.9	ゆるやかに外反する口縁部。	ナデ	ミガキ	乳黄茶色 暗灰色	砂粒、金 ◎		
277	壺	口　径(20.9) 残　高　2.2	外反する口縁部。小片。	マメツ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1~4） ◎		
278	壺	残　高　5.4	頸部片。肩部に2条の沈線をもつ。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石、長（1~4） 金 ◎		
279	壺	残　高　4.0	頸部小片。頸胴部境に段をもつ。	ミガキ	ミガキ	黄茶色 黄茶色	石、長（1~2） ◎		

SK11 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
280	壺	残 高 3.0	肩部小片。頸胴部境に段をもつ。	マメツ	マメツ	黄茶色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
281	壺	底 径 9.0 残 高 4.3	底部。たちあがりをもつ大きな平底。	ミガキ	ナデ(1部マメツ)	乳黄茶色 乳灰色	石、長（1～2） ◎		
282	壺	底 径(10.4) 残 高 4.7	底部。大きな平底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	黄褐色 灰色	石、長（1～3） ○		
283	壺	底 径（9.6） 残 高 3.0	底部。たちあがりをもつやや凹む底部。	ミガキ	マメツ	黒灰色 黒灰色	石、長、安(1～5) ◎	黒斑	
284	壺	底 径 7.8 残 高 5.3	底部。たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 灰黄色	石、長、安(1～3) ◎		
285	壺	底 径(11.5) 残 高 2.8	底部小片。たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石、長、安(1～3) ◎		
286	壺	底 径（8.7） 残 高 4.5	底部。平底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	灰黄色 灰黄色	砂粒、金 ◎		
287	壺	底 径 7.3 残 高 5.3	底部。たちあがりをもつ大きな平底。	マメツ	ミガキ	乳白色 灰色	石、長（1～3） ◎		
288	壺	底 径（7.8） 残 高 2.2	底部小片。たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	砂粒 ◎		
289	壺	底 径（7.4） 残 高 2.0	底部。たちあがりをもつ平底。	マメツ	ナデ	淡茶色 灰色	石、長、安(1～2) ◎		
290	壺	底 径（7.2） 残 高 2.3	底部。たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） ◎		
291	壺	底 径（9.0） 残 高 1.6	底部小片。たちあがりをもつ平底。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄茶色	密 ◎		
292	壺	底 径（6.0） 残 高 3.2	底部。平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 乳褐色	石、長、安(1～3) ◎		
293	鉢	口 径(28.5) 残 高 7.4	上外方にたちあがる口縁部。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） ◎		
294	鉢	口 径 23.8 残 高 10.2	内湾してたちあがる直口口縁。	ミガキ	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長、安(1～2) ◎		24
295	鉢	口 径(18.1) 残 高 4.7	内湾してたちあがる直口口縁。小片。	ミガキ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
296	鉢	口 径 7.7 器 高 4.3 底 径 5.5	小型品。直口口縁。大きい平底。	ナデ	ナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～2） ◎		
297	蓋	底 径(20.1) 残 高 3.1	ゆるやかに開く端部。	マメツ	マメツ	橙茶色 乳茶色	石、長、安(1～3) ◎		
299	甕	口 径(25.7) 残 高 6.5	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	安（1～2） ○		
300	壺	残 高 4.4	頸部小片。口頸部に段をもち、上段を刻む。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～2） 金 ○		24

SK11 出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
301	壺	残 高 9.0	肩部で屈折する。沈線1条＋刻目＋沈線2条を上下に1組。3条の孤文。	マメツ	マメツ	褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎		24
302	壺	残 高 5.5	肩部小片。3条沈線による木葉文。	マメツ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～2） ◎		24
303	壺	残 高 4.9	肩部小片。2条沈線下に短い斜線。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石、安（1～2） ◎		24
304	鉢	口 径 14.3 器 高 12.6 底 径 6.7	直口口縁。わずかに凹む大きな底部。	ミガキ	ミガキ	黄灰色 灰色	石、長（1～3） ◎		

SK11 出土遺物観察表（石製品）

(4)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
298	用途不明	完形	不明	16.5	5.6	3.7	450.0		
305	叩き石	完形	不明	7.5	10.3	5.7	625.0		

表27　墓出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
306	壺棺	残 高 33.0	口～頸部上半と胴下半部を打ち欠く。頸胴部境にあいまいな段。	ミガキ(マメツ)	マメツ	茶褐色 乳黄色	石、長（1～4） ◎	1号棺 棺蓋	
307	壺棺	口 径 30.0 器 高 58.4 底 径 12.5	復元完形品。円板状の底部。肩部は強く張り、内傾する長い頸部。短く外反する口縁部。	胴上ミガキ 胴下ハケ→ミガキ	口ミガキ 胴マメツ	乳黄褐色 乳黄色	石、長（1～3） ○	1号棺 棺身	25
308	壺棺	底 径 13.5 残 高 53.0	口～頸部上半を欠く。頸胴部境に段をもつ。底部はたちあがりをもち大きい平底。	ミガキ	マメツ	乳黄褐色 乳白色	石、長（1～3） ◎	2号棺 棺身	25
309	壺棺	底 径 11.5 残 高 36.2	口～頸部上半を欠く。頸胴部境に段をもつ。底部はたちあがりをもち、わずかに凹む。	胴上マメツ 胴中ミガキ 胴下マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） ○	3号棺	26

表28　SD1 出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
310	提瓶	残 高 18.9	扁平な胴部。	ヘラケズリ	胴上回転ナデ 胴中ナデ 胴下回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	
311	甕	口 径(12.0) 器 高 21.4 底 径 2.9	長胴で、ややふくらみをもつ。稜をもって外反する口縁部。底部は平底。	口ナデ 胴上タタキ→ハケ 胴下ハケ	口ハケ 胴ケズリ	暗茶褐色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	26
312	甕	底 径 3.5 残 高 3.4	底部。たちあがりをもつ平底。	タタキ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
313	壺	口 径(15.6) 残 高 7.0	複合口縁壺。口縁部は無文。	口マメツ 頸ハケ	口ナデ 頸マメツ	茶褐色 淡褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
314	高坏	残 高 4.5	坏部。稜をもって外反する口縁部。	マメツ	ミガキ(マメツ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～3） ○		
315	高坏	残 高 12.6	柱部。円筒形の柱部に、ゆるやかに開く裾部。	ハケ→ナデ	坏底ナデ 脚シボリ痕	灰黄色 灰色	密、金 ◎		

SD1出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
316	器台	残 高 15.0	柱部。円孔を2段もつ（φ2.2cm）。	マメツ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～3） ○		
317	壺	残 高 4.5	口頸部小片。口頸部境に段。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	砂粒 ◎		

SD1出土遺物観察表（石製品）

(3)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
318	磨製石器		結晶片岩	5.2	3.1	0.7	20.0		

SD1出土遺物観察表（装身具）

(4)

番号	器種	残存	材質	色	法量 外径(cm)	法量 内径(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
319	耳環	完形		青緑色	2.8	1.8	0.5	7.4		26

表29　SD2関連出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
320	坏蓋	口 径(14.1) 器 高 4.3	天井部から丸味をもって口縁部にいたる。口縁端部は丸い。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	㊦ナデ ㊤回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎	SD2	
321	甕	口 径(14.6) 器 高 19.1 底 径 (4.5)	胴部にわずかのふくらみをもつ。平底。あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊤ヨコナデ ㊥ハケ	㊤ハケ→ナデ ㊥ハケ→ナデ	乳灰黄色 乳灰茶色	石、長（1～2） ◎	黒斑 SD2下部	26
322	鉢	口 径(20.1) 器 高 7.3	直口口縁。丸みをもつ尖底。	㊤ヨコナデ ㊥ハケ	ハケ	乳黄茶色 乳灰茶色	砂粒 ◎	黒斑 SD2下部	
323	壺	底 径 4.0 残 高 2.5	底部。たちあがりをもつ平底。	マメツ	ハケ	淡灰色 灰黄色	石、長（1～3） ◎	黒斑 SD2下部	

表30　SD3出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
324	甕	底 径 (2.2) 残 高 3.6	底部。あいまいな平底。	タタキ	ケズリ	黒褐色 黒褐色	砂粒 ◎		
325	壺	口 径(15.8) 残 高 2.7	複合口縁壺。口縁部は無文。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳茶色 乳茶色	砂粒 金 ◎		
326	壺	底 径 4.6 残 高 4.8	底部。やや厚い平底。	マメツ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
327	器種不明	口 径(23.0) 残 高 5.0	大きく開く口縁部をもつ。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	安（1～4） ◎		

表31　SD5出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
328	器台	口径 31.7 器高 41.2 底径 24.1	脚部には5方向に7段の長方形スカシ。ただし下3段の3方向には三角形スカシが施される。	坏平行叩き 脚回転ナデ	坏円弧叩き 脚回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		27
329	甕	口径(45.5) 残高 23.0	大型甕。口縁部外面には2条1組の凹線の間に波状文が施される。	口回転ナデ 体平行叩き	口回転ナデ 体円弧叩き	灰色 乳灰色	密 ◎		
330	甕	底径 (5.1) 残高 3.8	底部。薄く、やや突出する平底。	マメツ	ケズリ	淡褐色 淡褐色	石、長 (1~2) ◎		
331	壺	底径 (8.1) 残高 2.3	底部小片。平底。	マメツ	マメツ	茶褐色 灰褐色	石、長 (1~2) ◎		
332	壺	底径 (7.7) 残高 5.7	底部。厚い平底。	マメツ	マメツ	灰褐色 淡褐色	石、長、安(1~3) ◎		
333	高坏	口径 23.4 残高 10.4	坏部完存。坏中位に稜をもつ。口縁部は直立した後外傾して開く。器壁が厚い。	口ヨコナデ 坏底ナデ	口ヨコナデ 坏底ナデ	灰黄褐色 灰褐色	石、長 (1~5) ◎	黒斑	27

表32　SD4出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
334	坏	口径(14.8) 残高 2.9	直立ぎみにたちあがる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
335	坏	底径(12.7) 残高 1.3	輪高台。高台は底端部よりかなり内側に「ハ」の字形に付く。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○		
336	坏	底径 7.2 残高 2.4	底部。円板高台。外面中央部がやや凹む。	体マメツ 底回転糸切り	ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
337	蓋	つまみ径 (3.3) つまみ高 1.0 残高 4.7	有蓋高坏の蓋。天井部と口縁部の境に2条の沈線。	天回転カキ目 口回転ナデ	天ナデ 口回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
338	高坏	残高 4.3	脚部。長方形スカシを三方向にもつ。	回転カキ目→ 回転ナデ	シボリ痕	灰色 灰色	密 ○		
339	壺	底径 (7.2) 残高 2.1	台付長頸壺の底部。高台内端面がやや凹む。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎	一部に自然釉	
340	不明	底径(24.2) 残高 1.6	脚端面はわずかに凹み、内側はわずかに肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
341	甕	口径(16.8) 残高 4.2	口縁端部外面には沈線状の凹み、内面には稜線をもつ。	回転カキ目	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
342	甕	口径(18.4) 残高 5.0	口縁端部内面に稜線をもつ。	回転カキ目	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
343	鉢	底径(22.4) 残高 4.0	短く外反する口縁部。口縁端部は上方に拡張。香川県十瓶窯系。	ナデ(1部ハケ)	口ヨコナデ 胴ナデ	灰黄色 乳灰黄色	砂粒 ◎	外来系	27
344	坏	口径 (7.5) 残高 2.0	輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長 (1~2) ◎		

SD4 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
345	坏	底径 6.1 残高 2.3	底部。円盤高台。	胴回転ナデ 底回転ヘラ切り	回転ナデ	淡茶色 淡茶色	密・シャモット ◎		
346	坏	底径 (9.0) 残高 1.8	底部。厚い底部。	胴回転ナデ 底回転ヘラ切り	回転ナデ	淡茶色 乳茶色	密・金 ◎		
347	坏	底径 (8.6) 残高 2.1	底部。内傾してたちあがる高台をもつ。	ナデ	マメツ	黄茶色 黄茶色	密・金 ◎		

表33　グリッド・地点不明 遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
348	甕	口径(25.5) 残高 6.5	外反する短い口縁部。	口ヨコナデ 胴マメツ	マメツ	暗灰色 灰黄色	安（1～3） ◎		
349	甕	口径(31.0) 残高 5.2	外反する短い口縁部。胴上半部に段をもつ。	マメツ	口ヨコナデ 胴マメツ	乳黄色 淡灰色	石、長、安(1～3) ◎		
350	甕	底径 7.7 残高 18.3	胴中位に段をもつ。大きい平底。	胴上マメツ 胴下ミガキ	ナデ	黄灰色 黄灰色	砂粒 ◎	黒斑 X9Y16	27
351	甕	口径 14.8 器高 20.3 底径 3.8	胴上半に張りをもつ。稜をもって外反する口縁部。平底。	口タタキ→ナデ 胴上タタキ 胴下タタキ→ハケ	口ハケ→ナデ 胴ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎	黒斑 X9Y9	27
352	甕	底径 3.5 残高 15.5	胴下半部にわずかな張りをもつ。たちあがりのある上げ底。	ハケ	ハケ	淡黄褐色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
353	甕	底径 4.4 残高 25.0	長球形の胴部。底部は丸みをもったあいまいな平底。	胴上タタキ→ハケ 胴下ハケ	マメツ(1部ハケ)	灰黄色 黄褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
354	甕	底径 3.7 残高 17.5	胴下半部にわずかな張りをもつ。平底。	胴中タタキ 胴下タタキ→ハケ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～5） ◎		
355	壺	口径(21.6) 残高 4.3	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文5条。	口ヨコナデ 頸ハケ	口ヨコナデ 頸ハケ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
356	壺	残高 5.4	複合口縁壺。口縁部欠損。半截竹管文。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石、長（1～3） ◎		
357	壺	口径(23.3) 残高 4.8	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文3条。	マメツ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
358	壺	口径(12.4) 残高 5.1	複合口縁壺。口縁部は無文。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
359	壺	口径(12.7) 残高 3.4	複合口縁壺。口縁部は無文。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
360	壺	口径 17.1 残高 3.0	複合口縁壺。口縁部に沈線2条、クシ描波状文4条。端部に沈線2条。	マメツ	ナデ	黄褐色 黒灰色	石、長（1～5） ◎	X3Y5	
361	壺	残高 8.7	頸部下端に斜格子目の刻目突帯文。	マメツ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		

グリッド・地点不明遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
362	壺	口径 16.2 残高 12.4	大きく開く長い口頸部。口縁部内面には線刻。	㊐ハケ ㊗ミガキ	㊐マメツ ㊗ハケ(1部ナデ)	茶褐色 乳黄灰色	石、長（1～2） 金 ◎	X6Y14	28
363	壺	口径 6.0 器高 9.5 底径 3.2	小型品。短く外反する口縁部。平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～5） ◎	X2Y5	
364	壺	残高 6.8	細長頸壺。扁平球の胴部。底部欠損。	マメツ	マメツ	茶褐色 灰色	石、長（1～4） 金 ◎	X3Y2	
365	壺	底径 5.1 残高 19.0	肩部に張りをもつ。平底。	ハケ	ナデ	淡褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
366	鉢	口径(45.0) 残高 4.7	稜をもって外反する口縁部。頸部に押圧による斜格子目の刻目突帯文。	㊐ハケ→ナデ	ナデ	乳茶褐色 淡橙褐色	石、長（1～3） ◎		
367	鉢	口径(29.7) 残高 5.7	ゆるやかに外反する口縁部。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～3） ◎	X1Y15	
368	鉢	口径(18.4) 器高 9.2 底径 3.8	ゆるやかに外反する口縁部。厚い平底。	㊐ヨコナデ ㊗マメツ	㊐ヨコナデ ㊗ハケ→ナデ	乳灰黄色 黄茶褐色	石、長（1～5） ◎		
369	鉢	口径(12.8) 器高 8.5 底径 3.0	直口口縁。たちあがりをもつ小さい上げ底。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎	X2Y3	
370	鉢	口径(13.0) 残高 6.6	直口口縁。底部は欠損。	ミガキ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
371	鉢	口径(10.5) 残高 7.0	直口口縁。	マメツ	ハケ→ナデ	淡黄茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） ◎		
372	鉢	底径 4.2 残高 6.8	口縁部欠損。大きい平底。	マメツ	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石、安（1～3） ◎		
373	高坏	口径(25.2) 残高 4.8	坏部。稜をもって大きく外反する長い口縁部。	㊐マメツ ㊔ミガキ	㊐ヨコナデ ㊔マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
374	高坏	残高 8.9	柱部。円孔4ケ（φ1.4cm）。	ミガキ	シボリ痕	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎	X10Y10	
375	高坏	残高 9.1	柱部。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～5） ○		
376	高坏	口径(23.8) 残高 1.9	口縁部。大きく開く口縁部は端面に小円形浮文をもつ。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石、長（1～4） 金 ◎	X3Y3	
377	高坏	残高 2.6	裾部。裾部が二段となる高坏。下段の裾部に円孔。	マメツ	マメツ	褐色 灰褐色	石、長（1～3） ◎	X3Y3	
378	高坏	残高 2.8	裾部小片。裾部が二段となる高坏。上下段に円孔。	マメツ	ハケ→ナデ	黄茶色 灰黄茶色	密、金 ◎		
379	器台	残高 1.2	口縁部小片。口縁端部を上下に拡張し、半截竹管文を施す。上端部は欠損。	ナデ		茶褐色	密、金 ◎		
380	器台	残高 1.6	口縁部小片。口縁端部は垂下し斜線充填の三角文を施す。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎	X7Y7	

グリッド・地点不明 遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
381	器台	底径(18.6) 残高 2.6	裾部片。端部は面をなし、竹管文を2段施す。	ミガキ	ナデ	乳茶褐色 明褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
382	支脚	残高 10.6	柱部。円筒状の柱部に、外反する口縁部をもつ。	タタキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	砂粒 ◎		
383	支脚	底径 8.2 残高 11.8	柱部。円筒状の柱部に、ゆるやかに開く裾部をもつ。	ナデ	ナデ(シボリ痕)	乳灰黄色 乳灰黄色	石、長（1～3） 金 ◎		
384	支脚	底径 7.2 残高 3.4	裾部。「ハ」に字状に開く裾部。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～3） ◎	X3Y9	
385	ﾐﾆﾁｭｱ	口径 6.8 器高 3.8 底径 0.4	鉢のミニチュア。尖底。直口口縁。	ナデ	ナデ	乳黄色 淡灰色	砂粒 ◎	X4Y4	
386	土玉	直径 2.0	小型品。洋ナシ状の形態。上部に貫通孔。	ナデ		褐色	石、長（1～2） ◎		28
387	土玉	直径 1.9	小型品。丸玉。中央に貫通孔。	ナデ		褐色	石、長（1～2） ◎		28
388	甕	口径(19.0) 残高 3.3	内湾してたちあがる口縁部。	ナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	密、金 ◎		
389	高坏	口径(12.4) 器高 9.8 底径 (9.7)	坏部は段をもつ。脚部は、柱部が三角錐、裾部は大きく開く。	マメツ	(坏)マメツ (脚)ケズリ (裾)ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	密、金 ◎		
390	高坏	残高 7.2	脚部。三角錐の柱裾部。大きく開く裾部。	ナデ	(脚)ケズリ (裾)ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
391	埴輪	残高 5.3	扁平で、四角形となるタガ。	マメツ	マメツ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～2） ◎		
392	埴輪	残高 4.8	小片。円孔部を看取。	ハケ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） ◎	X1Y10	
393	坏蓋	口径(14.4) 残高 3.8	天井部は丸みがある。口縁端部は先細りぎみ。	(天)回転ヘラ削り (口)回転ナデ	ナデ	淡白茶色 淡灰茶色	密 ○		
394	坏蓋	口径(12.2) 残高 2.3	口縁端部は丸く仕上げる。	マメツ	マメツ	淡茶灰色 淡茶灰色	密 ○	X10Y12	
395	坏身	口径(12.3) 残高 4.6	口縁部は内傾し、端部は丸い。受部は上外方へのびる。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ削り	回転ナデ	淡茶灰色 淡灰色	密 ◎	X6Y5	
396	坏身	残高 3.3	口縁部・底部は欠損。受部はほぼ水平にのびる。	(体)回転ナデ (底)回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
397	坏身	口径(12.8) 残高 2.7	口縁部は短く内傾し、受部はやや上外方へひねり出される。器壁が薄い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
398	坏身	口径(12.4) 残高 2.4	口縁部は短く内傾し、たちあがる。体部は浅い。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎	X4Y8	
399	坏身	口径(12.2) 残高 2.0	口縁部は短く内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰茶色 乳灰色	密 ○	X4Y8	

グリッド・地点不明 遺物観察表（土製品）

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
400	坏	口径(10.6) 残高 3.0	口縁部は外反してたちあがる。体部から底部にかけて内湾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	X13Y12	
401	坏	口径(12.8) 残高 4.0	端部付近でわずかに外反する口縁部。器壁が薄い。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
402	坏	底径(12.8) 残高 1.6	輪高台。底部から体部にかけて内湾する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
403	坏	底径 (8.0) 残高 1.3	円板高台。底部内面中央部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
404	坏	底径 (7.5) 残高 2.1	底部。円板高台。	回転ナデ	回転ナデ	淡茶灰色 淡茶灰色	密 ○		
405	高坏	口径(15.3) 残高 3.0	無蓋高坏の坏部。口縁部下位に凹線状の凹みが1条ある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	X6Y5	
406	蓋	口径(11.3) 残高 3.2	短頸壺の蓋。天井部から口縁部にかけて丸みをもつ。	㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	X14Y7	
407	長頸壺	残高 3.3	肩部。2条の凹線の間に羽状文が施される。	マメツ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	X4Y6	
408	横瓶	口径 8.6 残高 9.2	口頸部は外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉 X6Y3	
409	甕	口径(19.2) 残高 5.2	口縁部下に1条の凸線が巡る。	回転カキ目	不明	暗灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
410	甕	口径(22.6) 残高 3.6	口縁端部を珠玉状におさめる。	回転カキ目	マメツ	淡青灰色 淡灰色	密 ◎	X9Y15	
411	鍋	口径(19.4) 残高 4.0	内湾ぎみにたちあがる口縁部。外面に太い線状の凹みをもつ。	ヨコナデ	マメツ	灰黄色 淡茶色	石、長（1～4） ○	X12Y3	
412	坏	口径 11.7 器高 2.7 底径 7.3	厚い平底。	ナデ	ナデ	茶褐色 乳白色	密 ◎		
413	坏	口径(11.7) 器高 3.3 底径 6.9	厚い平底。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
414	坏	底径 7.2 残高 2.8	円板充塡の高台。	㊐回転ナデ ㊦ヘラ切り （すのこ痕）	回転ナデ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
415	坏	底径 (8.2) 残高 2.4	輪高台。	ナデ	ナデ	乳黄白色 乳黄茶色	密 ◎	X2Y10	
416	椀	底径 5.9 残高 1.6	輪高台。内黒椀。	マメツ	ミガキ	乳灰黄色 黒灰色	密、金 ◎	内黒	

グリッド・地点不明 遺物観察表　石製品

(5)

番号	器　種	残　存	材　質	法量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
417	石庖丁	約1/4	結晶片岩	2.3	4.5	0.5	11.0		28
418	石庖丁	完形	結晶片岩	8.8	4.0	0.9	65.0	打製 X7Y5	28
419	石庖丁	完形	結晶片岩	6.3	2.9	0.6	20.0	製品か？ X10Y9	28
420	石器素材		結晶片岩	11.4	7.7	1.7	276.0		29
421	石器素材	約1/2	結晶片岩	8.2	4.1	0.9	60.6		29
422	石器素材	完形	結晶片岩	14.4	5.5	2.5	440.0	X2Y5	29
423	用途不明	約1/2	結晶片岩	12.3	3.6	1.4	100.0		29
424	用途不明		結晶片岩	7.3	3.3	1.2	45.0		29
425	磨き石	約1/4	不明	5.2	4.9	1.4	40.0		29
426	用途不明	約1/2	不明	4.1	4.9	4.5	107.0	X7Y4	29
427	土掘具？	ほぼ完形	不明	5.0	12.8	1.6	155.0	未製品	29
428	砥石	約3/4	不明	23.7	7.5	4.2	1255.0	砥面4	29
429	砥石	完形	不明	18.8	8.8	7.1	2150.0	砥面7 X3Y6	29
430	砥石	約2/3	不明	12.2	7.1	6.2	975.0	砥面3 X3Y6	29
431	砥石	約1/2	石英粗面岩？	8.4	6.1	5.1	450.0	砥面2　X2Y11 鉄錆付着	29
432	砥石	約1/2	石英粗面岩？	9.2	4.8	4.4	206.0	砥面5 鉄器用か？	29
433	砥石	約3/4	石英粗面岩？	9.7	4.3	2.9	180.0	砥面4	29
434	砥石	ほぼ完形	白色凝灰岩？	8.8	2.3	1.1	50.0	砥面2	29

第４章

越智遺跡

第4章　越　智　遺　跡

1．調査の経過

（1）調査に至る経緯

昭和51年７月、松山市越智町223－１において店舗の建築工事中に土器が出土した。工事関係者は、土器の出土に関して松山市教育委員会に届け出を行った。届け出をうけた教育委員会は、文化財担当者を現地に派遣し、遺跡の遺存を確認した後、遺構・遺物が検出された部分に対し、発掘調査を実施することにした。調査は、７月15日～７月30日までの間に実施した。

なお、本調査に関係する資料は、記録写真と出土物とが保存されているが、測量図の所在が明確ではない。よって、報告書の作成に際しては、現存する記録と森　光晴氏の助言により作業を進めている。

（2）調査組織

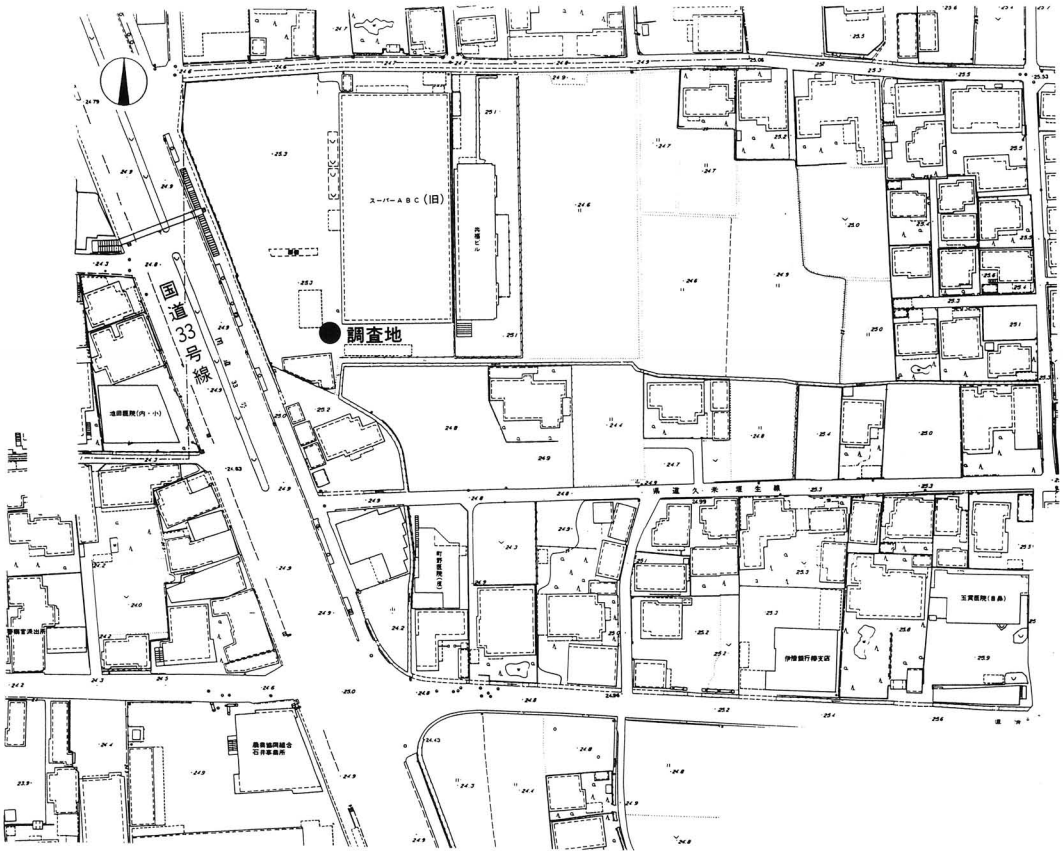
調 査 地　松山市越智町223－１

遺 跡 名　越智遺跡

調査期間　1976（昭和51）年７月15日～同年７月30日

調査面積　100m²

調査担当　森　光晴（当時、文化財指導員）



第53図　調査地位置図（Ｓ=1：2,000）

2．遺構と遺物

調査地は、その経緯よりすでに工事が行われており、土器出土地点を中心に限られた範囲の調査にとどまった。検出遺構は土坑１基で、出土遺物はコンテナ（44×60×15㎝）１～２箱分となる。

（1）遺　構

ＳＫ１（図版30）

地表下約20～30㎝で検出し、平面形態は長方形を呈する。規模は長辺が約1.2m、短辺は0.8～1.0m、深さ約20㎝となる。方位は長軸が概ね北西－南東方向にある。土坑内からは、弥生土器が東壁に沿って出土している。

出土遺物（第54図、図版30）

１～８は壺形土器である。１～６は複合口縁壺で、１～３は一・二次口縁の接合部が面をなし、４～６は稜をもつ。１は大きく開く一次口縁部に、内傾する長い二次口縁部がつく。頸部下端には、斜格子目の刻目凸帯をもつ。２は大型品で、内傾する直線的な頸部に、短く開く一次口縁部をもつ。口頸部境に明瞭な稜をもつ。平野の複合口縁壺の形状にないものである。･3は二次口縁部にクシ描波状文をもつ。７・８は上外方に長くのびる口頸部をもつものである。９・10は鉢形土器で、９は内面に、稜をもって外反する口縁部に、ボタン状の突出する底部をもつ。10は小型品で、内湾してたちあがる直口口縁をもつ。11～19は底部片である。11～14はあいまいなたちあがりをもち、平底となるものである。15～17は平底、18・19は小さく突出する底部となる。

時期：出土遺物は、弥生時代後期後葉～終末（古い様相）の特徴をもっている。出土状況より、これ等の遺物は、土坑の時期を決める資料といえ、よってＳＫ１は弥生時代後期後葉～終末（古い様相）に時期を比定する。

（2）遺　物（第55図、図版30）

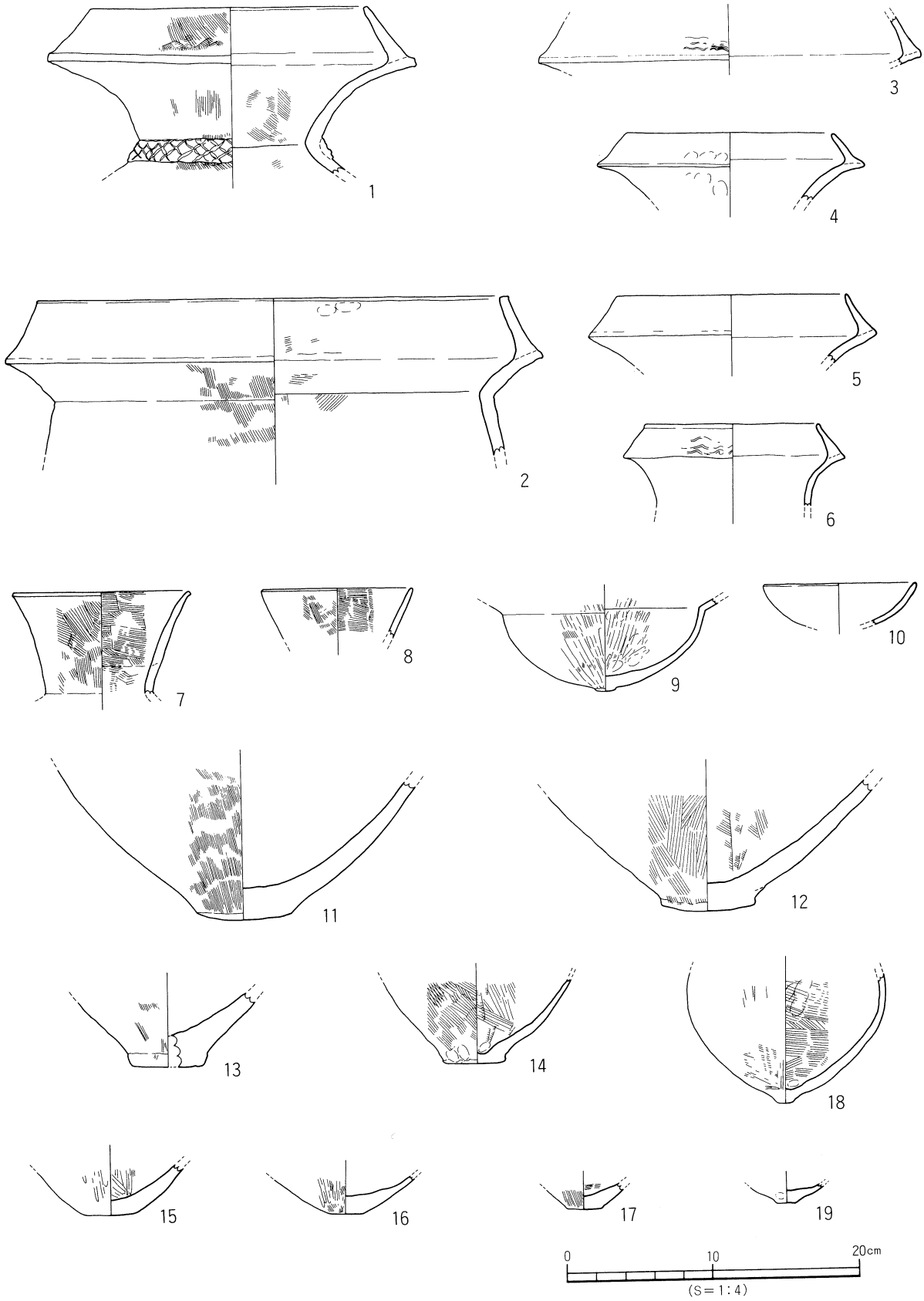
出土地点が明確でない土器のうち、時期が判明する資料を取り上げる。

20～23は弥生土器である。20～22は甕形土器で、20は長く外反する口縁部をもち、21は短く上方にたちあがる口縁部をもつものである。22は胴下半部～底部が遺存するもので、長胴でややふくらみをもつ胴下半部となる。23は複合口縁壺の一・二次口縁の接合部である。接合部は大きくタガ状にはりだし、幅広ろの凹み面をもつ。20～23の弥生土器は弥生時代後期後葉から終末に属する。24は須恵器の壺の頸部片である。クシ描波状文がかすかに看取される。６世紀。25は備前すり鉢の底部片である。単体の８条のスリ目をもつ。15～16世紀。26は土師器の釜で、口縁直下に断面三角形の隆帯をもつ。15世紀。27は三足付きの土釜である。底部は平底となる。15～16世紀。

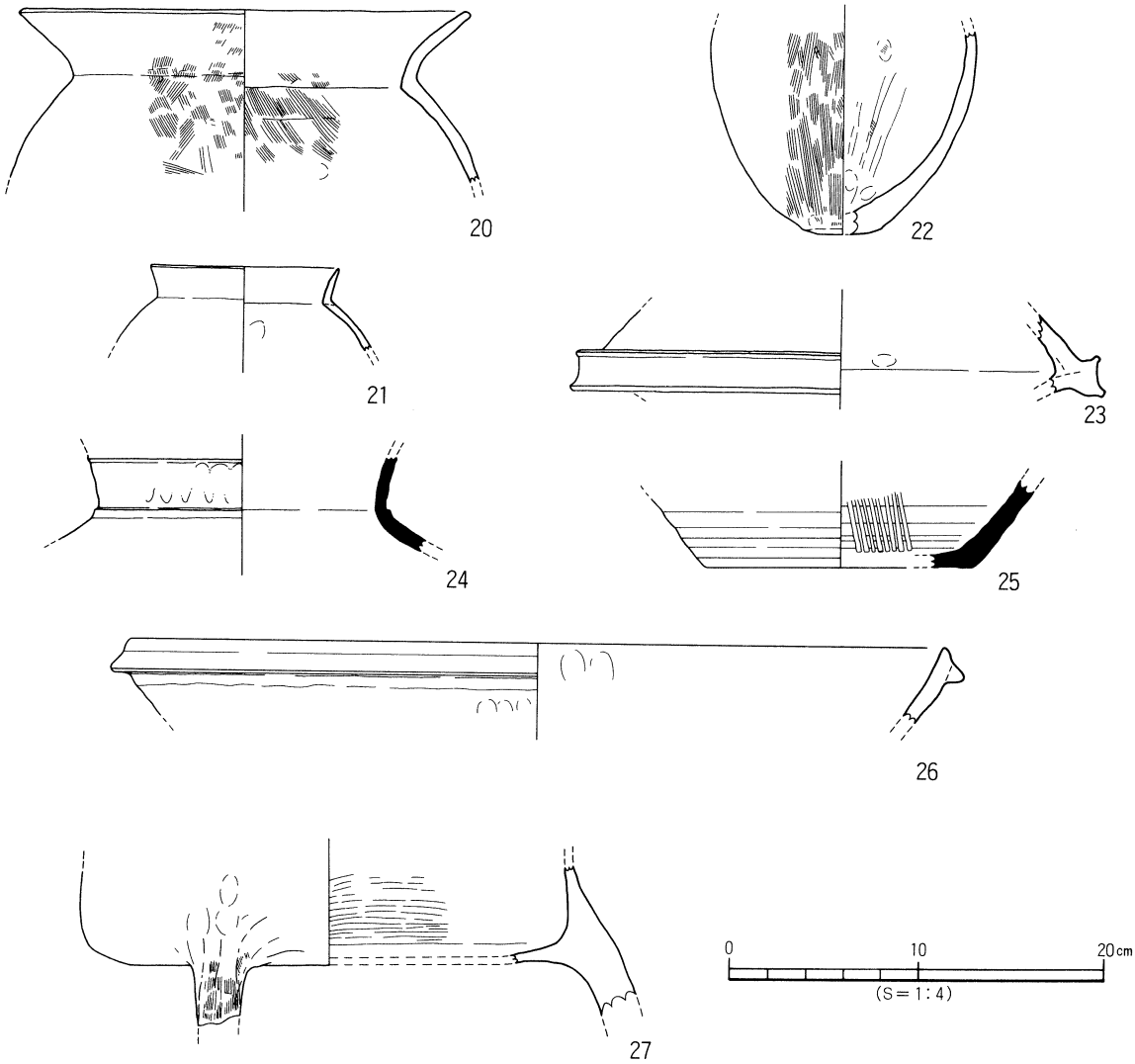
3．小　結

本調査では、弥生時代後期後葉～終末に比定される土坑１基を検出し、弥生土器・須恵器等の遺物を得ることになった。

土坑ＳＫ１は、長方形で、面積が１～２㎡となり、松山平野の弥生時代後期の土坑としては一般的なものである。出土物は、第54図２の壺形土器が平野の壺形土器とは異なる形状をとるが、それ以外



第54図　SK１出土遺物実測図



第55図　地点不明遺物実測図

の土器は当該期の在地の形態をもつものである。第54図２は、頸部が直線的に内傾している点で、香川県の同時期の壺形土器に形状を求めることはできるが、口縁部を含めた全体形は香川県にはない。よって、影響下にある土器としてとらえておく。

ＳＫ１以外の土器では、第55図23が注目される。23は複合口縁壺であるが、一・二次口縁の接合部に特徴をもつ。類例は松山大学構内遺跡３次調査ＳＲ２で２点出土しているが（宮内慎一 1995）、平野での類例は少ない。

また、中世15～16世紀の遺物が数点出土している。隣接地に当該期の集落が存在したことを示す資料として貴重である。

以上、越智町223－１で実施した調査についてその報告を行った。越智町内では、石井東小学校構内遺跡（本書第３章）以外には、遺跡調査の実施はなく、遺跡の実態は明らかでない。よって本資料は、稀少資料として重要であり、周辺地における遺跡調査の基礎資料の一つになるものである。

〔文献〕

宮内慎一　1995　『松山大学構内遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

表34　SK1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径 17.8 残高 1.3	口縁部は無文。頸部下端に木口押圧の刻目突帯文。	㊐ハケ ㊝ハケ	㊐マメツ ㊝ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ○		30
2	壺	口径(30.4) 残高 10.7	口縁部は無文。内傾する頸部に、稜をもって外反する口縁部。	㊐ナデ ㊝ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色 淡褐色	石、長（1～4） ◎		30
3	壺	残高 3.4	複合口縁壺。口縁部には5条のクシ描波状文。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		
4	壺	口径(14.2) 残高 4.6	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～3） ◎		
5	壺	口径(15.6) 残高 4.8	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石、長（1～7） ○		
6	壺	口径(11.8) 残高 5.7	口縁部には3条以上のクシ描波状文。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石、長（1～4） ◎		
7	壺	口径(11.8) 残高 7.0	上外方にのびる長い口頸部。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	砂粒 ◎		
8	壺	口径(10.4) 残高 3.5	直線的にたちあがる口頸部。	ハケ	ハケ	乳黄色 黄茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
9	鉢	底径 1.5 残高 6.3	稜をもって外反する口縁部。小さく突出する平底。	ハケ→ミガキ	ミガキ	淡茶色 茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
10	鉢	口径(10.2) 残高 2.8	内湾してたちあがる直口口縁。	マメツ	マメツ	乳茶色 淡茶色	密、金 ◎		
11	壺	底径 6.6 残高 10.5	あいまいなたちあがりをもつ大きい平底。	ハケ	マメツ	茶褐色 淡茶色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
12	壺	底径 (6.4) 残高 8.8	直立ぎみにたちあがる大きい平底。	ハケ	ハケ	淡黄茶色 淡灰黄色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
13	壺	底径 (4.8) 残高 5.0	外傾してたちあがる厚い平底。	ハケ（マメツ）	マメツ	乳褐色 灰黄色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
14	壺	底径 4.2 残高 5.7	外傾してたちあがる平底。胴下半部の器壁は薄い。	ハケ	ハケ	茶褐色 淡黄茶色	砂粒 金 ◎		
15	壺	底径 3.4 残高 3.4	平底。	ミガキ(マメツ)	工具痕	淡黄茶色 乳茶色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	
16	壺	底径 2.2 残高 2.6	やや小さい厚みのある平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	乳茶褐色 乳灰色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
17	壺	底径 2.2 残高 1.8	小さい平底。	ハケ	ハケ	茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		
18	壺	底径 1.1 残高 8.9	ふくらみをもつ胴部。小さく突出する小さい平底。	ハケ	ハケ	淡灰黄色 淡灰黄色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
19	壺	底径 1.4 残高 1.3	小さく突出する小さい平底。	マメツ	マメツ	乳灰黄色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎		

表35　地点不明 遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	口　径(23.2) 残　高　9.2	稜をもって外反する長い口縁部。	ハケ	㊐マメツ ㊟ハケ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～2） ◎		
21	甕	口　径（9.6） 残　高　4.2	稜をもって外反する短い口縁部。	マメツ	マメツ	淡茶色 乳灰色	石、長（1～3） ◎		
22	甕	底　径　4.2 残　高 11.0	胴下半部にわずかなふくらみをもつ。平底。	ハケ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎	黒斑	
23	壺	残　高　4.4	複合口縁壺。接合部を大きく拡張し、幅広ろのナデ凹みをもつ。	マメツ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		30
24	壺	残　高　5.1	頸部には多条の波状文をもつ。	マメツ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
25	擂鉢	底　径(14.1) 残　高　4.7	タテ方向に8条の条線。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	砂粒 ◎		30
26	釜	口　径(43.0) 残　高　4.0	口縁部の直下に断面三角形の隆帯。	ナデ	マメツ	濃茶色 淡茶色	石、長（1～3） ◎	煤	30
27	土釜	底　径(25.2) 残　高　8.1	底部に接して脚部を貼り付ける。底部は平底。	ナデ	ハケ→ナデ	灰黄茶色 乳灰黄色	石、長（1～2） 金 ◎	煤	

第５章

石井幼稚園遺跡

― ２次調査地 ―

第５章　石井幼稚園遺跡２次調査地

１．調査の経過

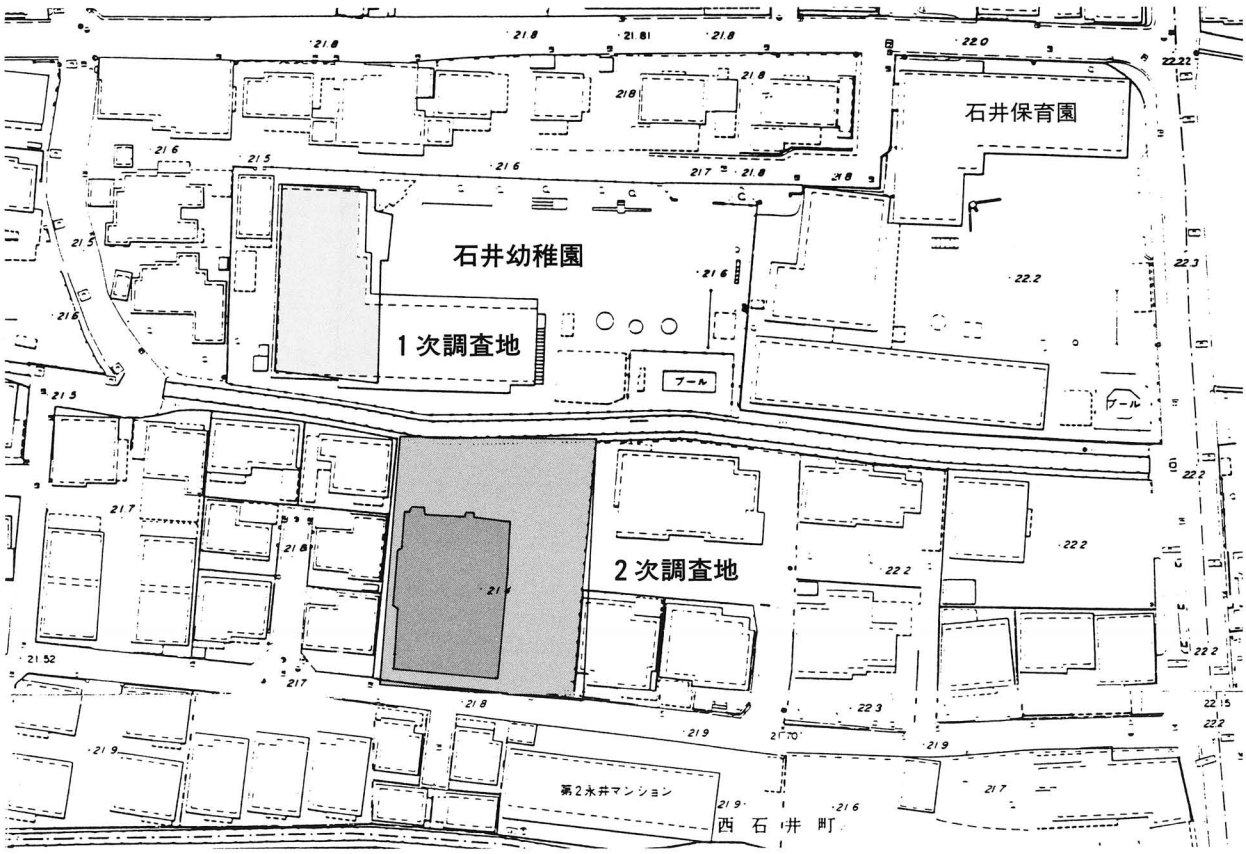
（１）調査に至る経過（第56図）

1995（平成７）年１月、松山市教育委員会学校教育課より、松山市西石井町４－１地内における運動場建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「119　西石井遺物包含地」内に含まれる。同包含地内には、古墳時代の竪穴式住居址や10世紀代の溝を検出した石井幼稚園遺跡（栗田茂敏 1994）がある。よって、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1995（平成７）年２月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査は、調査区の数ヶ所にトレンチを掘り、土層及び遺構・遺物の検出を行った。その結果、竪穴状遺構１基、溝状遺構１条、土坑状遺構２基、柱穴５基を検出し、弥生土器と土師器を含む遺物包含層をも確認した。

この結果を受け、文化教育課と松山市の二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、運動場建設によって失われる遺構と遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、古墳時代集落の範囲確認と、１次調査地で検出した中世の溝の範囲を明らかにすることを主目的とし、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、松山市教育委員会学校教育課の協力のもと1995（平成７）年４月24日に開始した。

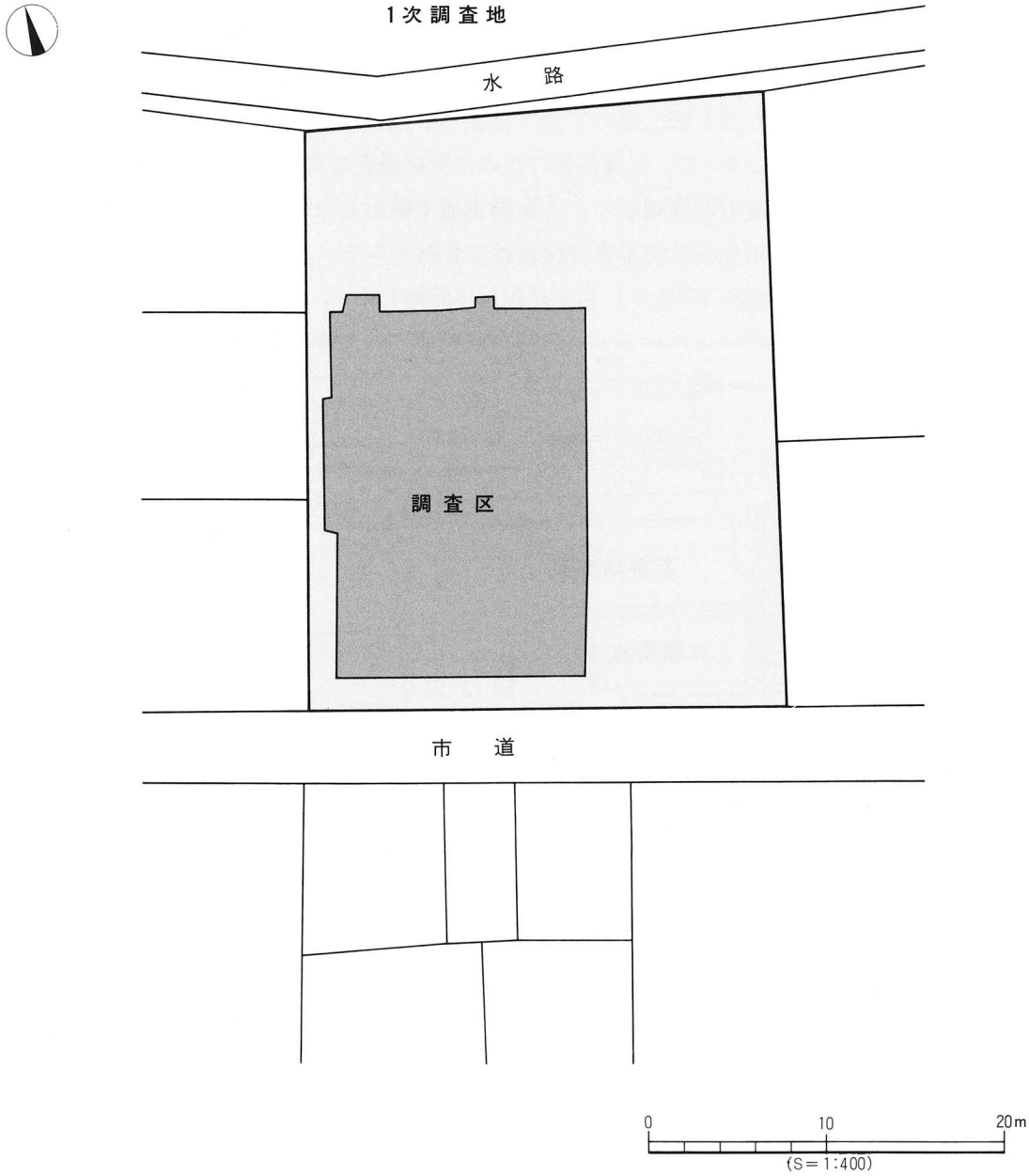


第56図　調査地位置図（縮尺１／1,000）

（2）経　過

調査地は調査以前は水田であり、調査面積は884㎡である。排土置場の都合上、最終的な発掘調査面積は約300㎡余りとなった。以下、調査工程を略記する。

1995（平成７）年４月24日より重機による表土剝ぎ取り作業を開始した。表土剝ぎは、調査日程の都合上、試掘調査の結果をもとに地表下20～25cmまで掘り下げを行い、排土は調査地外へ搬出した。調査地は試掘調査の後、一度埋め戻されているため、それら撹乱土の除去を含め表土剝ぎ取り作業に３日間を費やした。５月８日より作業員を増員し本格的な調査を実施する。引き続き包含層の掘り下げを行う。遺構検出を５月17日に終了し、その後、竪穴式住居址・掘立柱建物址・土坑・柱穴・土器溜りの掘り下げを開始する。６月27日、現地説明会を行う。６月30日、遺構の測量をすべて完了する。７月３・４日、道具を撤去して野外調査を終了する。７月５日～８月31日、松山市埋蔵文化財センターにて測量図や出土物の整理作業を行う。



第57図　調査地位置図

（3）調査組織

遺 跡 名　石井幼稚園遺跡２次調査地
調 査 地　松山市西石井町４－１
調査期間　1995（平成７）年４月24日～同年８月31日
調査面積　884m²
調査委託　松山市教育委員会学校教育課
調査担当　梅木 謙一・水本 完児

２．層　位（第58・59図）

本遺跡は、松山平野中央部に広がる重信川の氾濫原上、標高21ｍに立地する。基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土＋水田床土）、第Ⅱ層黒褐色シルト、第Ⅲ層黄褐色シルト、第Ⅳ層黒色シルト、第Ⅴ層茶褐色砂層、第Ⅵ層灰色砂礫層である。

第Ⅰ層は水田耕作に伴う客土で、地表下20～26cmの厚さを測る。調査区全域にある。

第Ⅱ層は黒褐色シルトで５～10cmの堆積であり、６～７ｃ代の土師器・須恵器を包含する。調査地南西部で検出された。

第Ⅲ層は黄褐色のシルト層で、粘性の違いで２層に分層される。

第Ⅲ①層は20～25cmの堆積であり、弥生時代の遺物を包含する。

第Ⅲ②層は、東壁・南壁沿いに設定したトレンチにより確認した土層で、第Ⅲ②層は第Ⅲ①層よりやや粘性が強く、10cmの堆積である。

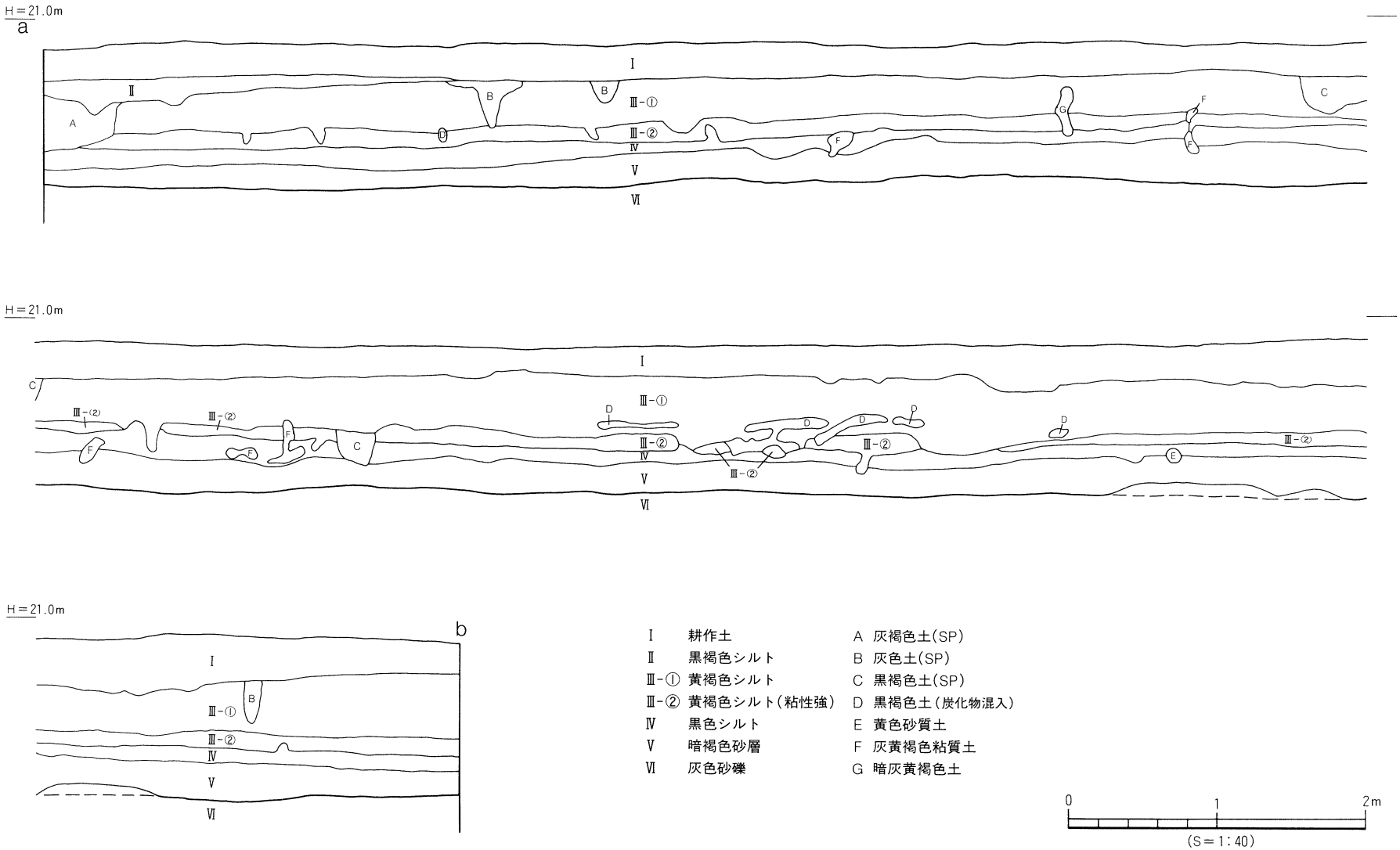
第Ⅳ層は黒色シルトで10cm程の堆積であり、遺物は出土していない。

第Ⅴ層は茶褐色砂層で２～15cmの堆積である。

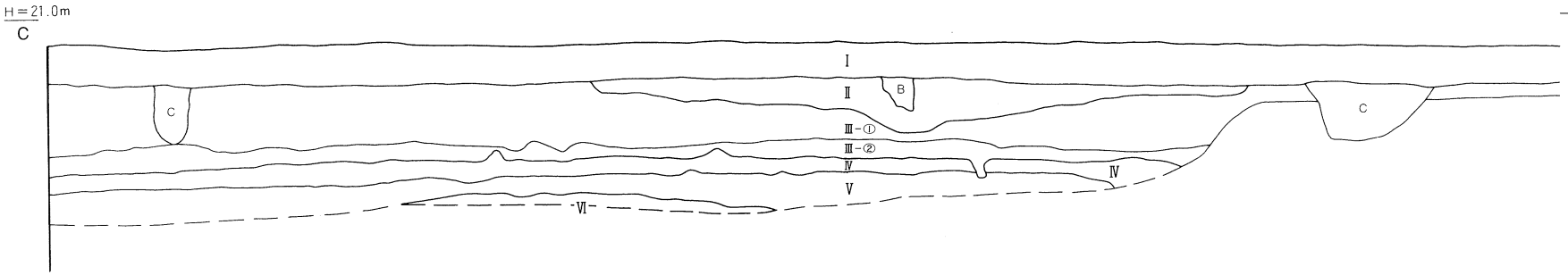
第Ⅵ層は灰色砂礫層で３～５cm程度の小礫を含む。

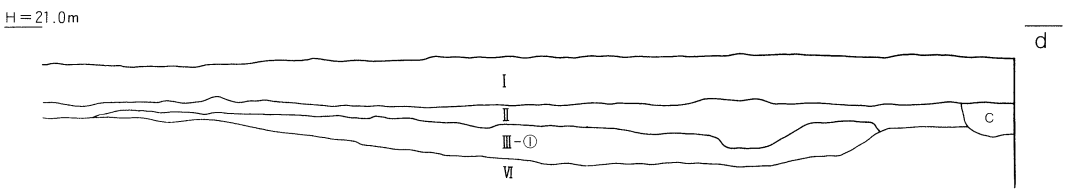
遺構は、第Ⅲ①層上面と第Ⅲ②層上面での検出である。第Ⅲ①層上面では竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址３棟、土坑５基、土器溜り２基、柱穴81基を検出した。また、第Ⅲ②層上面では柱穴１基を検出した。第Ⅲ①層上面の標高を測量すると調査区北側から南側へ、東側から西側へ暫時緩傾斜をなすが、さらに調査区中央から北東側にかけても暫時緩傾斜をなしている。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、北から南へ１・２・３・・・６とし、第60図に示すようにＡ１・Ａ２・Ａ３・・・Ｄ６といったグリット名を付けた。


H＝21.0m
a
I
II
III-①
III-②
IV
V
VI
A
B
C
D
E
F
G
H＝21.0m
b
I
III-①
III-②
IV
V
VI
B
I　耕作土
II　黒褐色シルト
III-①　黄褐色シルト
III-②　黄褐色シルト（粘性強）
IV　黒色シルト
V　暗褐色砂層
VI　灰色砂礫
A　灰褐色土(SP)
B　灰色土(SP)
C　黒褐色土(SP)
D　黒褐色土（炭化物混入）
E　黄色砂質土
F　灰黄褐色粘質土
G　暗灰黄褐色土
0
1
2m
(S＝1：40)

第58図　東壁土層図





I　耕作土
II　黒褐色シルト
III-①　黄褐色シルト
III-②　黄褐色シルト（粘性強）
IV　黒色シルト
V　暗褐色砂層
VI　灰色砂礫

A　灰褐色土(SP)
B　灰色土(SP)
C　黒褐色土(SP)

0　1　2m
(S＝1：40)

第59図　南壁土層図

３．遺構と遺物

本調査では、弥生時代～中世の遺構と遺物を確認した。遺構は、竪穴式住居址（ＳＢ）１棟、掘立柱建物址（掘立）３棟、土坑（ＳＫ）５基、土器溜り（ＳＸ）２基、柱穴（ＳＰ）81基を検出している（第60図）。

（１）弥生時代（第60・71図）

弥生時代の遺構は、土坑（ＳＫ２～４）３基と土器溜り（ＳＸ１・２）２基を検出した。また、柱穴とした小さい掘り方からも弥生土器を出土したものがあり、ここでは良好な資料３基（ＳＰ113～115）を取り上げた。

１）土坑…土坑３基は、第Ⅲ①層上面で検出した。

ＳＫ２（第61図、図版32）

調査区北西部Ａ１区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸１.８ｍ、短軸１.２ｍ、深さ10～22㎝を測り、断面形態はⅢ状を呈する。埋土は２層あり、上層が灰黄褐色土で、下層は灰黄褐色土に黒色土と少しの黄色粘土が混じるものである。遺物には、弥生土器の完形の甕が大・小各１点横たわって出土したほか、線刻を施した壺２点が出土している。出土状況などから貯蔵穴の可能性も考えられる。

出土遺物（第61図１～８、図版35）

１～３は甕形土器である。１は接合すると完形品になったものである。肩部に張りをもつ胴部に、薄い平底がつく。口縁端部はやや広い面をもつ。２は小型品で、一部を欠くが完形品にちかい遺存となる。肩部が張り、口縁部は「く」の字状、底部は凹み底となる。３は底部片で、平底を呈す。４～８は壺形土器である。４は肩部片で、線刻を施している。５～８は底部片で、８には胴部下半に線刻が施されている。

時期：出土した遺物から弥生時代後期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ３（第60図、図版33）

調査区北東Ｄ２区に位置し、第Ⅲ①層上面で遺構を検出した。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸88㎝、短軸68㎝を測り、断面形態は逆台形状である。埋土は褐色土と灰色の細砂からなるもので、黒褐色粘土、黄褐色粘土、灰色土、褐色土（砂含む）のブロックが混じる。遺物は埋土中から弥生土器の壺形土器の胴部が１点出土したが、胴部の上半分は削平され欠損している。

時期：出土した遺物から弥生時代後期と考えられる。

ＳＫ４（第62図、図版33）

調査区北Ｃ１区に位置し、北壁土層の観察からは第Ⅲ①層上面から掘り込まれている。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸62㎝、短軸48㎝、深さ17～19㎝を測り、断面形態は逆台形状である。埋土は淡黄褐色土で砂を多く含む。遺物は埋土中から高坏形土器の脚部が１点出土した。

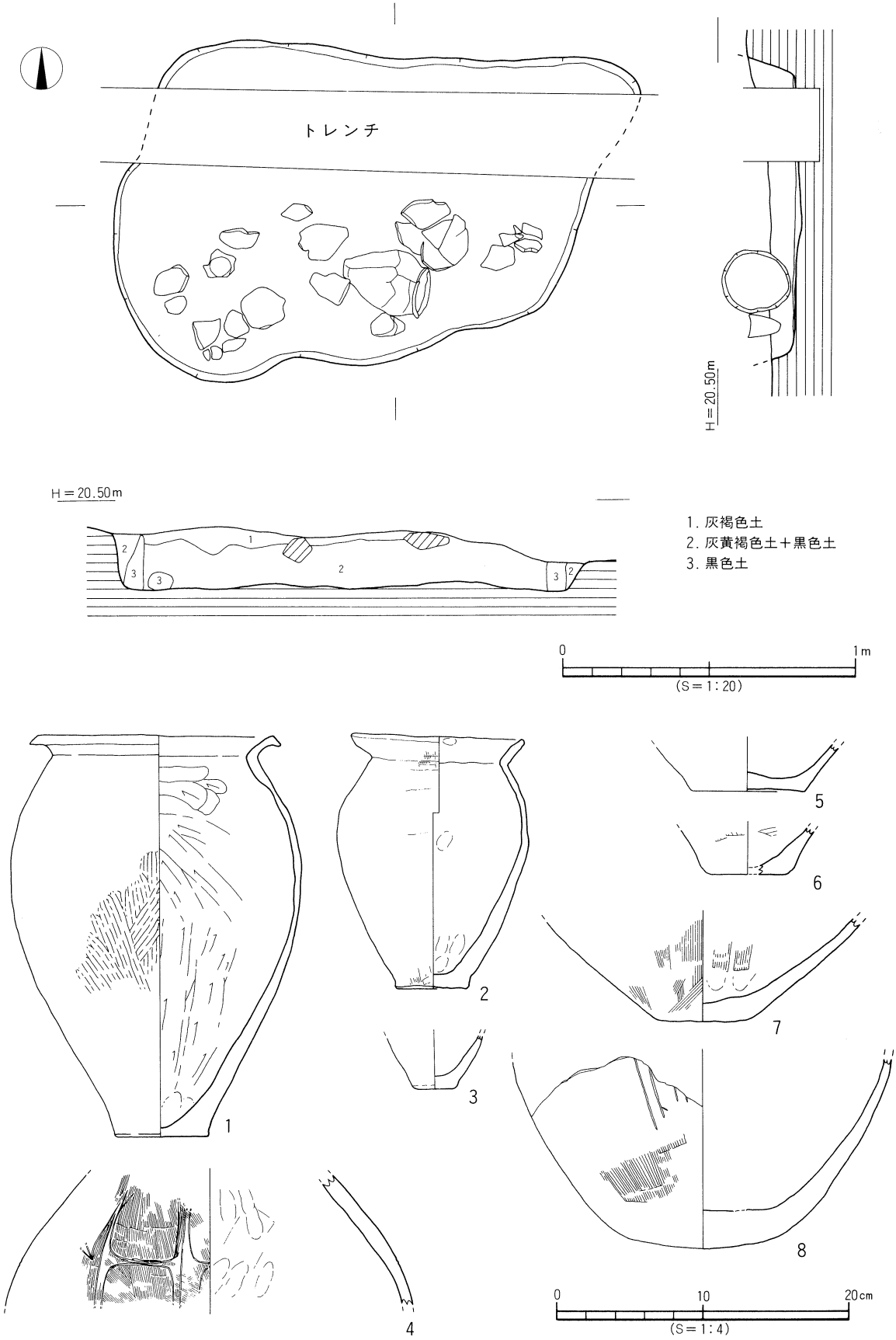
出土遺物（第62図９）

９は高坏形土器の脚部片である。柱部はやや径が大きい円筒形を呈し、裾部は長くゆるやかに開く。

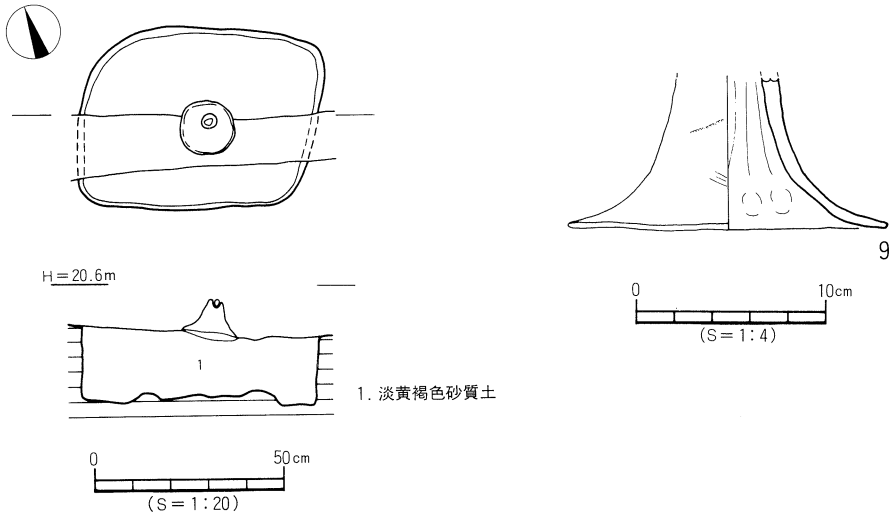
時期：出土した遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

A
B
C
D
a
b
c
d
1
2
3
4
5
6
SK2
SX2
SK4
SK1
SK3
掘立1
掘立2
掘立3
SB-1
SP115
SP113
SX1
SK5
0
5m
(S=1:100)

第60図　遺構配置図



第61図　SK２測量図・出土遺物実測図



第62図　SK４測量図・出土遺物実測図

２）土器溜り…土器溜り（ＳＸ１・２）２基は、第Ⅲ①層上面で検出した。

ＳＸ１（第60図、図版34）

調査区南Ｃ５区に位置し、北側は柱穴ＳＰ111に切られており、第Ⅲ①層上面で遺構を検出した。平面形態は不整な長楕円形で、規模は長軸１.６ｍ、短軸０.６ｍ、深さ６.５㎝を測り、断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土である。遺物は弥生時代後期後葉に比定される土器片が集中して出土し、このなかには完形品の土器がある。これ等の土器は出土状況から一括投棄されたものと考えられる。

出土遺物（第63・64図10～32、図版35・36）

10～13は甕形土器である。10は胴上半部にゆるやかな張りをもつもので、口縁部はあいまいな稜をもって外反する。11は口縁部片である。12・13は底部で、12は凹み底、13は平底となる。14～31は壺形土器である。14・15は複合口縁壺で、14は二次口縁部が外傾する。15は二次口縁部が欠損している。16はゆるやかに外反する短い口頸部をもつもので、17は口頸部がやや長く外傾するものである。18は口縁部の一部を欠くが、完形品にちかいものである。胴部は長胴で、肩部に張りをもつ。口頸部はやや長く、直立ぎみにたちあがる。19～23は、長い口頸部をもつものである。24～31は底部で、全てのものが平底を呈する。32は鉢形土器である。大型品で、上外方にたちあがる口縁部をもつ。底部はたちあがりをもち、平底となる。

時期：出土した遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

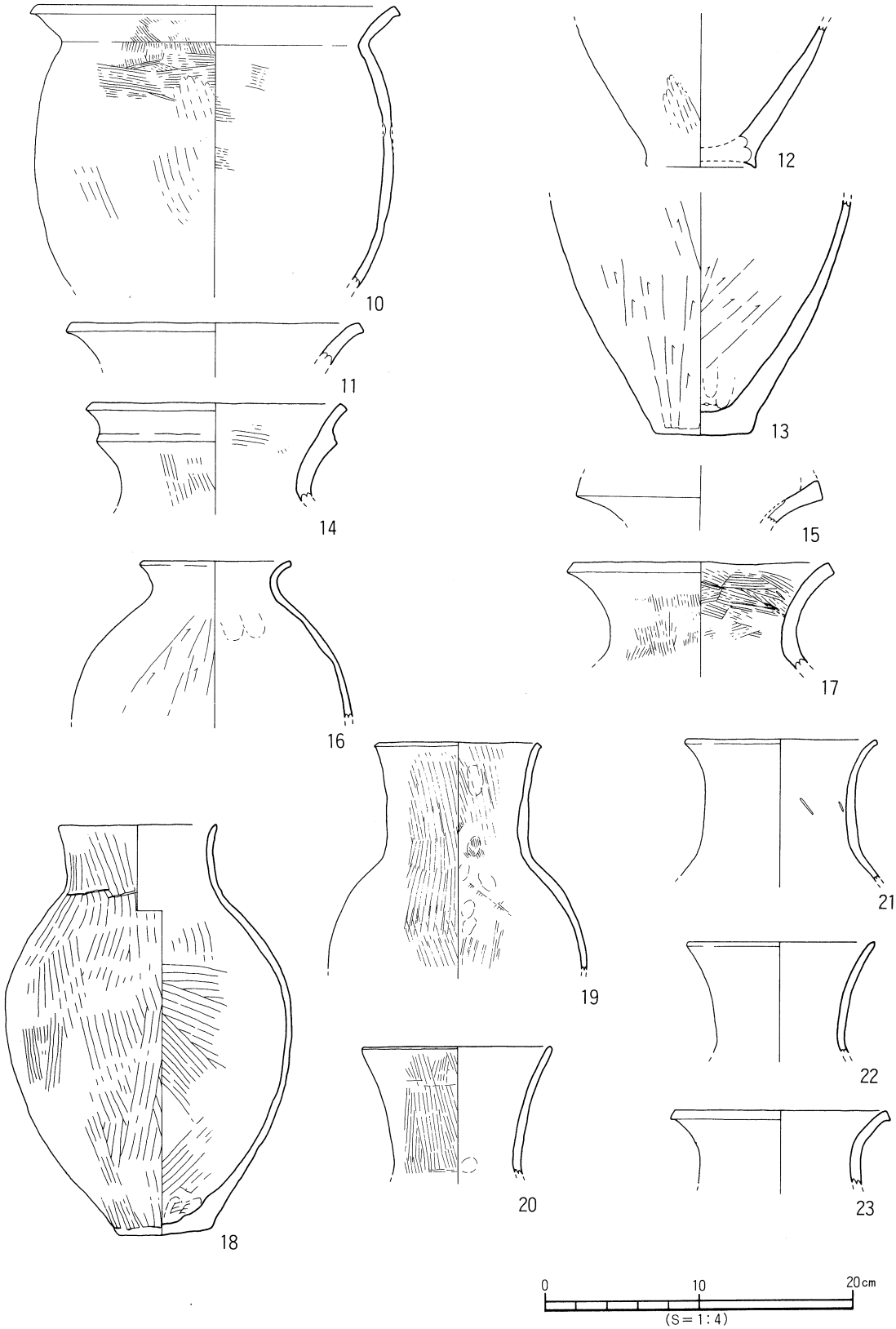
ＳＸ２（第60図）

調査区北西Ａ１に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。40×50㎝の範囲で、土器が出土したが、明確な掘り方は検出できなかった。

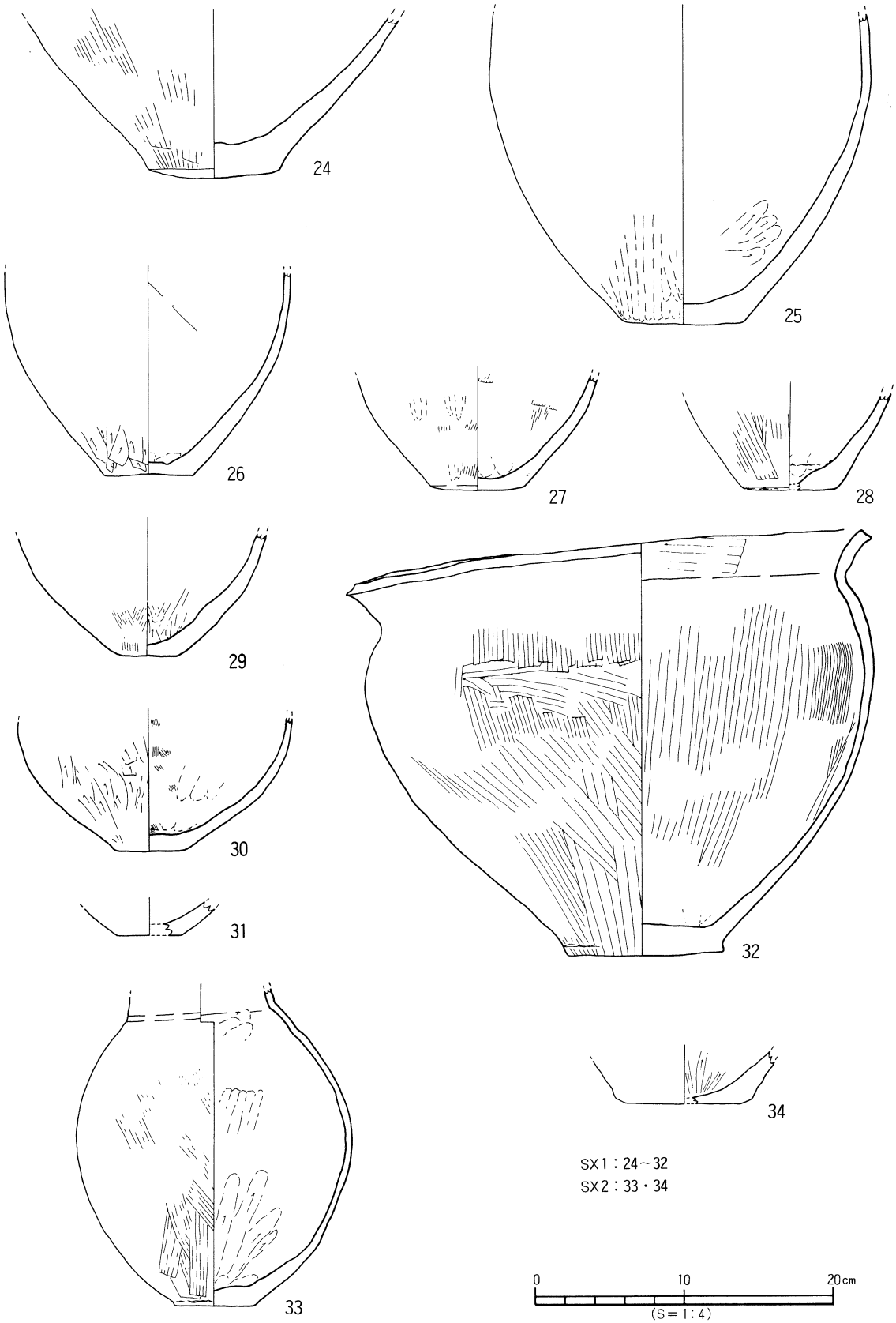
出土遺物（第64図33・34、図版36）

33・34は壺形土器である。33は口頸部を欠損するもので、ふくらみをもつ胴部に、平底がつく。頸胴部境には沈線状の凹みをもつ。34は底部片で、平底になる。

時期：出土した遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。



第63図　SX１出土遺物実測図（１）



第64図　SX１・２出土遺物実測図（２）

３）柱穴…柱穴及び柱穴状の小さい掘り込み遺構のうち、弥生土器の遺存状況がよい３基（ＳＰ113～115）を取り上げる。

ＳＰ113（第71図）

調査区南東部Ｄ５区を深掘りした際に第Ⅲ②層上面で検出した。調査区南東Ｄ５区に位置し、平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸72cm、短軸53cm、深さ19cmを測る。遺物は、弥生時代後期前半の壺形土器１点、高坏形土器の坏部１点、石庖丁の製品１点、砥石１点が出土している。壺形土器は半截で、高坏形土器の坏部はうつぶせの状態で出土した。

出土遺物（第65図35・36、図版36・37）

35は壺形土器で、一部を欠くが、完形品にちかい遺存である。大きく開く口頸部に、全体的にふくらみをもつ胴部、平底の小さい底部をもつ。36は高坏形土器の坏部で、稜をもって大きく開く口縁部をもつ。図版37・100は石庖丁の未製品である。石材は結晶片岩である。図版37・101は砥石である。

時期：出土物より、弥生時代後期後葉に比定する。

ＳＰ114（第71図、図版34）

調査区北西Ａ１に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸50cm、短軸45cm、深さ11～16cmである。埋土は黒褐色土（灰色土混り）で、遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（第65図37～42）

37～40は壺形土器である。37・38は外反する口頸部をもつものである。39は大きく開く長い口頸部をもつ。40は底部片で、たちあがりのある厚い平底となる。41は脚付鉢の脚部で、長い裾部には円孔が４ヶ穿たれる。42は支脚形土器である。受部は３分の１ほどが「Ｕ」字状に切りこまれている。

時期：出土物より、弥生時代後期後葉に比定する。

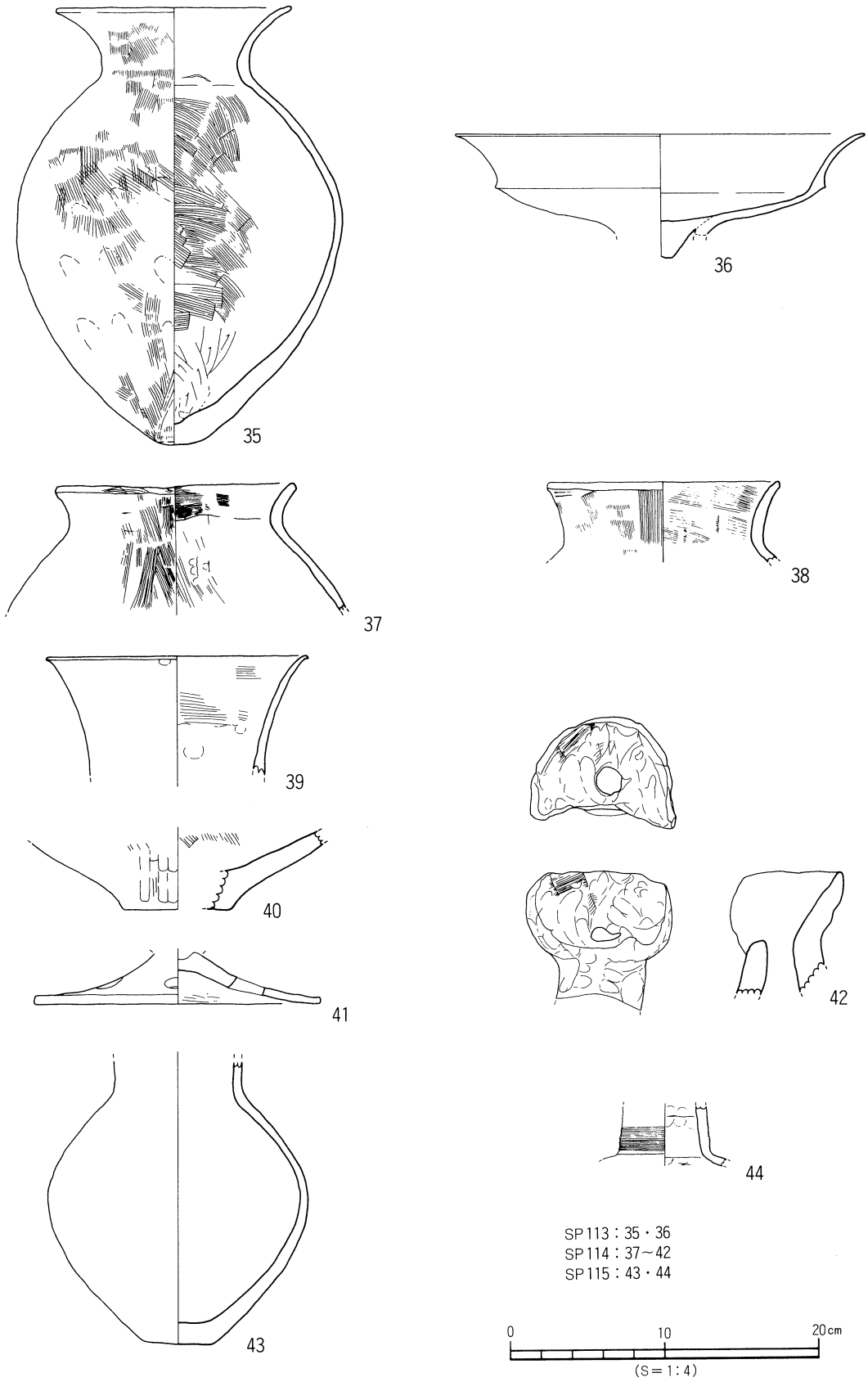
ＳＰ115（第71図、図版34）

調査区南Ｃ５に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は長軸45cm、短軸43cm、深さ７～11cmを測る。埋土は灰色土で、遺物には弥生土器の破片がある。

出土遺物（第65図43・44）

43・44は壺形土器である。43は口頸部を欠損するものである。胴中位が張り、全体にふくらみをもつ。底部は厚い平底である。44は細長頸壺の破片で、クシ描波状文が11条施されている。

時期：出土遺物より、弥生時代後期後葉に比定する。



第65図　SP出土遺物実測図

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴式住居址（ＳＢ）１棟で、第Ⅲ①層上面で検出した。

ＳＢ１（第60・66図）

調査区西壁中央部Ａ２～Ａ４区に位置し、住居址南東部はＳＰ69に、住居址東半分は試掘トレンチに切られ、西側は調査区外に続く。平面形態は方形になると考えられ、規模は南北４.６ｍ、東西検出長２ｍ、壁高は約40㎝を測る。床面は貼り床がなされ、貼り床の厚さは10㎝を測る。床面は比較的硬く平坦である。埋土は１黒灰色土、２灰褐色土の２層である。

住居址床面にて６基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。また、住居址は全体の１／３しか検出できず、炉・壁体溝・主柱穴等の屋内施設は未検出となった。遺物は床面付近からは高坏坏部が３点、埋土上層からはサヌカイト製の石庖丁が１点出土した。

出土遺物（第67図45～55）

45～48は土師器である。45～47は高坏の坏部で、外傾外反する口縁部をもつ。48はコシキの握手部分の破片で、握手部は短い。49は須恵器で、坏蓋の口縁部小片である。口縁端部は内傾する。50～53は弥生土器である。50～52は壺形土器の底部で、平底を呈する。53は高坏形土器の脚部片である。54・55は石製品で、54はサヌカイト製の石庖丁で、両側部に抉りをもつ。55は砥石の破片である。

時期：床面出土の高坏が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代中期に比定されるものであろう。よって、本住居址の廃棄・埋没時期も古墳時代中期と考えられる。

（３）古代～中世

中世の遺構は土坑（ＳＫ１）１基で、古代～中世の間に時期比定される遺構は掘立柱建物址（掘立１～３）３棟である。いずれも第Ⅲ①層上面で検出した。

掘立１（第68・71図）

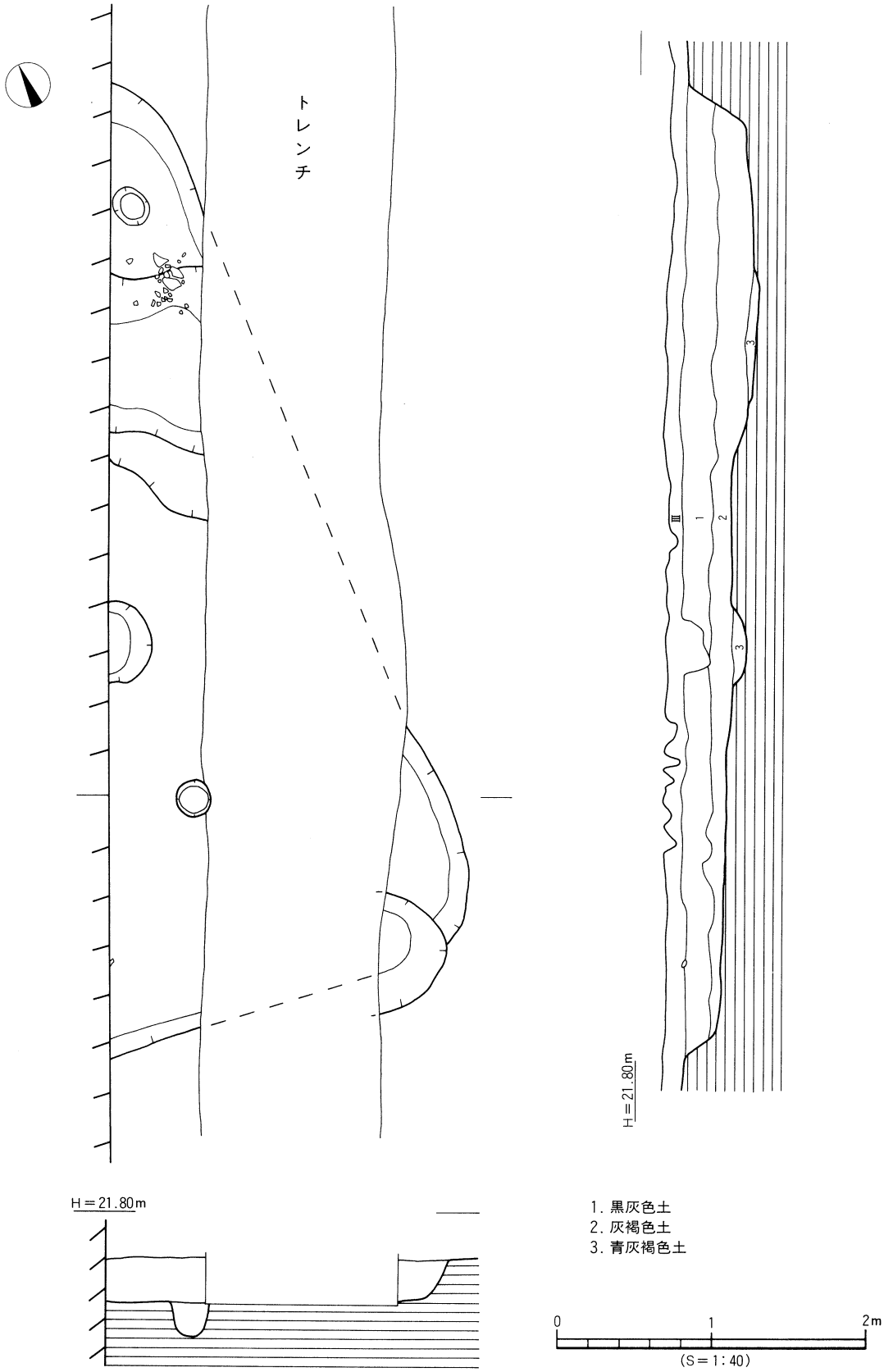
調査区北西～北Ａ２～Ｃ３区に位置する。建物の北東隅は土坑ＳＫ１に、北側中央東寄りではＳＰ25に、南西側東寄りではＳＰ54に、南東隅ではＳＰ60に各々切られ、北西側東寄りではＳＰ29を切っている。また、建物の西側ＳＰ102の柱穴は削平され、南西隅ＳＰ52の柱穴は削平されているが柱痕は残っていた。

建物は３×５間の東西棟で、桁行長８.２ｍ、梁行長４.４ｍを測る。平均柱間は東西１.６ｍ、南北１.５ｍで、床面積は約36㎡である。柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、径50～80㎝、深さ20～60㎝を測る。柱穴の埋土は黒褐色土である。柱痕は径10～20㎝、深さ18～40㎝を測る。遺物は、ＳＰ53から７世紀代の須恵器片が出土し（第68図56）、ＳＰ30の床面付近から礫が３点出土した。

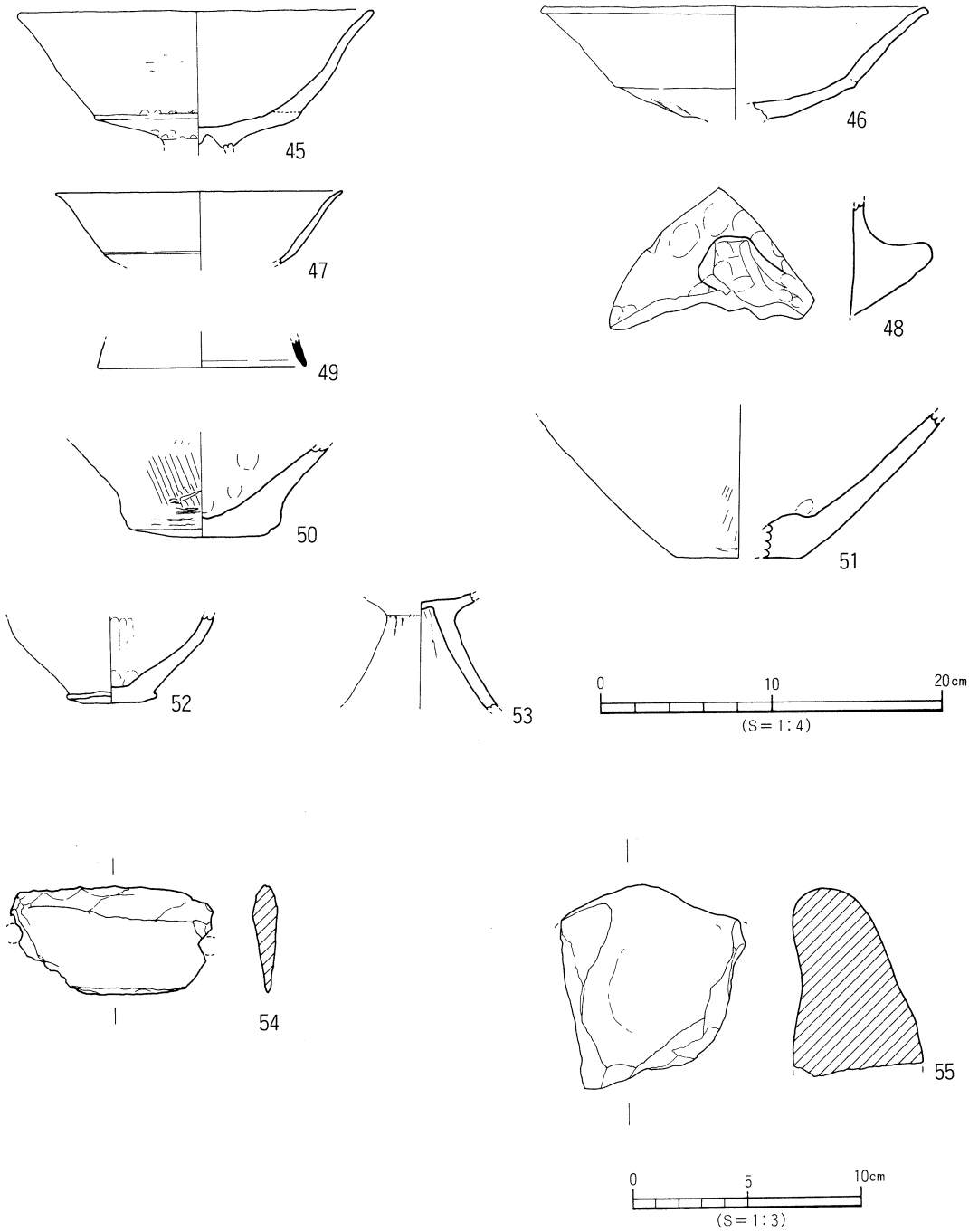
出土遺物（第68図56・57）

56はＳＰ53出土の須恵器の坏身で、口縁部のたちあがり部分の小片である。内傾する短いたちあがりをもち、端部は丸い。57はＳＰ58出土の弥生土器の高坏脚部である。大きく開く裾部をもつ。

時期：柱穴からの出土物と一部の柱穴が中世の遺物を含む柱穴（灰色土）に切られているため、上限が７世紀、下限が中世となる。



第66図　SB１測量図



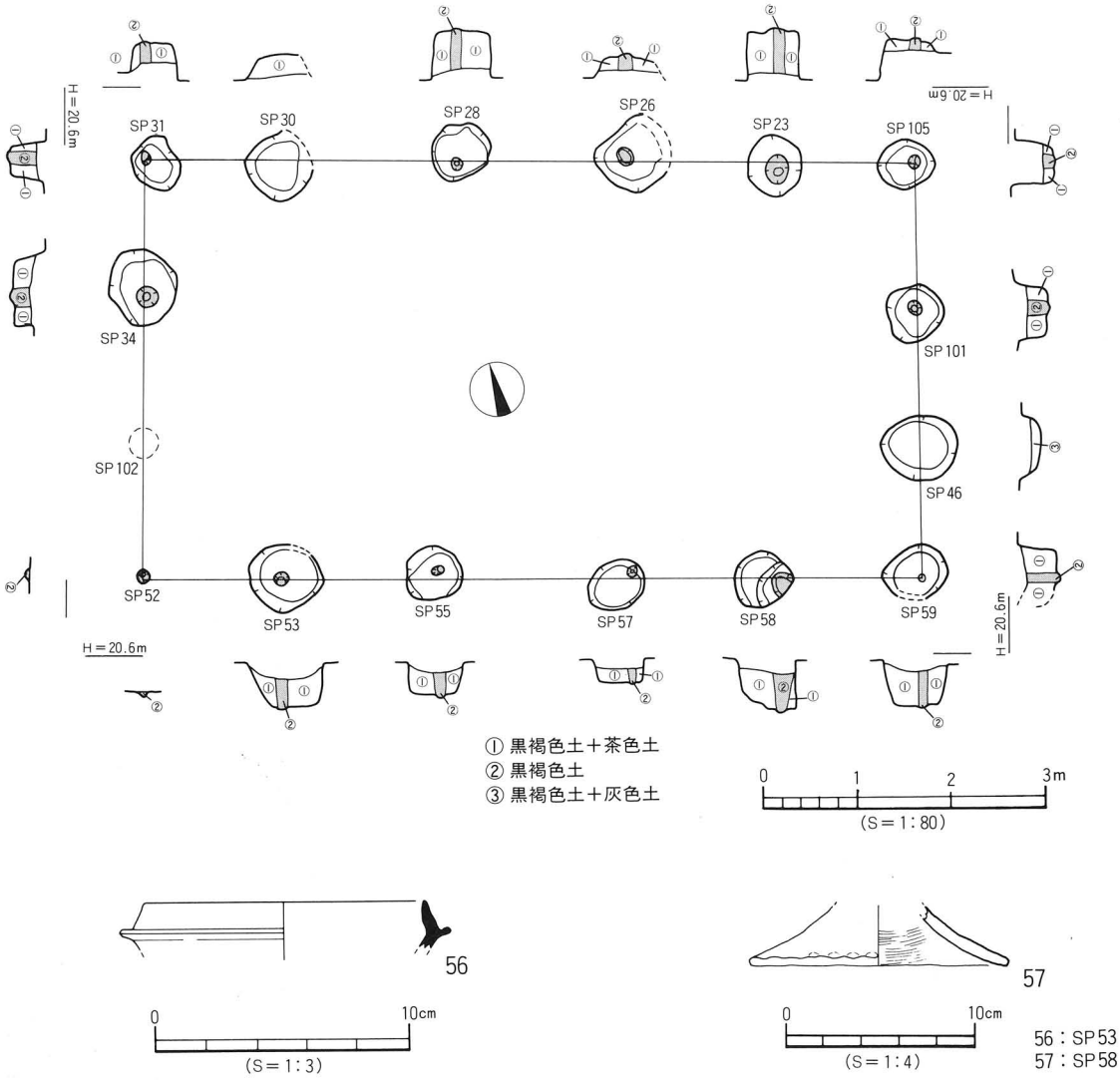
第67図　SB１出土遺物実測図

掘立２（第69図）

調査区中央Ｂ２～Ｃ４区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。

建物は３×３間の東西棟で、桁行長5.6m、梁行長4.5mを測る。平均柱間は東西1.9m、南北1.5mで、床面積は約25m²である。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径40～70cm、深さ20～40cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色土である。柱痕は径10～20cm、深さ10～32cmを測る。１号建物址に比べると、やや規模が小さな建物址になる。柱穴内から遺物は出土しなかった。

時期：中世の遺物を含む柱穴に切られていることから、下限が中世、上限は判断できない。



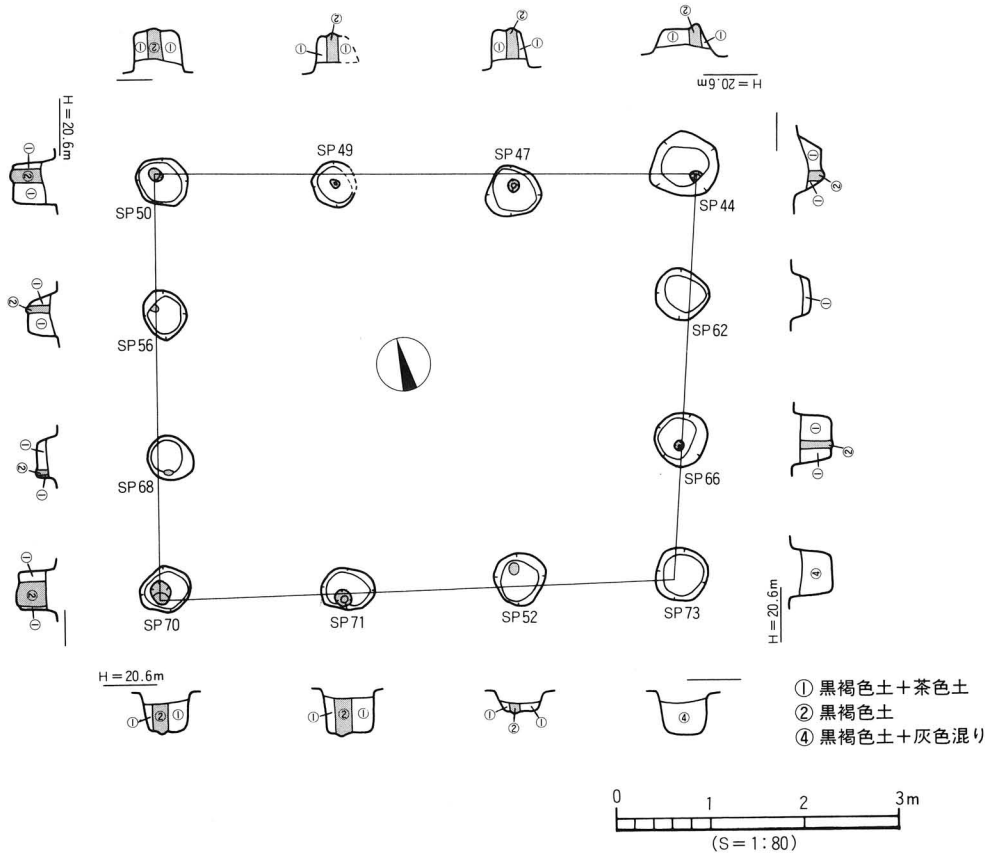
第68図　掘立１測量図・出土遺物実測図

掘立３（第70図）

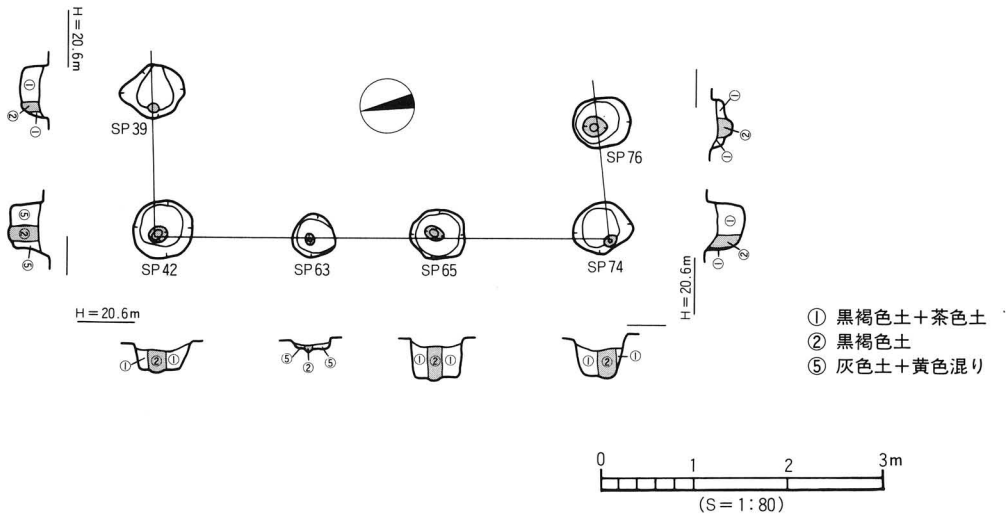
調査区中央東寄りＣ２区～Ｄ４区に位置し、第Ⅲ①層上面で検出した。遺構東半部は調査区外に続き、建物の北東隅はＳＰ48に切られている。

遺構の現状は、南北３間×東西１間分を検出した。規模は南北検出長4.7m、東西検出長1.3m、床面積約6.1m²を測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径43～60cm、深さ７～35cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色土である。柱痕は径10～20cm、深さ15～35cmを測る。ＳＰ74の埋土中からは炭が出土した。

時期：中世の遺物を含む柱穴に切られていることから、下限は中世となるが、上限は判断できない。



第69図　掘立２測量図



第70図　掘立３測量図

ＳＫ１（第71図）

調査区北東Ｃ１～Ｃ２区に位置し、１号掘立柱建物の柱穴を切っている。第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は長楕円形を呈する。規模は長軸2.1m、短軸1.2m、深さ40～44cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は２層あり、上層が灰褐色細砂、下層は上層より少し暗い灰褐色細砂である。遺物は埋土中から土器が数点、埋土中と床面付近から礫が数点、床面付近から陶器が１点出土した。陶器は水滴と呼び水差しと考えられる。

出土遺物（第72図58～64）

58・59は土師器の坏である。58は口縁部片で、内湾してたちあがる口縁部は、外面にあいまいな面をもつ。59は大きい平底で、底部は糸切りとなる。60はスリ鉢の底部片である。61は緑釉陶器で、水滴と呼ばれ、注口部と握手をもつ。62～64は弥生土器の底部で、平底となる。

時期：出土した遺物などから16世紀後半の遺構と考えられる。

（５）時期不明

時期不明の遺構は、第Ⅲ①層上面で検出した土坑（ＳＫ５）１基となる。

ＳＫ５（第60図）

調査区南西Ａ５～Ａ６区に位置し、西側は試掘トレンチに切られている。第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は不整形な楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は東西検出長1.2m、南北0.8m、深さ４～７cmを測る。埋土は灰黄褐色土に黒褐色土のブロックが混じるものである。遺物は出土しなかった。

（６）その他

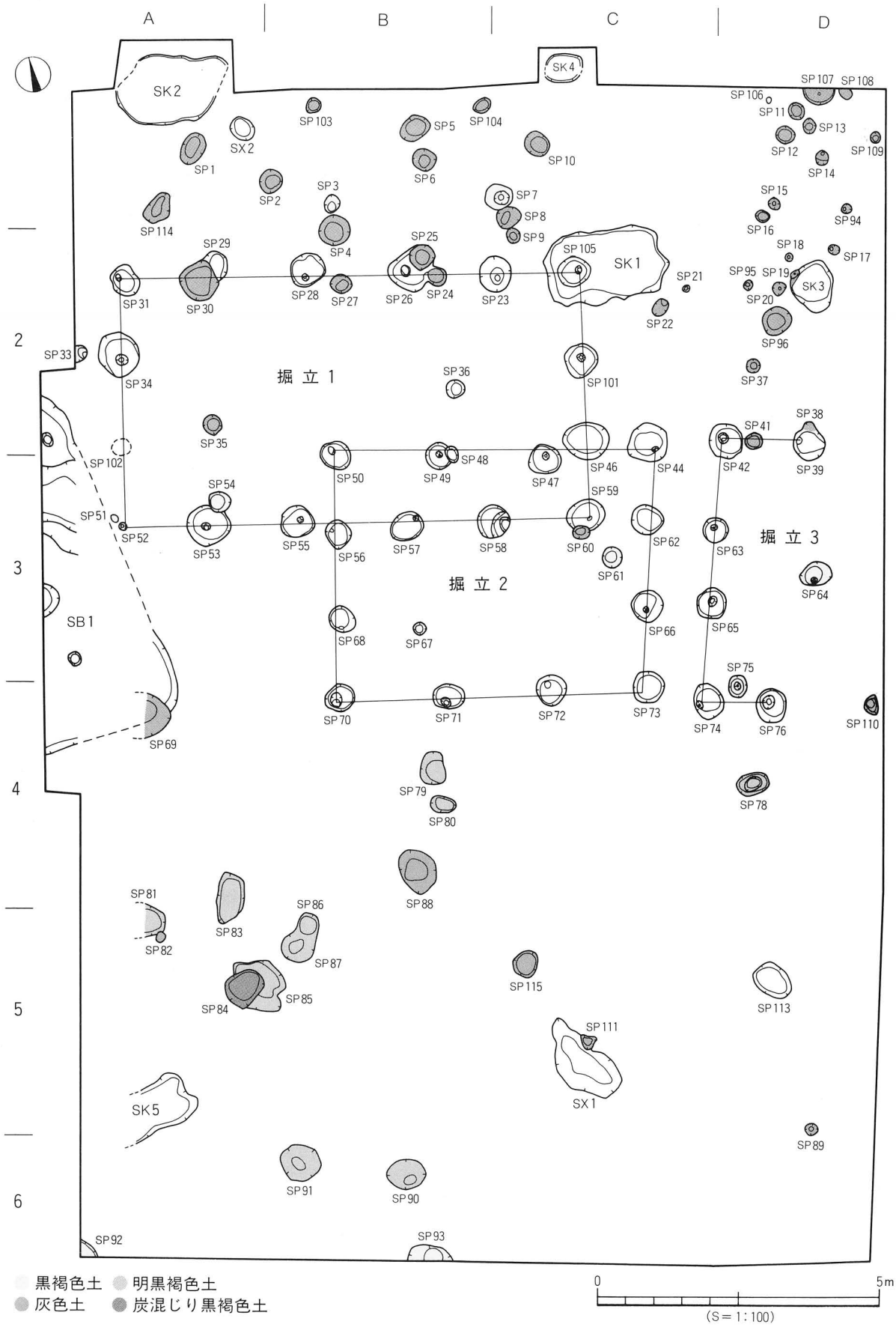
１）柱穴（ＳＰ）（第71図）

本調査において確認された柱穴は81基である。第Ⅲ①層上面では80基を検出し、第Ⅲ②層上面では１基（ＳＰ113）を検出した。第Ⅲ①層上面の柱穴は、埋土の違いにより４グループに分けられ、さらに柱穴内からの遺物より、少なくとも３時期のものがあると考えられる。

ｉ）第Ⅲ①層上面で検出した柱穴の埋土には、黒褐色土、灰色土、明黒褐色土、炭混じりの黒褐色土がある。

①黒褐色土を埋土にもつ柱穴は、ＳＰ３・７・33・51・54・61・64・67・75・92・93の11基である。

調査区のＢ１～Ｂ６区に位置し、柱穴の平面形態は円形と楕円形で、規模は径22～50cm、深さ10～20cmを測る。これ等の柱穴のうちＳＰ54は掘立１を切ることより、黒褐色埋土の柱穴は中世以降の可能性が高い。ＳＰ64からは、第72図66の弥生土器の壺形土器底部片が出土している。



第71図　埋土別柱穴配置図

②灰色土を埋土にもつ柱穴は、ＳＰ１・２・４～６・８～22・24・25・27・30・35～38・41・48・60・69・82・88・89・94～96・103・104・106～111・114・115の48基である。

調査区のＡ１～Ｄ６区に位置し、柱穴の平面形態は円形と楕円形で、規模は径13～49cm、深さ７～65cmを測る。これ等の柱穴のうちＳＰ24・25・60は掘立１を切り、ＳＰ48は掘立２、ＳＰ38は掘立３を切っている。遺物が出土し図化できたものはＳＰ２・41・88・110の土器である。ＳＰ２からは第72図65の弥生土器が出土している。壺形土器の口頸部片で、マメツが著しい。口縁端部には刺突文入りの円形浮文をもつ。ＳＰ41からは第72図71の須恵器が出土している。鉢の口縁部片で、口縁部は内湾してたちあがり、端部は丸みをもつ。ＳＰ88からは第72図72・73の土師器が出土している。72・73は坏で、72は短くたちあがる口縁部をもち、73は大きい平底となる。ＳＰ110からは第72図68の弥生土器が出土している。口頸部を欠く壺形土器の胴部片で、球胴で小さい平底をもつ。また、ＳＰ114とＳＰ115からは、弥生土器が出土している。

灰色土埋土の柱穴は弥生時代と中世以降のものがあることを提示しておく。

③明黒褐色土を埋土にもつ柱穴は、ＳＰ78～81・83・85～87・90・91の10基である。

調査区のＢ４～Ｂ６区に位置し、柱穴の平面形態は円形・楕円形・不整楕円形・長楕円形で、規模は径37～93cm、深さ９～35cmを測る。遺物はＳＰ86の上面で須恵器の完形の坏が、ＳＰ80の埋土中から弥生土器片が出土した。ＳＰ86からは第72図70の須恵器が出土している。完形の坏身で、短いたちあがりは内傾し、端部は部分的に面をもつ。ＳＰ80からは第72図67の弥生土器が出土している。器台形土器の受部片で、大きく開く口縁部をもつ。

明黒褐色埋土の柱穴は、弥生時代と古墳時代の柱穴に比定しておく。

④炭混じりの黒褐色土を埋土にもつ柱穴は、ＳＰ84の１基である。

調査区南西Ａ５～Ｂ５区に位置し、ＳＰ85を切っている。平面形態は楕円形で、規模は南北67cm、東西64cm、深さ３～12cmを測る。遺物は、６世紀後半の須恵器坏身が１点出土している。本柱穴の時期は出土品より６世紀後半とする。

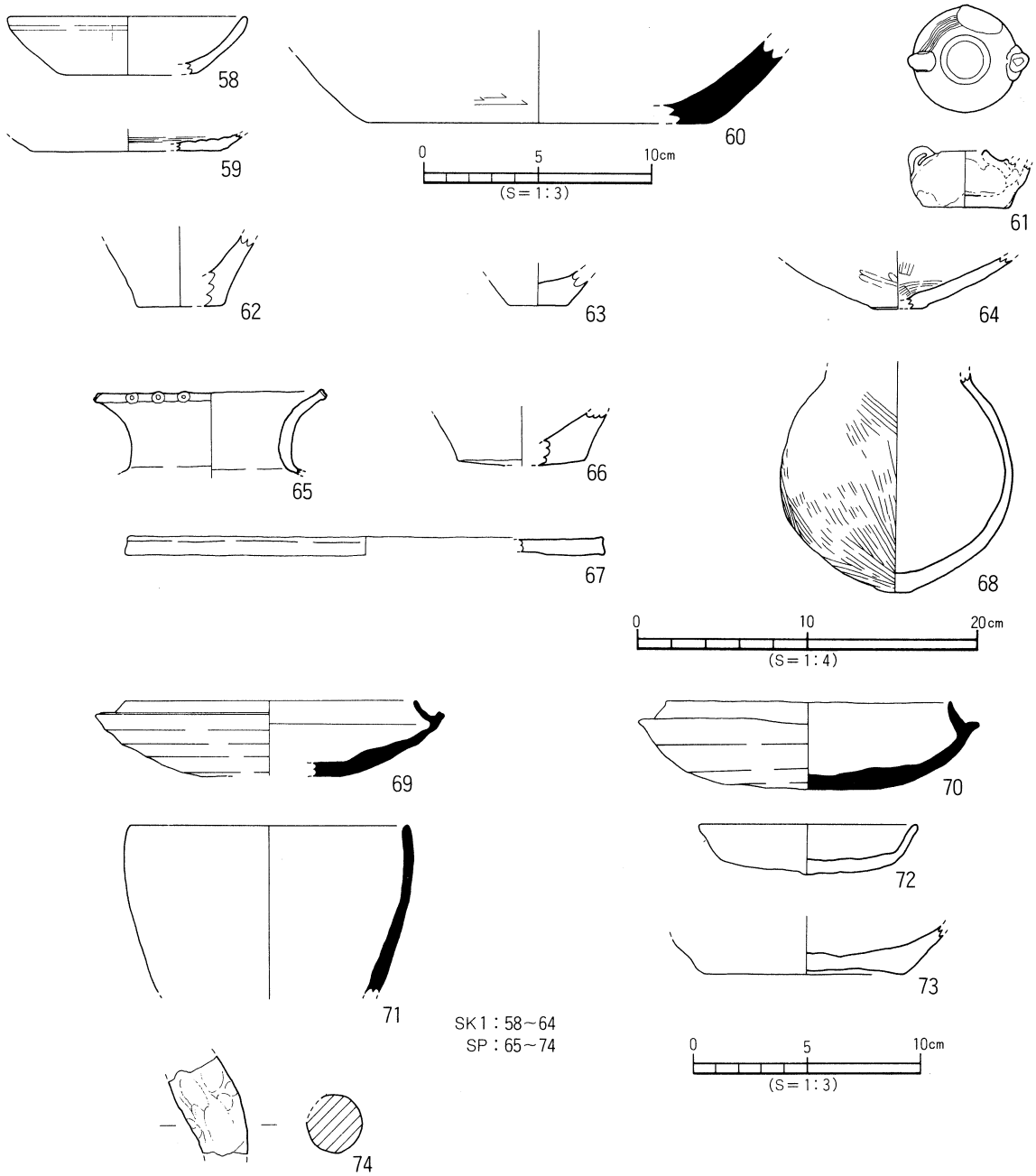
ii）第Ⅲ②層上面で確認された柱穴は、ＳＰ113の１基である。調査区南東部を深掘りした際に検出した。ＳＰ113は弥生時代後期の土器を出土しており、既に（２）弥生時代で報告したものである。

２）包含層と地点不明の遺物

ここでは、Ⅱ層とⅢ－①層、及び出土地点が不確定な遺物の資料を取り上げる。

ｉ）Ⅱ層出土遺物（第73図75～79）

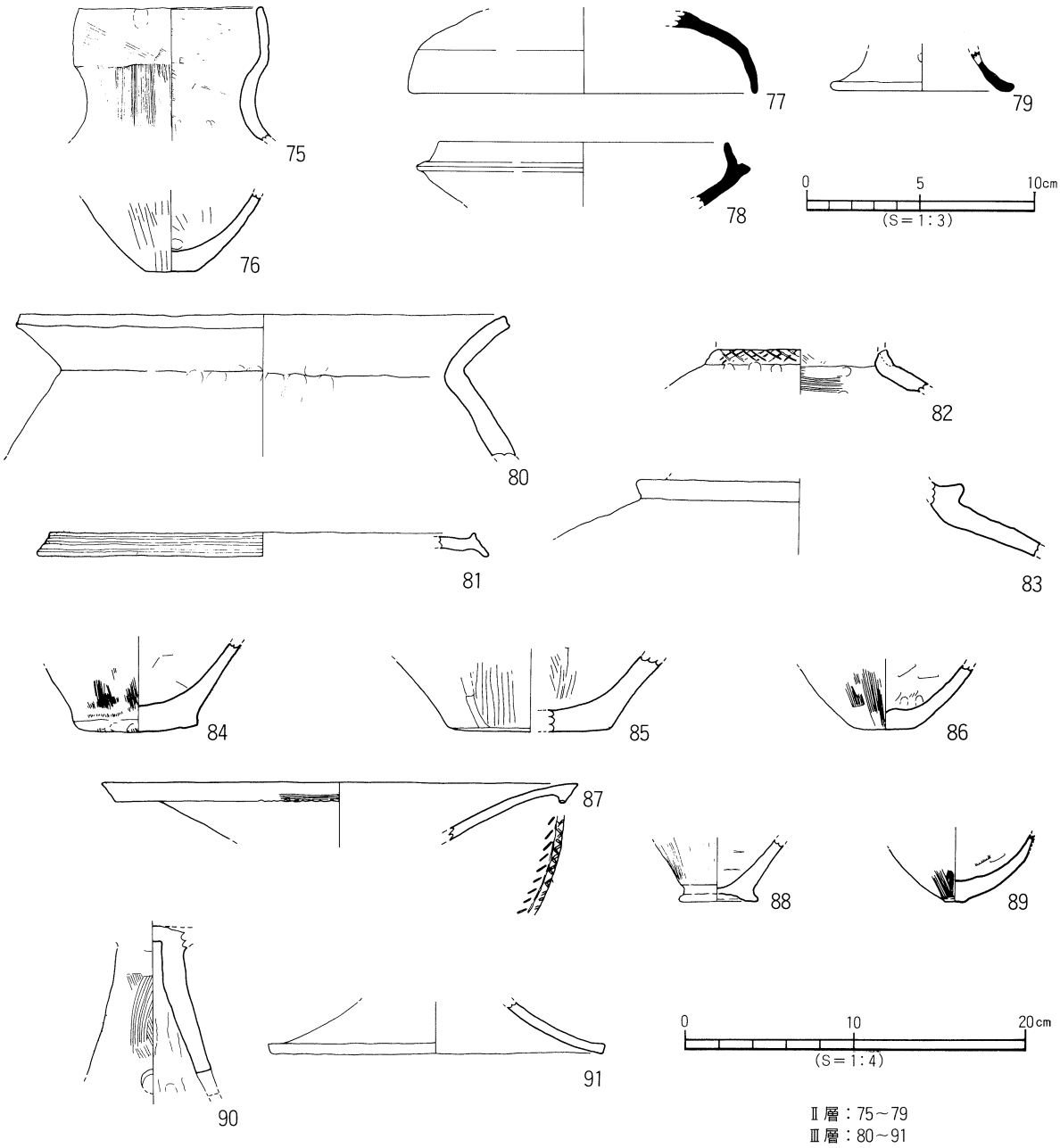
75・76は弥生土器である。75は複合口縁壺の口縁部で、口縁部は無文となる。76は壺形土器の底部で、平底をなす。77～79は須恵器である。77は坏蓋部片で、天井部から丸みをもって口縁部にいたる。口縁端部は丸い。78は坏身の小片で、内傾する短いたちあがりをもつ。79は脚部片で、小円孔をもっている。



第72図　SK１・SP 出土遺物実測図

ii）Ⅲ－①層出土遺物（第73図80～91、図版37）

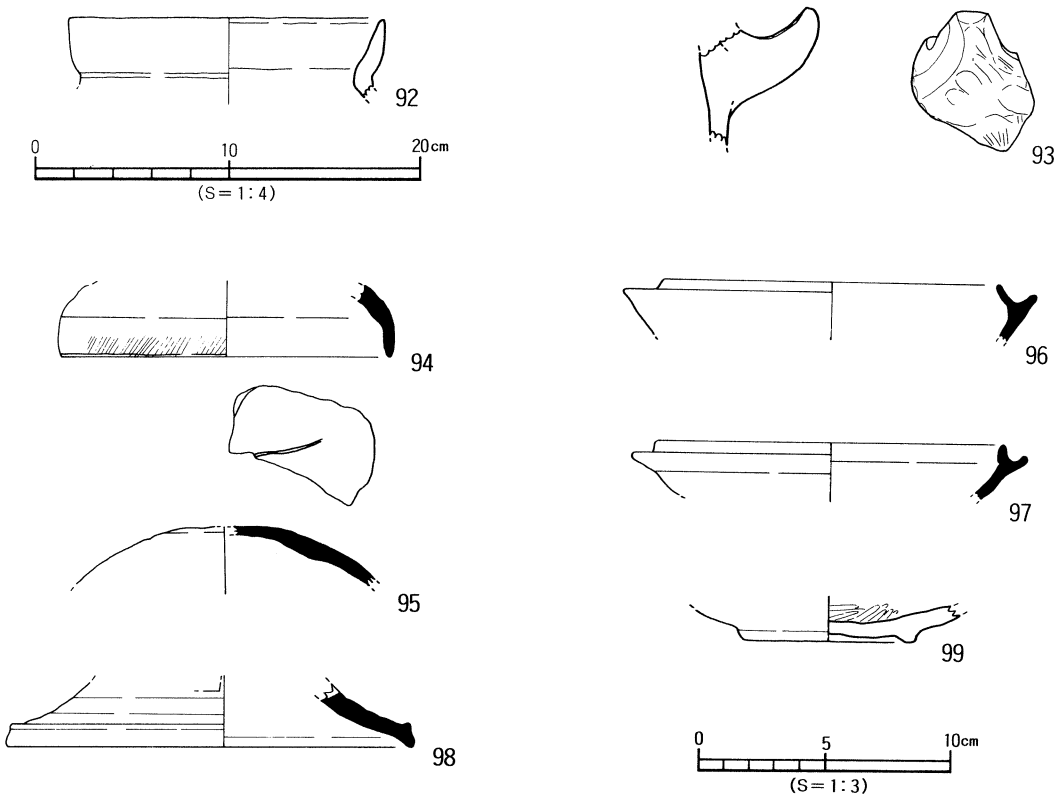
80～91は全て弥生土器である。80は甕形土器で、内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。81～87は壺形土器である。81は口縁部片で、口縁端部に凹線文を３条もつ。82・83は頸部片で、82は刻目、83は断面三角形の突帯文をもつ。84～86は底部で、平底となる。87は口縁部片で、端部は垂下する。下端部には刻目をもつ。異形である。88・89は鉢形土器で、88はくびれの上げ底、89は小さく突出する平底となる。90・91は高坏形土器で、90の柱部には円孔が施されている。



第73図　包含層出土遺物実測図

iii）詳細な出土地点が不明確な遺物（第74図92～99、図版37）

92・93は土師器である。92は甕の口縁部片で、内湾してたちあがる口縁部となる。93はコシキの握手部片で、握手部は上外方にたちあがる。94～98は須恵器である。94・95は坏蓋で、94の口縁外面には工具痕、95の天井部には線刻を看取する。99は内黒椀の底部片である。輪高台はマメツしている。図版37の102～105は石製品である。102・103は結晶片岩製の石器素材で、板状をなす。104は砥石片、105は用途不明の石器である。



第74図　地点不明遺物実測図

４．小　結

本調査においては、弥生時代～中世の間の遺構と遺物を確認することができた。

弥生時代

弥生時代に時期比定できる遺構は、土坑ＳＫ２～４と土器溜りＳＸ１・２及びＳＰ113～115である。ＳＫ２は完形品の甕２点が出土しており、貯蔵施設の性格をもっている。壺形土器の肩部片と底部片に施された線刻は類例がない。一方、ＳＸ１・２は後期後葉の土器溜りである。これまでに、調査地一帯では弥生時代後期の集落を示す資料はなかった。よって今回の調査は当地域の弥生時代集落の存在を示すものとして貴重な資料となる。

また、古墳時代のＳＢ１の埋土から出土したサヌカイト製石庖丁は、東部瀬戸内地方に分布が濃く、当平野では基本的にないものである。稀少例として注目される。

古墳時代

古墳時代に時期比定できる遺構は竪穴式住居址ＳＢ１である。平面形態は方形になると考えられ、施設には貼り床を検出した。１次調査においても同時期の住居址が検出されており、調査地一帯には古墳時代中期の集落が展開していることを追証することになった。

小　　結

古代～中世

古代～中世にかけての掘立柱建物３棟と中世の土坑ＳＫ１を確認した。１次調査では10世紀代の溝を検出したが、調査地内ではこの溝を確認できなかった。今回検出の掘立柱建物と溝の関係は、周辺の調査によって、判断したい。

今回の調査によって、当地一帯は弥生時代後期から中世までに断続的ではあるが居住区として利用されていたことが明らかになった。今後は、資料の増加を待ち、各時代の集落構造を明らかにすることが必要であろう。

〔文献〕

栗田茂敏　1994　『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡』　松山市教育委員会、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧（作成者：水本完児・水口あをい）

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、安→安山岩、密→精製土。

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表36　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模（m） 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	古墳中期	方形	4.6×2.0×0.4	黒灰色土 灰褐色土	7.0							

表37　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁　行		梁　行		方　位	床面積(㎡)	時　期	備　考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	3×5	東西	8.2	1.4・1.7・2.0・1.7・1.4	4.4	1.5・1.5・1.4		36.0	上限7C 下限中世	
2	3×3	東西	5.6	1.9・1.9・18	4.5	1.4・1.7・1.4		25.2	下限中世	
3	3×α		4.7	1.6・1.3・1.8	1.3	1.3		6.1	下限中世	

表38　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面図	断面形	規　模（m） 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C 2	隅丸方形	逆台形状	2.1×1.2×0.40～0.44	2.6	灰褐色細砂 ＋暗灰褐色細砂	土師 陶器	16C後半	
2	A 1	楕円形	皿状	1.8×1.2×0.1～0.2	2.1	灰黄褐色 ＋黒色土	弥生	弥生後期 前半	
3	D 2	楕円形	逆台形状	0.88×0.68×	0.6	褐色土 ＋灰色土	弥生	弥生後期	
4	C 1	楕円形	逆台形状	0.62×0.48×0.17～0.19	0.3	淡黄褐色土	弥生	弥生後期	
5	A 5	楕円形	皿状	1.2×0.8×0.04	0.9	灰黄褐色土	なし	不明	

表39　SK出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色　調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	甕	口　径 16.0 器　高 27.5 底　径 5.4	復元完形品。口縁端部はナデによりやや広い面を持つ。平底。	㊐ヨコナデ ㊥ミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ケズリ	茶褐色 茶褐色	石、長（3～8） ◎	SK2 黒斑	35
2	甕	口　径 11.4 器　高 17.4 底　径 4.7	復元完形品。小型品。肩部が張り、底部はわずかに凹む。	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～5） ◎	SK2	35
3	甕	底　径 2.8 残　高 3.6	底部。小さい平底。	マツメ	マツメ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～2） ◎	SK2	
4	壺	残　高 8.9	肩部。線刻を施す。	ハケ	ハケ→ナデ	淡黄茶色 灰色	石、長（1～2） ◎	SK2	35
5	壺	底　径 7.6 残　高 3.2	底部。大きな底部はわずかに凹む。	マツメ	マツメ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～5） ◎	SK2 黒斑	
6	壺	底　径 5.4 残　高 3.2	底部。平底。	ナデ（工具痕）	ナデ（工具痕）	褐色 褐色	石、長（1～4） ◎	SK2	
7	壺	底　径 6.0 残　高 7.2	底部。大型品。平底。	ハケ	ハケ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） ◎	SK2	
8	壺	底　径 10.0 残　高 12.9	底部。胴下半はふくらむ。厚い丸みのある平底。線刻を施す。	ハケ（マツメ）	ナデ	乳黄色 乳黄色	砂粒 ○	SK2	35
9	高坏	底　径(16.8) 残　高 6.0	脚部。大きく開く裾部をもつ。	マツメ	ナデ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） ◎	SK4	

表40　SX出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	甕	口径(23.0) 残高 18.2	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ→ミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ハケ(マツメ)	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） ◎	SX1	
11	甕	口径(18.4) 残高 2.7	口縁部片。外反して開く口縁部。	マメツ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（1～2） ○	SX1	
12	甕	底径 (6.8) 残高 9.3	底部。たちあがりをもつ上げ底。	ミガキ(マメツ)	マツメ	褐色 褐色	石、長（1～2） ○	SX1	
13	甕	底径 6.0 残高 15.3	底部。あいまいなたちあがりをもつ平底。	板ナデ	板ナデ	乳黄色 乳灰色	石、長（1～2） ○	SX1	
14	壺	口径 16.0 残高 6.7	複合口縁壺。外傾する二次口縁部。口縁部は無文。	㊐ヨコナデ ㊦ハケ	㊐ヨコナデ ㊦ハケ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） ◎	SX1	35
15	壺	残高 2.8	複合口縁壺。二次口縁部は欠損。	マメツ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（3～5） ○	SX1	
16	壺	口径 9.6 残高 10.3	ゆるやかに外反する短かい口頸部。胴状半は張りをもつ。	㊐ヨコナデ ㊥板ナデ	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	乳褐色 乳白色	石、長（1～3） ◎	SX1	35
17	壺	口径 16.4 残高 8.0	外反する口頸部はやや長い。	㊐端ハケ→ヨコナデ ㊦ハケ	ハケ	乳白色 乳白色	石、長（2～4） ◎	SX1	
18	壺	口径 10.4 器高 26.6 底径 (6.0	外傾してたちあがるやや長い口頸部。胴部は長く、肩部は張る。平底。	ハケ	㊐マツメ ㊥ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎	SX1	36
19	壺	口径(10.3) 残高 14.7	外傾してたちあがるやや長い口頸部。	㊐端ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	ハケ(一部ナデ)	淡茶褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎	SX1	
20	壺	口径(12.6) 残高 8.3	外傾してたちあがるやや長い口頸部。	ハケ	マツメ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～4） ◎	SX1	
21	壺	口径(12.2) 残高 9.2	直立外反する口頸部	マメツ	マツメ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎	SX1	
22	壺	口径(12.0) 残高 7.2	外傾してたちあがるやや長い口頸部。	マメツ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（1～3） ◎	SX1	
23	壺	口径(13.9) 残高 4.3	外傾外反するやや長い口頸部。	㊐端ヨコナデ ㊦マメツ	ナデ	乳黄色 淡黄色	石、長（1～3） ◎	SX1	
24	壺	底径 8.7 残高 10.7	底部。大型品。厚い平底。	ハケ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（2～3） ◎	SX1	
25	壺	底径 8.2 残高 2.1	胴下半部にふくらみをもつ。平底。	ミガキ(マメツ)	ナデ（マツメ）	乳灰色 乳灰色	石、長（1～4） ◎	SX1	
26	壺	底径 5.8 残高 13.7	胴下半部にふくらみをもつ。平底。	マメツ （1部ケズリ状）	マツメ	乳褐色 乳白色	石、長（2～5） ◎	SX1	
27	壺	底径 (6.4) 残高 7.7	底部。平底。	ハケ→ミガキ? （マツメ）	ハケ	乳灰色 乳灰色	石、長（1～2） ◎	SX1	

SX 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
28	壺	底径 6.4 残高 6.6	底部。やや厚い平底。	ハケ	マツメ	乳白色 灰色	石、長（2～3） 金 ◎	SX1	
29	壺	底径 3.6 残高 8.3	底部。胴下半部にふくらみをもつ。やや小さい平底。	ハケ（マメツ）	ハケ（マメツ）	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎	SX1	
30	壺	底径 4.4 残高 9.0	腰部。胴部中位が強く張る。厚い平底。	板ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色 黄灰色	石、長（1～3） ◎	SX1	
31	壺	底径（4.2） 残高 2.2	底部片。平底。	マツメ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（2～4） ◎	SX1	
32	鉢	口径 34.8 器高 28.5 底径 10.5	復元完形品。ゆるやかに外反する口縁部。肩部が張り、底部は大きい平底。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ハケ→ヨコナデ 胴ハケ	黄褐色 茶褐色	石、長（2～3） ◎	SX1	36
33	壺	底径 5.2 残高 21.3	口頸部を欠損。平底。頸胴部境に線状の凹みをもつ。	ハケ	ナデ	乳褐色 灰色	石、長（1～3） ◎	SX2	36
34	壺	底径（8.0） 残高 3.6	底部片。平底。	マツメ	ハケ	乳褐色 暗褐色	石、長（1～3） ◎	SX2	

表41　SP 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	壺	口径(15.0) 器高 28.2 底径 2.5	復元完形品。胴部の中位付近に張りをもつ。大きく開く長い口頸部。平底は小さい平底。	ハケ	口マツメ 胴ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎	SP113	36
36	高坏	口径(13.2) 残高 8.0	坏部。稜をもって外反する口縁部。円板充填技法。	マツメ	マツメ	乳白色 乳白色	石、長（2～5） ◎	SP113	
37	壺	口径(15.5) 残高 8.3	ゆるやかに外反する口縁部。	口端ハケ→ナデ 胴ハケ	ハケ	茶褐色 乳褐色	石、長（1～5） ◎	SP114	
38	壺	口径(14.8) 残高 5.2	口縁部片。上外方にたちあがる口縁部。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎	SP114	
39	壺	口径(17.0) 残高 7.7	口縁部片。大きく開く長い口頸部。	マツメ	ハケ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～6） ◎	SP114	
40	壺	底径（6.8） 残高 5.1	底部。たちあがりをもつ厚い平底。	ミガキ	ハケ	茶色 茶色	石、長（1～3） ◎	SP114	
41	鉢	底径 18.3 残高 3.2	脚付鉢。大きく開く長い裾部。円孔（φ1.8cm）4ケ。	マツメ	マツメ	黒茶色 灰茶色	石、長（1～2） ◎	SP114	
42	支脚	受部径 8.5 残高 8.7	受部。「U」字状の傾斜をもつ。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石、長（1～6） ◎	SP114 黒斑	
43	壺	底径 4.2 残高 18.3	ふくらみをもつ胴部。やや厚い平底。	マツメ	マツメ	乳黄色 乳黄色	石、長（2～3） ◎	SP115	
44	壺	残高 3.8	細長頸壺。クシ描沈線11条。	マツメ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～3） ◎	SP115	

表42　SB1出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
45	高坏	口径 20.6 残高 8.6	坏部。坏下部は段をなす。外傾する口縁部。	ナデ	ナデ	乳茶色 茶色	密 ◎		
46	高坏	口径(22.0) 残高 6.7	坏部。坏部に稜。口縁端部は外反する。	(坏上)ヨコナデ (坏底)ハケ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎		
47	高坏	口径(16.8) 残高 8.8	坏部。坏下部に弱い段。口縁部は外反。	マツメ	マツメ	黄褐色 黄褐色	密 ◎		
48	甑	残高 6.7	握手部。断面は台形状を呈する。	ナデ	ナデ	褐色 淡茶色	密 ◎		
49	坏蓋	口径(12.1) 残高 1.5	口縁部小片。口縁端部は内傾。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
50	壺	底径 8.7 残高 5.6	底部。たちあがりをもつ、厚い平底。	ハケ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
51	壺	底径（7.4） 残高 8.6	底部。平底。	マツメ	ナデ	淡茶色 乳黄色	石、長（1～3） ◎		
52	壺	底径（5.0） 残高 5.0	底部。平底。	マツメ	ミガキ	乳白色 乳白色	石、長（1～2） ○		
53	高坏	残高 6.8	脚部。柱部片。	マツメ	シボリ痕	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ○		

SB1出土遺物観察表（石製品）

(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅（cm）	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
54	石庖丁	完形	サヌカイト	8.8	4.7	1.0	45.4	打製	37
55	砥石	約1/4		8.4	7.1	5.7	450.4		37

表43　堀立1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
56	坏身	口径(11.0) 残高 1.8	口縁部小片。内傾するたちあがり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	PS53	
57	高坏	底径(13.4) 残高 3.2	脚部片。大きく開く裾部。	ナデ	ハケ	乳黄色 乳褐色	石、長（1～2） ◎	PS58	

表44　SK1出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
58	坏	口径(10.5) 器高 2.5 底径（6.0）	口縁部片。内湾してたちあがる口縁部。口縁外面にあいまいな面をもつ。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ○		
59	坏	底径（8.0） 残高 0.7	底部小片。平底。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ○		

SK1 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
60	擂鉢	底径(15.0) 残高 3.6	底部片。	ヨコナデ (1部ケズリ)	マツメ	灰色 灰色	石 (8) ◎		
61	水滴	口径 1.6 器高 2.6 底径 3.6	緑釉陶器。注口部欠損。小さい握り手をもつ。	㊡回転糸切り	ナデ	濃緑色 乳白色	密 ◎	緑釉陶器	37
62	甕	底径 (5.2) 残高 4.1	底部小片。厚い平底。	マメツ	マツメ	乳黄色 乳黄色	砂粒 ◎		
63	甕	底径 3.4 残高 2.1	底部小片。厚い平底。	マメツ	マツメ	乳白色 乳白色	砂粒 ◎		
64	壺	底径 (2.8) 残高 2.9	底部片。小さく突出する平底。	ミガキ	ハケ	黒色 乳白色	砂粒 ◎		

表45　SP出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
65	壺	口径(10.2) 残高 4.9	外傾外反する口頸部。口縁端部に刺突文入り円形浮文。	マツメ	マツメ	橙茶色 黄茶色	石、長 (1～2) ◎	SP2	
66	甕	底径 (7.4) 残高 3.1	底部小片。厚い平底。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石、長 (1～3) ◎	SP64 黒斑	
67	器台	口径(28.0) 残高 1.2	受部片。大きく開く口縁部。	ハケ→ヨコナデ	マツメ	乳黄色 乳黄色	石、長 (1～2) ◎	SP80	
68	壺	底径 2.0 残高 13.0	球形の胴部。小さい平底。	ハケ	マツメ	褐色 乳褐色	石、長 (1～2) ◎	SP110 黒斑	
69	坏身	口径(12.6) 残高 3.3	内傾する短いたたちあがり。口縁端部は丸い。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊤回転ナデ ㊡回転ナデ→ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	SP84	
70	坏身	口径(12.2) 残高 4.9	完形品。内傾する短いたちあがり。口縁端部は部分的に面をもつ。	㊤回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊤回転ナデ ㊡回転ナデ→ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎	SP86	37
71	鉢	口径(12.1) 残高 7.3	内湾してたちあがる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎	SP41	
72	坏	口径 (9.5) 器高 2.2 底径 7.5	短くたちあがる口縁部。	㊤ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	㊤ヨコナデ ㊡ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	SP88	
73	坏	底径 (8.6) 残高 2.2	底部。大きい平底。	㊥ナデ ㊡回転糸切り	回転ナデ	灰茶色 乳灰色	密 ◎	SP88	
74	釜	残高 4.3	脚部小片。断面は円形。	ナデ		淡茶色	石、長 (1～2) ◎	SP99	

表46　Ⅱ・Ⅲ-①層 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
75	壺	口径(10.6) 残高 7.5	複合口縁壺。口縁部は無文。	口ハケ→ヨコナデ 頸ハケ	ハケ	黄褐色 灰褐色	石、長（1～3） ◎	Ⅱ層	
76	壺	底径（4.0） 残高 4.6	底部。小さい平底。	ハケ	ハケ（マメツ）	茶褐色 灰茶色	石、長（1～5） ◎	Ⅱ層	
77	坏蓋	口径(15.2) 残高 3.6	丸みをもって口縁部にいたる。口縁端部は丸い。	口回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅱ層	
78	坏身	口径(12.5) 残高 2.8	内傾する短いたちあがり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅱ層	
79	不明	底径（7.7） 残高 1.7	脚部小片。ゆるやかに外反する裾部。小円孔をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅱ層	
80	甕	口径(28.0) 残高 8.3	稜をもって外反する口縁部。	口端ナデ 口マツメ	口マツメ 胴ナデ	黄褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎	Ⅲ-①層	
81	壺	口径(26.0) 残高 1.4	口縁部小片。口縁端部に凹線3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～2） ◎	Ⅲ-①層	
82	壺	残高 2.5	頸部小片。斜格子目の刻目突帯文。	マツメ	ハケ→ナデ	茶褐色 灰茶色	石、長（1～2） ○	Ⅲ-①層	
83	壺	残高 4.4	頸部小片。断面三角形の突帯文。	マツメ	マツメ	橙褐色 灰黄色	石、長（1～3） ◎	Ⅲ-①層	
84	壺	底径 6.9 残高 5.2	底部。厚い平底。	ハケ	ハケ→ナデ	茶色 淡茶色	石、長（1～3） 金 ○	Ⅲ-①層 黒斑	
85	壺	底径 9.3 残高 4.5	底部。厚い平底。	ハケ	ハケ	暗褐色 暗褐色	石、長（1～4） ◎	Ⅲ-①層	
86	壺	底径 3.0 残高 3.8	底部。小さい平底。	ハケ	板ナデ	淡茶色 赤茶色	石、長（1～3） ◎	Ⅲ-①層 黒斑	
87	壺	口径(27.9) 残高（3.4）	大きく外反する長い口頸部。口縁端部は垂下し、刻目をもつ。	マツメ	マツメ	橙茶褐色 淡橙褐色	石、長（1～3） ◎	Ⅲ-①層	37
88	鉢	底径（4.5） 残高 3.7	底部。くびれの上げ底。	ハケ	ナデ	黒褐色 黄褐色	砂粒 ○	Ⅲ-①層	
89	鉢	底径 1.0 残高 3.8	底部。小さく突出する平底。	ハケ	マツメ	黄褐色 橙褐色	石、長（1～5） ◎	Ⅲ-①層	
90	高坏	残高 9.5	脚部。柱部に円孔をもつ。	ハケ	シボリ痕	乳茶色 乳茶色	石、長（1～5） ◎	Ⅲ-①層	
91	高坏	底径(19.5) 残高 3.1	脚部。大きく開く裾部。	マツメ	マツメ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎	Ⅲ-①層	

表47　その他の出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
92	甕	口　径(16.2) 残　高　4.1	口縁部小片。内湾してたちあがる口縁部。	マツメ	ナデ	茶色 茶色	砂粒 ◎		
93	甑	残　高　7.3	握手部。厚く、上方にたちあがる。	ナデ	ナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	石、長（1～2） ◎		
94	坏蓋	口　径(12.8) 残　高　2.8	口縁部片。丸みをもって口縁部にいたる。口縁端部は丸い。口縁外面に工具痕。	(口端)キザミ (日)回転ナデ (1部ヘラケズリ)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		37
95	坏蓋	残　高　2.5	天井部片。焼成前の線刻がある。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
96	坏身	口　径(13.1) 残　高　1.8	坏部小片。内傾する短いたちあがり。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
97	坏身	口　径(13.5) 残　高　2.2	坏部小片。内傾する短いたちあがり。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
98	壺	底　径(14.6) 残　高　2.5	脚部片。透し孔をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
99	椀	底　径（7.0） 残　高　1.5	内黒椀。輪高台部はマツメする。	ヨコナデ	ミガキ	黒色 乳黄色	密 ◎	内黒	

その他の出土遺物観察表（石製品）

(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅（cm）	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
100	石庖丁	完形	結晶片岩	8.2	4.3	0.8	44.0	製品・欠損品 SP113	37
101	砥石	約1/2	不明	(20.3)	(7.7)	(5.3)	1370.0	SP113	37
102	石器素材	完形	結晶片岩	15.3	6.8	1.2	215.8	地点不明	37
103	石器素材		結晶片岩	13.4	3.8	0.8	73.8	地点不明	37
104	砥石		不明	(14.5)	(4.3)	5.2	554.0	Ⅲ—①層	37
105	不明		不明	(3.8)	3.8	1.8	32.7	地点不明	37

第６章　調査の成果と課題

本書では、石井・浮穴地区内における４遺跡の調査報告と、関連遺跡の資料報告を行った。

（１）石井地区

石井地区は、平野の中央部、小野川と内川とに挟まれた地域を呼称する。この地区では、本書掲載の石井東小学校構内遺跡・越智遺跡・石井幼稚園遺跡（１次調査）・西石井荒神堂遺跡が本格的に行われた遺跡の調査といえる。しかし、これ等の調査以降現在まで、同地区内では調査数は極めて少ない。それゆえ今回の報告は、石井地区の遺跡の実態を具体的に現すものとして位置付けられるものである。以下、時代ごとに注目される資料を取り上げていく。

弥生時代

前期前半の墓と土坑が、石井東小学校構内遺跡で確認されたが、これは現在においても、松山平野で最も古い弥生時代の遺構群である。松山平野では弥生時代前期前半の集落資料は少なく、石井東小学校構内遺跡の周辺地は調査を要する地域といえる。

後期前半の唯一の資料として石井幼稚園遺跡２次の土坑ＳＫ４がある。これまで、石井地区の弥生時代資料は前期後半以降後期後半にいたるまで良好な資料がなかっただけに、本資料の確認は、石井地区の遺跡動態を考える上では重要なものである。

後期後半～終末では、石井東小学校構内遺跡で竪穴式住居址が多数検出され、石井地区の中心的な集落地帯といえる。その一方で、越智遺跡では土坑、西石井荒神堂遺跡では墓と住居址が検出されており、石井地区のなかで幾つかの居住域が存在しているようである。

古墳時代

石井東小学校構内遺跡のＳＤ５は古墳の周溝と思われ、周辺にも古墳が存在することを推測させる資料である。松山平野の古墳立地は、丘陵部や山間部が大多数を占めているが、ＳＤ５は平野内においては数少ない沖積地上の古墳となり、平野における墳墓形成研究の新たな視点を示したことになる。

古代～中世

石井東小学校構内遺跡の溝ＳＤ４や自然流路はこの時代のものであり、集落の存在と集落経営における水利に関する資料を得たことになる。また、石井幼稚園遺跡２次調査地の掘立柱建物は、規模も大きく、継続的な建物である。建物の評価は課題となったが、石井地区の集落研究にとって重要な資料になり得るかもしれない。

遺物では、石井東小学校構内遺跡出土の須恵器のナベが注目される。香川県十瓶窯産の土器と形態が類似するが、細部に異なりをみせている。生産地や流通等の研究にとって一つの資料になるものであろう。

（２）浮穴地区

浮穴地区は、平野の南部、内川と重信川に挟まれた沖積低地にあたる。この地区内では現在知られている遺跡数や調査数は極めて少ない。そのなかにあって浮穴小学校構内遺跡は４次の調査と１度の立ち会い等、調査資料に恵まれ、浮穴地区の考古学資料の主体をなすものである。

弥生時代

弥生時代資料は、後期後半まで良好な資料はなく、管見するなかには前期～中期の資料はみあたら

ない。

浮穴小学校構内では、調査地点及び表採地点からは、必ず弥生時代後期後半～終末の土器が出土し、加えて、２・３次調査では溝と墓が検出されている。これは、小学校一帯が居住空間として利用可能になったのが、弥生時代後期後半以降ということを示したものである。ただし、未だ竪穴式住居址の検出はなく、推定地としては地形がやや高い構内北側が候補としてあげられる。

古墳時代

浮穴小学校構内遺跡３次調査の竪穴式住居ＳＢ１は、５世紀末～６世紀初頭のものである。近年の調査では、小学校の北方で古墳時代の水田が検出されており、その関係が興味深い（愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995)。小学校構内の包含層からは、６世紀代の須恵器が出土することより、小学校及びその一帯に集落が展開していたことは間違いないであろう。今後の調査に期待したい。

（３）結　び

石井・浮穴内では、まず石井地区で弥生時代前期に居住域としての土地利用がはじまる。ただし、集落が活発に展開しはじめるのは後期になってからである。後期後半～終末になると、石井地区の各地で集落が展開し、また浮穴地区でも集落が出現し、その内容も充実したものになる。例えば、石井と浮穴の境界地（内川の北側）には周溝墓や鍛冶工房をもつ集落が出現し（北井門遺跡)、石井地区内では井門町内と越智町内で青銅鏡が各一面出土するなど、平野内の主要な集落の一つになっている。浮穴地区は古墳時代後期に、平野で最も大きい波賀部神社古墳が久米地区との境界付近に築造され、古代には浮穴郡の名称が付加され、古墳時代後期以降に平野の主要な地域になっていく。

さて、石井・浮穴は重信川中～下流域内にあるが、今回これまで資料が稀薄であった河口域の考古資料を取り上げた。古泉遺跡は、管見の限りでは重信川流域では最も河口に近い遺跡である。出土品からすると弥生時代中期前葉には集落が出現していたことは間違いなく、さらには重信川河口域においても弥生時代終末をむかえ本格的に集落が展開しはじめたことが推定される。石井・浮穴地区を含め、重信川の中～下流域及び河口域は、弥生時代終末にいたって各地で集落が急増していったと考えてよいだろう。

石井・浮穴の地域には、未だ確認されていない遺跡が多数あることが、今回の調査で充分に推定される。重信川流域の弥生～古墳時代の研究は、今後の調査に期待するところが大きい。

以上で、本書の調査に関する報告はおわりである。調査から報告までの期間が長いことにより、記録として適切に保存することができなかった調査資料が多い。よって、多くの重要な資料が、未報告及び不充分な報告となった。調査担当者及び調査関係者には、調査成果を有効に提示できなかったことに対し、お詫びを申し上げます。

〔文献〕

㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1995　『埋文えひめ』第21・22号

附章１　浮穴小学校構内遺跡出土資料

１．はじめに

浮穴小学校構内では、これまでに４次の調査がなされている。１次調査は、昭和49年に運動場東側、現在の国旗掲揚台がある場所において土器を採取したものである。これは工事に伴うもので、遺物の取り上げが主体となり、本格的な調査にはいたらなかった。２次調査は、昭和52年に給食室の建設に伴う本格的な調査で既に報告がなされている（森　光晴 1980）。３次調査は昭和59年の校舎建設に伴う本格的な調査で、本書第２章で報告したものである。４次調査は、平成元年に配管設置に伴う確認調査として実施したものであった。なお、昭和61年に構内南端の水路建設に伴って、立会い調査を行っている。

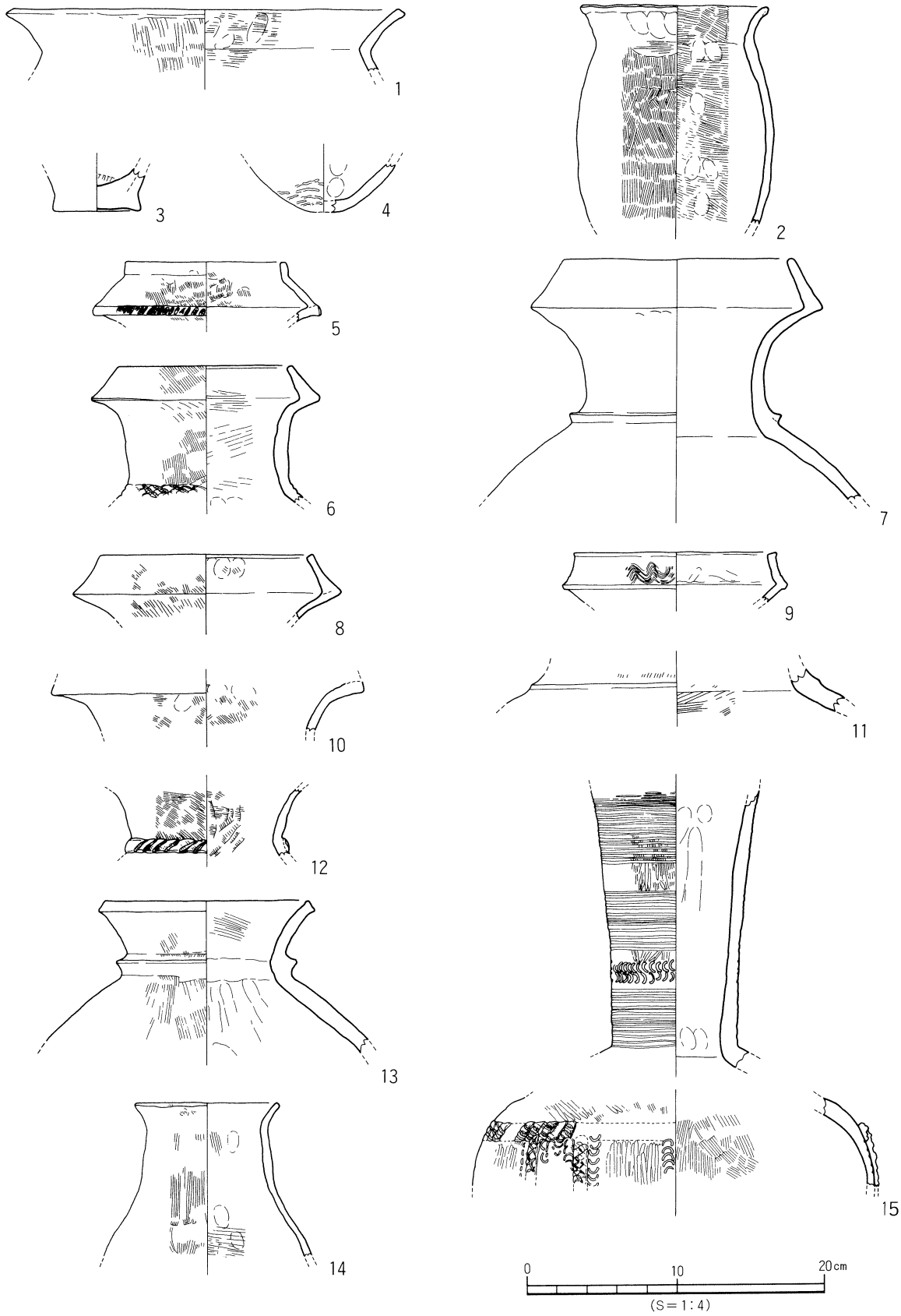
ここでは、報告が行われていない１・４次調査、報告が不十分であった２次調査について、新規の報告と追加報告を行い、浮穴小学校構内遺跡の資料の充実につとめるものである。

２．資　料

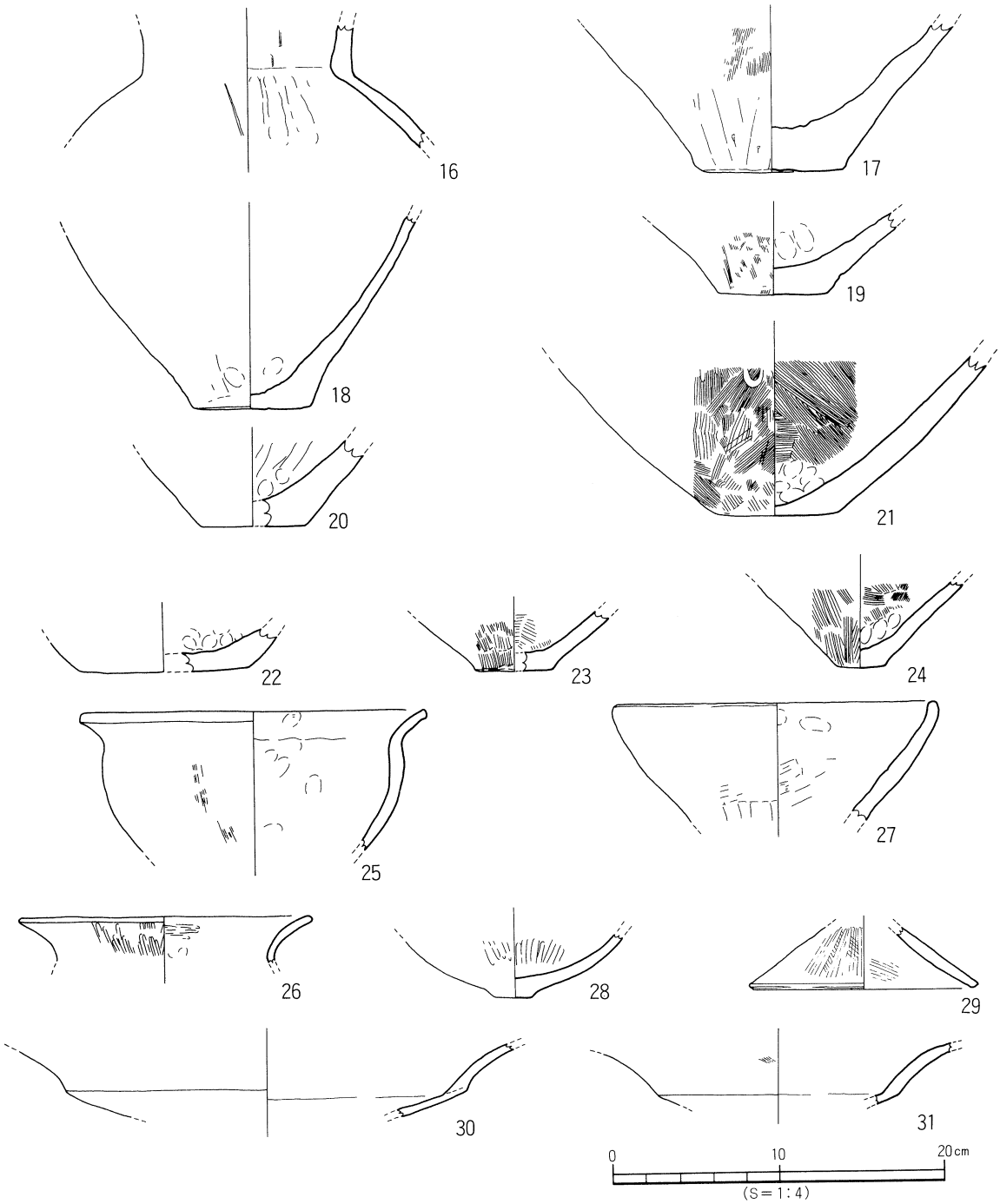
（１）１次調査（第４図、図版38）

昭和49年８月に、国旗掲揚台の設置に伴って調査をした。地表下約90cmに黒色粘質土があり、土器が集中して出土した地点がある。出土品は大多数が弥生土器で、少量の須恵器も採取した。弥生土器は破片も大きく、集中して出土したことより遺構に伴う可能をもっている。

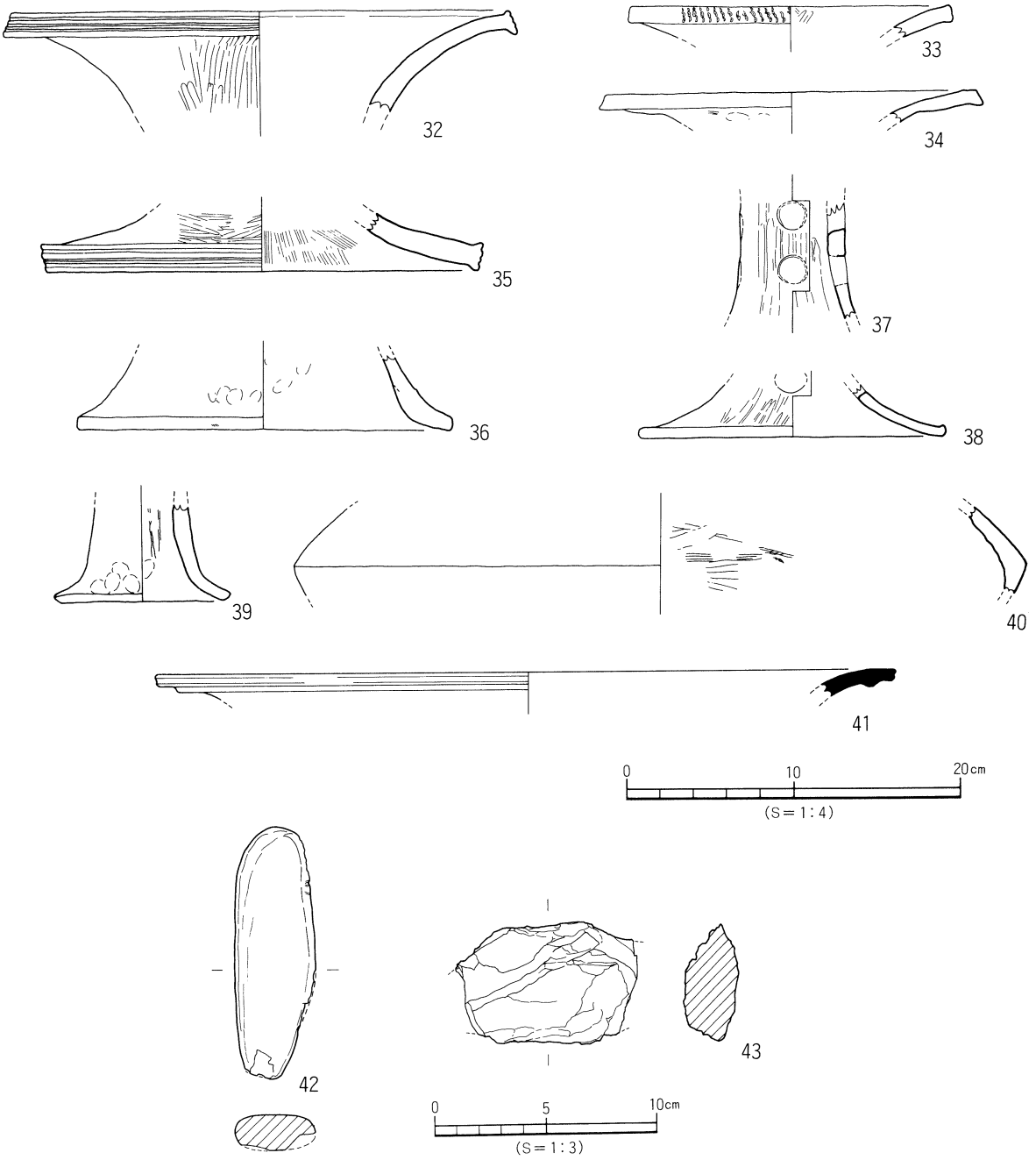
出土遺物（第75～77図、図版38）　１～40は弥生土器である。１～４は甕形土器で、２はゆるやかに上外方に開く口縁部をもつ。口縁端部外面に粘土帯の接合跡を看取する。５～24は壺形土器である。５～12は複合口縁壺で、６～８の口縁部は無文、９はクシ描波状文を施す。10は二次口縁が欠落したもので、擬口縁をみることができる。13は短頸壺、14は頸部が内傾する長頸壺となる。15は細長頸の直口壺で、加飾が著しい。頸部にはクシ描の多条沈線文と半截竹管文を施す。胴上半部には刻目を施した棒状浮文を多数貼付け、半截竹管文をも施す。17～24は底部で、平底が共通する。25～29は鉢形土器である。25・26は口縁部が外反し、27は直口口縁となる。29は台付鉢で、直線的に開く裾部をもつ。30・31は高坏形土器で、大きく外反する長い口縁部をもつ。32～38は器台形土器である。32～34は受部片で、口縁部はしっかりと面をなす。32は沈線文３条、33は押圧文を施す。35～38は柱部～裾部片で、35には脚端部に沈線文、37・38には円孔が施される。39は支脚形土器で、ゆるやかに開く裾部をもつ。40は器種と器形が判断できない。明瞭に屈折する部位をもつ。大型品である。以上の弥生土器は、後期後葉～終末期に属するものである。41は須恵器で、大型の甕である。６ｃ。42・43は石製品で、42は結晶片岩製で用途は特定できない石器である。43は土掘具の可能性がある。



第75図　1次出土遺物実測図（1）



第76図　1次出土遺物実測図（2）



第77図　1次出土遺物実測図（3）

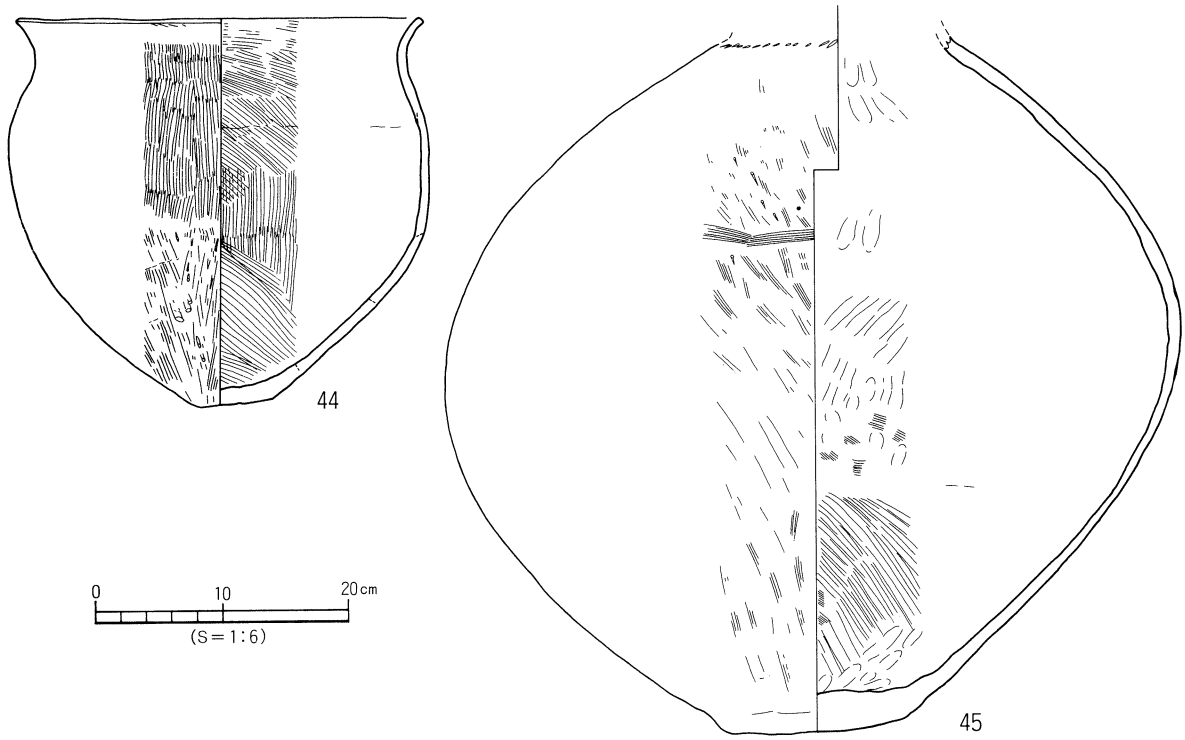
（２） ２次調査（第４図、図版39・40）

既に、昭和56年に報告がなされている（森　光晴 1980）。検出遺構は近現代を除くと、弥生時代後期の溝１条と土器棺墓３基となる。遺構の詳細は報告書を参照していただき、ここでは、未掲載になった土器棺の実測図を提示する。

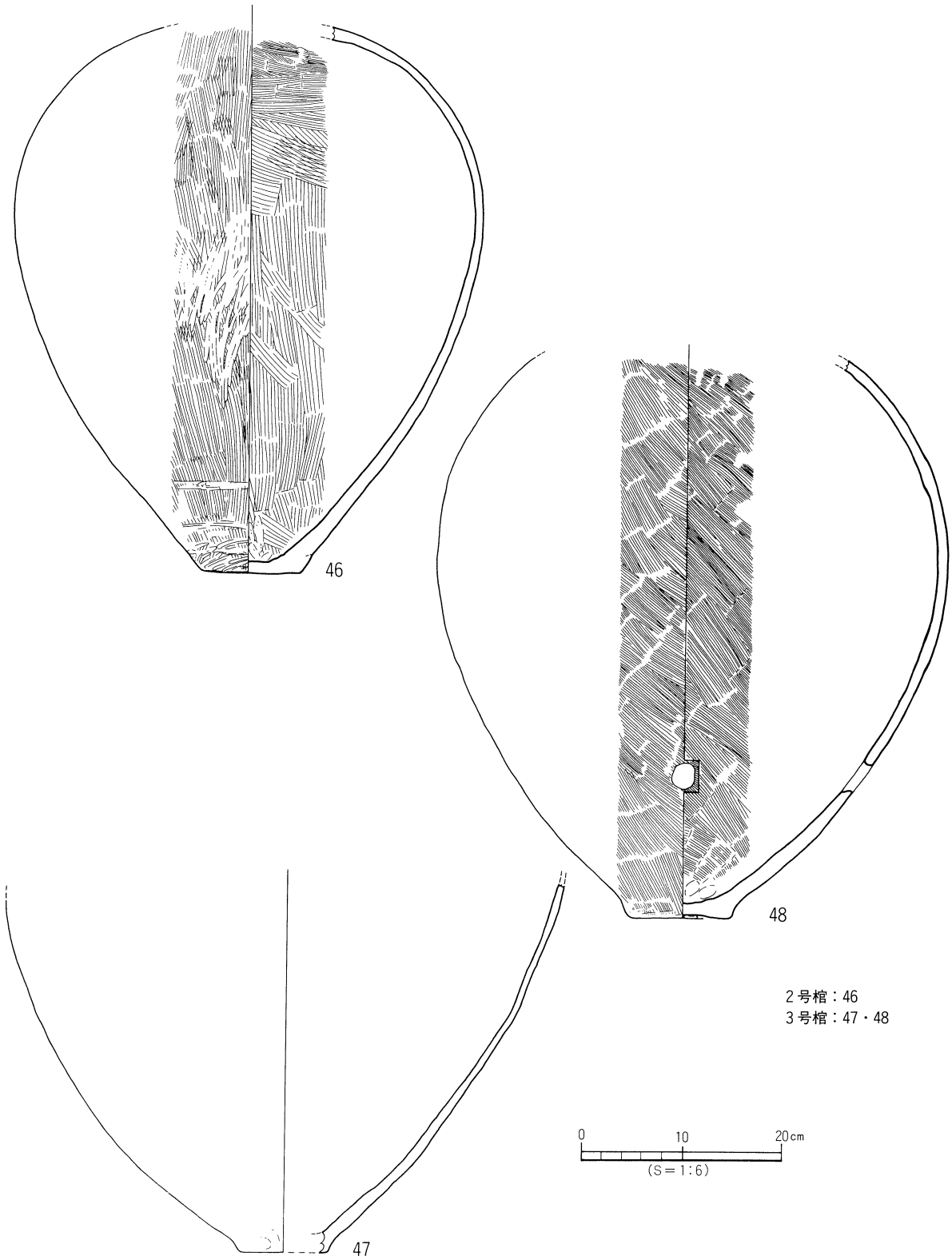
１号墓（ＴＰ１）：第78図44・45は１号墓（ＴＰ１）出土品で、44が棺蓋、45が棺身となる。44は、ゆるやかに上外方に開く口縁部、胴上半部はやや張りをもち、胴下半部は直線的にすぼまり、平底の底部をもつ。45は、口～頸部を欠落させて棺身としたものである。胴中位が強く張り、肩部と胴下半部の張りは弱い。頸部下端には「ノ」の字状の刺突文が巡る。底部はあいまいなたちあがりをもち、厚い平底になる（図版39・41）。

２号墓（ＴＰ２）：第79図46は、２号墓（ＴＰ２）出土品である。46は棺身で、２号墓の棺蓋は後世に大きく削平され極一部を残すにすぎない（棺蓋は未掲載）。46は、口～頸部を打ち欠いて棺身としている。肩部が張り、胴下半部は張りが少なく、底部にいたる。底部はあいまいなたちあがりをもち、平底になる（図版40・43）。

３号墓（ＴＰ３）：第79図47・48は、３号墓（ＴＰ３）出土品である。47は棺蓋、48は棺身となる。47は口縁部～胴上半部までを打ち欠いて使用する。胴下半部はわずかにふくらみ、外傾するたちあがりをもつ底部につづく。底部はその多くを欠損する。48は口縁部～頸部を打ち欠いている。胴上半部が丸く張り、胴下半部の張りは弱い。底部は外傾するたちあがりをもち、わずかに上がる上げ底となる。胴下半部に焼成後の穿孔を１ヶもつ（図版40・42）。



第78図　２次出土１号壺棺実測図（1）

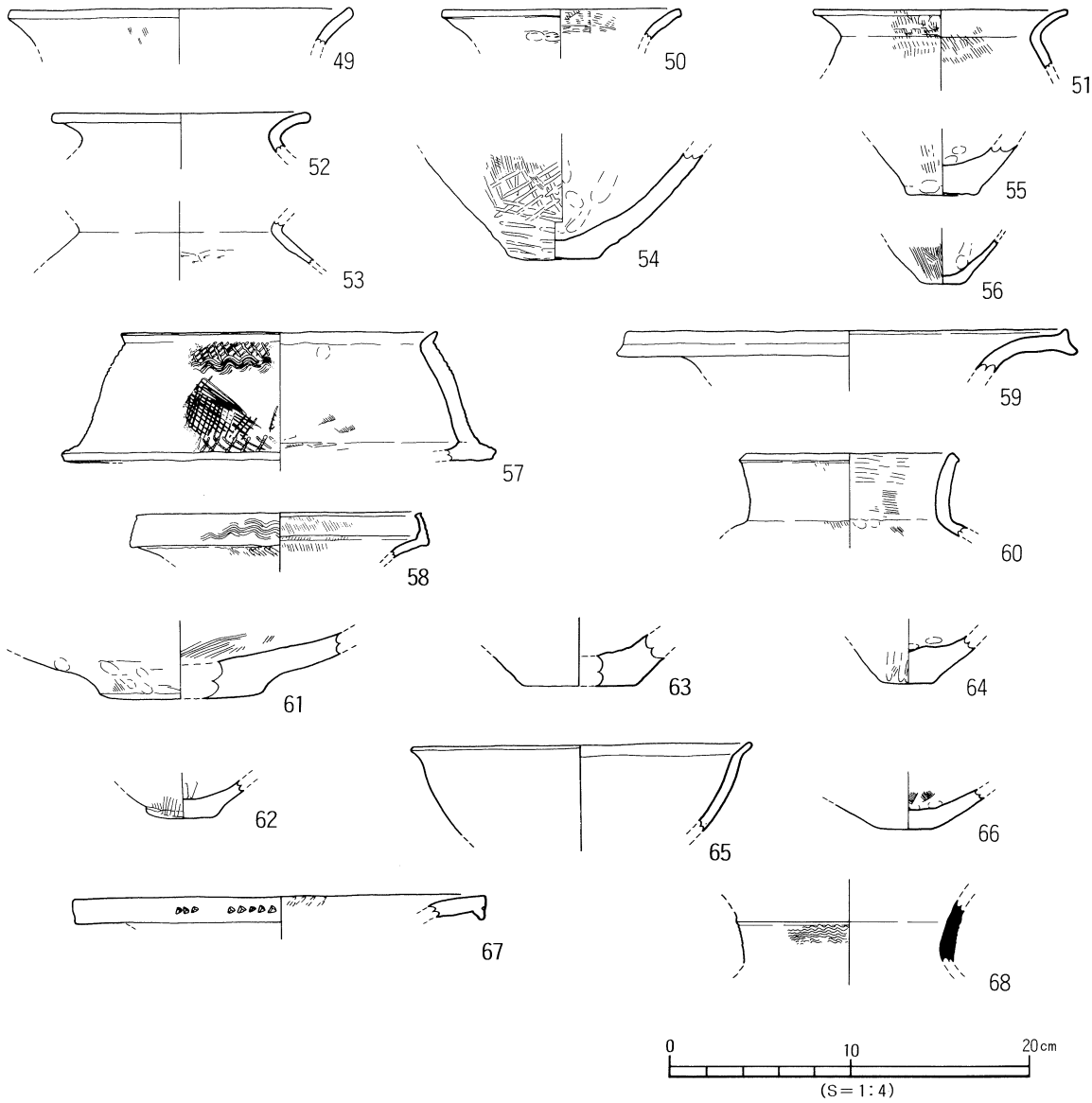


第79図　2次出土2・3号壺棺実測図（2）

（3） 4次調査（第4図、図版44）

調査は、平成7年5月に、構内西側の体育館周囲に設置する配管施設に伴い実施した。検出遺構はなく、土層の堆積を確認するとともに、黒色土から土器を採取した。調査によって確認した土層は、Ⅰ層表土、Ⅱ層明黄褐色土、Ⅲ層灰白色粘質土、Ⅳ層黄灰色粘質土、Ⅴ層暗灰褐色粘質土、Ⅵ層茶褐色粘質土、Ⅶ層黄色粘質土、Ⅷ層黄褐色土である。

出土遺物（第80図、図版44）　49～67は第Ⅵ層茶褐色粘質土中から出土した弥生土器である。49～56は甕形土器で、49～52の口縁部は「く」の字状に大きく外反する。53は口縁屈曲部のやや下（内面）にケズリによる稜をもち、畿内の古式土師器の特徴をそなえている。54～56は底部で、54は叩き痕がみられる。57～64は壺形土器である。57・58は複合口縁壺で、57の口縁部は加飾が著しい。59は口頸部が大きく開き、口縁端部が広い面となり、ナデ凹む。60は直立ぎみにたちあがる短い口頸部をもつ。61～64は底部で、たちあがりをもつ底部と単純な平底とがある。65・66は鉢形土器である。65



第80図　4次出土遺物実測図

は内面に稜をもって外反する口縁部をもつものである。66は底部で、やや厚い平底になる。67は器台形土器で、口縁部片である。口縁端部は拡張し、刺突文を施す。49～67の弥生土器は、いずれも弥生時代後期後葉から終末に属するものである。

68は廃土からの採取品である。須恵器の壺の頸部片で、波状文をもつ。６ｃ。

３．小　結

浮穴小学校構内の遺構は、弥生時代後期後半と古墳時代５世紀末～６世紀初頭に時期が限定できる。また、出土物も同時期に属するものが大多数を占め、６世紀後半以降の資料は数点に限られている。構内北側が未調査であるが、浮穴小学校構内遺跡の主要な時期はこの二つと考えてよいだろう。

弥生時代後期後半の様相は、溝と土器棺墓が検出されているが、２次調査ＳＤ01と３次調査ＳＤ１は位置、溝幅、断面形態から同一遺構の可能性が高く、出土物より終末期の水利に関係する溝と考えられる。土器棺墓は２次調査で、ＴＰ１～３の三基を検出した。これ等の土器棺墓は最も離れているＴＰ１とＴＰ３間でも約６ｍと距離は短く、土器棺墓は狭い範囲で、群を成しているものと理解できる。平野内の後期後半の壺棺墓は、朝美澤遺跡・福音小学校構内遺跡・砥部町水満田遺跡等があるが、いづれも３基前後で群集して検出される例が多い。よって本例は、平野における後期後半の墓制の典型資料といえるだろう。

古墳時代５世紀末～６世紀初頭は、３次調査地で竪穴式住居址１棟を検出しているが、このほかには資料が確認されていない。しかし、住居が１棟だけでなるとは考え難く、構内とその南側では竪穴式住居が検出される可能性は高いだろう。また、須恵器片が数点出土している。いづれも小片であるが、構内とその一帯に当該期の遺構が存在する可能性を示唆したものであり、留意したい資料である。

以上のように、浮穴小学校構内には、良好な状態で遺跡が遺存している。平野南部の主要な遺跡として評価されるものであり、小学校を含む一帯の今後の調査と、研究に期待したい。

なお、昭和40～50年代にプールの改築に際し、弥生土器が出土している。土器は工事関係者が採取し、学校へ届けているとのご教示を森　光晴氏から得た。今回は時間の関係により、同資料については提示できなかったことを記しておく。

〔文献〕

森　光晴　1980　『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会

表48　1次出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(25.5) 残高 4.2	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	ハケ	茶褐色 黄茶色	石、長（1～4） 安 ◎		
2	甕	口径 12.7 残高 14.8	ゆるやかに上外方に開く口縁。	㊐ナデ ㊐ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
3	甕	底径（5.6） 残高 2.9	くびれ上げ底。	ヨコナデ	マツメ	灰褐色 乳黄茶色	石、長（1～3） ◎		
4	甕	残高 3.1	丸みをもった平底。	タタキ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
5	壺	口径(16.1) 残高 4.0	複合口縁壺。口縁部は無文。接合部は面となり、板状木口の刻目文。	ハケ（1部ナデ）	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） 安 ◎		
6	壺	口径(10.5) 残高 9.0	口縁部は無文。頸部下端に斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～4） ◎		
7	壺	口径 15.3 残高 16.3	口縁部は無文。頸部下端は断面三角形の突帯文。	マツメ	マツメ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
8	壺	口径(14.3) 残高 4.4	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ハケ→ナデ ㊐ハケ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） 安 ◎		
9	壺	口径 13.5 残高 3.2	複合口縁壺。口縁部に6条のクシ描波状文。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～2） ◎		
10	壺	残高 3.3	複合口縁壺。口縁部欠損。擬口縁を看取。	ハケ→ナデ	ハケ（1部ナデ）	黄褐色 乳黄褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
11	壺	残高 3.0	複合口縁壺。頸部下端に扁平な断面三角の突帯文。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄茶褐色	石、長（1～4） ◎		
12	壺	残高 4.5	複合口縁壺。頸部下端に板状木口による刻目突帯文。	ハケ	ハケ	黄褐色 乳灰黄色	石、長（1～4） 安 ◎		
13	壺	口径(13.6) 残高 10.4	短く外傾する口縁部。頸部下端に断面三角形の突帯文。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ナデ	淡茶褐色 淡黄茶色	石、長（1～4） ◎		
14	壺	口径（9.4） 残高 10.4	内傾する長い頸部。短く外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	明黄茶色 茶褐色	石、長（1～4） ◎		
15	壺	残高 18.8 胴残高 6.1	頸部文様：沈線16～17条、11条、12条と半截竹管2段。胴部文様：刻目突帯と半截竹管。	ハケ→ミガキ	㊐ナデ ㊐ハケ	茶褐色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		38
16	壺	残高 7.1	直立する頸部下半。肩部は張る。	ナデ	ナデ	黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～3） 安 ◎		
17	壺	底径 8.6 残高 8.8	大きい平底。器壁が厚い。	ハケ(1部ケズリ)	マツメ	灰褐色 灰褐色	石、長（1～7） 金 ◎		
18	壺	底径 7.0 残高 11.8	あいまいなたちあがりをもつ平底。	マツメ	マツメ	黄茶色 乳茶色	石、長（1～5） シャモット ◎		
19	壺	底径 6.6 残高 5.0	大きい平底。器壁が厚い。	ハケ	マツメ	黄灰色 乳黄色	石、長（1～3） ◎		

1次出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
20	壺	底径 (6.0) 残高 5.2	平底。器壁が厚い。	マツメ	ナデ	橙褐色 黄茶色	長、安（1～4） ◎		
21	壺	底径 (7.6) 残高 9.7	あいまいなたちあがりをもつ平底。	ハケ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	
22	壺	底径(10.1) 残高 2.5	大きい平底。	マツメ	ナデ	明茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 安 ◎		
23	壺	底径 (4.6) 残高 3.6	わずかにたちあがりをもつ平底。	ハケ	ハケ	黄褐色 乳灰茶色	長、安（1～3） ◎		
24	壺	底径 2.9 残高 5.2	小さい平底。底部は厚い。	ハケ	ハケ	灰黄色 黒灰色	砂粒 金 ◎		
25	鉢	口径(20.8) 残高 8.5	ゆるやかに外反する口縁部。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ→ナデ	㊐ヨコナデ ㊐ナデ	乳黄茶色 灰黄色	砂粒 ◎		
26	鉢	口径(17.6) 残高 2.8	大きく開くやや長い口縁部。	ミガキ	ミガキ	淡茶色 灰黄色	密 ◎		
27	鉢	口径(19.1) 残高 7.2	直立する直口口縁。	ミガキ(マメツ)	ナデ	淡茶褐色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
28	鉢	底径 2.3 残高 3.8	小さく突出する平底。	ミガキ	ミガキ	淡褐色 淡茶色	密 ◎		
29	台付鉢	底径(13.7) 残高 3.8	「ハ」の字状に開く裾部。	ハケ→ミガキ	ハケ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
30	高坏	残高 4.3	大きく開く坏口縁部。	マツメ	マツメ	灰黄色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
31	高坏	残高 3.7	大きく開く長い坏口縁部。	マツメ	マツメ	黄茶褐色 乳茶褐色	砂粒 ◎		
32	器台	口径(29.4) 残高 6.1	口縁端部は上下に拡張。端面には3条の沈線文。	ハケ→ミガキ	マツメ	橙褐色 淡橙褐色	石、長（1～2） ◎		
33	器台	口径(19.1) 残高 1.9	口縁端部は面をなし、端面には3段の押圧文。	マツメ	ミガキ？	黄茶色 暗黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
34	器台	口径(23.0) 残高 1.8	口縁端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	マツメ	淡褐色 橙褐色	砂粒 ○		
35	器台	底径(25.6) 残高 3.5	脚端部は上下に拡張し、端面には3条の沈線文。	ミガキ	ハケ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～5） ◎		
36	器台	底径(22.0) 残高 4.4	ゆるやかに開く裾部。	ナデ	ナデ	乳黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～2） ◎		
37	器台	残高 7.1	柱部には2段以上で、一段が2ヶ以上の円孔（φ1.8cm）をもつ。	ミガキ	シボリ痕	茶褐色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
38	器台	底径(18.4) 残高 3.1	裾部には円孔（φ2.0cm）を1ヶ以上もつ。	ハケ→ミガキ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石、長（1～2） ◎		

1次出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	支脚	底径(10.4) 残高 5.8	ゆるやかに開く裾部。	ナデ	ナデ (1部シボリ痕)	淡褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
40	不明品	残高 5.2	器種・器形不明品。屈折する部位をもつ。	マツメ	ハケ（工具痕）	乳茶色 橙茶色	石、長（1～4） ◎		38
41	甕	口径(44.2) 残高 1.6	端部は凹む。突線を1条もつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

1次出土遺物観察表（石製品）

(4)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
42	用途不明	ほぼ完存	結晶片岩	11.3	3.6	1.6	112.7		38
43	土掘具？	約1/3	不明	8.1	5.5	2.4	130.6		38

表49　2次出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
44	鉢	口径(31.0) 器高 30.4 底径 5.6	胴上半部が張る。ゆるやかに上外方にたちあがる口縁部。平底。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴上)ハケ (胴下)ハケ→ケズリ	ハケ	暗茶色 暗黄褐色	石、長（1～5） ◎	1号 棺蓋	41
45	壺	底径 7.0 残高 53.5	胴中位が最も張る。頸部下端に「ノ」の字状の刺突文列。あいまいなたちあがりの厚い平底。	ハケ→ミガキ?	(胴上)ハケ→ナデ (胴下)ハケ	灰黄色 黄褐色	石、長（1～2） 金 ◎	1号 棺身	41
46	壺	底径 10.0 残高 53.6	肩部が強く張る。あいまいなたちあがりとなる平底。	ハケ→1部ミガキ	ハケ	淡茶褐色 淡灰色	石、長（1～3） ◎	2号 棺身	43
47	壺	底径 (8.7) 残高 35.9	ななめにたちあがる厚い平底。	マツメ	マツメ	橙茶褐色 橙茶褐色	石、長（1～5） ◎	3号 棺蓋	42
48	壺	底径 9.4 残高 55.4	胴部全体にゆるやかなふくらみをもつ。あいまいなたちあがりをもつ、上げ底。	ハケ	ハケ	橙褐色 灰黄色	石、長（1～4） ○	3号 棺身	42

表50　4次出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
49	甕	口径(18.5) 残高 2.0	外反する短かい口縁部。	マツメ	ヨコナデ	暗黄褐色 乳黄褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
50	甕	口径(13.3) 残高 1.7	外反する短かい口縁部。	ヨコナデ	ハケ	乳黄色 乳黄色	砂粒 金 ◎		
51	甕	口径(13.6) 残高 3.5	稜をもって外反する口縁部。	ハケ（1部ナデ）	(口)ハケ→ナデ (胴)ハケ	灰褐色 灰褐色	砂粒 金 ◎		
52	甕	口径(13.6) 残高 2.4	ゆるやかに大きく外反する口縁部。	マツメ	マツメ	乳黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎		
53	甕	残高 2.4	内面にケズリによる稜をもつ。	マツメ	ケズリ（1部ナデ）	乳黄色 乳黄色	砂粒 金 ◎	外来系	

4次SP出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
54	甕	底径 5.0 残高 5.9	平底。底部は厚い。	タタキ→ハケ	ナデ	灰褐色 黒褐色	石、長、安(1~2) ◎		
55	甕	底径 3.6 残高 2.8	あいまいなたちあがりをもつ底部。底部はわずかにあがる。	ハケ	ナデ	灰褐色 暗灰色	石、長、安(1~3) ◎		
56	甕	底径 2.6 残高 2.4	小さい平底。	ハケ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石、長（1~2） ◎		
57	壺	口径(17.4) 残高 7.2	口縁部文様：斜格子目文、3条クシ描波状文、斜格子目文充填の三角形文、斜格子目文。	ナデ	ハケ→ナデ (マメツ)	淡茶褐色 淡灰褐色	石、長（1~3） ◎		44
58	壺	口径(15.6) 残高 2.5	複合口縁壺。口縁部には6条のクシ描波状文。	ナデ	ハケ	灰黄褐色 灰黄褐色	石、長（1~3） ◎		
59	壺	口径(24.4) 残高 2.2	口縁部は大きく開く。口縁端部はやや拡張し、端面はナデ凹む。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄茶色	石、長（1~2） ○	黒斑	
60	壺	口径(12.2) 残高 4.6	上外方へ直線的に開く口頸部。	マメツ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1~2） ◎		
61	壺	底径 (9.0) 残高 3.0	たちあがりをもつ平底。底部は厚い。	ナデ	ハケ	淡褐色 黒灰色	石、長（1~2） ◎	黒斑	
62	壺	底径 2.9 残高 1.9	あいまいなたちあがりをもつ平底。	ハケ	マメツ	黄灰色 乳黄色	石、長（1~2） ◎		
63	壺	底径 (6.0) 残高 2.2	平底。	マメツ	マメツ	淡褐色 乳灰色	石、長（1~2） ◎		
64	壺	底径 2.7 残高 2.8	あいまいなたちあがりをもつやや小さい平底。	ハケ→ミガキ?	ナデ	乳桃色 乳灰色	密 ◎		
65	鉢	口径(18.8) 残高 5.0	稜をもって外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 灰黄褐色	石、長（1~2） ◎		
66	鉢	底径 3.0 残高 2.2	平底。底部は厚い。	マメツ	ハケ	淡褐色 茶褐色	石、長（1~2） ◎	黒斑	
67	器台	口径(22.8) 残高 1.4	口縁端部は垂下する。端面には刺突文。	マメツ	ハケ→ミガキ	淡褐色 黒灰色	石、長（1~2） ◎		
68	壺	残高 3.5	7条のクシ描波状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		44

附章２　西石井荒神堂遺跡出土資料

１．はじめに

西石井荒神堂遺跡は、松山市西石井町244番地の１に所在し、住宅建設に伴う発掘調査である。調査は昭和51（1976）年11月16日～同年12月16日に行い、弥生時代の竪穴式住居址１棟（ＳＢ01）、土壙墓（ＴＰ１～５）、土坑１基等を検出している。調査の成果は、昭和56（1981）年に既に報告されたが、出土品の実測図は、その一部しか掲載できなかった。よって、本章では未掲載となった主要遺構の出土品に対し実測図を掲載し、石井地区の遺跡研究の基礎資料を提示するものである。ただし、遺構の詳細や出土状況等は、報告書を参照していただきたい（森　光晴 1980）。

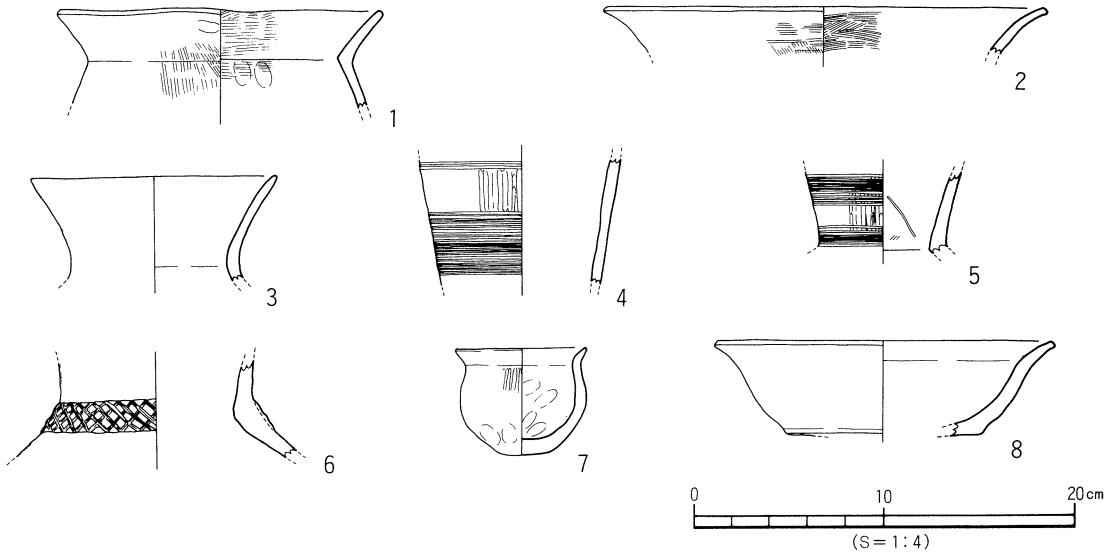
２．資　料

１）住居址

１号竪穴式住居址（ＳＢ01）

直径が６ｍの円形の竪穴式住居址である。住居址の約２分の１を検出している。出土遺物には少量の土器片と炭化材がある。

出土遺物（第81図１～８、図版45）　１・２は甕形土器で、１は内面に稜をもって外反する口縁部をもつ。３～６は壺形土器である。３は上外方にゆるやかに開くやや長い口頸部をもつ。４・５は直線的にたちあがる長い口頸部をもつもので、頸部には多条沈線文を２組以上もつ。４・５の胴部は扁平球を呈するものである。６は頸部片で、斜格子目の刻目突帯文をもつ。７は鉢形土器で、小型品である。ゆるやかに外反する口縁部に、平底の底部をもつ。８は高坏形土器の坏部である。口縁部はゆるやかに外反する。



第81図　PD１出土遺物実測図

2）墓

3号土壙墓（ＴＰ３）

直径70㎝、深さ140㎝の円形の土壙墓である。上部の土層から土器が多数出土している。

出土遺物（第82図９～21、図版45）　９・10は甕形土器で、ゆるやかに外反するやや長い口縁部をもつ。10は胴下半部～底部の破片で、上げ底の底部は直立するたちあがりをもつ。11～18は壺形土器である。11～15は複合口縁壺である。11～13は口縁部片で、12の口縁部にはクシ描波状文をもつ。14・15は肩部片で、頸部下端には刻目突帯文をもつ。16は完形品である。口頸部は短く、ゆるやかに上外方に開く。胴部はややふくらみ肩部が張る。底部は平底で、あいまいなたちあがりをもつ。17は完形品である。長胴で内傾する頸部、短く開く口縁部をもつ。底部は平底で、小さくたちあがる。18は長く外反する口頸部をもつ。19・20は高坏形土器である。19は坏部片で、大きく開く口縁部をもつ。20は柱部片で、円孔を施している。21は石製品で、石材は結晶片岩、扁平な石器素材である。

2号土壙墓（ＴＰ２）

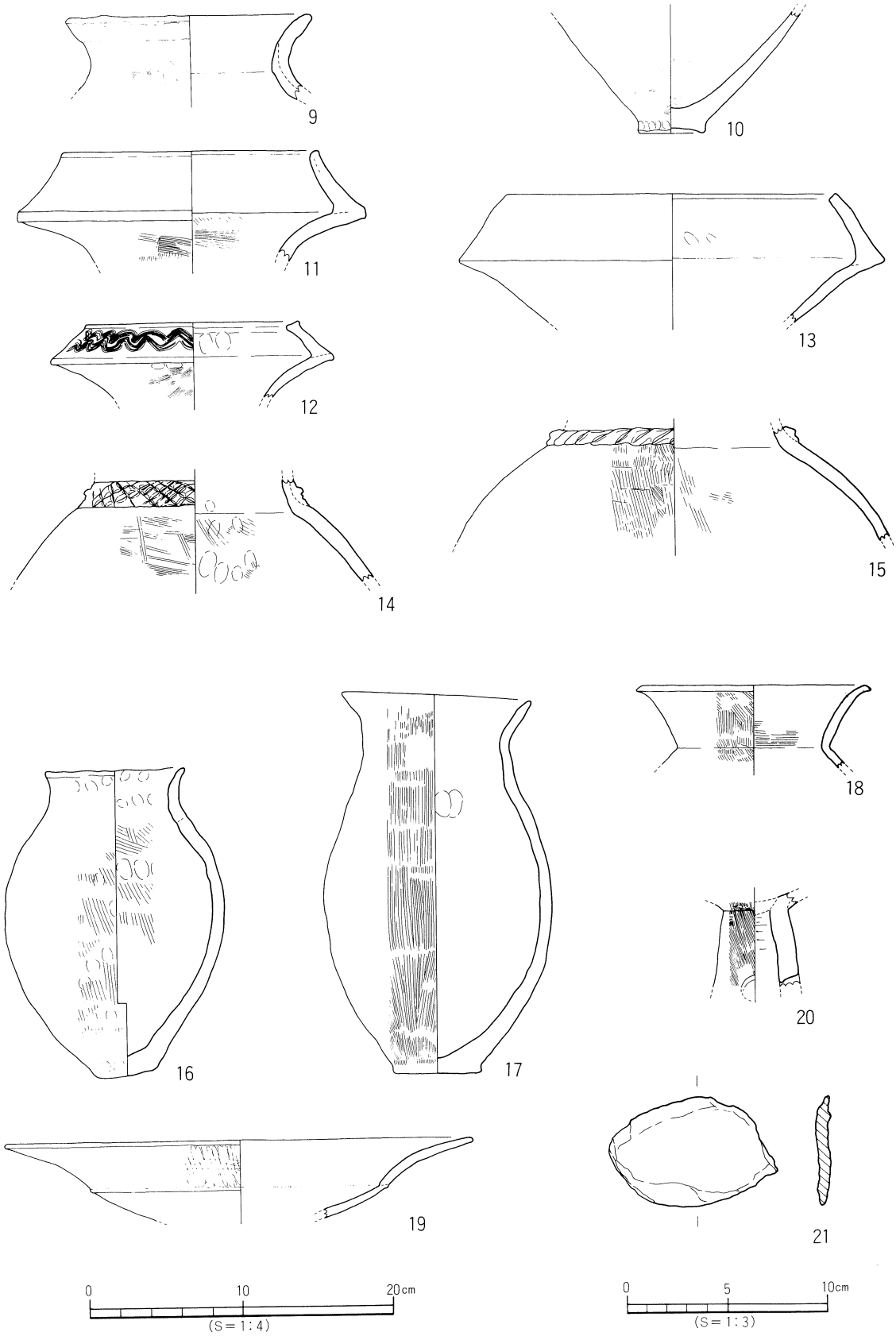
円形の土壙墓は、二段掘りされている。上場径は1.3ｍ、中位と基底面の直径は50～70㎝、深さは70～90㎝となる。遺物は、上部に土器片、下部で壺棺が出土した。

出土遺物（第83図22～41、図版45）　22は壺棺に使用された大型の複合口縁壺である。頸部上半以上を打ち欠いて棺となしている。頸部はゆるやかに外反し、下端部には斜格子目の刻目突帯文をもつ。胴部は長胴で、肩部に張りをもつ。底部は平底で、やや厚い。23～41は上部で出土した土器である。23～32は壺形土器である。23～25は複合口縁壺で、23は口縁部にクシ描波状文、25は斜格子目文をもつ。26は口頸部が大きく開くもので、口縁端部に２条の沈線文をもつ。27は扁平球の胴部をもつものである。器壁が薄い。著しく長い直線的な口頸部をもつものである。28は小型品で、完形品である。直線的に上外方に開く口縁部には口縁直下に７条の沈線文をもつ。胴部は扁平で、底部は平底で突出する。29～32は底部片で、平底となり、31は小さく突出する。33は甕形土器で、厚い平底をもつ。34～36は鉢形土器である。34は底部はやや大きい平底で、直立するたちあがりをもつ。35は台付鉢で、台部が欠損している。36は扁平球の胴部と、小さく突出する底部をもつ。長頸壺にもなりえる。37～39は器台形土器である。37・38は口縁端部片で、38の端面には竹管文入り円形浮文２ヶ１組とクシ描波状文がある。39は受部～柱上部の破片で、柱部には円孔をもつ。40は支脚形土器で、ゆるやかに開く裾部をもつ。41は大きな平底をもつ土製品で、バケツ状の鉢形土器か握手付鉢になるものと考えられる。

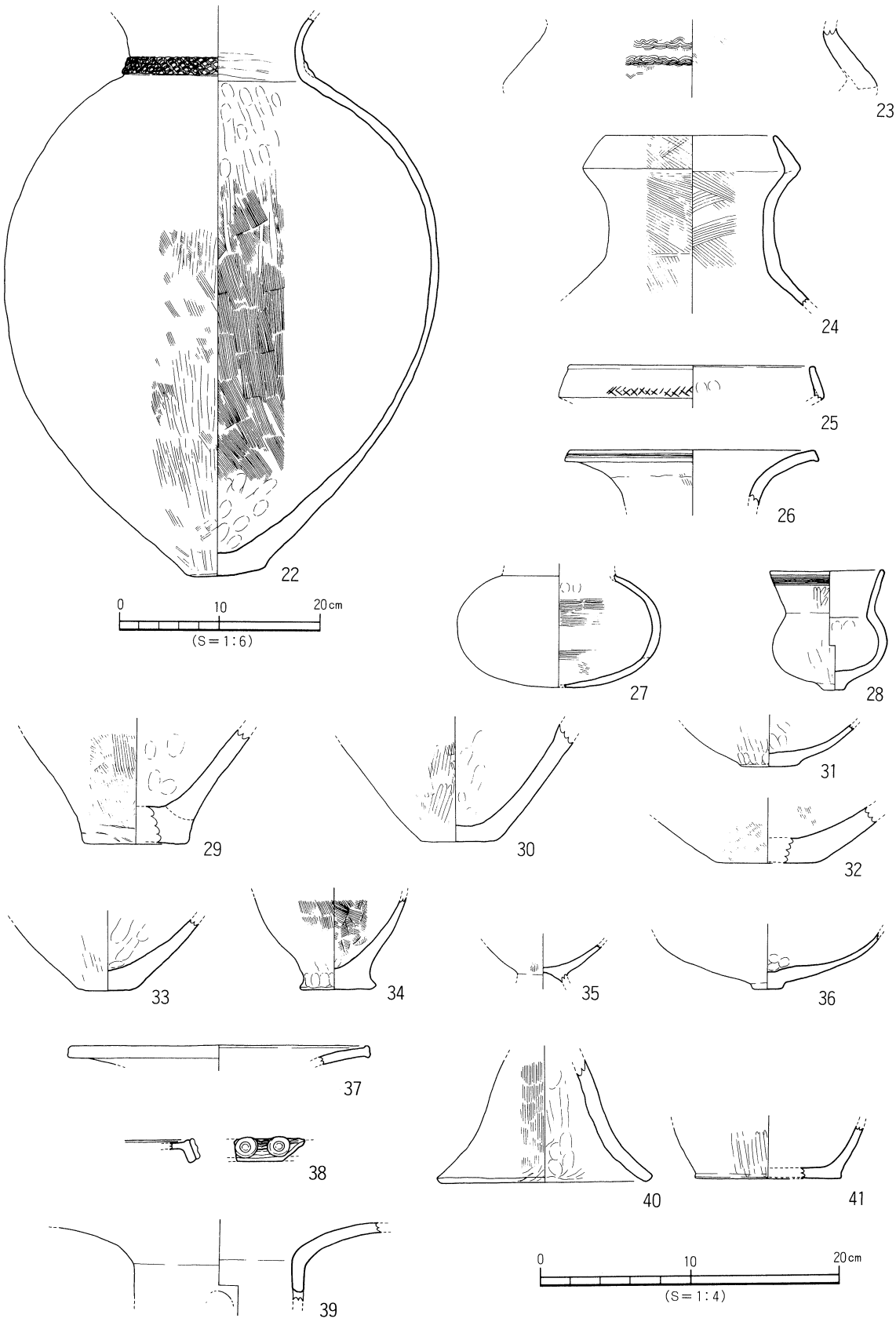
1号土壙墓（ＴＰ１）

円形の土壙墓で、直径105㎝、基底部径70㎝、深さ150㎝を測る。出土物は完形品５点（現状では４点）と破片が少量ある。

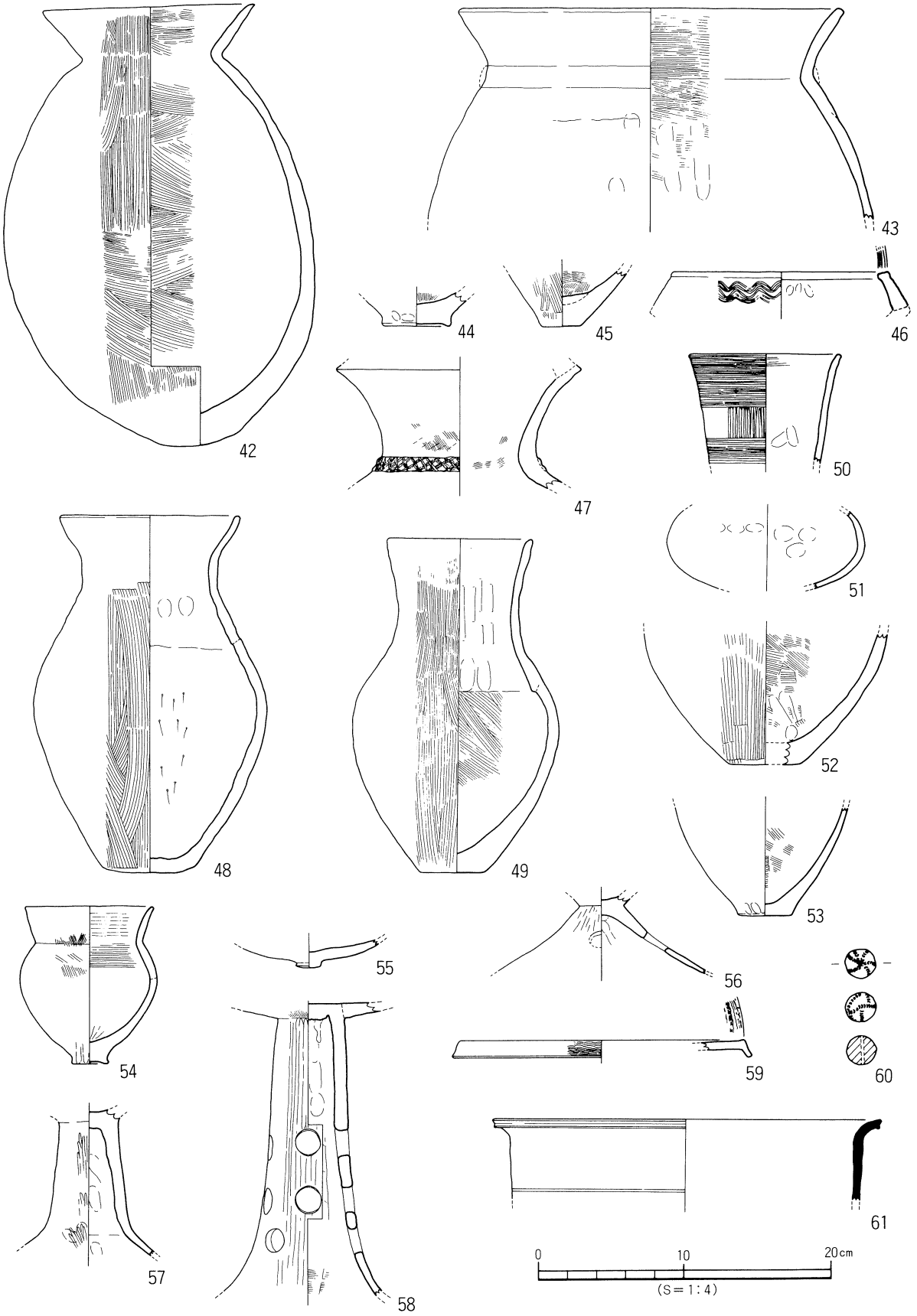
出土遺物（第84図42～61、図版46）　42～45は甕形土器である。42は長胴球で、「く」の字に外反する口縁部をもつ。底部は丸みをもつ平底で厚い。形態はやや異形で、胴下半部は壺形土器の形状である。43は大型品で、上外方にのびる口縁部をもつ。頸部外面には貼付け突帯文が欠落した痕を看取する。44・45は底部片である。44は上げ底、45は平底で、器壁が厚い。



第82図　TP 3 出土遺物実測図



第83図　TP 2 出土遺物実測図



第84図　TP 1 出土遺物実測図

46～53は壺形土器である。46は複合口縁壺の口縁部片である。口縁端面に多条沈線文、外面にクシ描波状文をもつ。47は複合口縁壺で、口縁部は欠損する。頸部下端に斜格子目の刻目突帯をもつ。48は完形品で、胴部は長胴で、頸部は直立、口縁部は内湾してたちあがる。49は完形品で、底部は平底、胴部は肩部が張り、長い口頸部をもつ。50・51は著しく長い口頸部をもつ壺形土器である。50は口頸部片で、多条の沈線文帯が2段みられる。51は扁平球の胴部をもつ。52・53は胴下半部～底部の破片である。底部は平底で、器壁は厚い。54～56は鉢形土器である。54は肩部が張り、口縁部は上外方に開く。底部はわずかに上げ底で、直立するたちあがりをもつ。55は底部片で、扁平球の胴部に、小さく突出する底部をもつ。56は台付鉢で裾部には円孔をもつ。57・58は高坏形土器で、脚部片となる。59は器台形土器である。口縁部片で、口縁端部は垂下し、端面と上面にはクシ描波状文を施す。60は球状の土製品である。貫通する小円孔があり、表面には小さい半截竹管文を多数施す。61は須恵器で、直立する胴上半部に、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部はナデ凹み、胴上半部には沈線が1条ある。本品は、後世の混入品で、形態は朝鮮半島に祖形を求められる。

3）土　坑

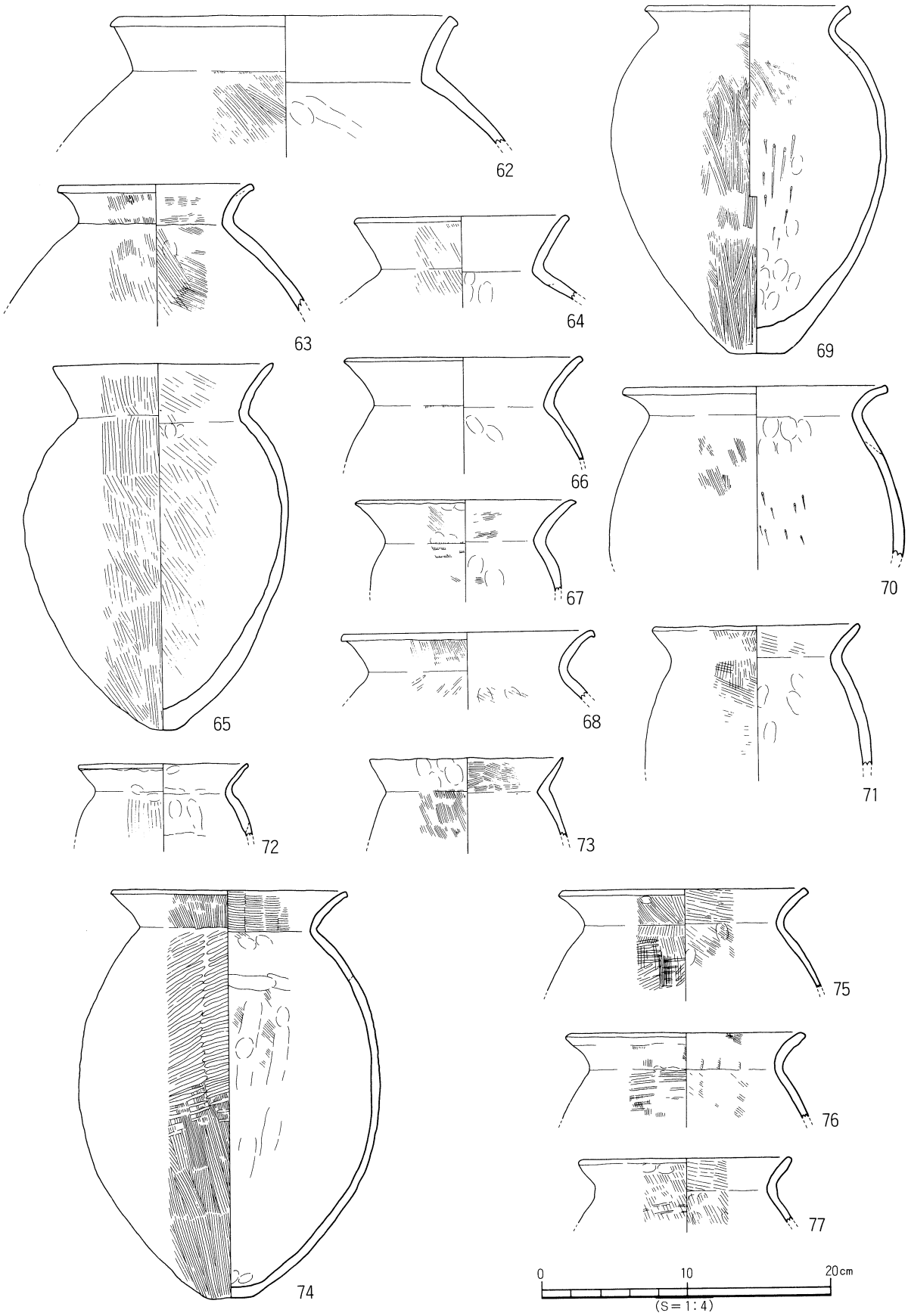
ＤＫ01

調査区の南端にあり、全てを調査したわけではない（未掘部分がある）。平面形態は現状で三角状を呈し、断面形態は北側が段をもち、逆台形状を呈する。規模は南北1.7m、東西2.7m、深さ50～60cmを測る。遺物は完形品を含む多くの土器片と少量の石器が出土している。

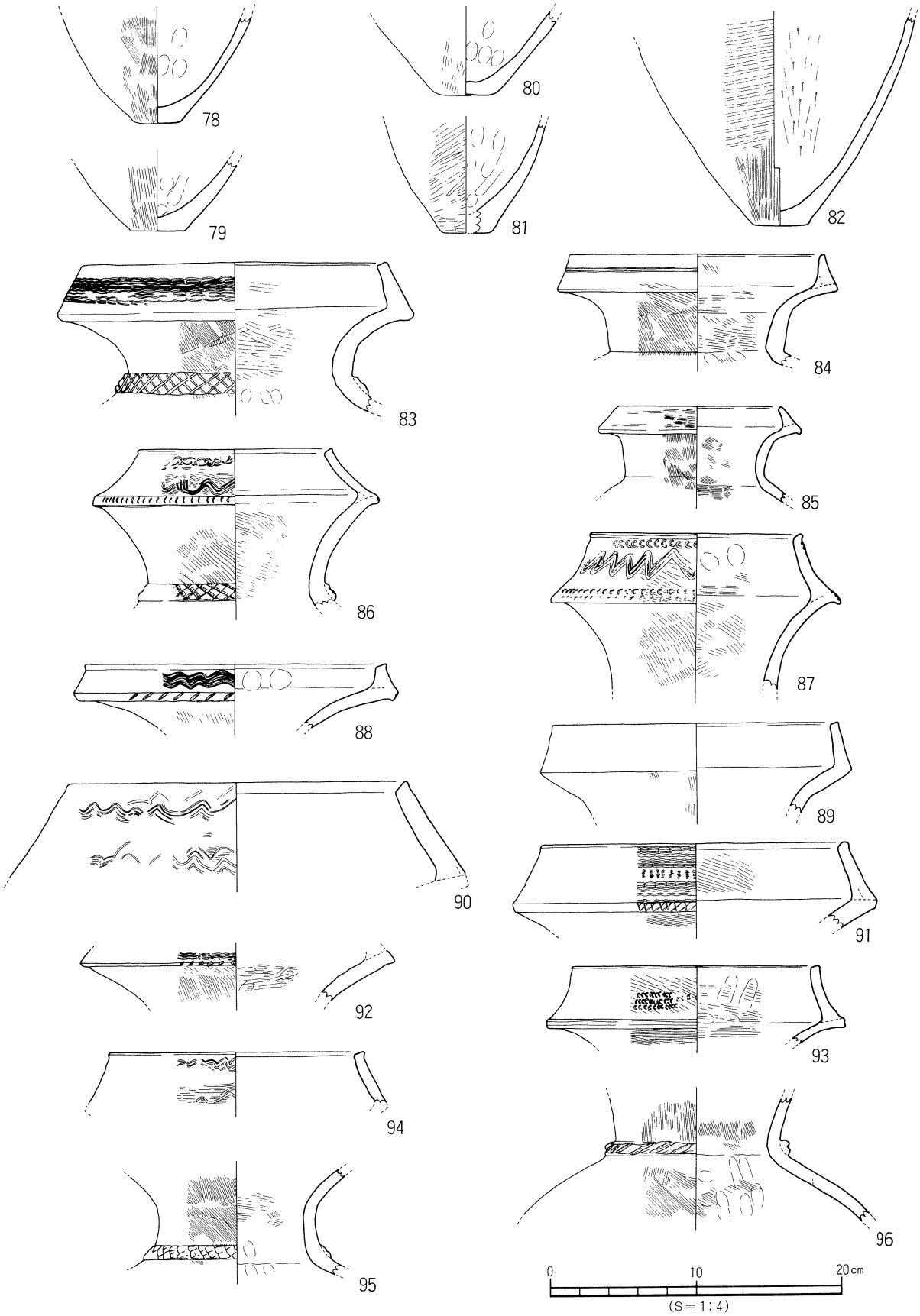
出土遺物（第85～90図62～150、図版47～49）

甕形土器（62～82）　62～73は外面が刷毛目調整に限られるものである。62～64は頸部のしまりは強く、内面に明瞭な稜をもって外反する口縁部をもつ。肩部は強く張る。65～69は、肩部の張りが強いもので、65・69は完形品となる。70～73は胴部中位～上位までがゆるやかにふくらむものである。74～77は、外面に叩き痕を残すもので、胴部全体に弱い張りをもつ形態となる。78～82は胴下半部～底部の破片である。胴下半部はふくらみをもたず、直線的に底部にいたる。78～80は刷毛目調整に限られ、81・82は叩き痕を看取する。

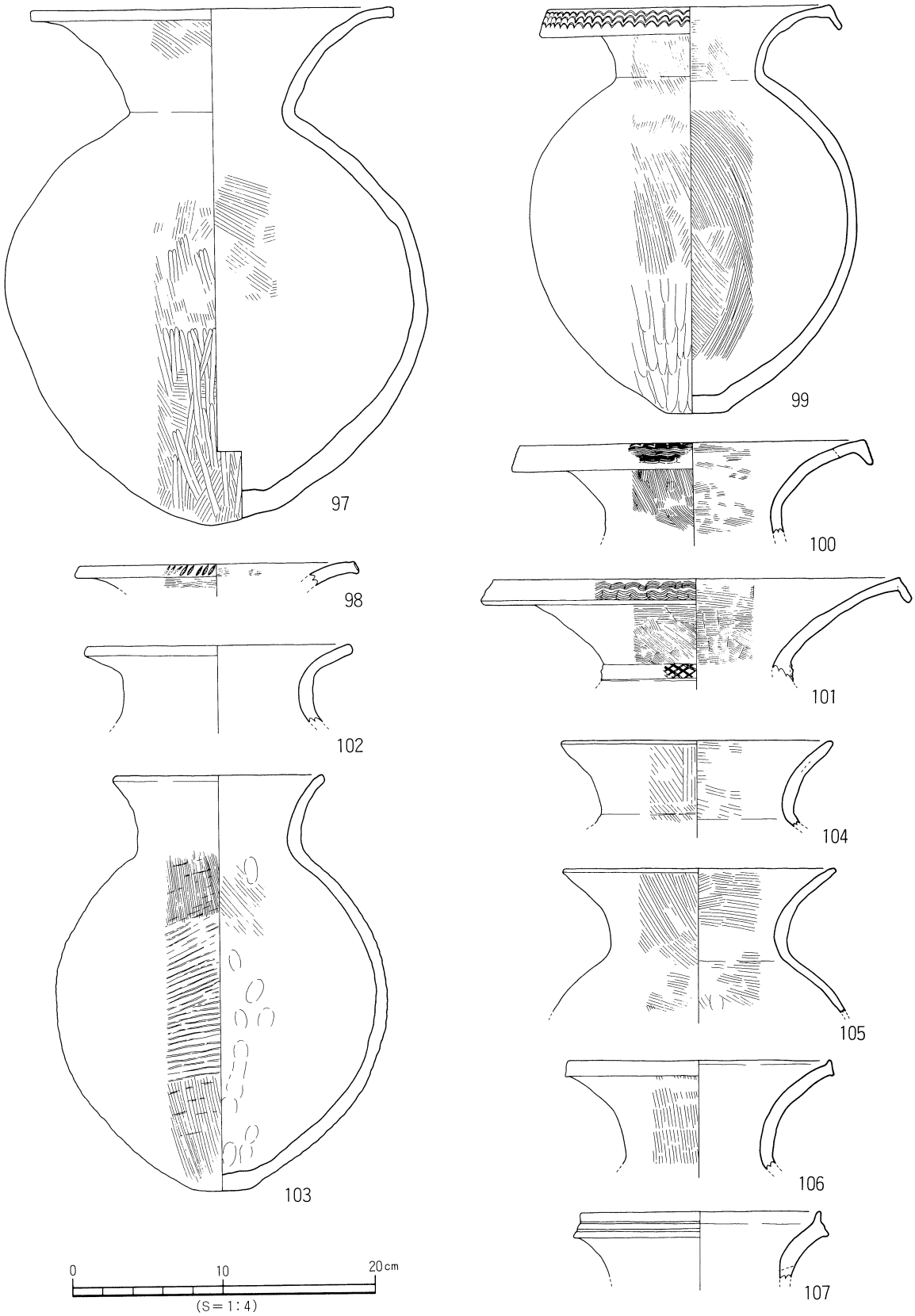
壺形土器（83～110）　83～96は複合口縁壺で、83～94は口～頸部片、95・96は頸部片となる。83～86は短く開く一次口縁に、二次口縁がつくものである。83・86には頸部下端に斜格子目の刻目突帯文をもつ。口縁部は、83がクシ描波状文、84が沈線文、86が二段のクシ描波状文を施している。86は口縁接合部に半截竹管の刺突文を施す。87～89は一次口縁部が長く開くものである。口縁部には、87は半截竹管文とクシ描波状文、88はクシ描波状文が施される。88の接合部には「ノ」の字状の刺突文がある。90～94は大型品の口縁部片である。90はクシ描波状文2段、91はクシ描波状文2段と刺突文、92はクシ描波状文、93は部分的に半截竹管文3段、94はクシ描波状文2段が施される。95・96は頸部下端に刻目突帯を貼付け、95は斜格子目状、96は「ノ」の字状の刻目となる。97～101は、大きく開く長い口頸部をもつものである。97は完形品で、球形の胴部にあいまいな平底の底部をもつ。98は口縁部片で、口縁端部には押圧の刻目文をもつ。99～101は口縁端部が垂下するもので、端面にはクシ描波状文を施す。99は完形品で、ややタテナガの球形の胴部、底部はやや厚い平底となる。



第85図　DK１出土遺物実測図（１）



第86図　DK１出土遺物実測図（２）



第87図　DK１出土遺物実測図（３）

101は頸部下端に斜格子目の刻目突帯文をもつ。102は直立する頸部に、外反する口縁部をもつものである。103～107は上外方に開く口頸部をもつものである。103は完形品で、球形の胴部に、やや厚い平底の底部をもつ。104・105は口縁端部が丸く、106・107は口縁端部が面をなす。107は端面に沈線をもつ。108～110は胴部～底部の破片である。108は大型品で、ふくらみのある胴部下半に、たちあがりをもつ厚い平底がつく。109は球形の胴部に、あいまいなたちあがりをもつ厚い平底がつく。外面には叩き痕を看取する。

鉢形土器（111～119）　111～114は口縁部が外反するものである。111～113は胴部径が口縁部径に比べ小さいものである。114は形態上壺形土器に近いもので、扁平球の胴部をもつ。底部はあいまいながらわずかに突出し、平底となる。115～117は、直口口縁となるものである。115は叩き痕を看取する。118は底部片で、わずかに上げ底となり、明瞭なたちあがりをもつ。119は台付鉢で、「ハ」の字状の低い台部が付く。

高坏形土器（120～125）　120～122は坏部、123～125は柱部である。柱部には円孔が２～３段施される。

器台形土器（126～136）　126～132は受部の口縁部片で、口縁端部を拡張する。127には浮文、128～132にはクシ描波状文を施す。133～136は柱部片で、円孔を施している。

支脚形土器（137～144）　137～140は受部が、２つの角状突起によってなるもので、体部は中空である。141～143は体部片で、「ハ」の字状に開く裾部をもつ。144は小型品で、受部は傾斜し、中央に大きな孔をもつ。

特殊品（145・146）　145は底部に焼成前穿孔をもつ土製品である。146はサジ状土製品の握手部と思われる。

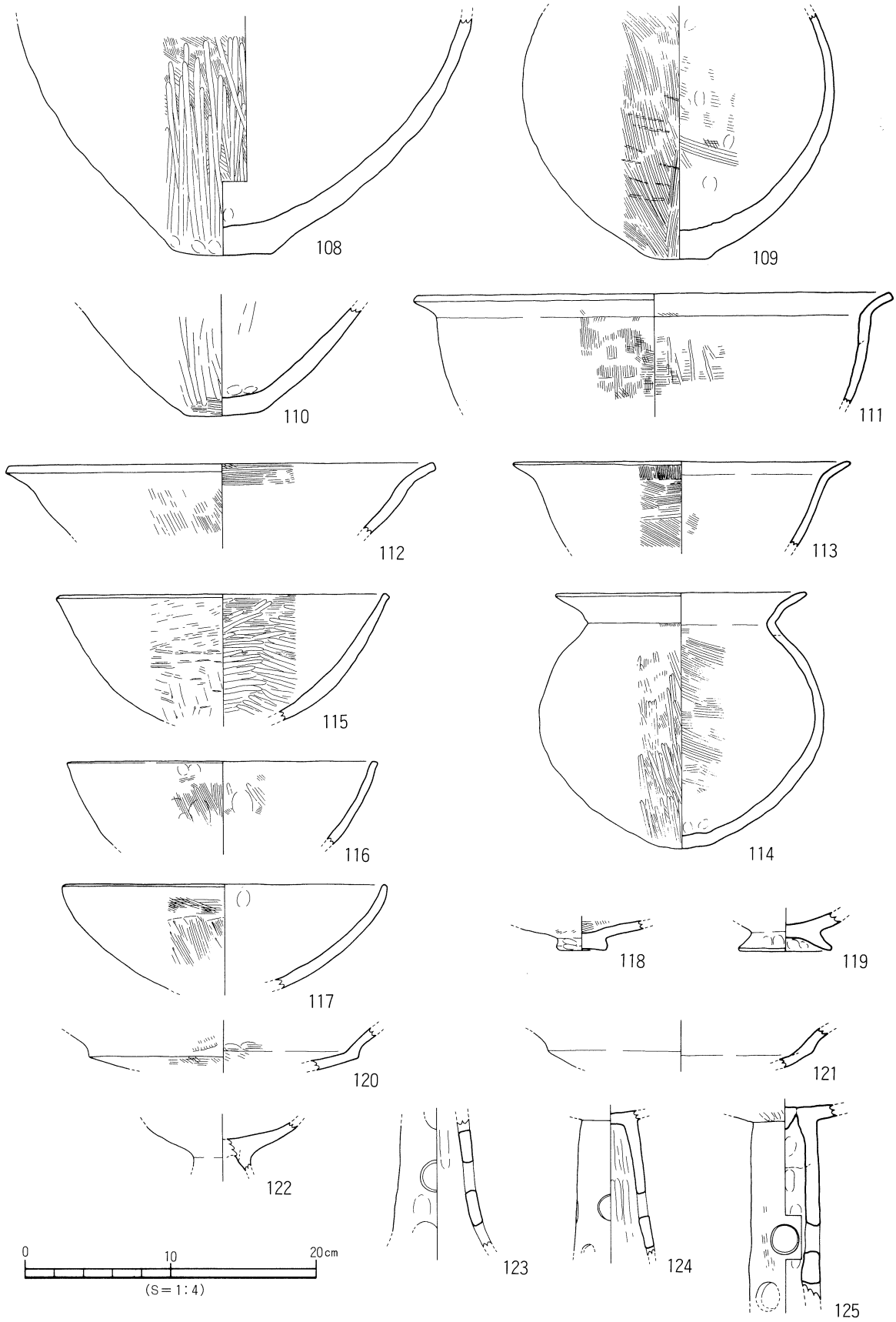
石製品（147～150）　147は石庖丁で、石材は結晶片岩である。平面形態は四角形で、両側には抉りがある。148・149は叩き石、または磨き石で、石材は不明である。150は板状の石器素材である。

４）土器集中地点Ｘ５－Ｙ１地点出土品

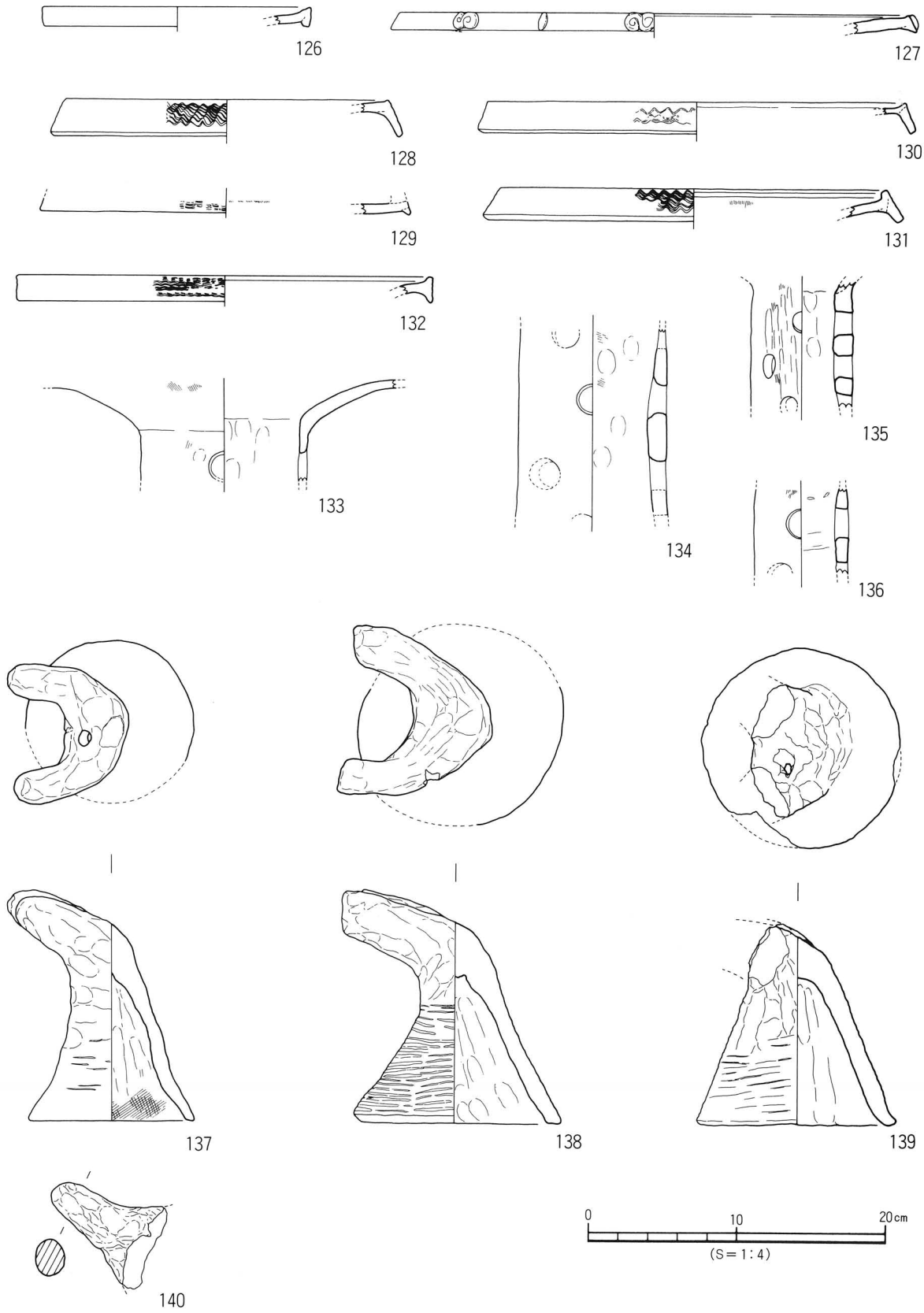
同地点からは、土器片が集中して出土している。性格は不明である。

出土遺物（第91図151～181、図版50）

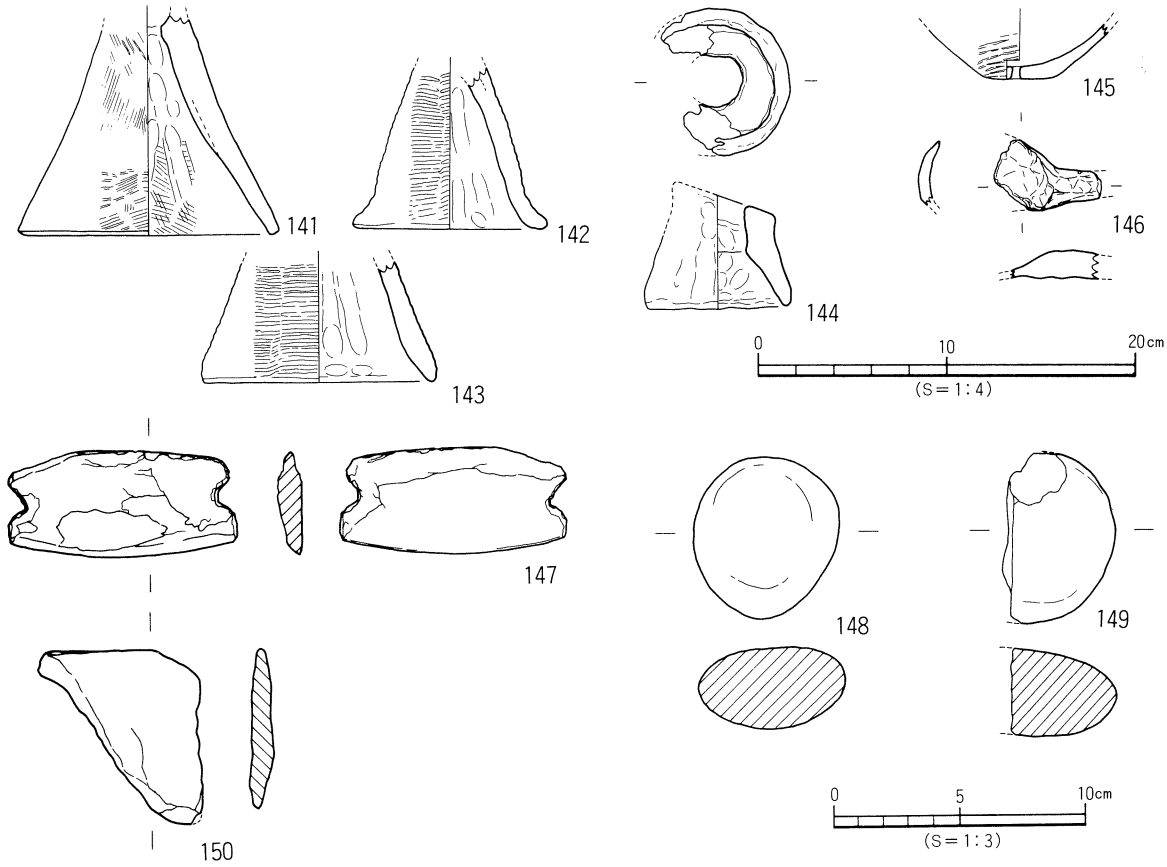
151～156は甕形土器である。151～154は口縁部片で、内面に稜をもって上外方に外反する。155・156は平底の底部片で、156には叩き痕がある。157～172は壺形土器である。157～167は複合口縁壺で、157～164の口縁部は無文である。165～167は頸部片で刻目の突帯文をもつ。168は長頸壺で、著しく長い口頸部と扁平な胴部をもつものである。頸部には多条の沈線文をもつ。169・170は底部片で、平底で突出する。171・172は口縁部片で、171は端部が垂下し、172は端面に刻目を施す。この形状は器台形土器にもみられるもので、壺形土器と限定できない。173は小型の鉢形土器である。球形の胴部に、上外方に短く開く口縁部をもつ。底部は厚く、平底をなす。174～177は高坏形土器である。174は坏部片で、大きく開く口縁部となる。175は裾部で、円孔をもつ。176・177は柱部で、円孔を２段以上もつ。178は支脚形土器の破片で、受部に突起をもつものである。179は注口土器の破片である。注口部が残り、上部には粘土の接合痕を看取する。180・181は石製品である。180は用途不明品である。181は磨き石で、石材は不明である。



第88図　DK１出土遺物実測図（４）



第89図　DK１出土遺物実測図（５）



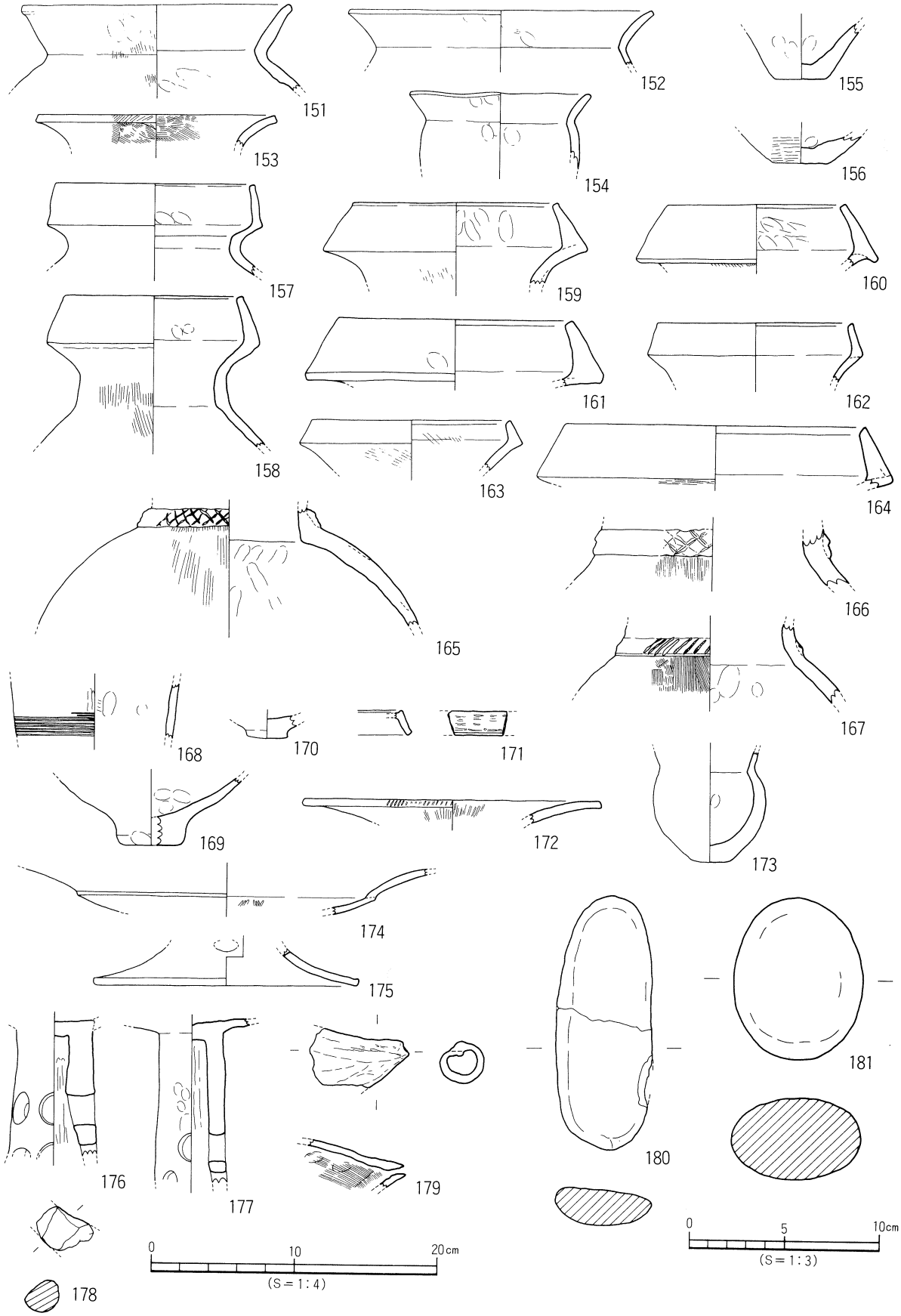
第90図　DK１出土遺物実測図（６）

５）その他の出土品（第92図、図版50）

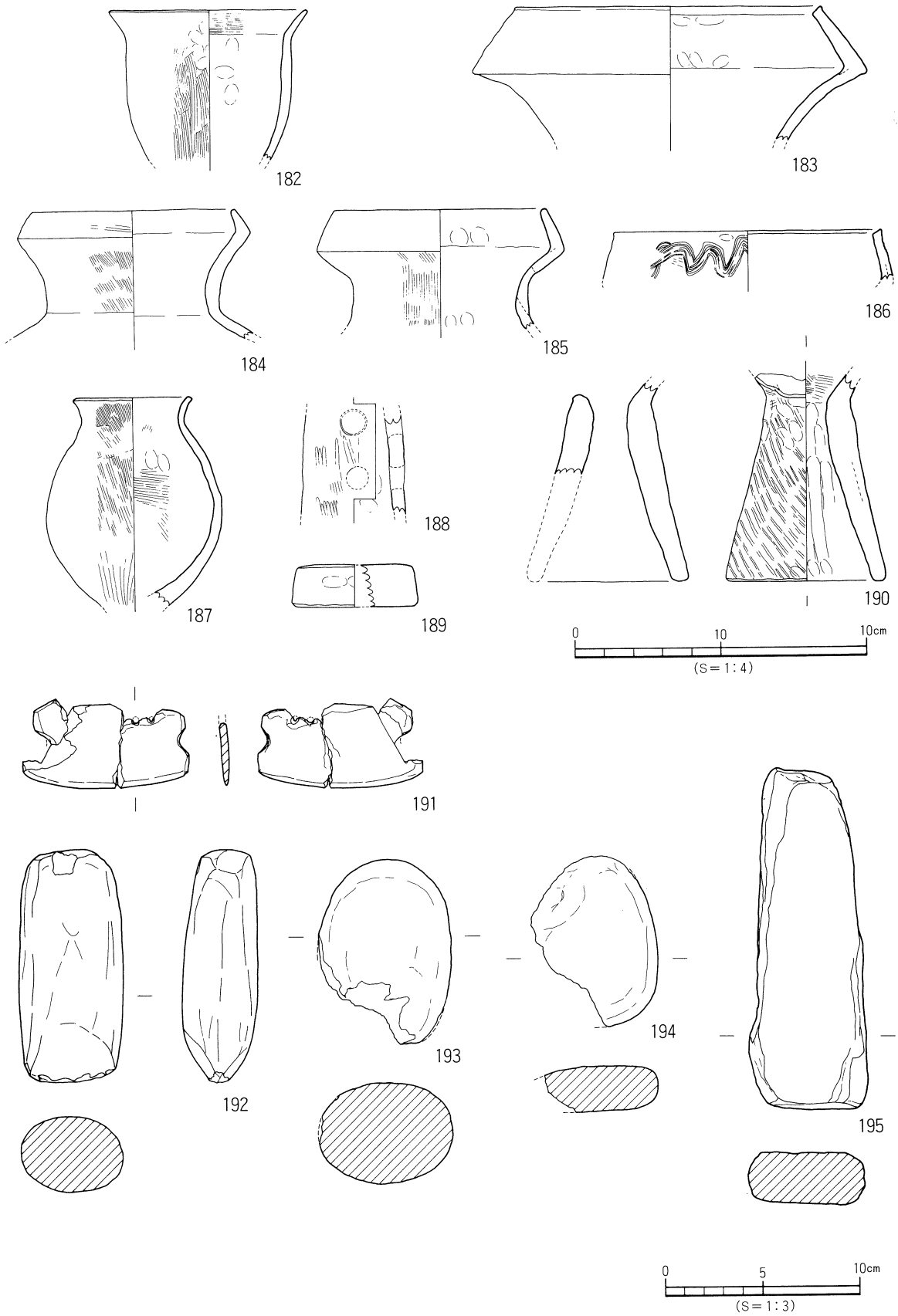
調査区内で出土した特徴ある土器・石器を取り上げておく。

182～190は弥生土器である。182は甕形土器で、胴部は張りが弱く、口縁部は内面にあいまいな稜をもって上外方にたちあがる。183～186は複合口縁壺である。183～185の口縁部は無文、186はクシ描波状文を施す。187は短い口頸部をもつ壺形土器で、長球形の胴部をもつ。188は高坏形土器の柱部片で、円孔を２段以上もつ。189・190は支脚形土器で、189は扁平な円柱状を呈し、190は受部が大きく「U」の字状に傾斜するものである。

191～195は石製品である。191は石庖丁の製品で、平面形態は長方形で、両側部には抉りをもつ。192は伐採斧である。重さは492ｇである。193は扁平球状の叩き石で、石材は花崗岩である。194は扁平な磨き石であり、石材は不明である。195は扁平で長方形を呈する石器の製品である。石材は結晶片岩で、重さは553ｇである。



第91図　土器集中地点出土遺物実測図



第92図　その他の出土遺物実測図

3．小　結

本稿では、西石井荒神堂遺跡の竪穴式住居址１棟（ＳＢ01）、土壙墓３基（ＴＰ１～３）、土坑１基（ＤＫ１）、土器集中地点等の遺物について、出土品の資料提示をした。土器では各遺構出土品は、共通する形態を有していた。甕形土器は口縁部が稜をもって「く」の字状に外反し、胴部は長胴で、胴下半部はふくらみが弱く、底部は平底が多数を占めている。壺形土器は垂下口縁壺や底部がボタン状に突出する細長頸壺がみられた。鉢形土器は台付鉢、高坏形土器は坏部高が浅く、口縁部が大きく開くものである。器台形土器は垂下口縁となり、支脚形土器は受部に角状突起をもつものが含まれている。これ等の特徴をそなえた土器群は、平野の弥生時代終末に時期比定される。さらには、甕形土器の下半部にふくらみが少ないことや、叩き痕が著しく残るものがないことは、終末でも古い様相をもつものになる。

よって、各遺構は、同時期に存在したものと考えられる。

さて、土壙墓とされたＴＰ１～３は、出土品に異なりをみせている。ＴＰ２は最下部に壺棺が出土し、小型鉢を含む土器片が土壙上部に出土する。一方、ＴＰ１・３は、複数の完形品と木製品・種実が出土し、埋葬施設に直接的に結びつく資料はない。近年の調査増加により、弥生時代後期には、土器祭祀をした井戸が検出されるようになり（桑原田中遺跡・祝谷アイリ遺跡）、その状況にＴＰ１・３は類似する。ＴＰ１・３の出土遺物と出土状況は墓の可能性は全く否定されるものではないが、貯蔵穴もしくは井戸としてとらえるほうが、無理がないものと考える。

このほか、注目される遺物には、ＴＰ３出土の韓半島系の須恵器（第84図61）、遺物集中地点の注口土器（第91図179）があげられる。前者は素鵞小学校構内遺跡（西尾ほか、1987）、後者は中村松田遺跡（梅木謙一 1997）等で類似品が出土している。

西石井荒神堂遺跡は、弥生時代終末の土器様相と、集落構造を分析するには、良好な資料の一つである。再整理にあたり、調査担当者の森　光晴氏には多くの助言をいただいた。

表51　PD1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 外面	整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(16.1) 残高 5.1	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊒ハケ	ハケ→ナデ	乳茶色 乳茶褐色	石、長（1～3） ◎		
2	甕	口径(23.1) 残高 2.5	外反口縁。	ハケ→ナデ	ハケ	灰茶色 乳灰茶色	石、長（1～2） ◎		
3	壺	口径(12.6) 残高 5.4	上外方に開くやや長い口縁部。	マメツ	マメツ	茶褐色 灰茶色	石、長（1～4） ◎		
4	壺	残高 6.4	細長頸壺。多条沈線2条以上、19条。	ミガキ	ナデ	淡黄茶色 乳白色	石、長（1～4） ◎		
5	壺	残高 3.9	細長頸壺。多条沈線10条以上、6条。	ミガキ	ナデ	茶褐色 乳黄茶色	砂粒 ◎		
6	壺	残高 5.1	斜格子目の刻目突帯。	マメツ	マメツ	淡灰黄色 灰黄褐色	石、長（1～3） ◎		
7	鉢	口径 6.8 器高 5.7 底径 2.4	口縁部一部欠損。ゆるやかに外反する口縁部。平底。	ナデ(1部ハケ?)	ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		45
8	高坏	口径(17.4) 残高 5.0	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳灰茶色	石、長（1～4） ◎		

表52　TP3出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
9	甕	口径(15.2) 残高 5.7	稜をもって外反する口頸部。	㊐ナデ ㊍ハケ→ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡黄褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
10	甕	底径 (4.2) 残高 8.0	たちあがりをもつ上げ底。	ハケ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎	煤	
11	壺	口径(16.8) 残高 7.4	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	乳茶色 乳黄色	石、長（1～3） 金 ◎		
12	壺	口径(14.0) 残高 5.1	複合口縁壺。口縁部はクシ描波状文5条。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	黄白色 黄白色	石、長（1～3） 金 ◎		
13	壺	口径(20.4) 残高 8.9	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	ナデ	黄茶褐色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		
14	壺	残高 6.8	斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	ハケ→ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
15	壺	残高 7.7	「ノ」の字状の刻目突帯文。	ハケ	ハケ	黄灰色 茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
16	壺	口径 9.1 器高(20.3) 底径 4.0	完形品。長胴・平底。短く外反する口頸部。	㊐ナデ ㊋ハケ	㊐ナデ ㊋上ハケ ㊋下ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎	黒斑	45
17	壺	口径 12.5 器高 25.5 底径 6.0	胴下半一部欠損。内傾する頸部に、外反する短い口縁部。平底はやや大きい。	ハケ	ナデ	乳黄色 乳黄色	砂粒、金 ◎	煤	45
18	壺	口径(14.9) 残高 5.4	外反する長い口頸部。口縁端部は面をなす。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊋ハケ	㊐ハケ→ヨコナデ ㊋マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） ◎		
19	高坏	口径(30.8) 残高 5.2	大きく開く長い口縁部。接合部は稜となる。	ミガキ	マメツ	黄茶色 灰茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
20	高坏	残高 6.0	柱部片。柱上部に円孔4ヶ（φ1.8cm）。	㊍坏底ミガキ ㊍脚ハケ	㊍坏底マメツ ㊍脚ケズリ	暗茶色 淡灰色	石、長（1～4） 金 ◎		

TP3出土遺物観察表（石製品）

(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
21	石器素材		結晶片岩	8.4	5.5	6.0	38.9		

表53　TP2出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
22	壺	底径 8.0 残高 52.0	口頸部は打ちかき。長胴、厚い平底。斜格子目の刻目突帯文。	ハケ→ミガキ	ハケ	橙茶色 暗黒褐色	石、長（1～4） ◎	壺棺	45
23	壺	残高 3.9	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文3条が3段。	ハケ	ハケ	黄茶色 灰茶色	石、長（1～3） ◎		
24	壺	口径(11.4) 残高 11.6	複合口縁壺。直立する頸部。口縁部は無文。	ハケ	㊐ヨコナデ ㊍ハケ ㊋ナデ	灰褐色 淡橙色	石、長（1～4） ◎		
25	壺	口径(19.7) 残高 2.3	複合口縁壺。口縁部に斜格子目の刻目。	ヨコナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～2） 金 ◎		

TP2出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	壺	口径(16.2) 残高 3.7	外反する長い口頸部。端部は面をなす。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
27	壺	残高 7.6	細長頸壺の胴部。扁平球の胴部。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄灰色	石、長（1～2） ◎		
28	壺	口径 7.7 器高 8.1 底径 1.5	完形品。扁平球の胴部。小さく突出する底部。直線的に長い口頸部。	口ミガキ 胴ナデ	ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	砂粒 ◎		45
29	壺	底径（6.8） 残高 7.7	中・大型品の底部。平底でたちあがりをもつ。	ハケ	ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石、長（1～5） ◎		
30	壺	底径 5.0 残高 7.9	中型品底部。平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	乳黄色 灰色	石、長（1～2） 金 ◎		
31	壺	底径 3.9 残高 2.9	中型品底部。やや厚い平底。	ミガキ	マメツ	乳茶色 乳灰色	石、長（1～3） ◎		
32	壺	底径（6.4） 残高 3.8	中・大型品底部。厚い平底。	ハケ	ナデ	乳茶色 乳茶褐色	石、長（1～2） ◎		
33	壺	底径（3.8） 残高 4.8	中型品底部。	マメツ	ナデ	桃茶色 黄茶色	石、長（1～4） ◎		
34	壺	底径 4.9 残高 6.2	たちあがりをもつ、厚い底部。	ハケ（1部ナデ）	ハケ	乳灰茶色 乳灰茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
35	鉢	残高 2.5	台付鉢。脚部を欠損。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
36	鉢	底径 2.1 残高 3.6	扁平球の胴部。小さく突出する平底。	マメツ	マメツ	灰黄茶色 灰茶色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
37	器台	口径(19.5) 残高 1.3	口縁部片。口縁端部は面をなす	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
38	器台	残高 1.7	口縁端部。端部は拡張し、竹管文入り円形浮文2ヶ1組。	ナデ	ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
39	器台	残高 5.5	稜をもって大きく開く受部。円孔を施す。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
40	支脚	底径(14.2) 残高 8.8	「ハ」の字状に開く柱～裾部。	ハケ（1部ナデ）	ナデ	乳茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
41	鉢	底径（9.7） 残高（3.6	鉢もしくは握手付上製品の底部。大きい平底をもち、胴下半部はふくらむ。	ミガキ	ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	砂粒 ◎	黒斑	

表54　TP1出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
42	甕	口径 14.4 器高 30.2 底径 4.8	異形品。底部は壺、口縁部は甕の形状をもつ。完形品。	口端ハケ→ヨコナデ 口ハケ 胴ハケ	口 ハケ 胴上 ナデ 胴中 ハケ 胴下 ナデ	淡褐色 淡褐色	砂粒 ◎		46
43	甕	口径(26.3) 残高 14.6	稜をもって外反する口縁部。頸部には突帯の痕跡を残す。	マメツ	ハケ	淡茶色 灰色	石、長（1～5） 金 ◎		

TP1出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	底径 (4.4) 残高 2.3	たちあがりをもつ上げ底の底部。	ナデ	ハケ	灰茶色 灰茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
45	甕	底径 2.5 残高 3.7	厚く小さい平底。	ハケ	ハケ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～5） ◎		
46	壺	口径 14.6 残高 2.7	複合口縁壺。口縁部にはクシ描波状文7条。	マメツ	ナデ	灰茶色 淡灰色	石、長（1～2） 金 ◎		
47	壺	残高 8.5	複合口縁壺。口縁部欠損。斜格子目の刻目突帯文。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～4） ○		
48	壺	口径(12.2) 器高 24.6 底径 6.3	口縁部一部欠損。長胴、大きい平底。直立する頸部。内湾ぎみにたちあがる口縁部	口ナデ 胴ハケ	口ナデ 胴下ケズリ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～4） ○		46
49	壺	口径 10.0 器高 23.0 底径 4.3	胴下半部一部欠損。平底、肩張り、長い口頸部。	口ハケ→ナデ 頸ハケ 胴ハケ	口ナデ 頸ナデ 胴ハケ	黄褐色 褐色	石、長（1～4） ◎	黒斑	46
50	壺	口径 (9.4) 残高 7.7	細長頸壺。クシ描沈線文30条、15条以上。器壁薄い。	ミガキ	ナデ	灰茶色 灰黄色	石、長（1～3） ◎		
51	壺	残高 5.4	細長頸壺。扁平球の胴部。	ナデ	ナデ	褐色 灰色	石、長（1～6） ◎		
52	壺	底径 (4.8) 残高 8.6	底部。平底。	ハケ	ハケ	灰茶色 黒灰色	砂粒 ◎	黒斑	
53	壺	底径 3.7 残高 7.4	底部。たちあがりをもつ平底。	マメツ	ハケ	灰黄色 淡灰色	石、長（1～3） 金 ◎		
54	鉢	口径 8.6 器高 10.9 底径 2.4	口縁部一部欠損。たちあがりをもつ小さい上げ底。肩部張り、直線的に開く口縁部。	口ハケ→ヨコナデ 胴下ナデ 胴上ハケ	ハケ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎		46
55	鉢	底径 1.7 残高 1.9	鉢もしくは細長頸壺の胴部。小さく突出する平底	マメツ	マメツ	黒灰色 黒灰色	石、長（1～3） ◎		
56	鉢	残高 5.4	台付鉢。大きく開く裾部。	ミガキ	ハケ→ナデ	茶褐色 黄茶色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
57	高坏	残高 10.1	脚部。円柱状の柱部に、「ハ」の字に開く裾部。	ミガキ	ナデ	乳茶褐色 乳茶色	石、長（1～4） ◎		
58	高坏	残高 21.0	脚部。長い脚部をもつ。円孔3段（φ1.7cm）。	ハケ→ミガキ	柱ナデ 裾ハケ	橙茶色 橙茶色	石、長（1～2） ◎		
59	器台	口径(19.4) 残高 1.2	口縁部片。口縁端部にクシ描波状文8条。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	黄橙色 黄褐色	砂粒 ◎		
60	土玉	直径 2.0	小型品。貫通孔。半截竹管文は多数。	ナデ		黄褐色	密 ◎		46
61	鍋	口径(26.3) 残高 5.6	直立してたちあがる胴上半部。短く外反する口縁部は端部がナデ凹む。胴上半部に沈線1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○	須恵器	46

表55　DK1出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
62	甕	口径(22.7) 残高 9.1	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をなす。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	マメツ	乳茶色 乳黄色	石、長（1～3） 金 ◎		
63	甕	口径(12.6) 残高 8.9	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ	ハケ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～3） ◎	黒斑	
64	甕	口径(14.4) 残高 6.0	稜をもって外反する長い口縁部。	マメツ	㊐マメツ ㊥ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石、長（1～2） ◎		
65	甕	口径(14.9) 器高 25.5 底径 1.8	口縁部と胴部が一部欠損。肩部が張る。小さく厚い平底。	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～6） 金 ○	黒斑	47
66	甕	口径(16.0) 残高 7.3	稜をもって外反する長い口縁部。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～3） ○		
67	甕	口径(15.4) 残高 6.5	稜をもって外反する長い口縁部。	ハケ	ハケ→ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
68	甕	口径(17.2) 残高 4.9	あいまいな稜をもって外反するやや長い口縁部。	㊐ハケ ㊥タタキ	㊐ナデ ㊥ハケ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
69	甕	口径 13.9 器高 24.3 底径 3.6	完形品。肩部が張り、平底。口縁部はゆるやかに外反し、短い。	㊐ヨコナデ ㊥ハケ	㊐ヨコナデ ㊥上ハケ ㊥中ケズリ ㊥下ナデ	灰黄褐色 暗灰褐色	石、長（1～4） ○	黒斑	47
70	甕	口径(18.1) 残高 12.1	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐マメツ ㊥ハケ(マメツ)	㊐ヨコナデ ㊥上ナデ ㊥中ケズリ	黄茶色 淡茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
71	甕	口径(14.1) 残高 10.0	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	㊐ハケ ㊥ナデ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
72	甕	口径(12.1) 残高 5.1	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐ナデ ㊥ハケ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
73	甕	口径(13.2) 残高 5.6	稜をもって外反する口縁部。	㊐ナデ ㊥ハケ	㊐ハケ ㊥ナデ	黄茶色 淡茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
74	甕	口径 16.1 器高 28.6 底径 3.2	口縁部を一部欠損。長胴。平底。稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ ㊥上タタキ ㊥下ハケ	㊐ハケ ㊥上ハケ→ナデ ㊥下ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		47
75	甕	口径(16.7) 残高 7.0	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ ㊥タタキ→ハケ	㊐ハケ ㊥ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
76	甕	口径(15.8) 残高 6.0	稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ→ナデ ㊥タタキ→ハケ	㊐ハケ ㊥ハケ	黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～5） 金 ◎		
77	甕	口径(14.4) 残高 4.6	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	㊐ハケ ㊥タタキ→ハケ	ハケ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎	黒斑	
78	甕	底径 7.4 残高 3.2	厚い。やや小さい平底。	ハケ	ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） ◎	煤	
79	甕	底径 3.8 残高 4.9	やや厚い平底。	ハケ	ナデ	黄茶色 黄褐色	石、長（1～3） 金 ◎	黒斑	
80	甕	底径 (3.1) 残高 5.8	平底。	ハケ	ナデ	黄茶色 茶色	石、長（1～4） 金 ◎		

DK1出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
81	甕	底径 (3.3) 残高 7.6	厚い平底。	タタキ	ナデ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
82	甕	底径 3.8 残高 14.4	胴下半部はわずかにふくらむ。平底。	(胴中)タタキ (胴下)タタキ→ハケ	ケズリ	黄褐色 褐色	石、長（1～6） 金 ○	黒斑	
83	壺	口径 20.7 残高 10.6	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文10条。刻目突帯文。斜格子目は押圧される。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
84	壺	口径(17.4) 残高 7.7	複合口縁壺。口縁部に沈線1条。	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
85	壺	口径(11.6) 残高 6.6	複合口縁壺。口縁部は無文。	ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～2） ◎		
86	壺	口径(11.3) 残高 10.9	複合口縁壺。口縁部はクシ描波状文（2～3条）2段。半截竹管文。斜格子目の刻目突帯文。	(口)ハケ (頸上)ハケ→ヨコナデ (頸下)ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		47
87	壺	口径(14.2) 残高 10.8	複合口縁壺。半截竹管文を上部に1段、下段に2段。クシ描波状文2条。	ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ	淡褐色 淡茶褐色	石、長（1～4） ◎		47
88	壺	口径(20.6) 残高 4.4	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文8条。「ノ」の字状の刻目文。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ(1部ナデ)	ヨコナデ	淡茶褐色 灰褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
89	壺	口径(19.5) 残高 6.3	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
90	壺	口径(22.8) 残高 6.9	複合口縁壺。口縁部はクシ描波状文5条2段。	ハケ	ナデ	淡茶色 淡灰色	石、長（1～5） 金 ◎		
91	壺	口径(19.6) 残高 6.0	複合口縁壺。クシ描波状文（9～10条）2段。押圧文1段。斜格子目の刻目文。	(口)ナデ (頸)ハケ	(口)ハケ (頸)ナデ	黄褐色 暗茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		47
92	壺	残高 3.5	複合口縁壺。口縁部欠損。クシ描波状文3条以上。刻目突帯文。刻目文。	ハケ	ハケ→ミガキ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） 金 ◎		
93	壺	口径(16.8) 残高 5.4	複合口縁壺。口縁部の一部に半截竹管文3段。	ハケ	ハケ→ナデ	黄茶色 灰黄色	石、長（1～5） 金 ◎		47
94	壺	口径(17.4) 残高 3.7	複合口縁壺。口縁部にクシ描波状文3条以上。	ハケ	ヨコナデ	黄茶色 灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
95	壺	残高 7.3	複合口縁壺。斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	(頸上)ハケ→ナデ (頸下)ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
96	壺	残高 7.2	「ノ」の字状の押圧突帯文。	ハケ	(頸)ハケ (胴)ハケ→ナデ	淡褐色 暗茶褐色	石、長（1～5） ◎		
97	壺	口径(23.6) 器高 33.9 底径 4.8	口縁部を欠損。肩の張る球形の胴部。大きく開く長い口縁部。	(口)ハケ (胴)ハケ→ミガキ	(口)マメツ (胴上)ナデ (胴中)ハケ (胴下)ナデ	褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		48
98	壺	口径(18.0) 残高 1.6	口縁部片。口縁端部に押圧の刻目文。	ハケ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
99	壺	口径 18.6 器高 27.1 底径 3.8	肩の張る球形の胴部。平底。大きく開く長い口頸部。口縁端部は垂下し、クシ描波状文（2～3条）をもつ。	(頸)ハケ (頸上)ハケ (頸下)ミガキ	ハケ	茶褐色 灰褐色	石、長（1～4） ◎		48

DK1 出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
100	壺	口径(25.2) 残高 6.2	大きく開く、長い口頸部。口縁端部は垂下し、クシ描波状文8条。	ハケ	ハケ→ナデ	明褐色 明褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
101	壺	口径(26.7) 残高 6.8	大きく開く、長い口頸部。口縁端部は垂下し、クシ描波状文6条。押圧の斜格子目突帯文。	ハケ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		48
102	壺	口径(17.3) 残高 5.2	直立する頸部に、外反する口縁部。	マメツ	マメツ	黄茶色 乳黄茶色	石、長（1～4） ◎		
103	壺	口径 13.5 器高 27.7 底径 3.7	口縁部を一部欠損。球形の胴部、厚い平底。外反する口頸部。	口ヨコナデ 胴上タタキ→ハケ 胴中タタキ 胴下タタキ→ハケ	口ヨコナデ 胴上ハケ 胴下ナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～7） ○		48
104	壺	口径(13.3) 残高 5.7	外反する口頸部。	ハケ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
105	壺	口径(18.2) 残高 9.5	外傾外反するやや長い口頸部。	ハケ	口ハケ 胴ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
106	壺	口径(17.1) 残高 7.3	外反する長い口頸部。	ハケ	マメツ	茶褐色 黄茶褐色	石、長（1～2） ◎		
107	壺	口径(15.6) 残高 4.5	外傾外反する長い口頸部。口縁端部に2条の沈線文。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
108	壺	底径 6.6 残高 16.0	胴下半はふくらみをもつ。厚い平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡茶色 黄灰色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
109	壺	底径 4.0 残高 16.8	球形の胴部。底部は平底で、やや厚い。	タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	黄灰褐色 黄灰褐色	石、長（1～5） ○	黒斑	
110	壺	底径 (5.4) 残高 7.4	平底の底部。	ミガキ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
111	鉢	口径(32.4) 残高 7.6	稜をもって外反する口縁部。	口ハケ→ヨコナデ 胴ハケ	口ナデ 胴ハケ→ミガキ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
112	鉢	口径(32.0) 残高 6.4	外反する口縁部。	ハケ	口ハケ→ナデ 胴ミガキ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～6） ◎		
113	鉢	口径(23.2) 残高 5.9	稜をもって外反する口縁部。	ハケ	マメツ	淡茶褐色 灰黄茶色	石、長（1～3） ◎		
114	鉢	口径(17.0) 器高 17.6 底径 (3.8)	口縁部～胴上半部を部分的に欠く。球形の胴部、平底。稜をもって外反する口縁部。	口ヨコナデ 胴ハケ→ミガキ	口ヨコナデ 胴ハケ	乳白色 淡褐色	石、長（1～3） ◎		48
115	鉢	口径(22.4) 残高 8.7	直口口縁。	口ハケ→ナデ 胴タタキ(1部ケズリ)	ハケ→ミガキ	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～6） ◎	黒斑	
116	鉢	口径(21.2) 残高 5.7	直口口縁。	ハケ	ハケ→ミガキ	乳茶色 乳茶色	密 ◎	黒斑	
117	鉢	口径 21.6 残高 7.2	内湾してたちあがる直口口縁。	口ハケ 胴ケズリ？	ナデ	暗灰褐色 暗茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
118	鉢	底径 3.3 残高 2.0	突出するやや大きい平底。	マメツ	ハケ	黒茶色 黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎	黒斑	

DK1出土遺物観察表（土製品）

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
119	鉢	底径 6.3 残高 2.8	台付鉢。「ハ」の字状に開く脚部。	ナデ	ナデ	黄茶色 乳茶色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	
120	高坏	残高 2.9	坏部。稜をもつ。	ハケ→ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～4） ◎		
121	高坏	残高 2.7	坏部。稜をもつ。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） ◎		
122	高坏	残高 2.8	坏部。	マメツ	マメツ	赤褐色 乳黄褐色	密 ◎		
123	高坏	残高 8.7	柱部。円孔3段（φ2.2cm）。	マメツ	マメツ	灰茶色 灰茶色	石、長（1～3） ◎		49
124	高坏	残高 9.9	柱部。円孔2段（φ1.8cm）。	ミガキ	ナデ	黄褐色 暗黄褐色	石、長（1～6） 金 ◎		49
125	高坏	残高 13.5	柱部。円孔2段（φ1.8cm）。	マメツ	ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） ◎		49
126	器台	口径 20.0 残高 1.3	口縁部片。口縁端部は垂下する。	ナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		
127	器台	口径(34.0) 残高 1.2	口縁端部は面をなし、「S」字状の棒の浮文を施す。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～5） ○		49
128	器台	口径(21.6) 残高 2.5	口縁端部は垂下し、端面にはクシ描波状文6条を施す。	ナデ	ミガキ	褐色 褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
129	器台	残高 1.0	口縁部片。口縁端部は上端部が剥離する。	ミガキ	ハケ	黄茶色 茶褐色	石、長（1～2） ◎		
130	器台	口径(28.2) 残高 2.1	口縁部片。口縁端部は垂下し、クシ描波状文6条。	ナデ	ナデ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		
131	器台	口径(25.4) 残高 2.2	口縁部片。口縁端部は垂下し、クシ描波状文6条。	ナデ	ハケ→ナデ	淡黄褐色 淡褐色	石、長（1～4） ○		49
132	器台	口径(26.8) 残高 1.8	口縁部片。口縁端部は拡張し、クシ描波状文7条	ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石、長（1～2） ◎		
133	器台	残高 7.4	稜をもって外反する受部。柱部に円孔（φ2.0cm）。	ハケ→ナデ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～5） ◎		
134	器台	残高 8.9	柱部。円筒形の柱部に、円孔3段以上（φ2.0cm）。	マメツ	ナデ	明茶褐色 明茶褐色	石、長（1～3） ◎		
135	器台	残高 8.2	柱部。円筒形の柱部に、円孔3段以上（φ1.6cm）。	ハケ→ミガキ	ナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
136	器台	残高 5.8	柱部。円筒形の柱部に、円孔2段以上（φ2.0cm）。	マメツ	ナデ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
137	支脚	底径 11.1 残高 15.4	角状の突起部を2ヶもつ。受部には貫通孔。	タタキ→ナデ	ナデ（布目痕）	黒褐色 褐色	石、長（1～4） ○		49

DK1 出土遺物観察表（土製品）

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
138	支脚	底径 12.6 残高 15.5	角状の突起部を2ヶもつ。	㊥ナデ ㊦タタキ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～4） ○		49
139	支脚	底径 13.5 残高 13.5	角状の突起部を2ヶは欠損。受部には貫通孔をもつ。	ナデ・タタキ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石、長（1～5） ○		
140	支脚	残長 8.1	角状の突起部片。	ナデ		茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
141	支脚	底径(13.2) 残高 11.3	「ハ」の字状に開く裾部。	タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	黄茶色 灰黄色	石、長（1～2） ◎		
142	支脚	底径 (9.4) 残高 8.5	「ハ」の字状に開く裾部。	タタキ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
143	支脚	底径(11.9) 残高 6.3	「ハ」の字状に開く裾部。	タタキ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石、長（1～3） 金 ◎		
144	支脚	底径 7.8 残高 6.0	受部には大きい貫通孔。受部は傾斜する。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石、長（1～2） 金 ◎		
145	甑	底径 3.6 残高 3.0	平底の底部。焼成前の突孔（φ0.4cm）。	タタキ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石、長（1～3） 金 ◎		49
146	匙	残長 5.7	サビ状土製品の握手部片。	ナデ	ナデ	淡褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	49

DK1 出土遺物観察表（石製品）

(6)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
147	石庖丁	完形	結晶片岩	9.0	4.2	1.5	54.4	両側部に抉り	49
148	叩き・磨き石	完形	不明	6.3	5.7	3.2	133.4		
149	叩き・磨き石	約1/2	不明	6.7	4.2	3.5	125.4		
150	用途不明		不明	6.9	6.4	8.5	40.9		

表56　土器集中地点 出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	甕	口径(18.6) 残高 6.0	稜をもって外反する口縁部。	ハケ（マメツ）	マメツ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1～3） ◎		
152	甕	口径(22.5) 残高 3.8	あいまいな稜をもって外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎		
153	甕	口径(16.5) 残高 2.2	外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ハケ	暗褐色 暗褐色	砂粒 ◎		
154	甕	口径(12.9) 残高 4.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ナデ	ナデ	黄褐色 乳褐色	石、長（1～3） ◎		

土器集中地点 出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
155	甕	底径 3.6 残高 3.8	やや厚い。平底。	マメツ	マメツ	乳褐色 茶褐色	石、長（1～3） ○		
156	甕	底径 3.9 残高 (2.0)	平底。	タタキ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～2） ◎		
157	壺	口径(13.8) 残高 6.4	複合口縁壺。口縁部は無文。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	砂粒 ◎		
158	壺	口径(11.3) 残高 10.5	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐マメツ ㊍ハケ	ナデ	乳黄色 灰黄色	石、長（1～3） 金 ◎		
159	壺	口径(14.2) 残高 5.6	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	ナデ	黄茶色 黄白色	石、長（1～4） 金 ◎		
160	壺	口径 (9.9) 残高 4.3	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ナデ ㊍ハケ	ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～5） ◎		
161	壺	口径(14.1) 残高 4.7	複合口縁壺。口縁部は無文。	ナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳黄茶色	石、長（1～4） ◎		
162	壺	口径(13.6) 残高 4.1	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	乳茶色 黄白色	石、長（1～2） 金 ◎		
163	壺	口径(12.6) 残高 3.5	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ナデ ㊍ハケ	㊐ハケ→ナデ ㊍ナデ	暗茶色 暗灰色	石、長（1～2） ◎		
164	壺	口径(21.0) 残高 4.2	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	ヨコナデ	灰黄色 乳灰色	石、長（1～2） 金 ◎		
165	壺	残高 8.2	頸部下端に斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	㊍ヨコナデ ㊐ナデ	黄茶色 灰黄色	石、長（1～6） ◎		
166	壺	残高 3.8	頸部下端に斜格子目の刻目突帯文。	ハケ	マメツ	淡茶褐色 乳褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
167	壺	残高 5.3	頸部に「ノ」の字状の刻目突帯文。	ハケ	ナデ	茶褐色 灰黄褐色	石、長（1～6） 金 ◎		
168	壺	残高 3.9	細長頸壺。頸部にクシ描沈線文7条。	ミガキ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
169	壺	底径 (4.3) 残高 4.7	たちあがりをもつ厚い平底。	ナデ	ナデ	淡赤褐色 乳灰色	石、長（1～3） ◎		
170	壺	底径 2.7 残高 1.6	底部。突出する平底。	ナデ	ナデ	灰色 乳茶色	砂粒 ◎		
171	壺	残高 1.7	口縁部片。口縁端部は垂下する。器台の口縁部の可能性をもつ。	ナデ	マメツ	黄灰色 黄茶色	石、長（1～2） ◎		
172	壺	口径(20.6) 残高 1.6	口縁部片。口縁端部に刻目を施す。	ミガキ	ミガキ	乳灰色 乳黄色	石、長（1～2） 金 ◎		
173	鉢	底径 2.7 残高 8.0	丸みをもつ胴部、平底。口縁部はわずかに欠損する。	ナデ	ナデ	黄褐色 乳褐色	石、長（1～4） ◎		50
174	高坏	残高 3.2	坏部。稜をもつ。	マメツ	ミガキ(マメツ)	乳黄褐色 暗茶褐色	石、長（1～3） 金 ◎		

土器集中地点 出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
175	高坏	底径(18.2) 残高 2.6	脚部。裾部は大きく開き円孔をもつ。	ミガキ(マメツ)	マメツ	暗灰色 暗灰色	石、長（1～3） 金 ◎		
176	高坏	残高 9.5	柱部。円孔2段（φ2.0cm）。	ナデ	シボリ痕	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～4） ○		
177	高坏	残高 11.3	柱部。円孔2段（φ1.9cm）。	マメツ	ナデ	灰茶色 茶褐色	石、長（1～3） ◎		
178	支脚	残長 3.9	受部の突起部片。	ナデ		乳灰茶色	石、長（1～3） ◎		
179	土製品		注口土器。注口部片。	ナデ	ハケ	灰褐色 淡褐色	石、長（1～2） ◎		50

土器集中地点 出土遺物観察表（石製品）

(4)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
180	用途不明	完形	不明	13.3	5.0	1.9	174.8		
181	磨き石	完形	不明	8.4	6.7	3.3	300.0		

表57　その他の出土遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
182	甕	口径(12.4) 残高 10.2	ゆるやかに外反する口縁部。	㊐ナデ ㊐ハケ	㊐ハケ→ナデ ㊐ナデ	乳茶色 乳黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
183	壺	口径 20.7 残高 9.2	複合口縁壺。口縁部は無文。	マメツ	マメツ	黄橙色 乳灰色	石、長（1～5） ◎		
184	壺	口径(13.5) 残高 8.7	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ナデ ㊐ハケ ㊐ナデ	ナデ	橙茶色 橙茶色	石、長（1～3） ◎		
185	壺	口径(14.5) 残高 8.2	複合口縁壺。口縁部は無文。	㊐ナデ ㊐ハケ	㊐ヨコナデ ㊐ナデ	乳茶色 乳茶色	石、長（1～3） ◎		
186	壺	口径(18.3) 残高 3.5	複合口縁壺。口縁部クシ描波状文。	ハケ	ヨコナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～2） 金 ◎		
187	壺	口径 (7.5) 残高 14.2	ふくらみをもつ胴部。短かく外反する口頸部。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊐ハケ	ハケ→ナデ	黄灰色 黄灰色	石、長（1～3） 金 ◎		
188	高坏	残高 6.8	柱部。円孔2段。	ハケ→ミガキ	ナデ	黄褐色 灰褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
189	支脚	受部径 (7.8) 器高 3.8 底径 (8.2)	扁平な円柱を呈す。	ナデ		黄灰色	石、長（1～4） 金 ◎		
190	支脚	底径(10.5) 残高 14.1	「ハ」の字に開く裾部。	タタキ	㊐ハケ ㊐ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） 金 ◎		

その他の出土遺物観察表（石製品）

(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
191	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	8.4	4.3	4.0	25.6		50
192	石斧	完形		11.9	5.3	3.9	492.0		50
193	叩き石	2/3	花こう岩	9.4	6.8	5.2	390.0		
194	磨き石	2/3	不明	8.8	6.5	2.3	159.3		
195	用途不明	完形	結晶片岩	17.3	2.6	5.9	553.0		50

附章３．古泉遺跡出土資料

１．はじめに

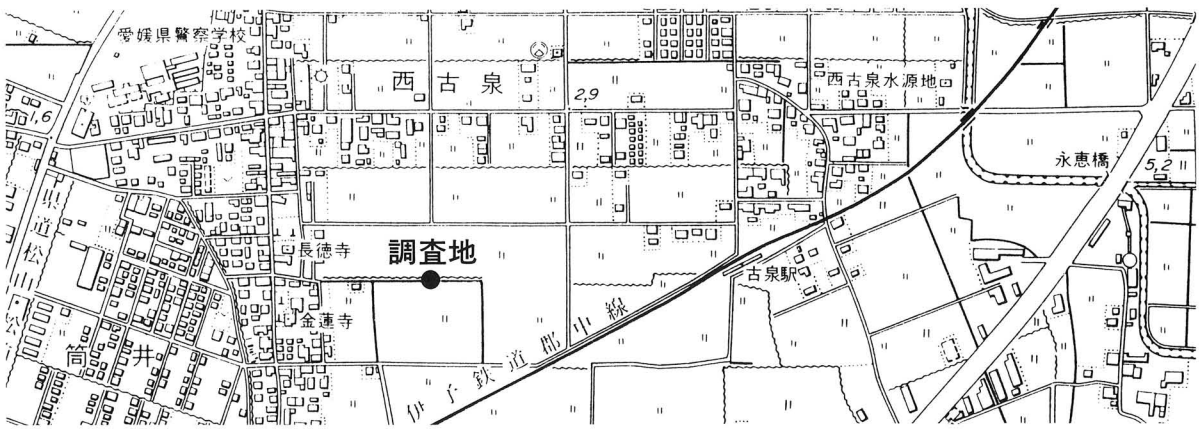
松山平野最大の河川である重信川は、平野西の伊予灘にそそぐ。下流域は、北岸が松山市石井・垣生地区、南岸が伊予郡松前町となる。北岸では石井地区で、近年弥生時代後期末～古墳時代の大集落が確認されたが、河口域一帯の垣生地区では本格的な調査がなく、遺跡の有無を含めその実態は全く分からない。一方、南岸は、国近川を含む数条の小河川による沖積微高地上に遺跡が展開し、下流域では古墳時代集落の出作遺跡があり、河口付近には本稿提示の古泉遺跡が存在する。

本稿では、重信川流域の遺跡様相を明らかにするために、河口南岸にある古泉遺跡の出土資料を取り上げ、重信川流域の弥生集落研究の基礎資料を提示するものである。

２．遺跡の概要

古泉遺跡は、松前町西古泉、伊予鉄道郡中線古泉駅の西方400mの地点にある。重信川及び伊予灘までは１.５㎞の位置で、遺跡は標高３ｍの砂丘列上ないし三角州上の微高地に立地している。ただし、重信川下流域は慶長期に河川改修が行われ、古代においては当地域には幾つかの小河川が流れていたようである。

遺跡は、昭和58年２月の水路工事に際し、同町在住の弘津慎勝氏等によって土器が発見され、周知の遺跡となった。弘津氏は10日間を費やし、土層の記録と記録写真、そして遺物の取り上げを行った。作業は工事に伴って行われ、対象面積は幅１.８ｍ、長さ約100ｍにおよぶ。このうち作業の大半は、土器が集中している約６㎡の範囲で行われた。土器出土地点の土層は、地表より第１層表土（20㎝）、第２層粘土層（20㎝）、第３層礫層（40㎝）、第４層粘土層（20㎝）、第５層砂層（20㎝）となる。遺物は地表下1.0～1.2ｍにある第５層砂層中から出土し、完形品を含む大型の土器と少量の石器が採取された。特に土器は積み重なるような状況で出土している。調査後は、遺物の洗浄と一部の接合を行い、展示ケースを製作し、出土品の収蔵と展示にご努力されている。本資料については、故西田　栄氏（愛媛大学名誉教授）が昭和58年に調査をなされたほか、町や地区の文化祭に展示するなど地域の文化財普及活動に寄与している。



第93図　位置図（縮尺１／10,000）

3．資　料

出土品には、土器、石器、土製品がある。土器は遺存がよいものが多く、完形に近い欠損品が10個体余りと、破片が100点以上ある。石器は、石庖丁の製品を含み10点余りが出土している。これ等に加えて、土製のフイゴ羽口片が１点みられる。以下、出土品で図化可能なものを掲載する。

１）土製品

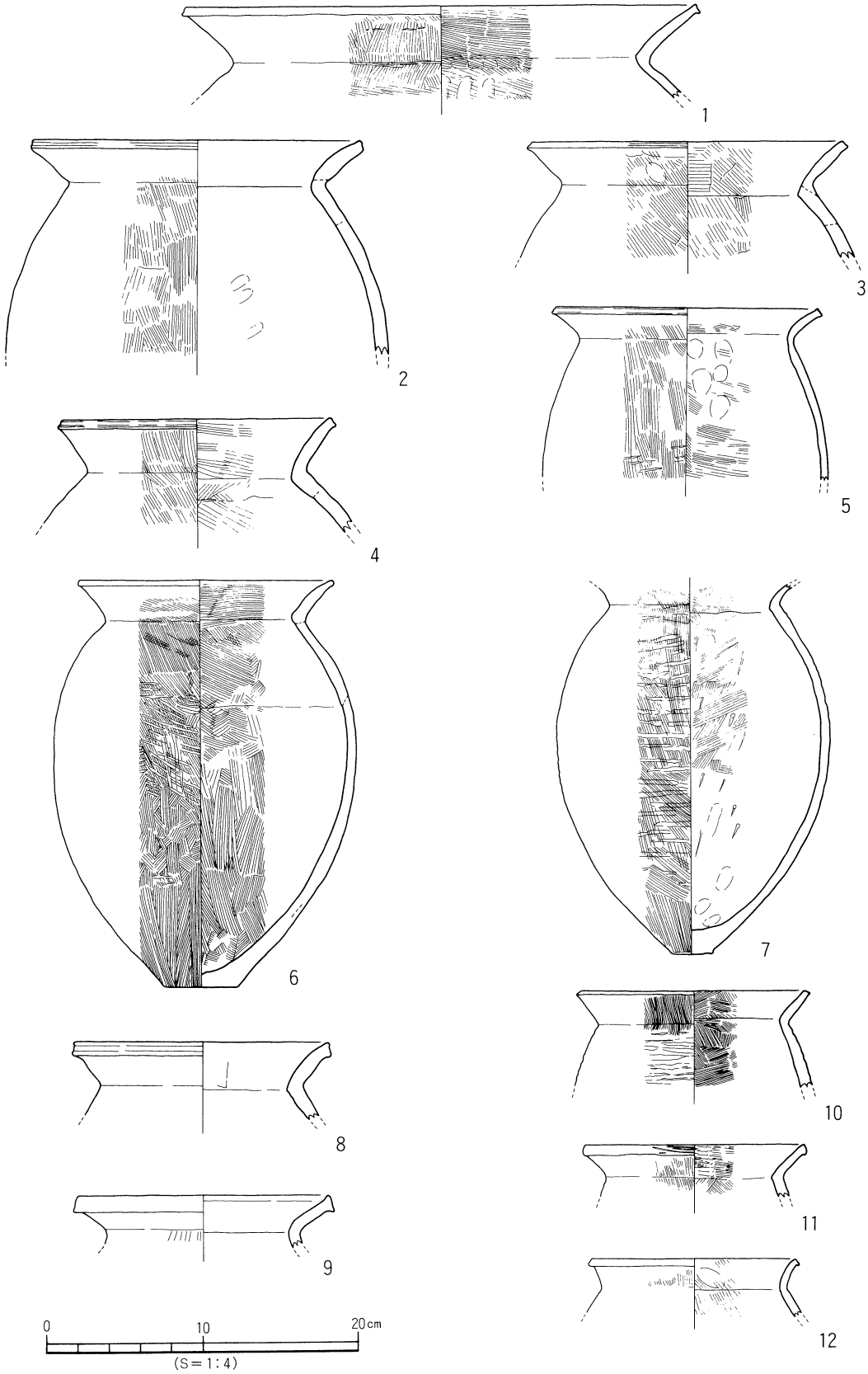
出土土器は、大多数が弥生時代後期の土器群で、そのほかに10点余りの弥生時代中期の土器がある。

ｉ）弥生時代後期の土器群（第94～100図、図版51～55）

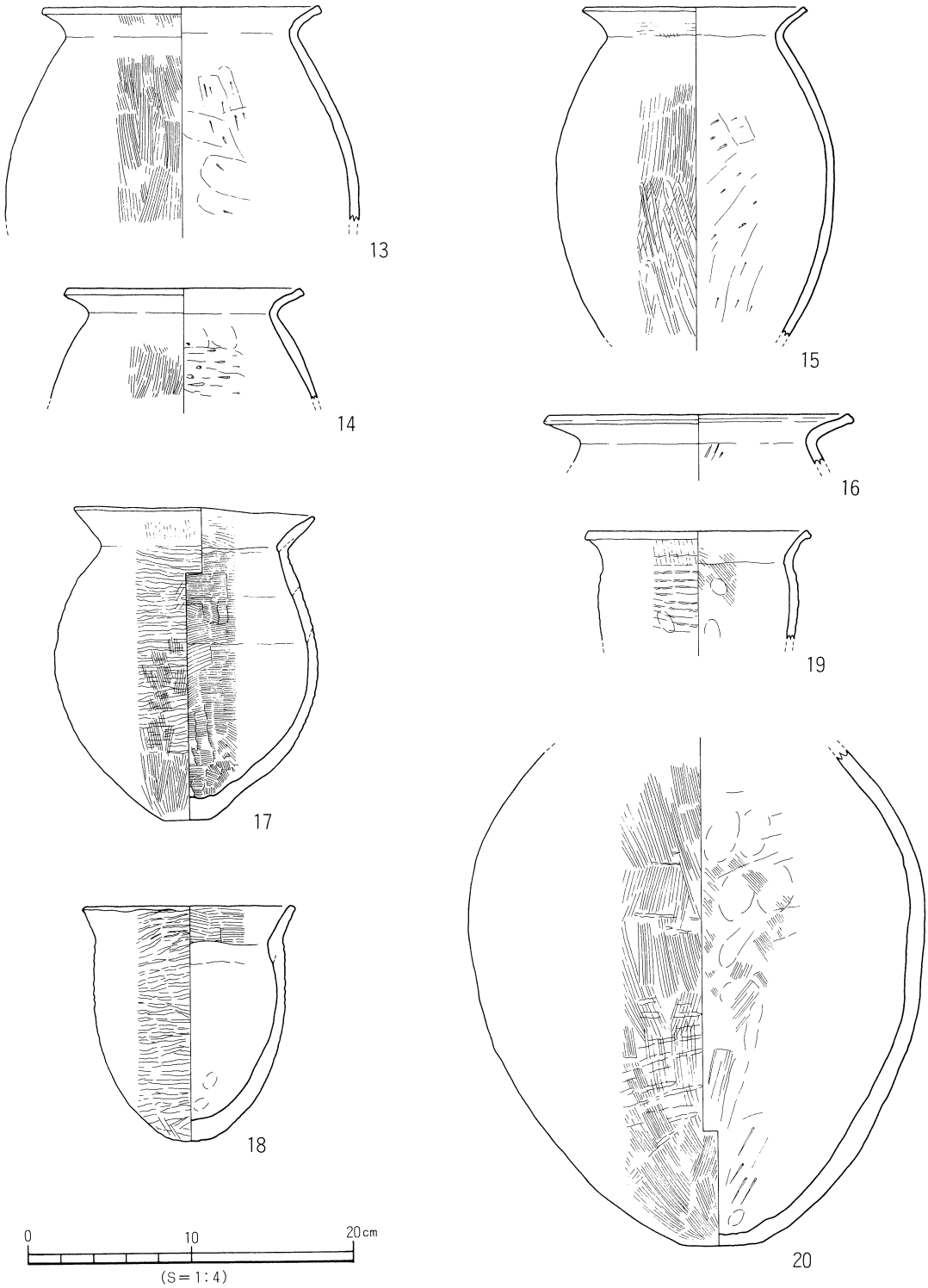
器種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、器台形土器、支脚形土器、ミニチュア品があり、土製羽口片がこれに伴う可能性が高い。個体数は、口縁部の小片を含め個体認定を行うと、甕形土器57点（50.44％）、壺形土器19点（16.81％）、鉢形土器34点（30.08％）、器台形土器１点（０.88％）、支脚形土器１点（０.88％）、ミニチュア１点（０.88％）となる。底部片では、甕形土器45点（51.72％）、壺形土器24点（27.58％）、鉢形土器18点（20.68％）となる。

甕形土器（１～37）は、法量に差があり、口径15～20㎝、器高25～30㎝の中型品が多数を占める。器形は、内面に稜をもって外面する「く」の字状口縁をもち、胴部は長胴で、胴中位前後の張りが強く、全体にわずかにふくらみをもっている。底部は平底になる。１は口径が30㎝を越える大型品である。２～５は胴上半部は刷毛目調整、６・７・10は胴上半部に叩き痕を残すものである。８・９は口縁端部がやや広い面となるもので、８はナデ凹みをもつ。11・12は口縁部の小片である。13～15は口縁部がゆるやかに外反するもので、胴部内面にケズリ痕を残すものである。16はゆるやかに外反する口縁部の小片で、13～15に類するものである。17～19は器高が20㎝に満たない小型品である。17は一部を欠損するもので、短い胴部は全体にふくらみをもつ。18・19は口縁部が上外方に開くもので、胴部は張りが弱く、最大胴径は口径より小さい。18は一部欠損品で、底部は丸みをもつ平底となる。20～37は胴部～底部の破片である。20～28は胴部形態が概ね判明するもので、胴部は長胴で、胴部下半にふくらみをもち、底部は平底になる。外面には叩き痕をもつもの20・21・24・27・28と、刷毛目調整痕に限られるもの22・23・25・26とがみられる。29～37は底部で、平底となる。外面には叩き痕をもつもの29～31・33がある。34～37は平底の底部片で、内面にケズリ痕をもつものである。

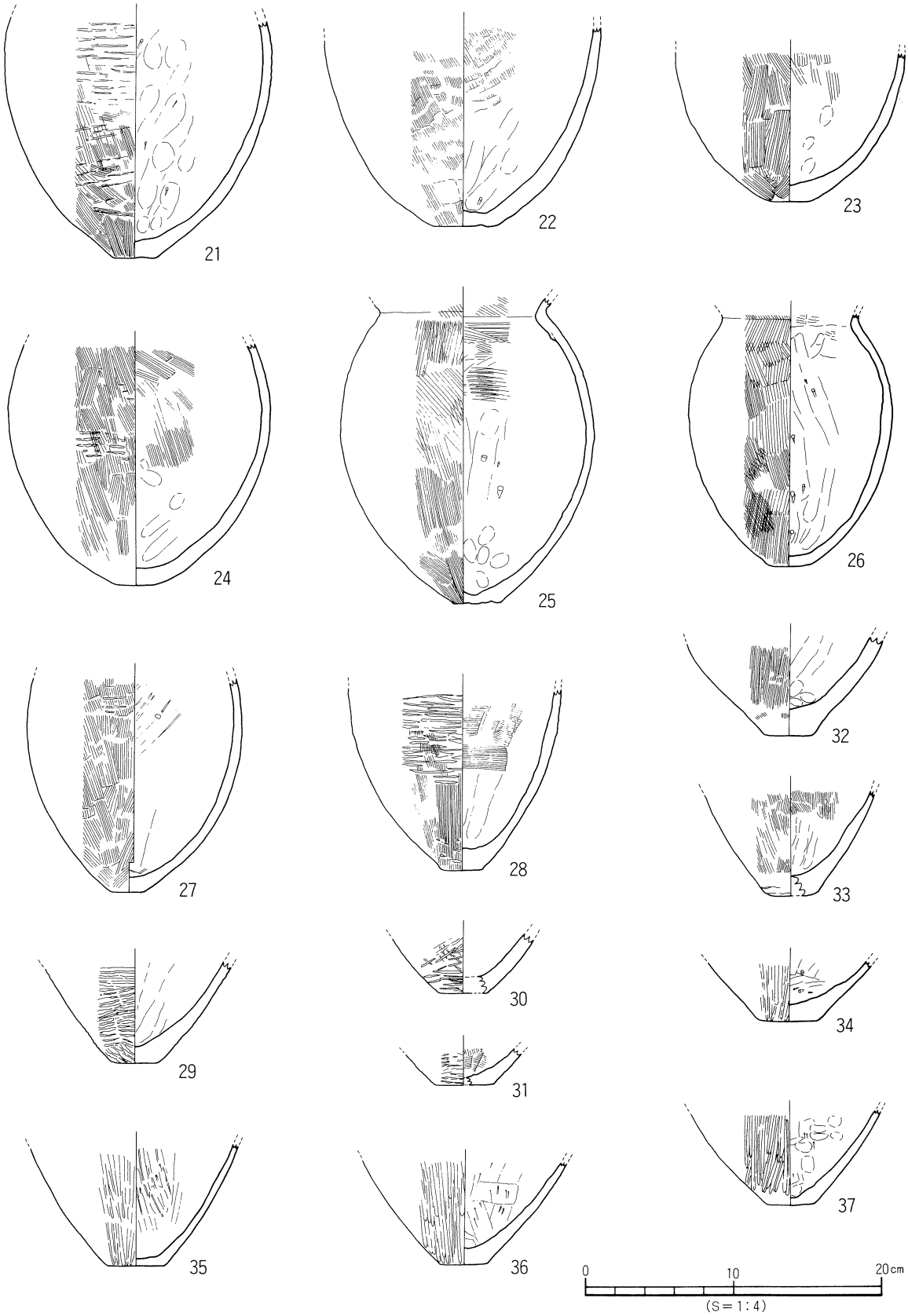
壺形土器（38～63）は、器形の全体を知られるものが少ない。38～40は複合口縁壺で、二次口縁部が内傾する38と、外傾する39・40がある。38は口縁部に斜線充塡の三角文を施し、39・40は斜格子目の刻目突帯文を頸部下端にもつ。41・42は直線的に上外方に開くものである。43は長い口頸部が直立してたちあがる。44～49は長い口頸部が大きく開くものである。44は口縁端部を垂下し、端面にはクシ描波状文を施す。50～52は頸部下端に刻目突帯文を施すものである。53は長頸壺の胴部片で、胴部は扁平球、底部は小さく突出する平底になる。54は小型品で、口頸部を欠損する。肩部の張る胴部と平底をもつ。55は口縁部を欠損するものである。肩部は張り、底部は広い平底となる。頸部は長く、ゆるやかに上外方にたちあがり、多条沈線文と「ノ」の字状の刺突文を巡らす。平野での類例は極めて少ない。56は脚台付の無頸壺で、復元完形品である。胴下半部はふくらみ、内傾してたちあがる口縁部をもつ。胴部下半には断面が台形状の貼付突帯をもち、突帯上には斜線充塡の三角文をもつ。脚部は、直立する短い柱部に、「ハ」の字状に開く裾部をもつ。裾部の中位には小円孔を穿つ。平野内には類例がない。



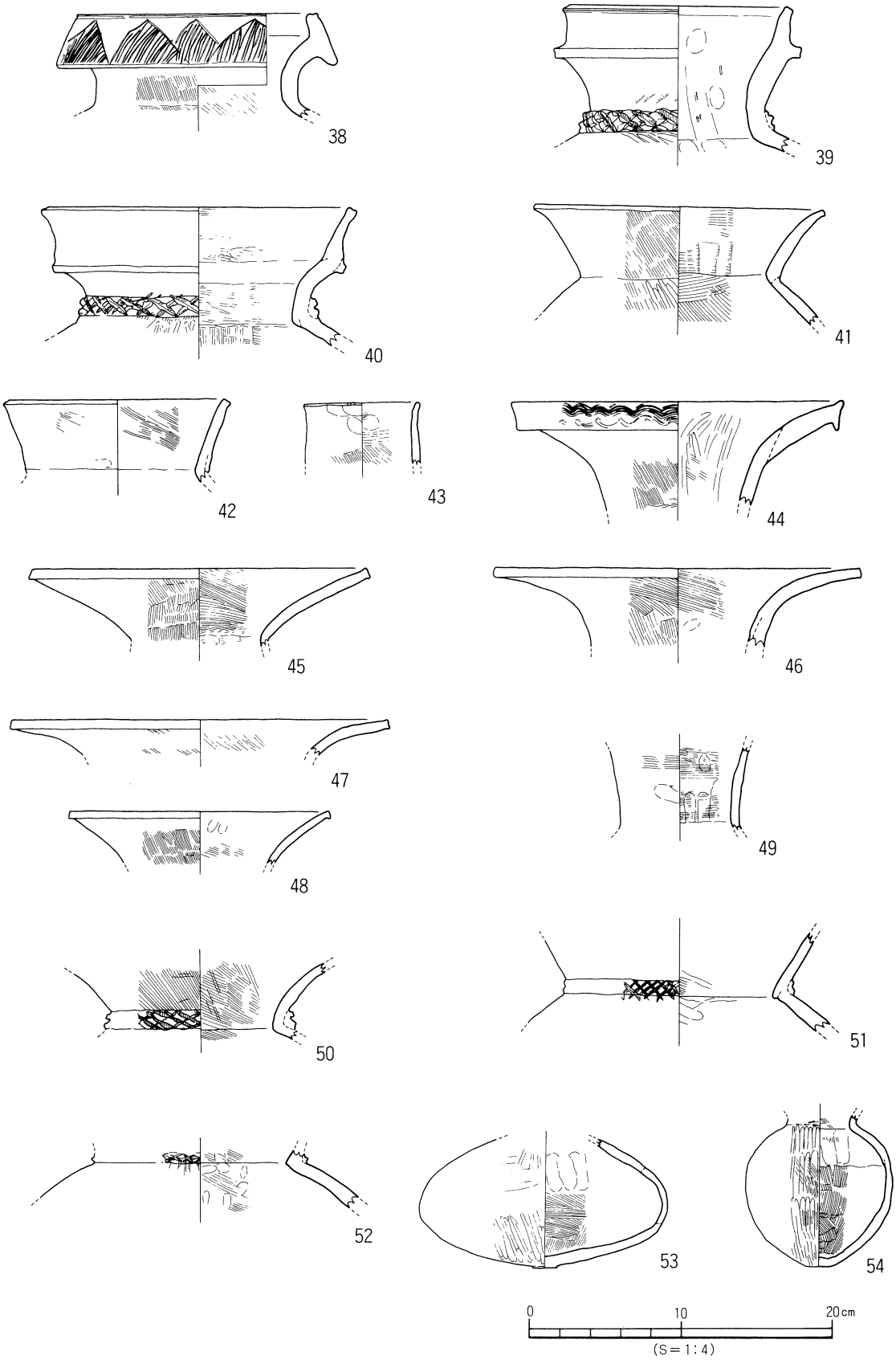
第94図　出土遺物実測図（1）



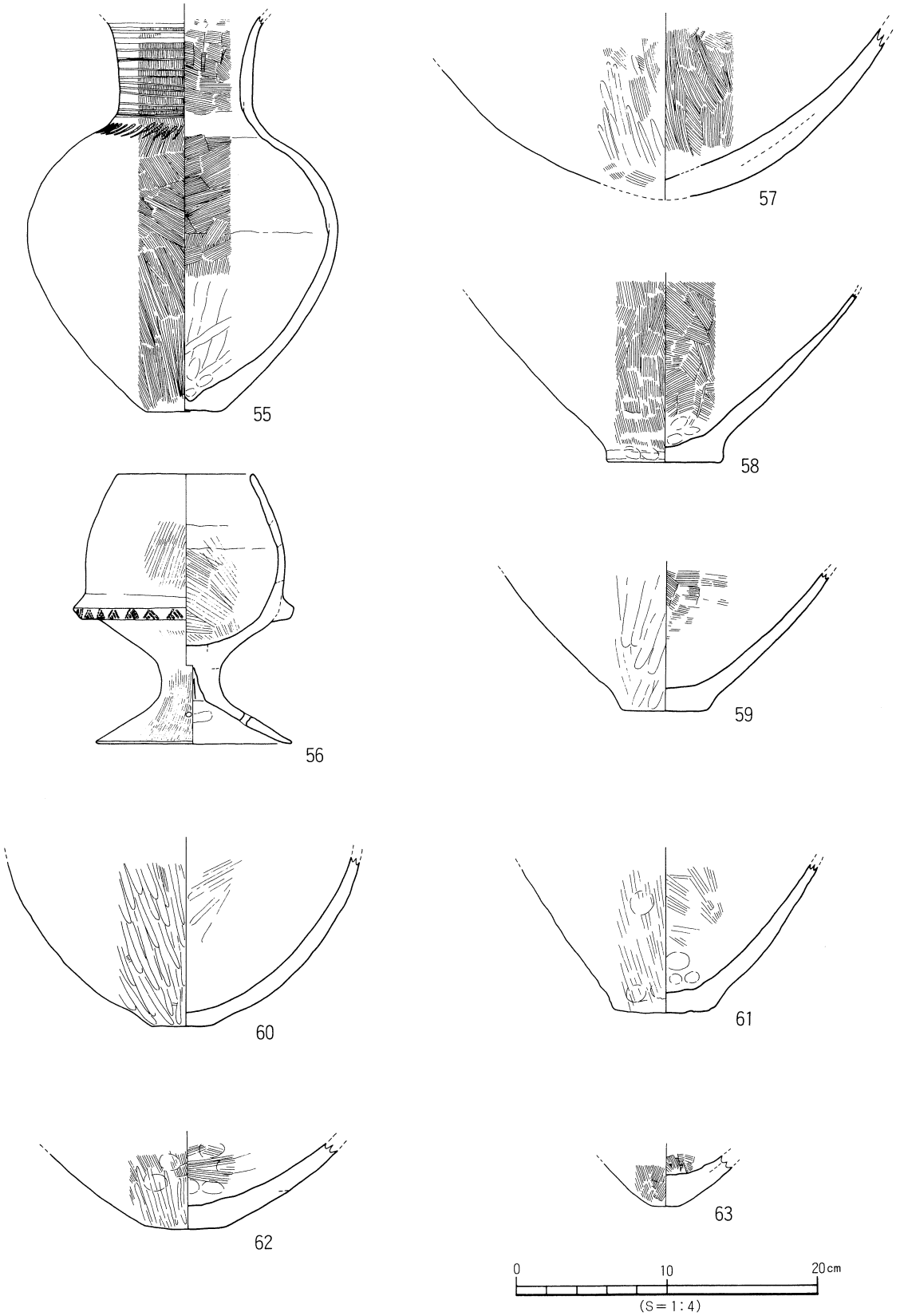
第95図　出土遺物実測図（2）



第96図　出土遺物実測図（3）



第97図　出土遺物実測図（4）



第98図　出土遺物実測図（5）

57～63は大～中型品の底部片である。57は底部を欠損している。58～61はたちあがりをもち、62・63は単純な平底となる。

鉢形土器（64～94）は、口縁部が外反するもの64～74、口縁部が直口であるもの75～83、脚台付きのもの84に分けられる。口縁部が外反するものには、口径値が胴部最大径値を凌ぐ64～72と、胴部が張り、胴部最大径値が口径値を凌ぐもの73・74とがみられる。後者は、口縁部が短く、上方にたちあがる特徴をもつ。直口口縁のものは、胴部にふくらみをもつもの75～82と、胴部が直線的なもの83とがある。底部は平底で、突出するものが１例ある（79）。脚台付鉢は84の１点で、一部を欠くがほぼ完形品となる。外傾してたちあがる口縁部に、「ハ」の字状に開く脚部をもつものである。85～94は底部片で、85～89は単純な平底、90～94はたちあがりをもち平底となる。89・93・94の外面には、叩き痕がみられる。

器台形土器は95で、口縁部片である。口縁端部は拡張し、上面・内面・外面には半截竹管による刺突文が施される。

支脚形土器は96で、受部に突起をもつもので、２つの突起が欠落している。胴部は中空となる。

ミニチュア土器は97で、底部片である。くびれの上げ底を呈している。

土製品にはフイゴの羽口片98がある。

ii）弥生時代中期（第101図99～108、図版55）

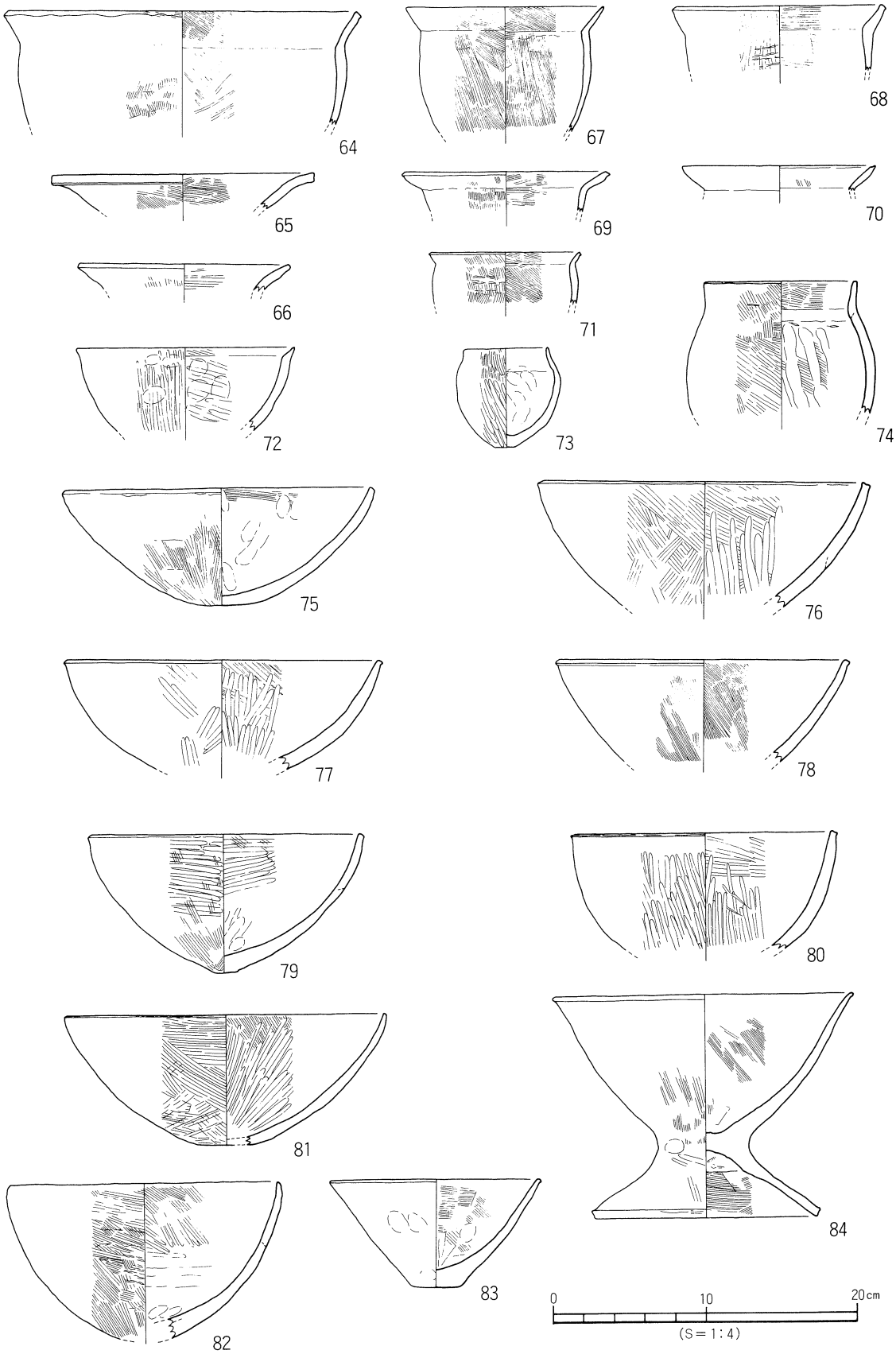
99～103は甕形土器である。99・100は口縁部片で、99は直立してたちあがる胴部に逆「く」の字状の口縁部をもち、胴部にはクシ描の多条沈線文と刺突文を施している。100は口縁部小片で、口縁部は逆「L」字状に外反する。101は胴部片で、多条沈線文と刺突文を施している。102・103は底部片で、くびれの上げ底となる。104～108は壺形土器である。104は口縁部片で、大きく開く口縁部となる。口縁端面には、斜格子目文が施される。106～108は底部片で、106・108は平底、107は凹み底になる。

2）石製品（第102・103図109～117、図版56）

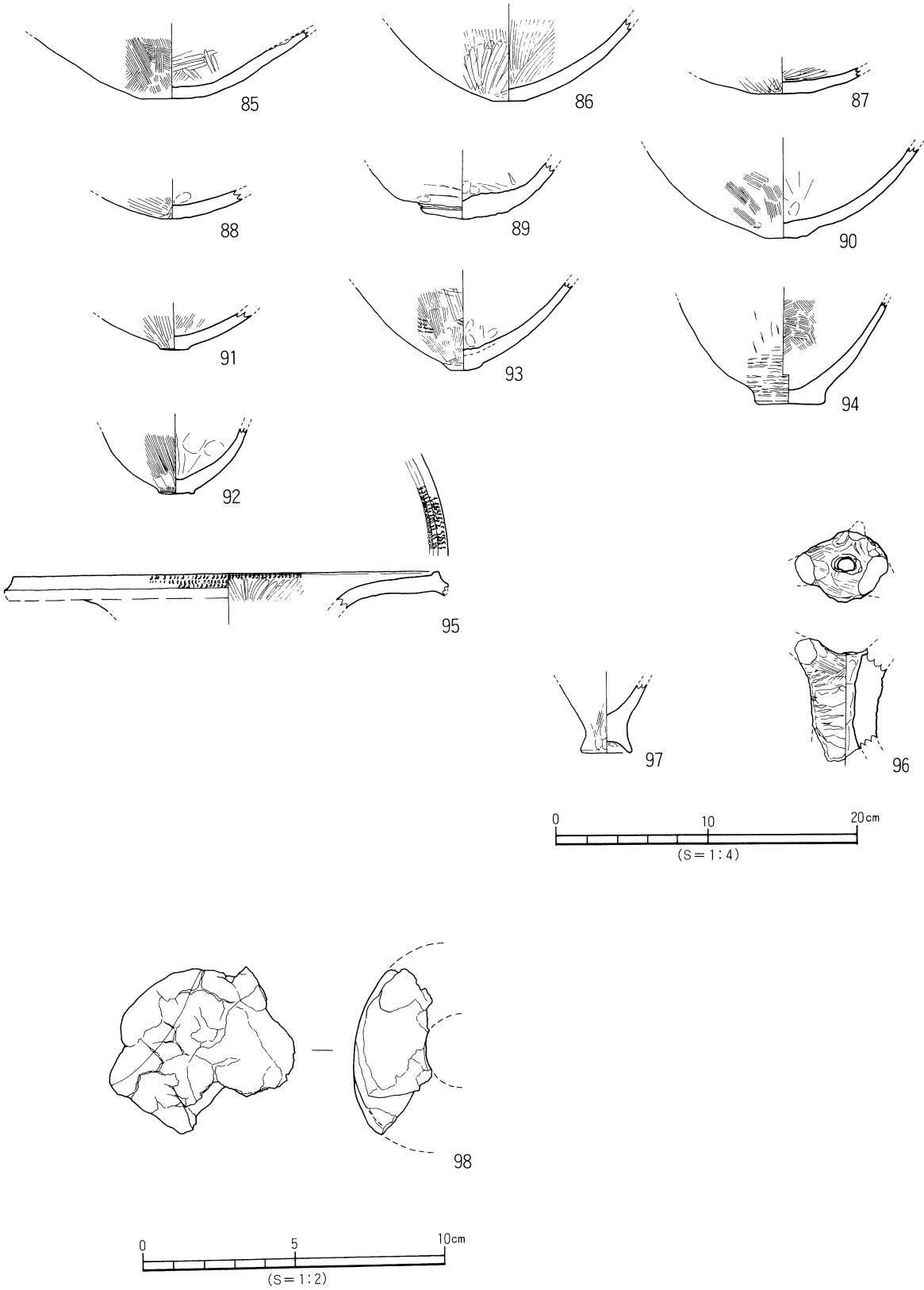
109～112は石庖丁である。109は製品で、平面形態が長方形を呈し、両側部には抉りをもつ。石材は結晶片岩で、重さは44ｇである。110は未製品で、石材は結晶片岩である。112は石庖丁の未製品と考えられるもので、石材は結晶片岩である。111は石庖丁で、石材は安山岩系、重さは34ｇとなる。113・114は器種不明品である。113は自然面を残し、114は円盤状の石製品で、石材は結晶片岩である。115は作業台となる台石片で、116・117は器種が判断できない。116は平面形態が撥形で、図上の三角形部分は薄く、図下はやや厚くなる。117は半円球状を呈し、中央部が大きく凹むものである。

4．小　結

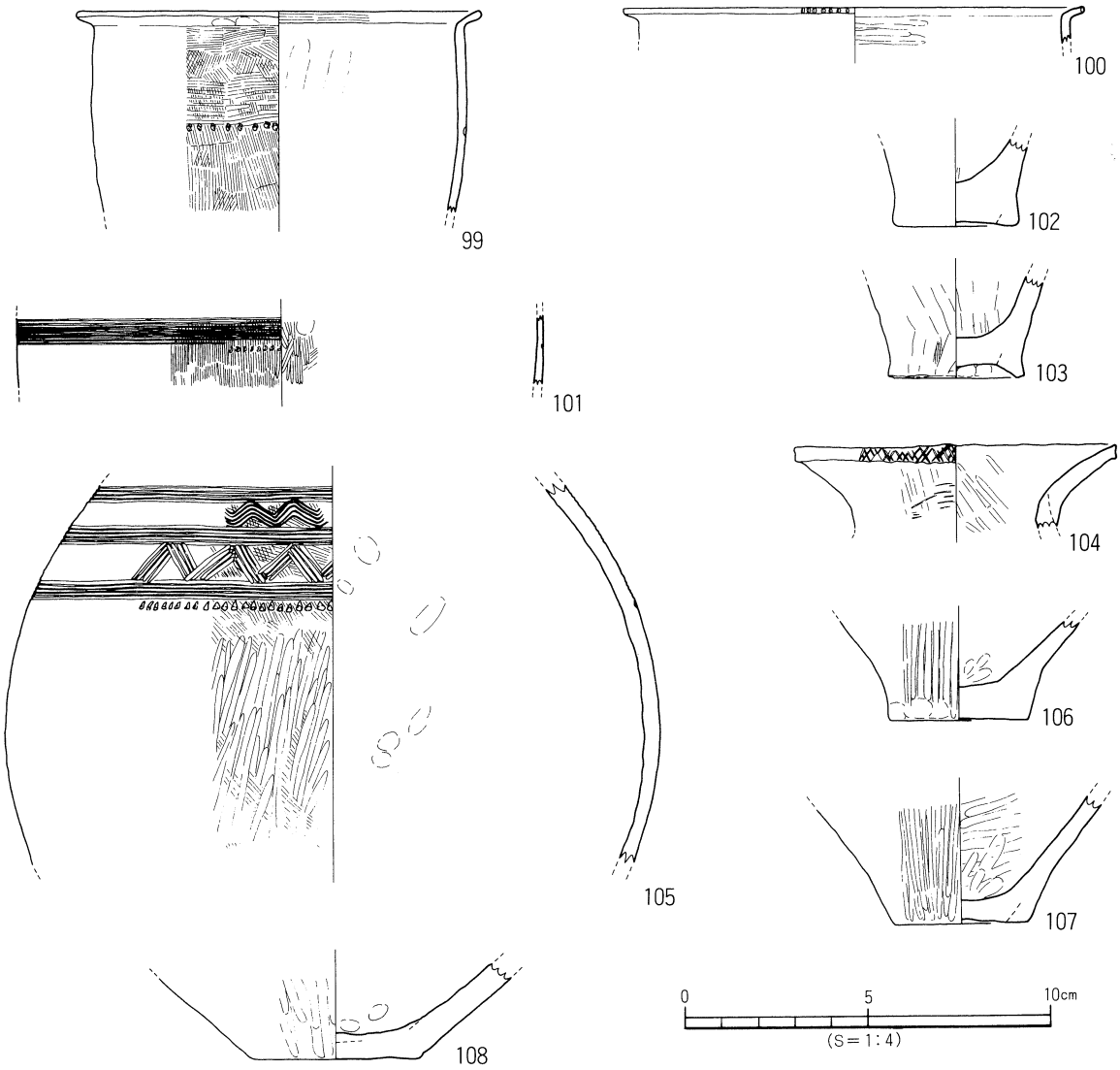
古泉遺跡出土土器は、その大半が弥生時代後期に属し、少量の弥生時代中期の資料を含んでいる。後期の土器は、甕形土器は底部が平底で、外面には叩き痕を残すものが一定量ある。壺形土器には口縁端部を垂下し、端面を飾るものがあり、支脚形土器には受部に角状の突起をもつものがある。これ等の特徴は、当平野の土器編年では梅木編年後期Ⅲに属するもので、弥生時代終末の土器群に比定することができる。一方、少量の中期土器は、甕形土器は逆「L」字状を呈し、底部は厚く上げ底になる。壺形土器は球形の胴部をもっている。施文には、甕形土器・壺形土器ともにクシ描文をもっている。これ等の特徴は、当平野の土器編年では梅木編年中期Ⅰに属するもので、中期前葉の土器群に比定される。この時期の資料は少なく、平野内では宮前川遺跡にみられるくらいである（野口 1986）。



第99図　出土遺物実測図（6）



第100図　出土遺物実測図（7）

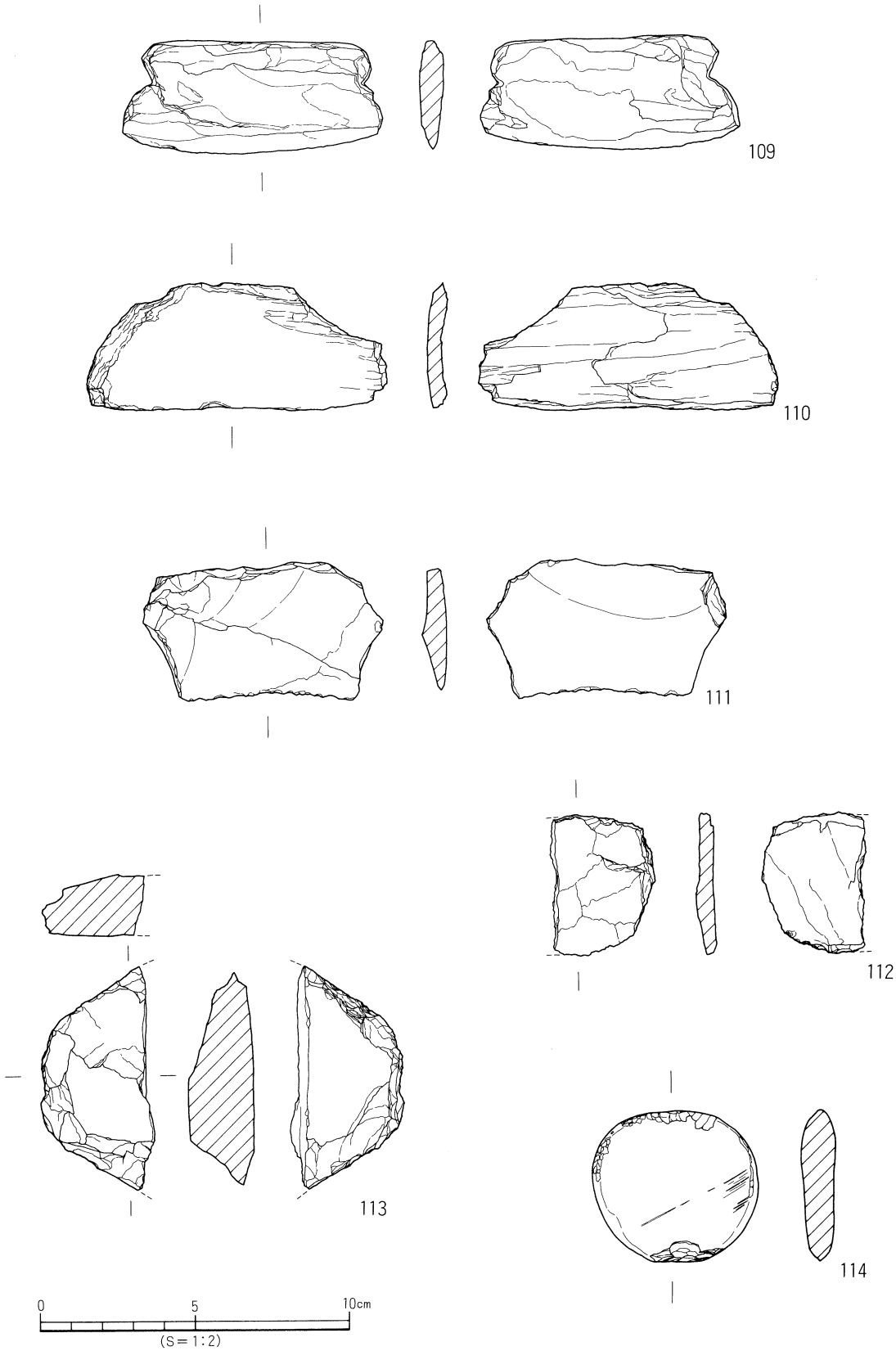


第101図　出土遺物実測図（8）

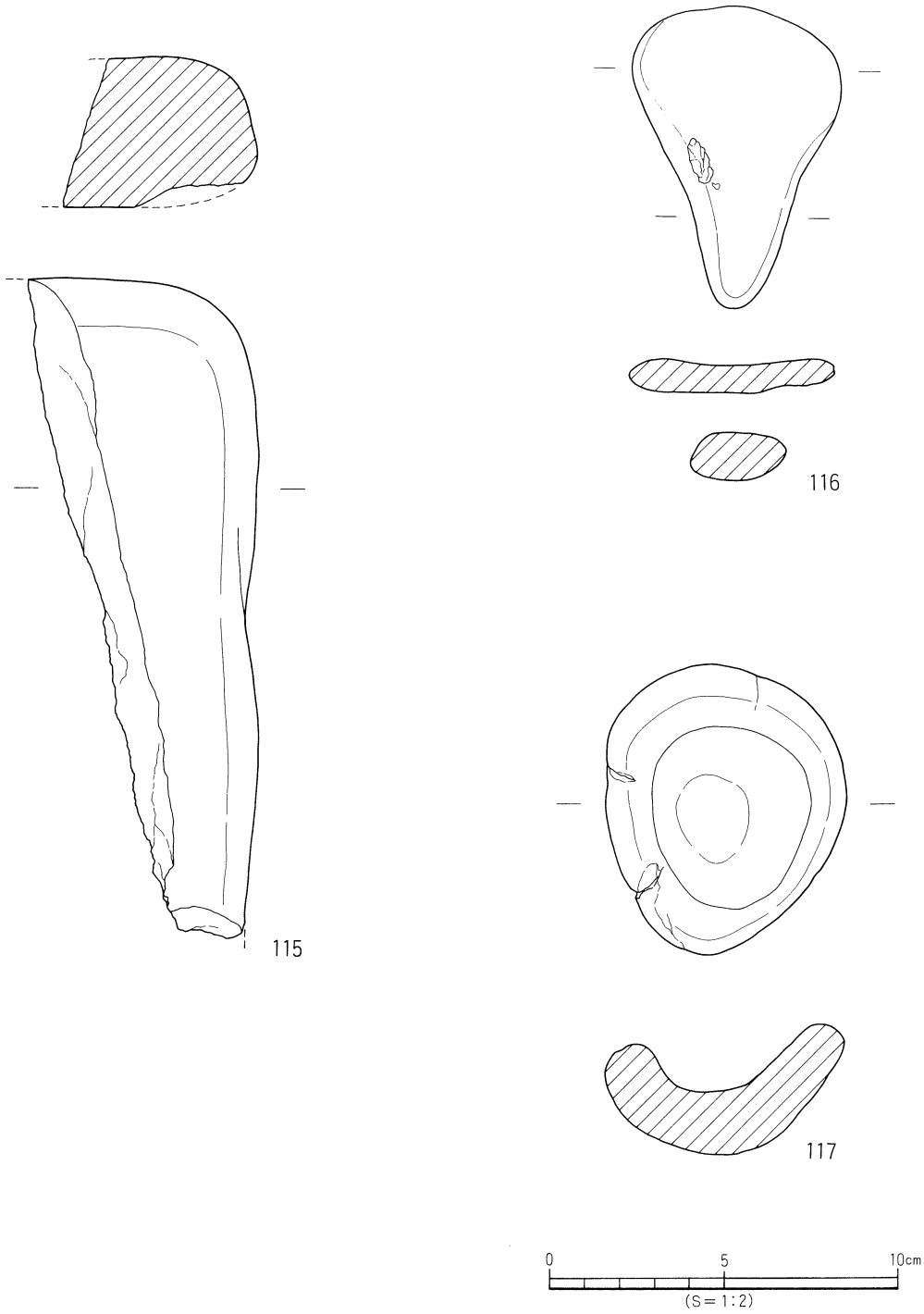
終末の土器群は、出土状況や遺物の遺存状況からすると遺構内出土品で、さらには短期間で廃棄された資料であることが推定される。例えば当平野では、溝や住居址等に一括投棄される事例（松山大学構内遺跡３次・浮穴小学校構内３次）や、土器が掘り方を伴わず集中して出土する事例（宮前川遺跡）があり、それ等に類するものであろう。さて、後期の土器には、２例の外来系品がある。第98図55・56は異形品で、吉備地方に類例が求められる。55は、長頸壺で、頸部に多条沈線文を施すことで、吉備地方では後期前葉～中葉に属するものであろう。終末の土器群と共伴するには時期差があまりにも大きい。56は、そのものは管見できないが、脚部形態や文様から吉備地方の後期終末に属するものであり、在地のそれと伴う可能性をもつ（正岡睦男 1992）。

土製品では、フイゴ羽口の破片が注目される。終末の土器が多いことや松山市北井門遺跡資料を参考にすると、弥生時代終末に時期比定されておかしくないものである（愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996）。

石製品は、四角形で両側を抉る109は、当平野では後期にみられる形態で、終末の土器と共伴した可能性をもつ。



第102図　出土遺物実測図（9）



第103図　出土遺物実測図（10）

このようにみると、本資料は松山平野の弥生時代終末の土器及び石器の基本的な要素をそなえたものとなる。また、吉備地方との関係を考える上での貴重な資料を含んでいる。最後に、本資料を評価するならば、弥生時代の重信川河口域の自然地形を言及する資料であり、重信川下流域の弥生時代集落の構造（立地と集落展開）や、弥生終末期の土器様相が知れる基礎資料といえる。

なお、資料の実見と本稿の掲載に際しては、発見及び採取者である弘津慎勝氏ご夫妻のご好意によるところが大きい。発見時の対応やその後の整理、展示ケースの設置等、文化財に対する姿勢を改めて学ばさせていただいた。末尾になりましたが、ご夫妻のご配慮と協力に感謝申し上げます。

〔文献〕

梅木謙一　1991　「松山平野の弥生後期土器」『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
野口光比古ほか　1986　『宮前川遺跡』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター　1996　「北井門遺跡」現地説明会資料

（注）　古泉遺跡出土資料は、下記にて展示・収納している。
愛媛県伊予郡松前町西古泉　見穏院松安山長徳寺（弘津慎勝）

表58　出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口　径(32.5) 残　高　6.0	口縁端部は面をなす。頸部内面は稜をもつ。	(口端)ナデ(マメツ) (口頸)タテハケ(6本/cm) (頸)ヨコハケ	ナデ→ハケ(11本/cm) 指頭痕	褐色 暗褐色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
2	甕	口　径(27.0) 残　高 13.6	口縁端部は面をなす。頸部内面は稜をもつ。	(口)ナデ (頸胴)ハケ(6本/cm)	(口)ヨコナデ (頸胴)ナデ(マメツ)	乳黄色 淡黄色	石(1～2)、長(1) ◎	煤	
3	甕	口　径(19.6) 残　高　7.5	口縁端部は面をなす。頸部内面は稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ→ナデ (肩)ハケ	ハケ	暗黄褐色 暗黄褐色	石、長（1～2） ◎		
4	甕	口　径(17.0) 残　高　7.3	口縁端部は面をなす。頸部内面は稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口頸)ハケ(7本/cm)	(口)ハケ(6本/cm･マメツ) (頸)ナデ (肩)ハケ(5本/cm)	淡灰黄色 淡茶褐色	石、長（1～4） 金 ◎		
5	甕	口　径(11.7) 残　高 10.9	口縁端部は面をなす。頸部内面はゆるやかな稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ (胴)タタキ→ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ→ナデ(指頭痕) (胴)ハケ	明褐色 明褐色	石、長（1～4） ◎		
6	甕	口　径(16.8) 器　高 25.9 底　径　4.7	口縁端部わずかに先細り。頸部内面は稜をもつ。	(口)ハケ→ヨコナデ (頸)ハケ (胴)タタキ→ハケ (底)ハケ	(口)ハケ (頸胴)ハケ→1部ナデ (胴底)ハケ	黄茶褐・黒灰色 黄茶褐色	石、長（1～6） 金 ◎	煤	52
7	甕	底　径　2.5 残　高 23.5	頸部内面は稜をもつ。平底の底部。	(胴中)タタキ→ハケ (胴下)ハケ	(胴上)ハケ (胴中)ハケ→ナデ	暗黄灰色 黄灰色	石、長（1～6） ◎		52
8	甕	口　径(16.0) 残　高　4.8	口縁端部はナデ凹む。	ヨコナデ	(口)ハケ→ナデ (頸)ハクリ	乳灰色 乳灰色	石、長（1） ◎		
9	甕	口　径(15.8) 残　高　3.6	口縁端部はナデによりやや広い面をなす。頸部内面はゆるやかな稜をもつ。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	(口)ヨコナデ (口頸)ナデ	白茶色 白茶色	石、長（1～3） ◎		
10	甕	口　径(13.6) 残　高　6.2	口縁端部はあいまいな面をなす。頸部内面はゆるやかな稜をもつ。	(口端)ナデ (口)ハケ(5～6本/cm) (頸)タタキ	ハケ	灰黄色 灰黄色	石、長（1～2） ◎	煤	
11	甕	口　径(13.9) 残　高　3.4	口縁端部は面をなす。頸部内面は稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口頸)ハケ	ハケ	黄灰色 灰茶色	石、長（1～3） ◎		

出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
12	甕	口径(12.9) 残高 3.8	口縁端部は面をなす。頸部内面はあいまいな稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(4~6本/cm) (頸)マメツ	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ	灰黄色 灰黄色	石、長（1） ◎		
13	甕	口径(17.0) 残高 12.6	口縁端部は丸みのある面をなす。頸部内面は丸みをもつ。	(口端)ヨコナデ (口頸)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ナデ (胴)ケズリ	乳黄茶・乳茶褐色 乳黄茶・乳茶褐色	石、長（1~3） 金 ◎	煤	
14	甕	口径(14.1) 残高 6.8	口縁端部は丸みのある面をなす。頸部内面は丸みをもつ。	(口頸)ヨコナデ (胴)ハケ	(口頸)ヨコナデ (胴)ケズリ	黄茶色 黄茶色	石、長（1~3） ◎		
15	甕	口径(12.6) 残高 20.1	口縁端部はあいまいな面をなす。頸部内面はゆるやかな稜をもつ。	(口端)ナデ (口頸)ハケ→ナデ (胴)ハケ(7~8本/cm)	(口)ヨコナデ (頸)ナデ(マメツ) (胴)ケズリ	淡灰黄色 淡灰黄色	石、長（1~2） ◎	煤	
16	甕	口径(18.2) 残高 3.1	口縁部は、わずかに内湾しながらたちあがる。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石、長（1~2） ◎		
17	甕	口径 14.6 器高 19.1 底径 2.4	口縁端部先細り。胴部は短く全体にふくらみをもつ。	(口)ハケ→ナデ (肩)タタキ (胴)タタキ→ハケ(6本/cm) (底)ナデ	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ(20本/cm) (胴)ハケ(9本/cm) (胴底)ハケ(20本/cm)→ナデ	乳茶黄色 乳茶褐色	石、長（1~4） ◎	黒斑	52
18	甕	口径(12.8) 器高 14.4 底径 (2.0)	丸平底。口縁端部はあいまいな面をなす。頸部が厚い。	(口端)ナデ タタキ	(口)ハケ(5本/cm) ナデ	乳茶黄色 乳茶褐色	石、長（1~4） 安山岩 ◎	黒斑	52
19	甕	口径(13.3) 残高 6.7	口縁端部は面をなす。頸部内面に稜をもつ。	(口端)ヨコナデ (口頸)ハケ→ナデ (胴)タタキ	ハケ→ナデ	灰茶黄色 暗黄褐色	石、長（1~2） ◎	黒斑	
20	甕	底径 4.6 残高 30.2	平底。胴部は全体にふくらみをもつ。	(胴上)ハケ(8本/cm) (胴下)タタキ→ハケ (底)ハケ	ハケ→ナデ	乳灰茶褐色 暗灰乳白色	石、長（1~3） ◎	煤	52
21	甕	底径 2.8 残高 16.0	底部は平底となる。	タタキ→ハケ	ナデアゲ (ケズリかき取り痕有) 指頭痕	灰茶色 灰色	石、長（1~6） ◎	黒斑	53
22	甕	底径 4.1 残高 13.3	底部は大きな平底。胴下半部はふくらみをもつ。	ハケ	(胴上)ハケ→ナデ (胴底)ナデ・ナデアゲ	暗灰褐色 暗褐色	石（1~4） ◎		53
23	甕	底径 2.3 残高 10.0	底部は丸みをもった平底。胴下半部はふくらみをもつ。	ハケ	(胴上)ハケ (胴底)ナデ	灰黄色 灰黄色	石(1)、長(1~3) ◎	煤	
24	甕	底径 2.5 残高 16.1	底部は丸みをもつ平底。	(胴上)タタキ→ハケ (胴下)ハケ (底)ナデ	(胴上)ハケ (胴底)ナデ	暗灰褐色 黄褐色	石、長（1~3） ◎	煤	53
25	甕	底径 3.1 残高 20.4	胴部は全体にふくらみをもつ。胴中位部が最大径となる。平底。	(胴上)ハケ(4~5本/cm) (胴下)ハケ(10~12本/cm) (底)ナデ	(頸)ハケ (胴)ケズリ (底)ナデ(指頭痕有)	黄茶灰色 黄灰・茶灰色	石、長（1~6） ◎	煤	
26	甕	底径 2.7 残高 16.8	底部は平底。胴下半部はわずかにふくらみをもつ。	ハケ	(頸)ハケ (胴)板ナデ(かき取り?) (底)ナデ	灰黄褐・乳褐色 灰黄褐色	石、長（1~8） 金 ◎	黒斑 煤	
27	甕	底径 2.0 残高 14.5	底部は丸みのある平底。	(胴上)タタキ→ハケ (胴底)ハケ(7本/cm)	(胴上)1部かき取り (胴底)ナデ	乳茶黄色 乳茶黄色	石、長（1~4） ◎	黒斑	
28	甕	底径 2.7 残高 12.2	底部はあいまいなたちあがりをもつ平底。胴下半部は張りが弱い。	(胴上)タタキ(1部ハケ) (胴下)タタキ→ハケ (底)タタキ→ナデ	(胴上)ハケ (胴底)ナデ	黄褐・赤褐・乳茶褐色 乳茶褐・暗灰褐色	石、長（1~5） 金 ◎	黒斑 煤	
29	甕	底径 3.2 残高 6.8	底部は丸みのある平底。胴下半部は張りが弱い。	タタキ	ナデ・ナデアゲ	乳灰色 淡灰黄色	石、長（1~4） ◎	黒斑	
30	甕	底径 (3.4) 残高 4.1	底部は平底。胴下半部は直線的。	タタキ	ナデ	淡灰褐色 暗灰褐色	石、長（1~5） 金 ◎		
31	甕	底径 4.0 残高 2.4	底部は平底。胴下半部は直線的。	タタキ (底)タタキ→ハケ	ハケ	灰黄褐色 黄褐色	石、長（1~3） ◎		

出土遺物観察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
32	甕	底径 3.2 残高 6.7	底部は厚く、平底。あいまいなたちあがりをもつ。	ハケ(10~11本/cm) (底)未調整	ナデアゲ (指頭痕)	暗灰茶色 灰黄色	石、長 (1~3) ◎		
33	甕	底径 (3.4) 残高 7.1	底部は厚く、平底。胴下半部は直線的。	ハケ (胴底)ナデ	ハケ (底)ナデアゲ	暗灰褐・黄褐色 黄褐色	石、長 (1~5) 金 ◎	黒斑	
34	甕	底径 4.0 残高 4.2	底部は、大きな平底。胴下半部は薄く、底部はやや厚い。	ミガキ	ケズリ	灰茶色 灰黄茶色	石、長 (1~5) ◎	黒斑	
35	甕	底径 3.9 残高 8.2	底部は、大きな平底。器壁は薄い。	ミガキ(ハケ?) (底)ハケ	ケズリ (底)ナデ	淡灰茶色 灰茶褐色	石、長 (1~3) ◎	煤	
36	甕	底径 3.2 残高 6.2	底部は平底。胴下半部は直線的で、薄い。	ミガキ	ケズリ	淡白褐・淡黄褐色 黄褐・暗灰色	石、長 (1~4) 金 ◎	黒斑	
37	甕	底径 3.2 残高 6.1	底部は平底。胴下半部は直線的で、薄い。	ミガキ (底)ミガキ→ナデ	ナデ(1部工具痕) 指頭痕	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長 (1~4) 金 ◎		
38	壺	口径 15.5 残高 6.9	口縁部には斜線充塡の三角文10ケ。	(口)ナデ (頸)ハケ	(口)ヨコナデ (頸)ハケ	灰乳茶黄色 乳黄茶色	石(1~2)、長(1~3) ◎		53
39	壺	口径 14.1 残高 9.5	複合口縁部は直立し外反する。頸部には斜格子目の刻目突帯。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ→ヨコナデ (肩)工具痕(ヨコナデ)	(口)ヨコナデ (頸)ナデアゲ?	乳黄茶・黄灰色 黄茶色	石、長 (1~3) 金 ◎		53
40	壺	口径(19.6) 残高 9.1	複合口縁部は直立し、端部が外反する。頸部には斜格子目の刻目突帯。	(口)ヨコナデ (肩)ハケ→ミガキ	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ(マメツ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石、長 (1~7) ◎		
41	壺	口径(18.7) 残高 7.8	直線的に開く口縁部。頸部内面には稜をもつ。口縁端部は面をなす。	(口端)ナデ (口)ハケ(マメツ) (頸)ハケ→ミガキ	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ(7本/cm)	乳茶色 乳灰茶色	石、長 (1~4) ◎		
42	壺	口径(14.0) 残高 5.4	直線的に開く口縁部。口縁端部は面をなす。	(口端)ヨコナデ (口)マメツ(ハケ) (頸)ナデ	(口)ハケ(11本/cm) (頸)マメツ	淡黄茶色 黄茶色	石、長 (1~3) ◎		
43	壺	口径 (9.3) 残高 4.1	口縁部は直立し、端部がわずかに外反する。端部は丸みをもつ。	(口端)ナデ (口上)ヨコナデ (口下)ハケ	(口上)ヨコナデ (口下)ハケ	暗褐色 暗褐色	石、長 (1~3) ◎		
44	壺	口径(21.6) 残高 6.8	口縁端部には5条以上のクシ描波状文	(口端)ヨコナデ (口)ハケ	(口上)ヨコナデ (口下)ハケ→ミガキ	白茶色 白茶色	石、長 (1~3) ◎		53
45	壺	口径(21.6) 残高 5.0	口縁部は大きく開く。口縁端部は面をなす。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	茶褐色 茶褐色	石、長 (1) ◎		
46	壺	口径(23.7) 残高 5.2	口縁部は外傾外反して開く。端部はあいまいな面をもつ。	(口端)ナデ (口)ハケ	ハケ(1部ナデ)	淡茶黄色 淡茶黄色	石(1~3)、長(1~2) ◎		
47	壺	口径(24.4) 残高 2.3	口縁部は大きく開く。口縁端部は面をもつ	ヨコナデ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長 (1~2) ◎		
48	壺	口径(16.9) 残高 3.4	口縁部は大きく直線的に開く。端部は面をなす。	(口端)ナデ (口)ハケ	ハケ→ナデ	暗灰茶色 暗灰茶色	石(1~3)、長(1) ◎		
49	壺	残高 5.3	頸部はやや細く、直線的に外傾する。	ハケ(10本/cm) →ナデ	ハケ(11本/cm) →ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長 (1~4) ◎	モミ圧痕	
50	壺	残高 4.9	頸部には斜格子目の刻目突帯。	ハケ (頸)ハクリ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長 (1~4) 金 ◎		
51	壺	残高 5.0	頸部には斜格子目の刻目突帯。	ナデ	ナデ (1部ハケ)	茶褐色 茶褐色	石、長 (1~3) ◎		

出土遺物観察表（土製品）

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
52	壺	残高 3.8	頸部には斜格子目の刻目突帯文をもつ	マメツ	頸ハケ 胴ハケ→ナデ	淡乳白色 淡乳白色	石、長（1） ◎		
53	壺	底径（1.5） 残高 8.5	胴部は扁平球状を呈する。底部は小さく突出した平底となる。	胴上マメツ(1部ミガキ) 胴底ミガキ	胴上ナデ 胴底ハケ	明茶褐色 明茶褐色	石(1)、長(2) ◎	黒斑	53
54	壺	底径 1.6 残高 9.9	肩部に張りをもつ。底部は厚い平底。	ハケ→ミガキ 底ナデ	頸ハケ→ナデ 肩ナデ 胴ハケ(7本/cm)	乳茶黄色 黒灰色	石、長（1～4） ◎	黒斑	53
55	壺	底径 4.6 残高 26.0	頸部は浅い細沈線文15条以上。頸部下端には板状工具の木口による押圧文	ハケ	口ヨコハケ 頸ナデ 肩ヨコハケ 胴上ハケ→ナデ 胴底ナデ	茶褐色 茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎	黒斑	54
56	脚付壺	口径（8.8） 器高 17.8 底径 12.7	脚部には小円孔（φ5mm3ヶ推定4ヶ）。胴部下半には台形状の突帯。突帯上には押圧の三角文。	口上マメツ 口下ハケ 胴ヨコナデ 脚ハケ(6本/cm)	口マメツ(ナデ) 胴ハケ(マメツ) 脚マメツ(工具痕)	茶・明茶褐色 茶・明茶褐色	石、長（1～2） 金 ◎		54
57	壺	残高 11.2	胴下半部はふくらみが強い。丸底。	ハケ→ミガキ 底ハクリ	ハケ	乳茶褐・茶褐色 赤茶褐色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
58	壺	底径 7.4 残高 11.2	底部はたちあがりをもち、平底となる。	ハケ(10本/cm) 底ナデ(1部ヨコナデ)	ハケ(11本/cm) 底ナデ	灰茶褐色 濃灰色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
59	壺	底径 5.9 残高 10.2	底部はあいまいなたちあがりをもち、平底となる。	ミガキ(マメツ?) 底未調整	ハケ（マメツ）	乳灰黄褐色 乳灰黄色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
60	壺	底径 3.9 残高 11.1	底部はあいまいなたちあがりをもち、平底となる。胴下半部はふくらみをもつ。	ハケ→ミガキ 底未調整	ミガキ？ 工具痕有	黄茶色 黄茶色	石、長（1～6） ◎	黒斑	
61	壺	底径 6.7 残高 9.7	底部はあいまいなたちあがりをもち、平底となる。	ハケ(マメツ) 底未調整	ハケ 底ナデ	灰黄茶色 黄茶色	石、長（1～5） ◎		
62	壺	底径 5.3 残高 5.5	底部は丸みのある平底。胴下半部はふくらむ。	ハケ→ミガキ 指頭痕	ハケ(6本/cm)→ナデ 指頭痕	黄茶褐色 黄茶色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
63	壺	底径 1.8 残高 3.4	底部は厚く、丸みのある小さい平底。	ハケ(8本/cm) 底ナデ	ハケ	灰茶褐色 灰茶黄色	石、長（1～2） 金 ◎		
64	鉢	口径(21.7) 残高 7.8	折り曲げ口縁。口縁端部は面をなす。	口端ヨコナデ 口頸マメツ(ハケ) 胴ハケ→ナデ(マメツ)	口ハケ(マメツ) ハケ→ミガキ	乳灰茶色 乳黄褐色	石、長（1～4） ◎		
65	鉢	口径(16.8) 残高 2.4	折り曲げ口縁。口縁端部は面をなす。	口端ヨコナデ 口ハケ→ナデ	ハケ （1部ヨコナデ）	乳黄茶色 乳黄茶色	石、長（1） ◎		
66	鉢	口径(13.4) 残高 1.7	折り曲げ口縁。口縁端部は丸い。	口端ヨコナデ 口ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石、長（1～4） ◎		
67	鉢	口径(12.6) 残高 8.4	折り曲げ口縁。口縁端部は尖る。	ハケ(9本/cm)	ハケ(10本/cm)	暗褐色 暗褐色	石、長（1～5） 金 ◎		
68	鉢	口径(14.0) 残高 4.0	折り曲げ口縁。口縁端部は面をなす。	口端ナデ 口ハケ 頸タタキ→ハケ	口ハケ 頸ハケ	明茶褐色 灰茶色	石、長（1～3） ◎		
69	鉢	口径(13.6) 残高 2.5	折り曲げ口縁。口縁端部はあいまいな面をなす。	口端ヨコナデ 口頸ハケ	ハケ	白茶色 白茶色	石、長（1～2） ◎		
70	鉢	口径(12.8) 残高 1.7	折り曲げ口縁。内湾ぎみにたちあげる。口縁端部はあいまいな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄橙色 乳黄橙色	石、長（1～2） ◎		
71	鉢	口径(10.0) 残高 3.4	折り曲げ口縁。口縁端部はあいまいな面をなす。	口端ナデ 口ハケ→ナデ 胴タタキ→ハケ(7本/cm)	ハケ(9本/cm)	淡灰黄色 淡灰黄色	石、長（1～3） ◎		

出土遺物観察表（土製品）

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	鉢	口径(14.1) 残高 5.6	折り曲げ口縁。口縁端部は先細りする。	㊐ミガキ→ヨコナデ ミガキ(指頭痕)	ミガキ(指頭痕)	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） ◎		
73	鉢	口径 (5.5) 器高 6.6 底径 1.2	内傾する直口口縁部。口縁端部は先細りする。小さい平底。	㊐ミガキ→ナデ ミガキ	㊐ヨコナデ ナデ	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1） ◎	黒斑	
74	鉢	口径 (9.8) 残高 8.8	折り曲げ口縁。	(口端)ナデ ハケ(6本/cm)	㊐ハケ(8本/cm) (頸)ナデ (胴)ハケ(6本/cm)→ナデ指頭痕	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～5） ◎		
75	鉢	口径(19.8) 器高 7.8 底径 3.4	直口口縁。口縁端部はあいまいな面をなす。底部は丸平底。	㊐ナデ(1部マメツ) ハケ(7本/cm)	㊐ハケ(8本/cm)→ナデ ナデ（マメツ）	淡黄褐色 淡黄褐色	石、長（1～7） ◎		54
76	鉢	口径(20.8) 残高 8.3	直口口縁。口縁端部は面をなす。	(口端)ヨコナデ ㊐ハケ→ヨコナデ ハケ(5本/cm)→ナデアゲ?	㊐ハケ(4本/cm)→ヨコナデ ハケ→ミガキ	淡黄茶色 灰黄色	石、長（1～5） ◎	黒斑	
77	鉢	口径(20.8) 残高 8.7	直口口縁。口縁端部は面をなす。	(口端)ヨコナデ ㊐ミガキ→ヨコナデ、ミガキ	ハケ→ミガキ (胴底)ミガキ	乳茶褐色 乳茶褐色	石、長（1～2） ◎		
78	鉢	口径(18.8) 残高 6.8	直口口縁。口縁端部は面をなす。	㊐ヨコナデ ハケ→ナデ(マメツ)	ハケ	黄茶灰色 黄茶・黄茶黒色	石、長（1～2） ◎		
79	鉢	口径(18.0) 器高 9.2 底径 1.6	直口口縁。底部は、小さく突する丸みをもつ平底。	(口端)ヨコナデ (胴上)ハケ→ミガキ (胴底)ハケ	㊐ハケ→ミガキ (胴底)ハケ→ナデ	乳灰茶黄色 乳灰茶黄色	石（1～3）、長(1) ◎		54
80	鉢	口径(11.4) 残高 7.7	直口口縁。口縁端部は面をなす。	㊐ヨコナデ ミガキ	ハケ(5本/cm) (胴)ミガキ(工具痕有)	黄茶色 黄茶色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
81	鉢	口径(21.0) 残高 8.5	直口口縁。口縁端部はあいまいな面をなす。	ハケ	ミガキ(1部ハケ)	灰乳黄色 乳黄茶色	石(1)、長(1～2) ◎	黒斑	
82	鉢	口径(17.6) 残高 10.3	直口口縁。口縁端部は先細りする。	(口端)ナデ タタキ→ハケ(8本/cm)	㊐ハケ(7本/cm) (胴)ミガキ (底)ナデ	灰黄色 黄茶色	石、長（1～5） ◎	黒斑	54
83	鉢	口径 14.0 器高 7.2 底径 3.2	直口口縁。口縁端部はあいまいな面をなす。平底。	ナデ	ハケ（ナデ）	灰茶色 灰茶色	石、長（1） 金 ◎	黒斑	54
84	台付鉢	口径(19.3) 器高 14.9 底径(14.3)	台付鉢。脚端部は面をなす。口縁端部はあいまいな面をなす。	㊐ヨコナデ (胴上)ハケ→ナデ (胴下)ハケ→ヨコナデ (脚)ミガキ→ヨコナデ (脚端)ヨコナデ	ハケ→ナデ (脚上)ハケ→ナデ (脚裾)ハケ	黄灰・灰色 淡黄茶・茶灰色	石、長（1～4） 金 ◎	黒斑	55
85	鉢	底径 4.4 残高 4.1	大きい平底。	ハケ (底)ナデ	ハケ→ミガキ （1部ハクリ）	灰黄茶色 灰黄茶色	石、長（1～2） ◎	黒斑	
86	鉢	底径 2.1 残高 5.5	あいまいなたちあがりをもつ平底。	ハケ→ミガキ	ハケ	黄褐色 茶褐色	石(1)、長(1～3) ◎	黒斑	
87	鉢	底径 3.4 残高 1.7	大きい平底。	ハケ→ミガキ (底)ナデ	ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	密（石、長1～2） ◎		
88	鉢	底径 1.3 残高 2.0	小さく突出する丸みのある平底。	ハケ	ナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	石(1~7)、長(1~2) ◎		
89	鉢	底径 4.7 残高 3.8	大きい平底。	ナデ(工具痕有)	ナデ(指頭痕有)	黄灰・灰色 茶灰色	石、長（1～4） 安山岩 ◎		
90	鉢	底径 2.9 残高 5.9	小さく突出する平底。	ハケ(1部マメツ) (底)マメツ	ハケ→ナデ	灰乳黄色 灰茶黄色	石、長（1～4） ◎	黒斑	
91	鉢	底径 2.1 残高 2.4	小さく突出する平底。	マメツ (底)ナデ	ハケ→ナデ	茶色 灰色	石、長（1～5） ◎		

出土遺物観察表（土製品）

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
92	鉢	底径 2.4 残高 4.3	小さく突出する平底。	ハケ (底)ナデ	工具痕→ナデ	黄茶色 黄茶色	石、長（1～3） ◎		
93	鉢	底径 2.0 残高 5.9	小さく突出する丸みのある平底。	タタキ→ハケ (底)ナデ	ナデ（マメツ）	乳灰色 乳白色	石、長（1～2） ◎	煤	
94	鉢	底径 4.7 残高 6.9	たちあがりをもつ平底。底部外面に木葉痕。	マメツ (胴下)タタキ (底)未調整	ハケ (底)ナデ	黄茶色 灰色	石、長（1～4） ◎		
95	器台	口径(27.8) 残高 2.4	端部に3段以上の半截竹管文。口縁上面に2列の半截竹管文。	(口端)ナデ (口)ハクリ	ミガキ	淡灰黄色 灰黄色	石、長（1～5） ◎		55
96	支脚	残高 8.1	角状の受部2ヶ。背部に握手部1ヶ(欠損)。	タタキ(1部ハケ)	ナデ	乳茶褐・乳灰色 乳茶褐・乳灰色	石、長（1～4） ◎		
97	ミニチュア	底径 3.1 残高 4.6	ミニチュア。くびれの上げ底。	ハケ→ナデ (底)ナデ	ナデ	乳白色 乳茶黄色	石(1~3)、長(1~2) ◎	黒斑	
98	羽口片		鉄さいが付着。			暗灰褐・黄灰褐色 橙褐色	密		55
99	甕	口径(21.6) 残高 10.9	7～8条のクシ描き文3段と刺突文。刺突文は凹みに2ヶの穴を穿つ。	(口)ヨコナデ ハケ（7本/cm）	(口)ハケ(7本/cm) ナデ	茶褐色 暗茶褐・茶褐色	石、長（1～2） ◎		55
100	甕	口径(24.9) 残高 2.0	口縁端部には刻目。	ナデ	(口)ヨコナデ ミガキ	灰茶黄色 灰茶黄色	石、長（1） 金 ◎		
101	甕	残高（3.7）	7～8条のクシ描きと刺突文。	ハケ→ナデ(ミガキ?)	ミガキ	灰茶褐色 灰茶褐色	石、長（1） 金 ◎		
102	甕	底径（6.2） 残高 4.7	底部はたちあがり、厚い上げ底。	ミガキ(マメツ)	マメツ(工具痕有)	黄茶色 灰黄色	石、長（1～4） ◎		
103	甕	底径 7.4 残高 5.5	底部は小さくくびれる上げ底。	ハケ→板ナデかミガキ (底)ナデ	ハケ	淡黄茶色 灰黄色	石、長（1～4） 金 ◎		
104	壺	口径(17.4) 残高 4.5	口縁端面には斜格子目文。	ハケ(工具痕有)	ハケ→ミガキ	茶褐色 黄褐色	石、長（1～3） ◎		
105	壺	残高 20.6	クシ描文。6条以上→4条波状文→4条平行線→4条山形文→5条平行線→刺突文。	ハケ→ミガキ	ナデ	暗茶褐・乳茶褐色 茶褐・乳茶褐色	石、長（1～5） ◎	黒斑	55
106	壺	底径 7.4 残高 5.3	底部はたちあがりをもち、厚い平底となる。	ミガキ (底)ナデ	マメツ	茶褐色 灰黄色	石(1~3)、長(1~2) ◎		
107	壺	底径（7.1） 残高 6.8	底部はわずかに上がる。	ミガキ (底)ナデ	ミガキ	乳・乳茶褐色 灰黄色	石(1~3)、長(1~2) ◎		
108	壺	底径 9.8 残高 5.2	底部は大きい平底。	ミガキ	ナデ(指頭痕有)	黄茶色 乳灰茶色	石、長（1～8） ◎	黒斑	

出土遺物観察表（石製品）

(7)

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ(g)		
109	石庖丁	完形	結晶片岩	3.6	8.4	0.75	44.04	製品	56
110	石庖丁		結晶片岩	4.0	9.7	0.6	32.30	未製品	56
111	石庖丁	完形	安山岩系	4.3	7.7	1.07	34.92	製品	56
112	石庖丁		結晶片岩	4.6	3.4	0.66	14.96	未製品	56
113	不明品		泥岩	7.2	3.7	2.1	55.48		56
114	不明品		結晶片岩	4.9	5.4	1.1	50.93		56
115	台石？			18.8	6.6	4.3	552.00		56
116	不明品			8.6	6.0	1.4	69.79		56
117	不明品			8.3	6.9	3.8	206.14		56

写　真　図　版

写　真　図　版　例　言

1．遺構の撮影は、ほとんどを調査担当者が行い、石井幼稚園遺跡２次調査地では高所作業車を使用した。

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ　メ　ラ　　トヨ／ビュー45Ｇ

レ　ン　ズ　　ジンマーＳ240㎜Ｆ５.６他

ス　ト　ロ　ボ　　コメット／ＣＡ32－２灯・ＣＢ2400－２灯（バンク使用）

スタンド他　　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フ　ィ　ル　ム　　白黒　プラスＸパン４×５　カラー　ＥＰＰ４×５

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。（白黒に限る）

使用機材：

引　伸　機　　ラッキー450ＭＤ

　　ラッキー90ＭＳ

レ　ン　ズ　　エル・ニッコール135㎜Ｆ５.６Ａ

　　エル・ニッコール50㎜Ｆ２.８Ｎ

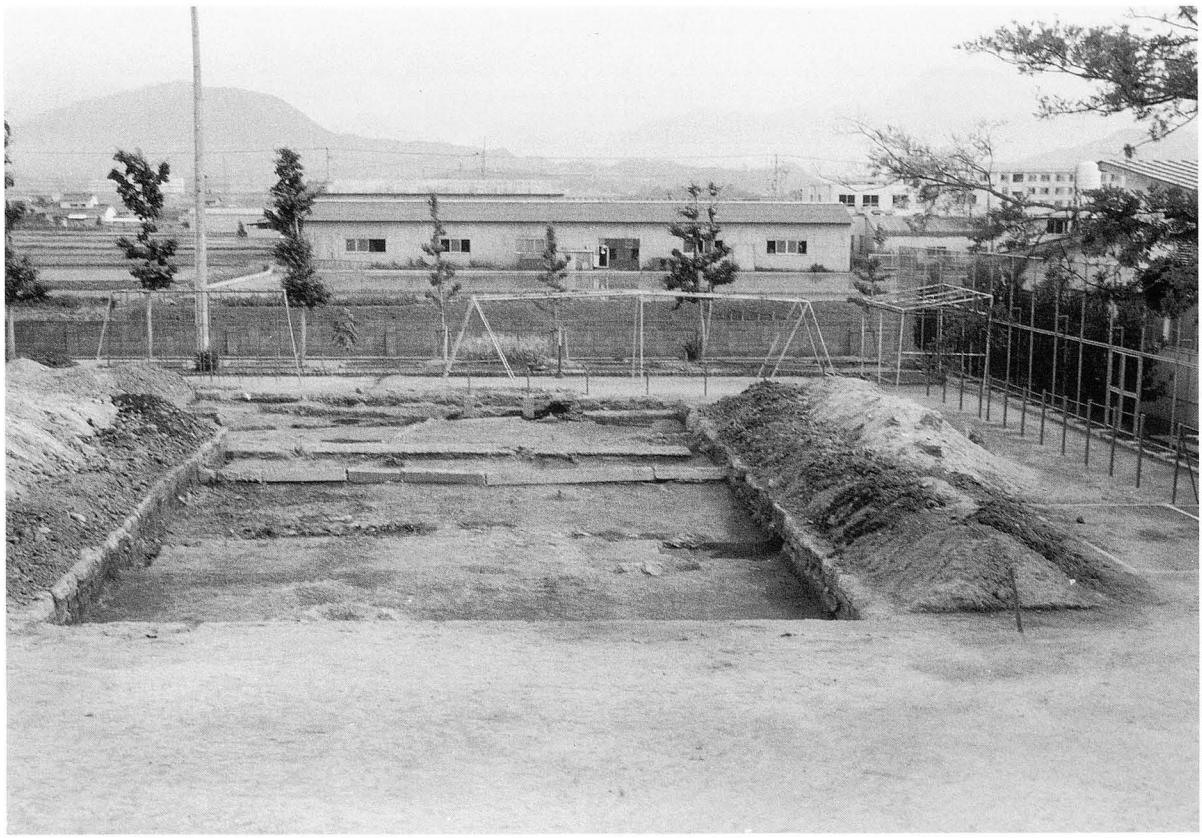
印　画　紙　　イルフォードマルチグレードⅣＲＣ

4．製版　150線

印　　刷　　オフセット印刷

用　　紙　　マットカラー110㎏

【参考】『埋文写真研究』Vol.１～８　　（大西朋子）



1. 調査地全景（北より）

2. 調査地南西隅（西より）

1. SD２遺物出土状況①（東より）

2. SD２遺物出土状況②（西より）

1. SD２遺物出土状況③（南東より）

2. SD２遺物出土状況④（北より）

図版　四

1. SD２完掘状況①（東より）

2. SD２完掘状況②（東より）

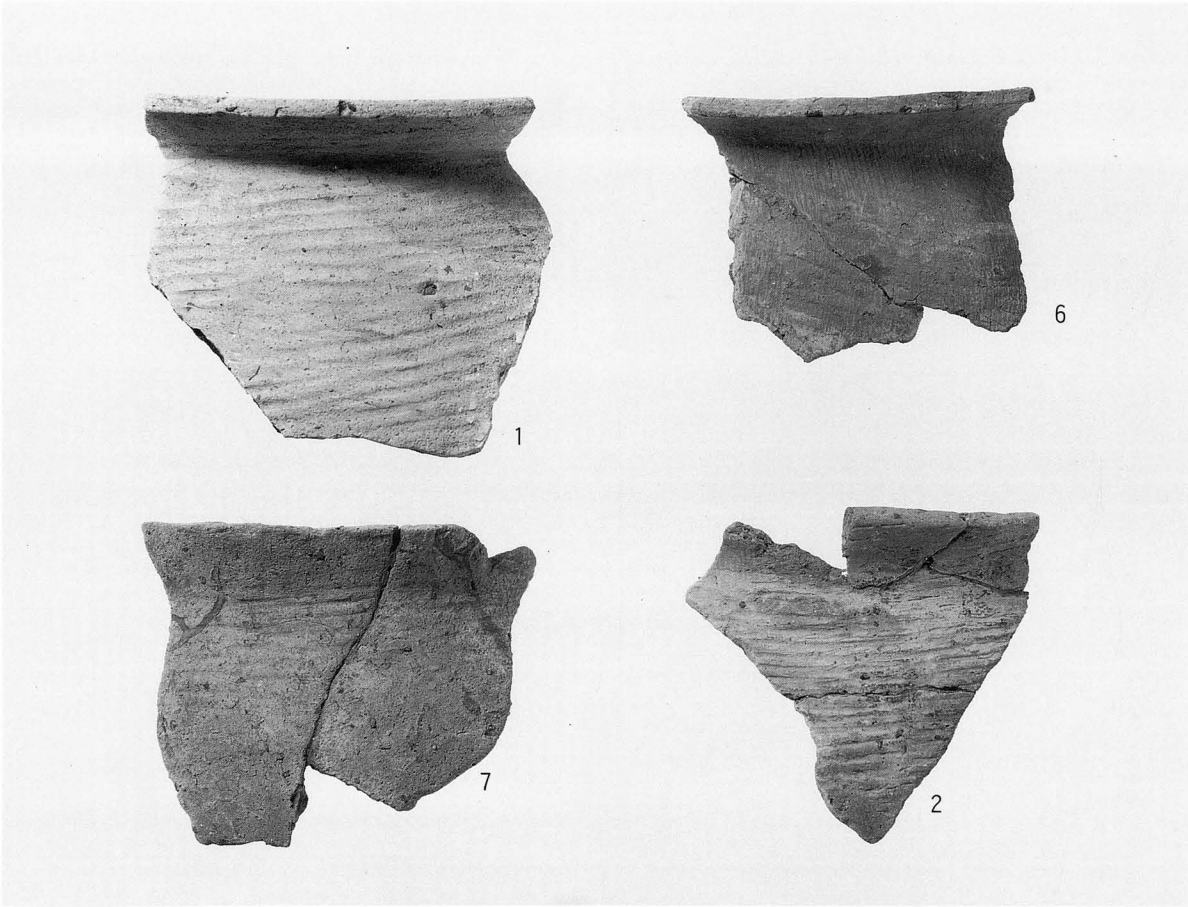
1. SB１検出状況（南東より）

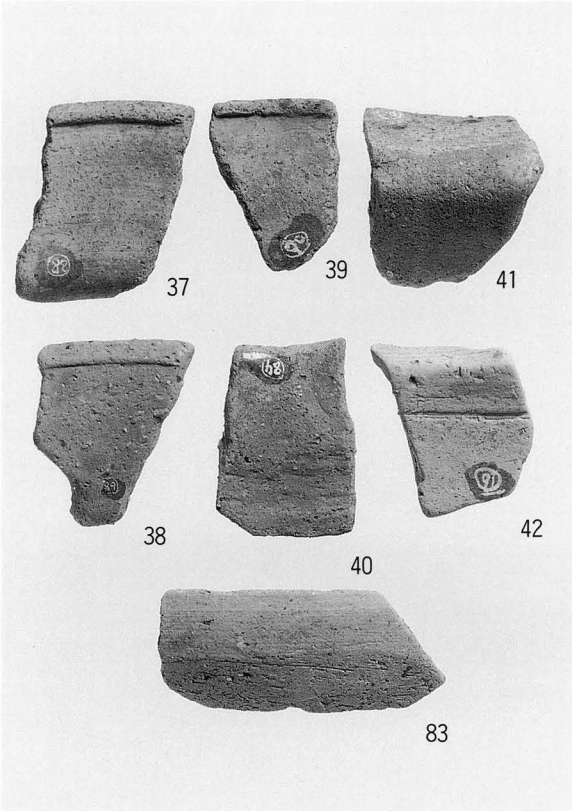
2. SB１内Ｋ１遺物出土状況①（東より）

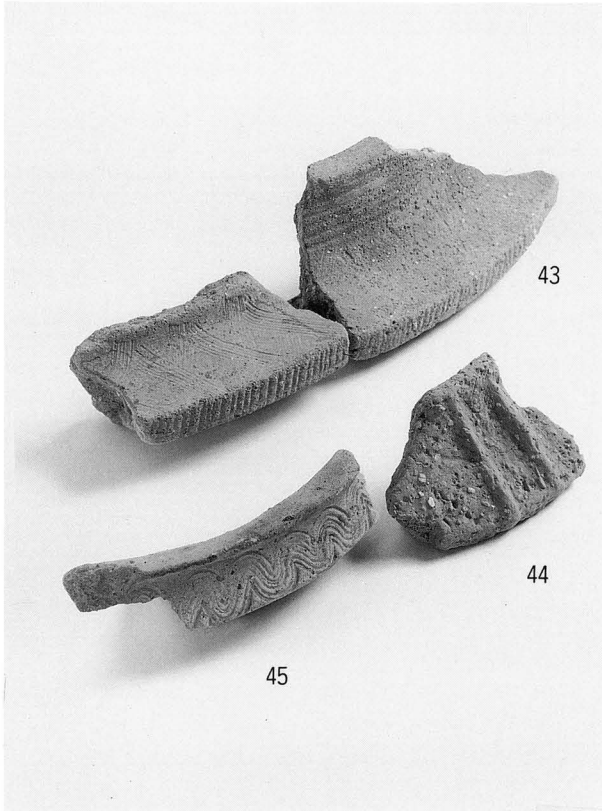
図版　六

1. SB１内Ｋ１遺物出土状況②（北より）

2. SB１内Ｋ２遺物出土状況（南より）

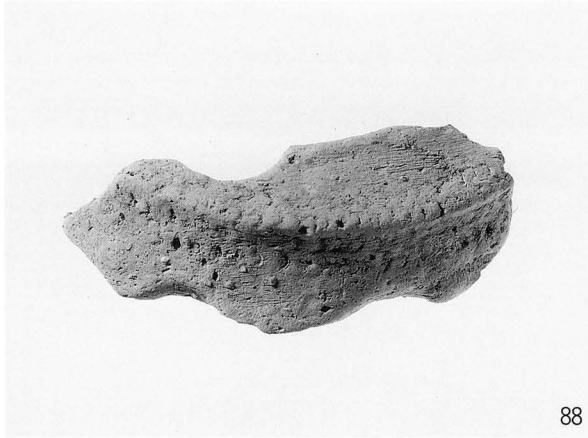


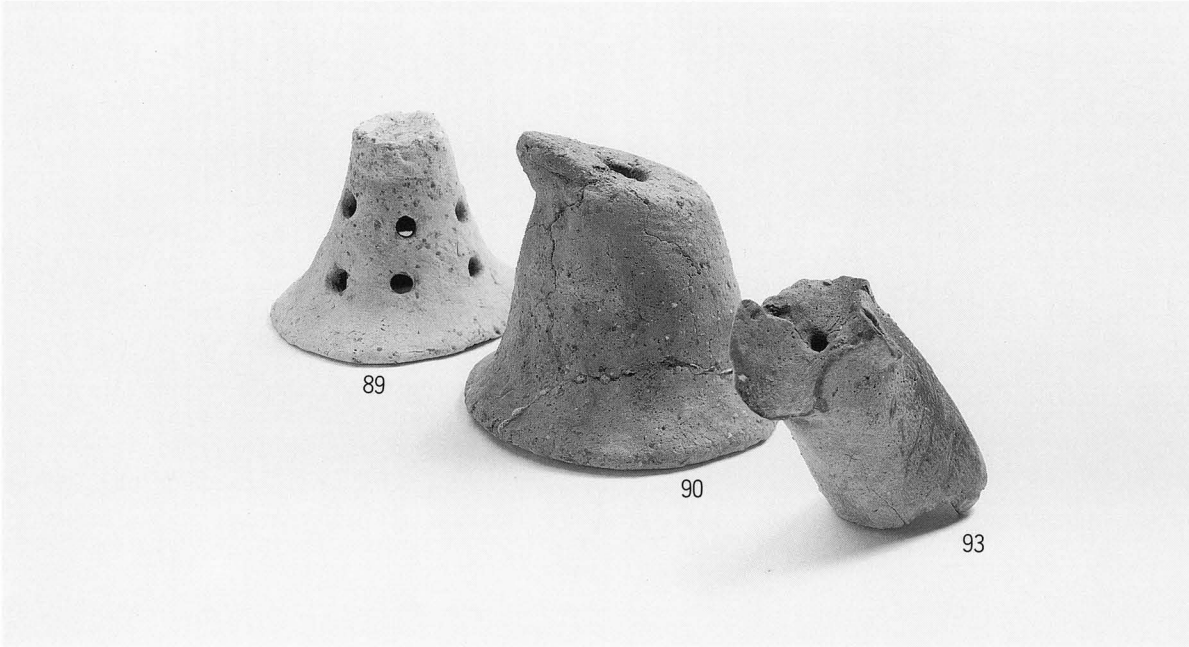




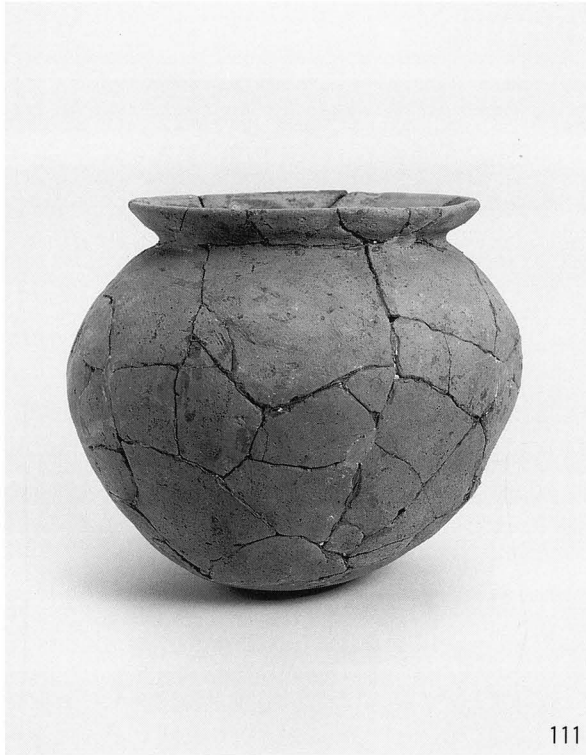
1. SD２出土遺物①

図版八

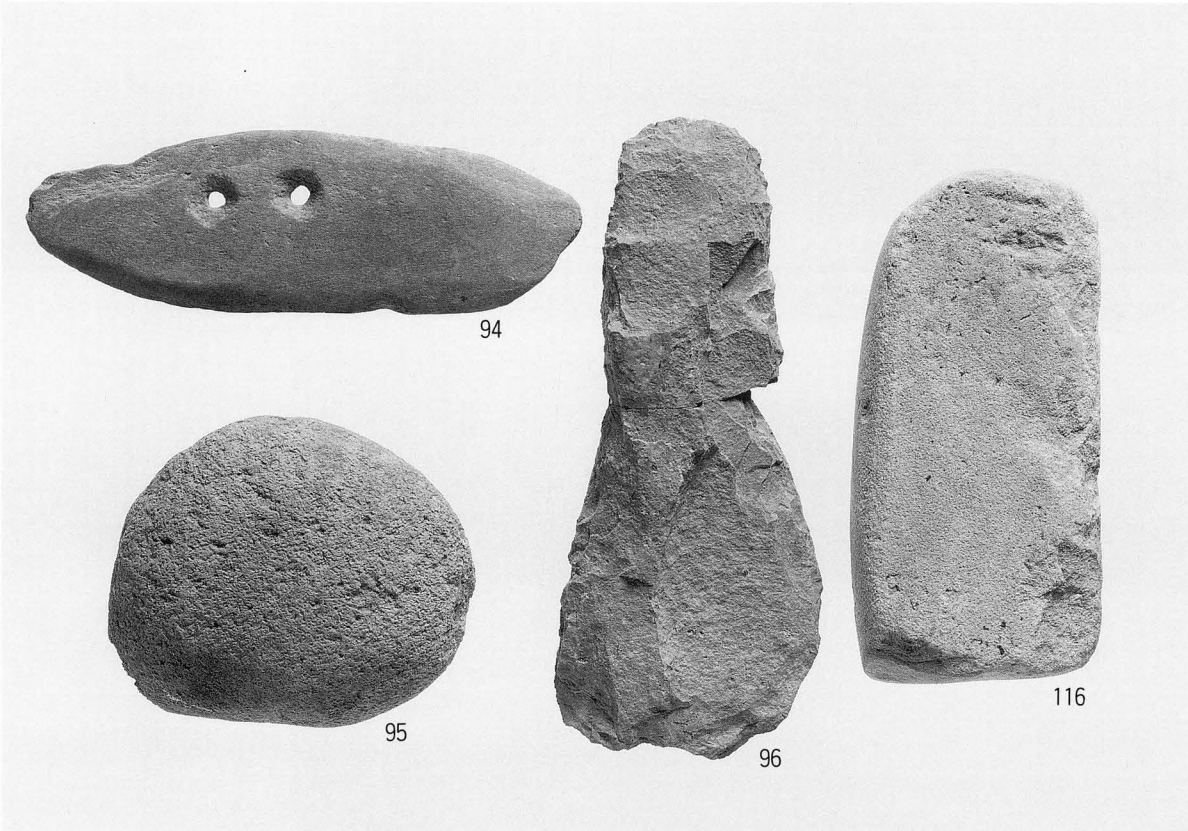




1. SD２出土遺物②

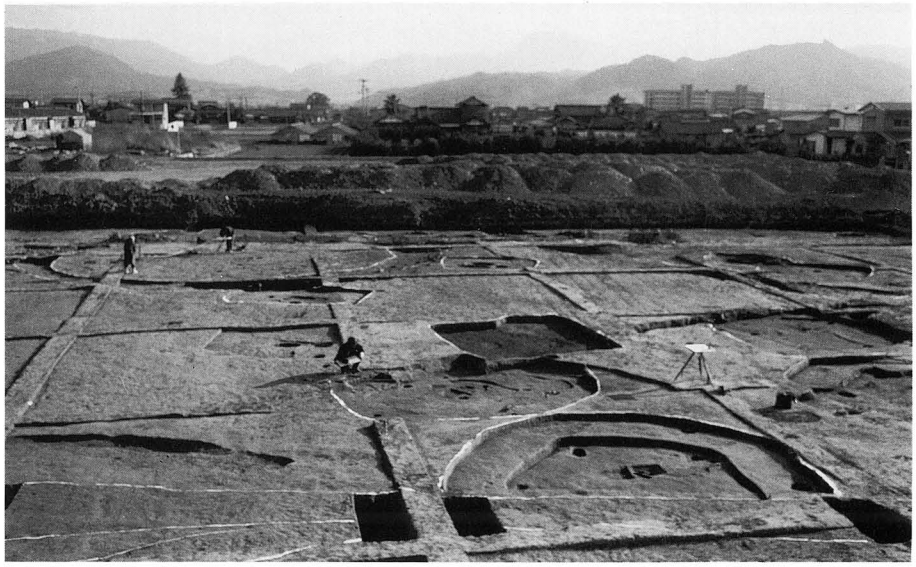


1. SB１(107)・K２(111) 出土遺物

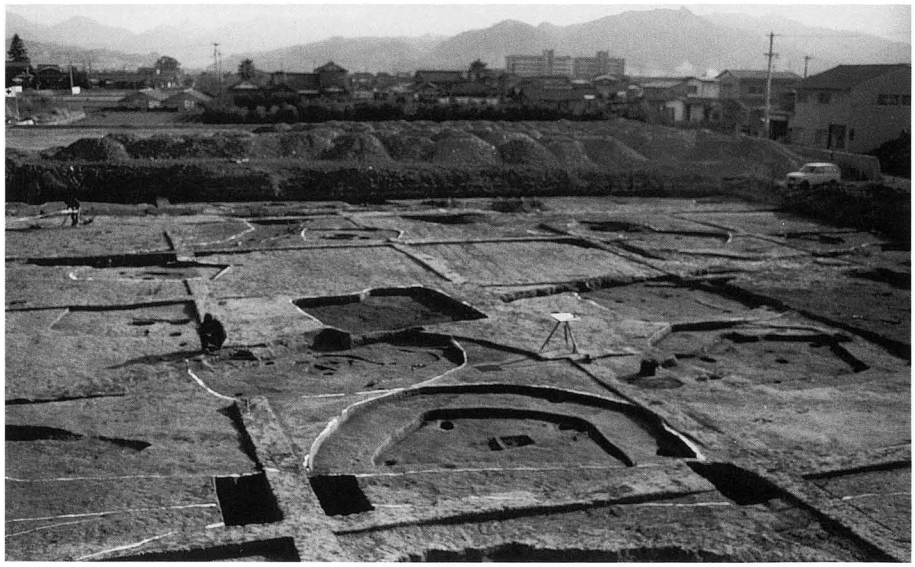


2. SD２出土遺物③（95～96）・SK１出土遺物（116）

1. 調査区東側（北より）

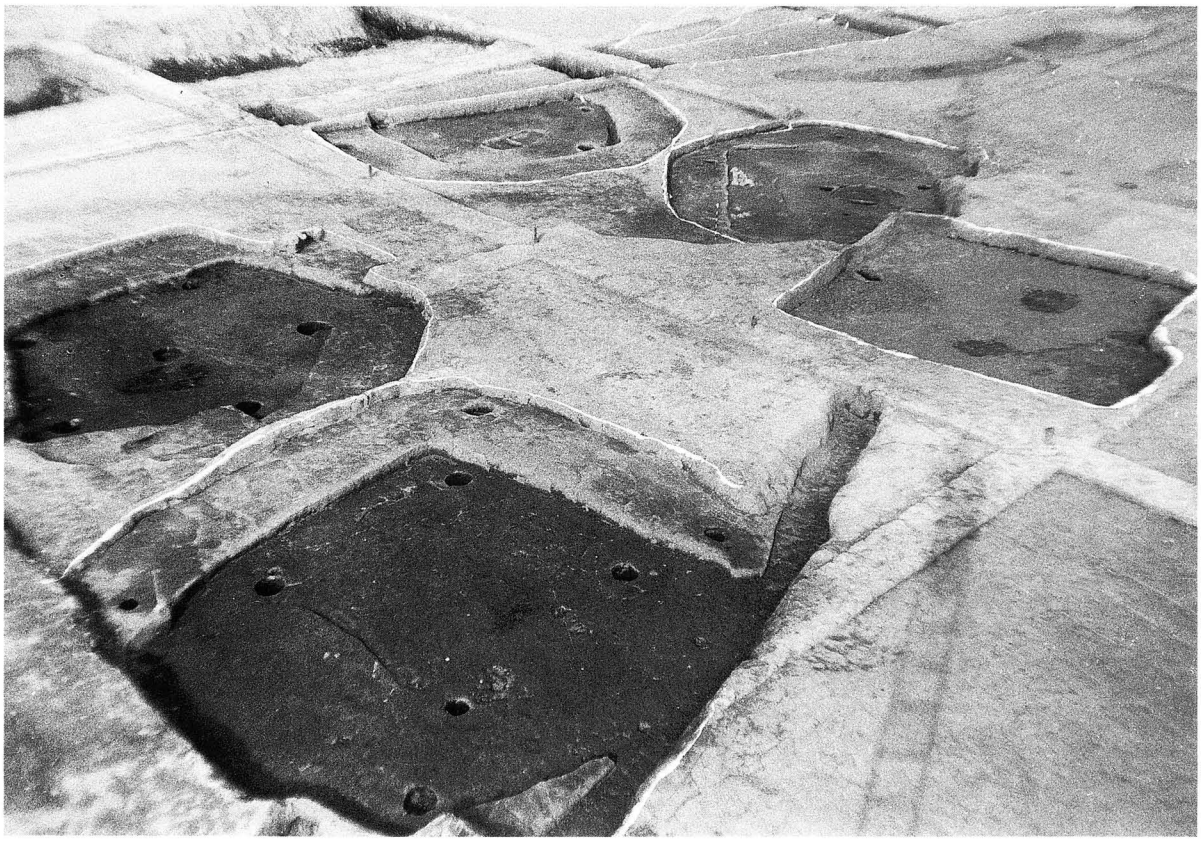


2. 調査区全景①（北より）



3. 調査区全景②（北より）

1. 調査区西側（南より）



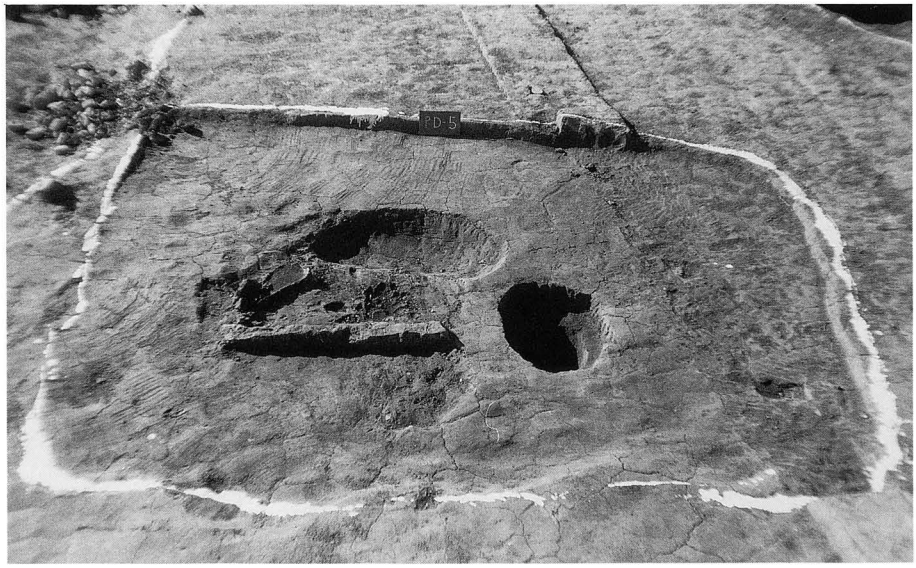
2. 住居址完掘状況（西より）

1. SB1-1・2完掘状況
（東より）

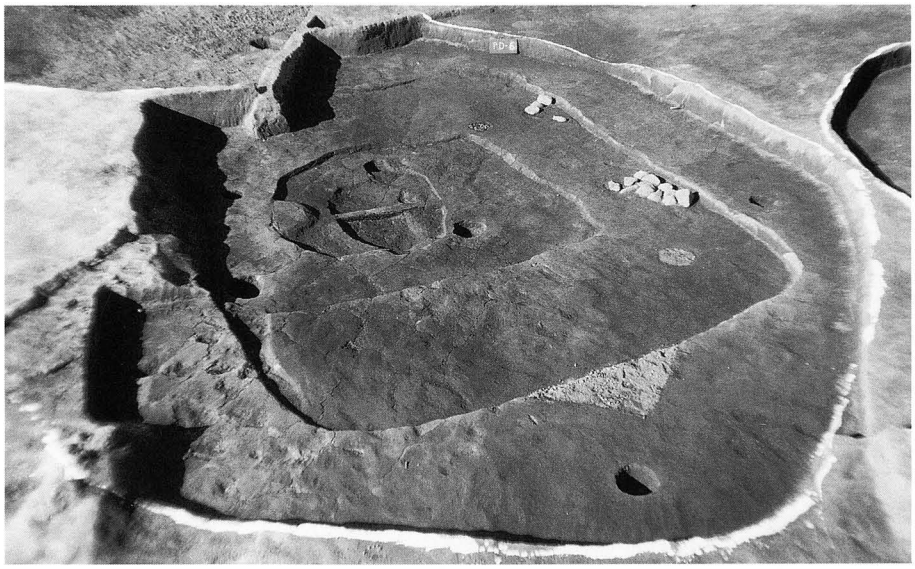
2. SB2完掘状況（東より）

3. SB3完掘状況（東より）

1. SB５完掘状況①
（東より）

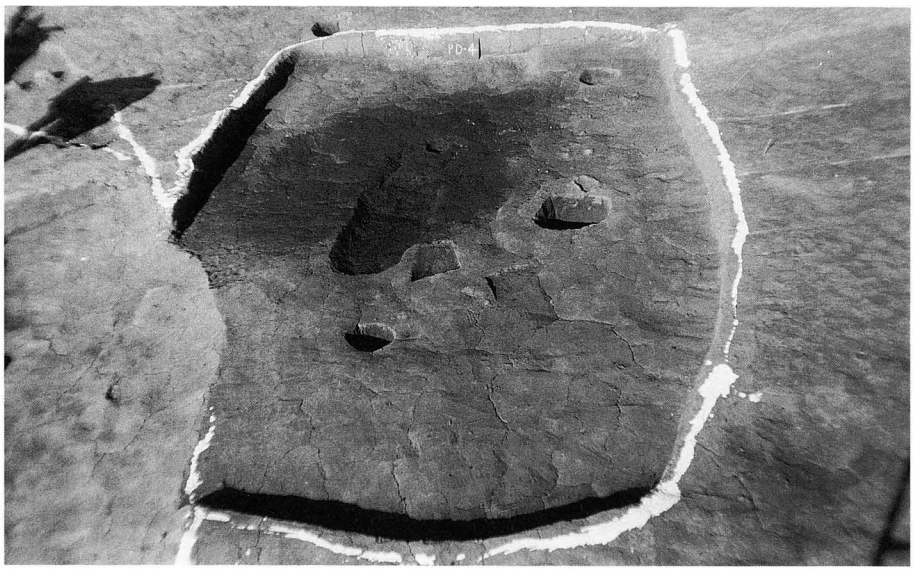


2. SB５完掘状況②
（北より）



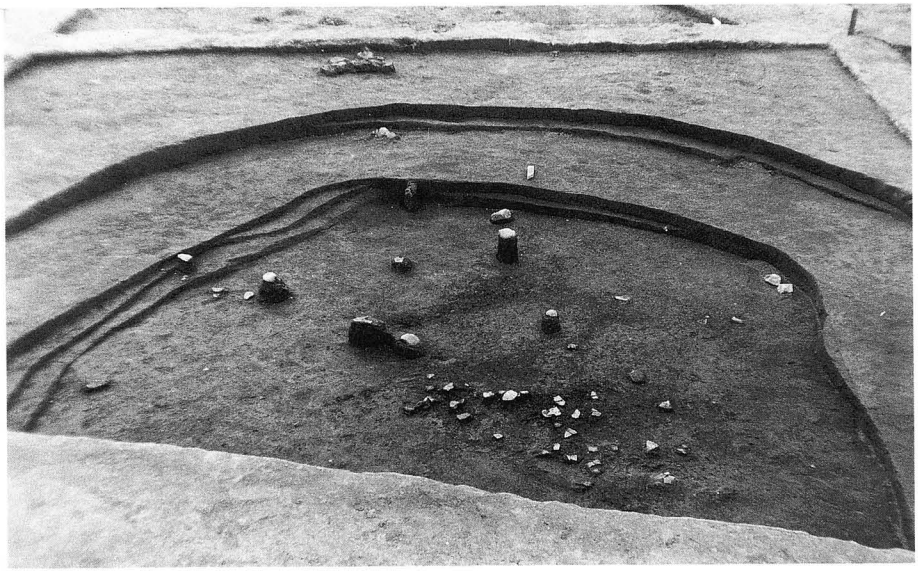
3 . SB７完掘状況(北より)

1. SB４遺物出土状況
（西より）



2. SB４完掘状況（東より）

3. SB９完掘状況（北東より）

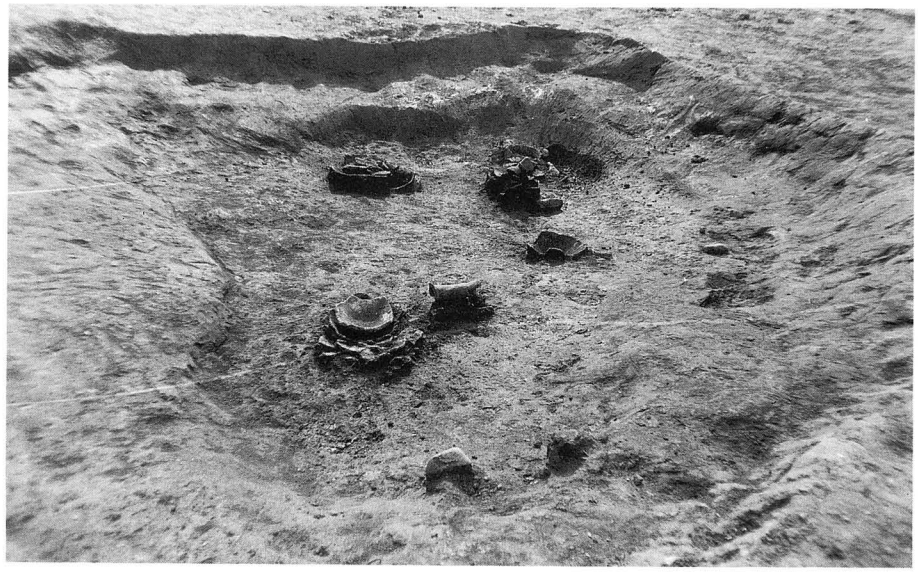


1. SB７遺物出土状況
（北より）

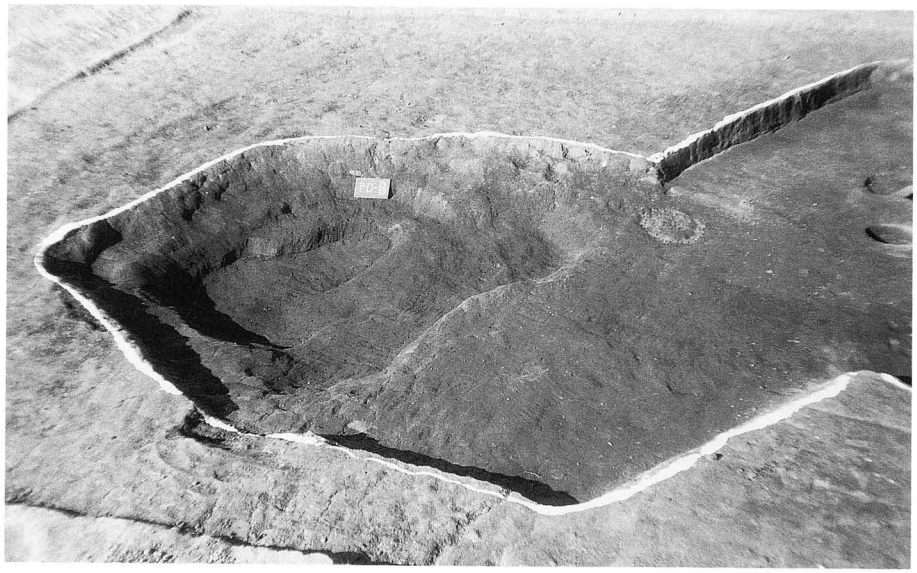
2. SB７完掘状況（東より）

3. SB11完掘状況
（西より）

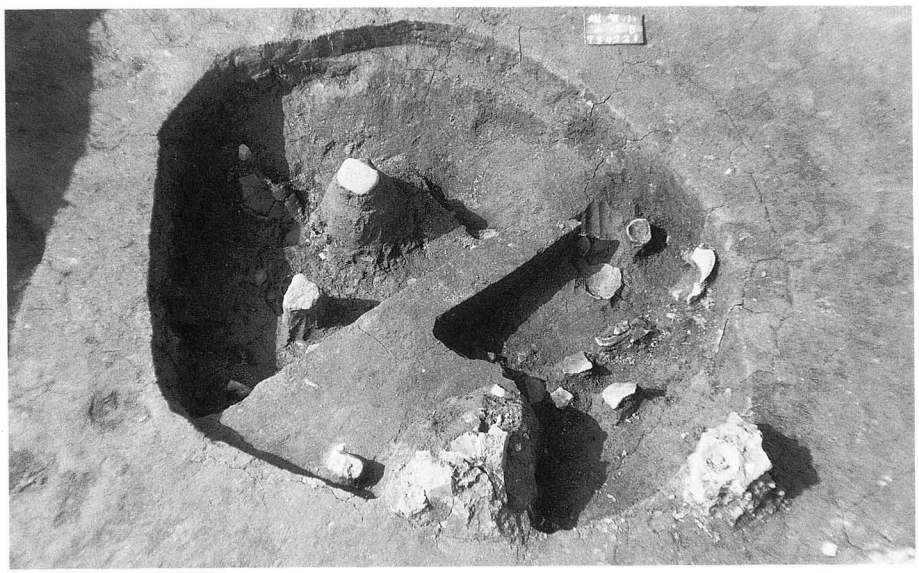
1. SB８遺物出土状況①
（西より）



1. SB８遺物出土状況②
（北西より）



1. SB８完掘状況（東より）

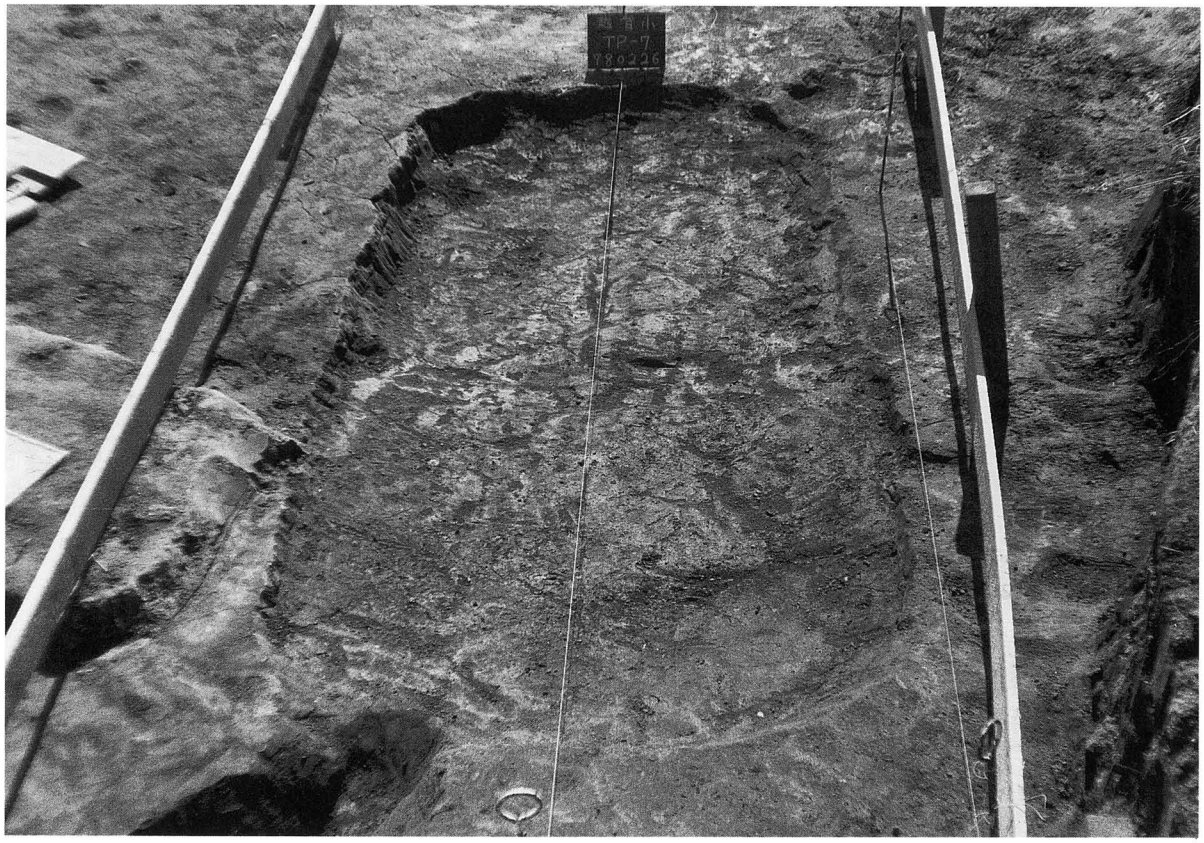


1. SK５遺物出土状況
（東より）

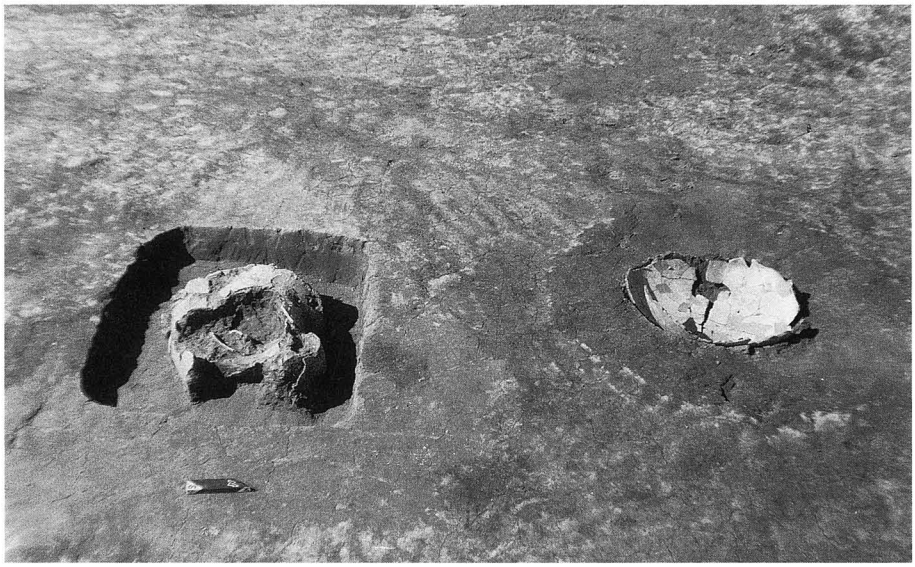
1. SK６遺物出土状況
（東より）

1. SK７遺物出土状況
（北西より）

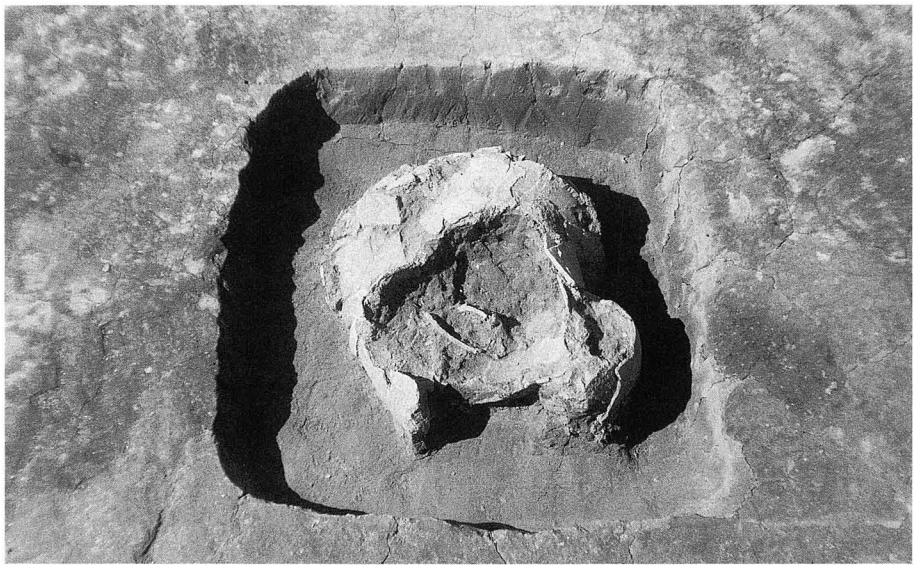
1. 調査区南西側完掘状況（東より）



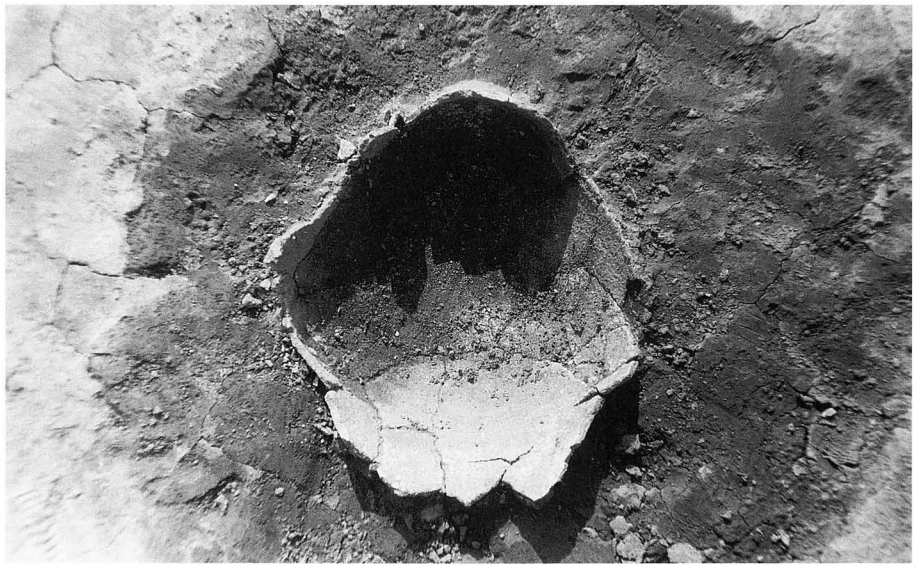
1. SK 10 完掘状況（北西より）



1．1・2号壺棺墓(東より)



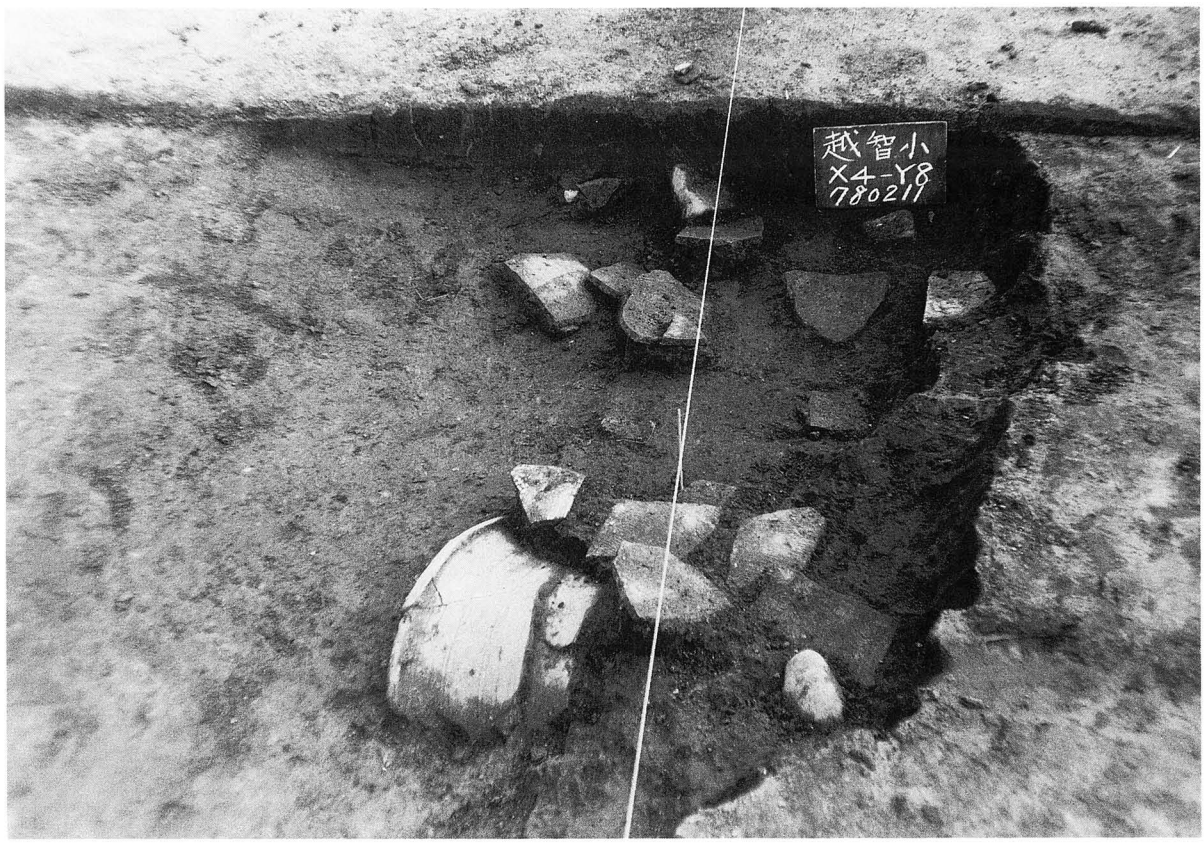
1．1号壺棺出土状況
(東より)



1．3号壺棺出土状況

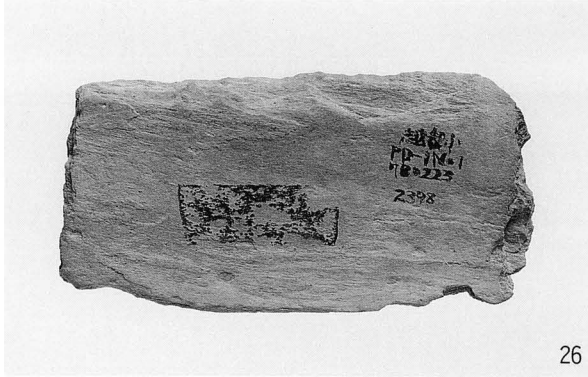
1. SD１完掘状況（東より）

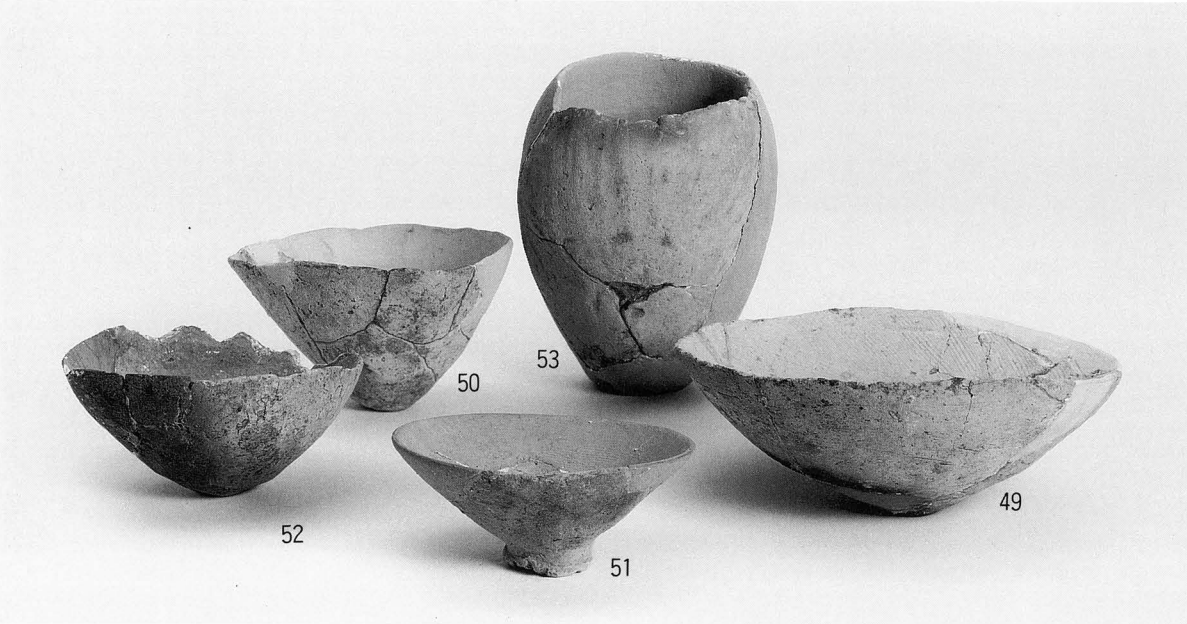
2. SD２完掘状況（北より）



1. SD 5 遺物出土状況（南より）

2. SB 10 完掘状況（北より）





1. SB 1 出土遺物（25・26）　SB 2 出土遺物（32・37・49～53）